

416  
6

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5



史蹟名勝天然記念物

前篇



1  
3



# 史蹟名勝天然記念物

前篇

大正  
9. 8. 7  
購求



史蹟名勝天然記念物帖序

天孫垂跡。高千穗嶺之雲。縣縣不盡。日神  
傳統。五十鈴川之水。混混不極。表志行宮。  
櫻遺無盡之芳。潛身虛颯。杉留不朽之名。  
一山一水。名勝可以收攬。一花一木。史蹟  
可以指點。然而今也。懸輪縱橫。如蠅蚩之  
成行。沿道名勝。動輒失其所在。電線交錯。  
似蜘蛛之張網。旁近史蹟。間又爲其所沒。  
人爲之力。雖曰陵谷可移。天然之物。奈其  
形迹易渝。瀨川君有慨乎此。寫真寸楮。直  
寘人于其境。聚遠尺幅。乃縮地于斯卷。若  
夫一山一水。攬名勝乎眼前。一花一木。指  
史蹟乎掌中。天孫所國。仰瞻鴻基之固。日  
神攸宮。俯思寶運之長。溯洄淵源。因以提  
醒人心。培植根柢。亦將裨補世道。則寥寥  
冊子。可代萬卷之書。區區婆心。爰贊一辭  
之贊。

大正九年七月

伯爵 大木遠吉



## 自序

皇祖都を檀原に奠め給ひてより以來二千六百年、時に治亂あり、世に隆替あり、而かも天壤無窮の帝業、愈今來に新にして萬古不易の國體益寰宇に光あらんとす。列聖の乾德八紘に光被するに由ると雖、抑亦吾人の祖先が克く忠に、克く義に悠遠なる皇圖を翼賛したる結果ならずんば、あらず。故に其忠節を竭し、義烈を表したる遺跡は、即ち國史の光輝を宣揚し、國體の精華を發揮するものにして之を保存し、之を表章するは吾人の義務なり、又實に國民性を涵養する唯一の資料なり。

歐洲諸國に於ても國帑を吝まずして史蹟の保存に勉め、新興國たる米國の如きは新に史蹟を選定し、保存の道を講じて自國の誇りとせんとす。民族雜糅興亡常なき異邦にありて尙且此の如し。況んや金甌無缺の我帝國に於てをや。

獨り我國情の世界に比なきのみならず、氣候の和煦、山河の秀麗亦萬邦に冠絶し、自ら國民性を陶冶し、且偉人の鴻爪を留め、先哲の遺蹤を存するもの多し。史蹟と共に尊重せざるべからざるや言を俟たず。

唯憾む時勢の推移、滄桑の變あり。之を現代に觀るも、貴紳の庭苑成りて御殿山の形勝復見るに由なく、富豪の邸宅構へられて天下茶屋の史蹟遂に湮滅せんとす。吾人夙に此に憂ふる所あり、史蹟名勝の考査に努力するもの日既に久し。幸に同憂の士あり、史蹟名勝天然記念物保存法案帝國議會に可決せられ、當局者に於て調査に着手するに至りしは吾人の大に慶する所なり。而かも政府當局の施設は保存方法に在り。本會の趣旨は之を表彰して汎く天下に周知せしめんと欲す。本書一卷固より吾人の苦心を徴するに足らずと雖、庭訓の資、清娛の具、兼ね備はり併せ存す。日夕繙閱の間自ら國民性を薰陶し、長へに仁風普天に洽く、熙澤率土に滋かんことを冀ふ。茲に上梓に臨み、微衷を陳べて敢て大方に薦む。

大正九年七月

「史蹟名勝天然記念物刊行會」主幹

瀬川 光 行 識



## 續編刊行に就て江湖同好諸賢に告ぐ

本書に登載せる史蹟、名勝、天然記念物は該史蹟に縁故深き人物の肖像、筆蹟其他の遺物を加へて約一千八百點に達せり。然りと雖二千六百年の歴史を有し天然の形勝に富める我瑞穂の國には古來史籍に上り、吟詠に誦はれたる名蹟甚だ多く素より一冊子の能く竭す所にあらず、故に明春更に續篇を刊行して之が完璧を期せんと欲す。續編の内容は其外觀と共に本篇よりも尙優秀なるべく、紙數六百餘枚、純日本紙使用、上下兩冊にして寫真數も同じく約千七八百點を算すべし、斯くして吾人は未だ世に顯はれざる天下の名蹟を世に紹介し或は古代寧樂朝、平安朝の盛時に於て人口に膾炙し歌に詠まれ詩に吟ぜられたる床しき名所の名残を惜むも亦興深き業に非ずや。寫眞の寄贈を歓迎す 我國の史蹟名勝に富めるが爲に世界に誇るに足るが如く、各地方に於ける史蹟名勝は其地の榮譽にして、之を表彰するは地方人士の義務なりと言ふも過言に非らず、本會は大方諸賢の其地に於ける史蹟、名勝、天然記念物に關する寫眞の寄贈を歓迎す。

名勝史蹟と地方人士 心なき名所、舊跡にも幸と不幸とあり、天下著名の史蹟、名勝として世に顯はれざるもの尠からざると共に、さもなき場所の嘖々として都人士の間に傳唱せられ、中には全然根もなき假作物語を根據とせる名所にして世人の信仰を受け土地の繁榮を招致せるもの亦多し、之れ其地に心ある人の有ると否とに基因せざるべからず。

本書の如き權威ある大著述に依りて一とたび世に紹介せられんか、是れ當に埋木の花咲く春に逢ふに同じ、豈に地方人士の利用すべき時に非らずや。

絶好の好機を逸する勿れ 曩者史蹟、名勝、天然記念物保存法案の帝國議會に於て可決せられたる結果、政府は官制を定め、委員を設け、史蹟、名勝、天然記念物の保存すべきものを審議考査せんとす。恰も是れ未だ世に顯はれざる史蹟名勝の天下に紹介せられ、永世に保存せらるべき絶好の機會にして、地方人士の輕々に看過すべからざる所なりとす。本會亦此機に臨み、慎重に調査し、聊か政府當局者の事業に貢獻せんことを期す。

## 「史蹟名勝天然記念物」刊行會

大正九年七月

## 緒言

本書編纂の主旨を賛し特に寫真技師を實地に特派し其土地の史蹟、名勝を撮影し本會に寄與せられたる篤志家から吾人は謹んで左に芳名を列ねて其厚意を謝す、又繪葉書、雜誌、

- |           |        |           |
|-----------|--------|-----------|
| 一 高館址、外諸勝 | 岩手縣平泉  | 毛越寺       |
| 一 大御堂寺諸名勝 | 愛知縣知多郡 | 大御堂寺      |
| 一 朝六橋     | 岐阜縣    | 小坂町役場     |
| 一 關宗祐墓    | 茨城縣下館町 | 東京朝日新聞出張所 |
| 一 北畠親房遺蹟  | 同 上妻村  | 張所        |



緒言

本書編纂の主旨を贅し特に寫真技師を實地に特派し其土地の史蹟、名勝を撮影し本會に寄與せられたる篤志家抄からず吾人は謹んで左に芳名を列ねて其厚意を謝す、又繪葉書、雜誌、其他の印刷物を寄贈せられたる者甚だ多しと雖も本書に掲載する寫真は萬、止を得ざるもの、外は出版物より複製することを選りてを以て大方諸君の御同情を空ふせること少からず是れ又併せて茲に之を陳謝す。

一本書編纂切後に頗る珍しき寫真を贈與せられたるもの數十枚に達せり、是等は明年刊行する續編中に搜入して可成其厚志を空ふせざらんことを期す。

一吾人は本書に於ける天然記念物に關する寫真の少きを遺憾とす、蓋し其選定撮影に就て多大の困難を感じたるが爲也、是又、續編に網羅すべし。

寫真寄贈者芳名

- 一 高岡公園、櫻馬場公園、前田利長墓及廟前、繁久寺 高岡繁久寺住職 在田 如山
- 一 鹿野山神野寺、山上の瀧、同大杉、白鳥神社 千葉縣神野寺住職 楠 純 隆
- 一 萬松寺佛殿外 山形市外 萬 松 寺
- 一 山寺立石寺諸勝 同 山寺立石寺
- 一 唐松大悲閣 山形東村山郡東澤 石井孫兵衛
- 一 奈首の白瀧外奈首諸勝 秋田縣由利郡上郷村 遠藤 貞三
- 一 金澤欄址外 秋田縣仙北郡金澤 金澤村役場
- 一 井伊谷城址外 靜岡縣引佐郡 井伊谷村役場
- 一 藤原藤房墓 秋田縣南秋田郡旭川 補 陀 寺
- 一 長井浦水調の井外 廣島縣系崎町 武田 瀧夫
- 一 千代尼墓外 石川縣松住町 千代 尼會
- 一 九鬼義隆首塚外 三重縣志摩郡 荅志村役場
- 一 周澤山全景外 栃木縣 唐澤山神社々務所
- 一 鳥海山諸勝 鳥海山 大物忌神社々務所
- 一 新田義貞墓 福井縣 新田公菩提所再興會
- 一 稱の津及外 廣島縣稱の津 尾 本 鋪 雄
- 一 佐多岬 鹿兒島縣 佐多岬役場
- 一 長母寺外 名古屋市外 長 母 寺
- 一 犬山城外 愛知縣 犬山町役場
- 一 小丸山別院 新潟縣五智 小丸山別院
- 一 高館址、外諸勝 岩手縣平泉 毛 越 寺
- 一 大御堂寺諸名勝 愛知縣知多郡 大御堂寺
- 一 朝六橋 岐阜縣 小坂町役場
- 一 關宗祐墓 茨城縣下館町 東京朝日新聞出張所
- 一 北畠親房遺蹟 同 上妻村 護 國 園
- 一 道後公園、道後名勝 愛媛縣 道後湯ノ町役場
- 一 山中温泉場名勝 石川縣 山中温泉合資會社
- 一 落別王墓 靜岡縣 舉母町役場
- 一 土佐吸江及土佐諸名所 高知縣 高知教育會
- 一 水主神社外 香川縣大川郡 譽水村役場
- 一 雲井御所址外 香川縣 林田青年會
- 一 南湖公園、白河名勝 福島縣 白河町役場
- 一 妙見山 德島縣撫養 瀬戸瀧乃
- 一 飯香岡八幡宮神木 上總國市原郡八幡町 飯香岡八幡社
- 一 久能山諸勝 靜岡縣久能山 社 務 所
- 一 曾我兄弟墓、曾我寺 神奈縣曾我村 曾 我 寺
- 一 北條五代墓 同 箱根 早 雲 寺
- 一 彌彦神社 新潟縣 彌彦神社々務所
- 一 白山神社、白山公園 新潟縣 新潟市役所
- 一 衣川館址 陸 中 國 關 成 就 院
- 一 出雲神社 岐阜縣 出雲神社々務所
- 一 織田信長廟外 岐阜縣 崇 福 寺
- 一 鞍馬山諸勝 京都市外 鞍 馬 寺
- 一 醍醐寺諸勝 京都市外 醍 醐 寺
- 一 茂林寺及文福茶釜 群馬縣六郷村 高橋森太郎
- 一 大野山御陵 兵庫縣加古郡 水丘村役場
- 一 中尊寺秀衡像外 岩手縣 中 尊 寺
- 一 甲宗八幡宮、門司海峽 京都府 門司市役場
- 一 常照皇寺佛殿 京都府 常 照 皇 寺
- 一 松川浦諸景 福島縣相馬郡松ノ江村 眞清田神社
- 一 眞澄田神社 愛知縣 眞 清 田 社
- 一 曼陀羅寺 同 曼 陀 羅 寺
- 一 南宮神社外 岐阜縣宮代 石 井 俊 藏
- 一 永源寺諸勝 滋賀縣 永 源 寺
- 一 高山招魂社 岐阜縣 高 山 町 役 場
- 一 九十九橋、足羽山 福井市役場
- 一 佐藤兄弟古墳外 山形縣 米 澤 市 役 所
- 一 慈恩寺佛殿 山形縣 善 寶 寺
- 一 清水宗治首塚外 備中國古備郡高松町 平 松 長 次 郎



『史蹟名勝天然記念物』前編目次

畿内

山城國

京都御所紫宸殿及 <small>右近の橋</small> 左近の橋	二	東寺五重塔	九	同 筆蹟	一〇
建禮門	二	同 金堂	九	南禪寺山門	一〇
蛤御門	二	同 南大門	九	同 五鳳樓	一〇
清凉殿	二	六孫王經基靈廟	九	同 方丈	一〇
仙洞御所御苑	二	源爲義墓	九	山名宗全墓	一〇
京都御所禁苑	三	多田滿仲産湯の井	九	細川幽齋夫妻墓	一〇
宜秋門	三	羅城門址	九	梁川星巖夫妻墓	一〇
清和院門	三	西本願寺	一〇	清水寺全景	一〇
平安神宮及應天門	四	同 山門	一〇	清水の瀧	一〇
二條離宮	四	東本願寺	一〇	田村堂	一〇
神泉苑	四	同 山門	一〇	阿彌陀堂	一〇
縣井	四	飛雲閣	一〇	清閑寺	一〇
肺の井	四	三條大橋	一〇	高臺寺本堂	一〇
大極殿址	四	四條大橋	一〇	同 開山堂	一〇
加茂御祖神社	五	五條橋より鴨川を隔て、東山を望む	一〇	同 傘の亭	一〇
加茂別雷神社	五	鴨川 踊	一〇	同 臥龍の廊下	一〇
加茂の葵祭	五	丸山公園(祇園の櫻)	一〇	同 大政所靈廟	一〇
八瀬の大原女	五	大雅堂舊址	一〇	東福寺通天橋	一〇
相國寺	六	長樂寺	一〇	同 山門	一〇
鸞宿梅	六	頼山陽墓	一〇	兆殿司墓	一〇
足利義政墓	六	西行庵址	一〇	藤原俊成墓	一〇
藤原惺窩墓	六	双輪寺女御殿址	一〇	同 筆蹟	一〇
同 筆蹟	六	八坂神社	一〇	萬壽寺愛染堂	一〇
本國寺	七	八坂の塔	一〇	方廣寺	一〇
六角堂	七	祇園の祭禮	一〇	方廣寺大佛殿	一〇
菅公産湯の井	七	一力樓	一〇	國家安康鐘	一〇
梨木神社	七	都 踊	一〇	六波羅址	一〇
佐女牛井	七	靈山招魂社殉難志士墓	一〇	建仁寺	一〇
本能寺	八	東大谷本廟	一〇	同 矢立門	一〇
織田信長父子之墓	八	西大谷本廟	一〇	安國寺惠理首塚	一〇
織田信長肖像	八	親鸞上人肖像	一〇	阿彌陀ヶ峯	一〇
同 筆蹟	八	青蓮院	一〇	豐國廟	一〇
建勳神社	八	同 庭園	一〇	豐國神社唐門	一〇
明智光秀筆蹟	八	智恩院本堂	一〇	豊臣秀吉肖像	一〇
		同 内陣	一〇	同 筆蹟	一〇
		智恩院山門	一〇	耳塚	一〇
		同 釣鐘	一〇	三十三間堂	一〇
		法然上人肖像	一〇	同 内陣	一〇
				鳥邊山	一〇
				如意ヶ嶽	一〇

目次



泉涌寺	大覺寺	花園天皇御陵
泉涌寺夢の浮橋	大澤の池	同 御尊影
孝明天皇御尊影	紫野大徳寺	佐久間象山墓
同 宸 翰	同 解脱門	雙ヶ岡
今熊野觀音寺	一休禪師居室	清原夏野墓
平等院鳳凰堂	一休禪師筆蹟	御室仁和寺
扇の芝	千利休像	同 山門
高倉宮社	千利休墓	同 五重塔
井堤左大臣館址	黒谷光明寺	同 靈明殿
井堤の玉川	淀見の茶亭	同 宸 殿
源 頼政墓	松越、鈴蟲墓	同 境内
宇治川	永 觀 堂	等 持 院
宇治橋	岩 垣 楓	足利尊氏墓
巨椛池	鳥羽天皇御陵	同 木 像
浮島多寶塔	安樂壽院	同 筆 蹟
萬福寺	同 冠 石	足利義詮墓
興聖寺	孔雀明王像	同 筆 蹟
宇治探茶	深草法華堂十三陵	細川勝元墓
北野天滿宮	深草の里	桓武天皇御陵
同 樓 門	戀 塚	天智天皇御陵
平野神社	深草元政上人墓	僧正遍昭墓
鞍馬寺全景	同 筆 蹟	阪上田村廣墓
同 本 堂	松永貞徳墓	元 慶 寺
鞍馬寺大杉	金 閣 寺	大石良雄山科閑居遺蹟
小倉山	同 陸舟松	奴 茶 屋
鹿 王 院	銀 閣 寺	高 尾 山
定家山莊址	足利義滿筆蹟	同 紅葉谷
時 雨 亭	足利義政筆蹟	清瀧川渡猿橋
藤原定家筆蹟	嵯峨天龍寺庭園	槇 尾
伊藤仁齋墓	後嵯峨、龜山二帝陵	松尾神社
角倉了意墓	臨 川 寺	愛宕山
鷹司家廟所	太秦廣隆寺	月輪寺時雨櫻
二條家廟所	川原左大臣源融墓	空 也 瀧
三條家廟所	嵐山渡月橋	梅 尾
嵯峨野	桂 川	明惠上人筆蹟
小督局墓	大 悲 閣	笠 置 山
勾當内侍幽棲地址	小楠公首塚	後醍醐天皇行在所址
祇 王 寺	野の宮舊址	後醍醐天皇御尊影
祇王、祇女及佛御前墓	花園妙心寺	同 宸 翰
新田義貞首塚	花園妙心寺内四派の松	萬里小路藤房筆蹟

伏見桃山御陵 同 大佛前燈籠  
 同 東御陵 正倉院  
 明治天皇御尊影 鳥毛立女屏風繪  
 同 廻廊  
 同 紀貫之故郷梅  
 同 筆 蹟



小督局墓	……	二六	大慈閣	……	二五	笠置山	……	二四
勾當内侍幽棲地址	……	二六	小楠公首塚	……	二五	後醍醐天皇行在所址	……	二四
祇王寺	……	二六	野の宮舊址	……	二五	後醍醐天皇御尊影	……	二四
祇王、祇女及佛御前墓	……	二六	花園妙心寺	……	二六	同 宸翰	……	二四
新田義貞首塚	……	二六	花園妙心寺内四派の松	……	二六	同 宸翰	……	二四
						萬里小路藤房筆蹟	……	二四

伏見桃山御陵	……	二四	同 大佛前燈籠	……	二四	同 廻廊	……	二四
同 東御陵	……	二四	正倉院	……	二五	同 紀貫之故郷梅	……	二四
明治天皇御尊影	……	二四	鳥毛立女屏風繪	……	二五	同 筆蹟	……	二四
同 宸翰	……	二四	臺武天皇宸翰	……	二五	同 藤原定家墓	……	二四
昭憲皇太后尊影	……	二四	光明皇后御筆蹟	……	二五	初瀬山	……	二四
同 御筆蹟	……	二四	般若寺	……	二五	初瀬川	……	二四
伏見稻荷神社	……	二四	同 十三層塔笠卒塔婆	……	二五	室生寺	……	二四
同 大鳥居	……	二四	同 嵯峨天皇勅額	……	二五	同 五重塔	……	二四
御香宮神社	……	二四	新藥師寺	……	二五	三輪山	……	二四
藤の森神社	……	二四	同 十二神將像	……	二五	大神神社	……	二四
義民文珠九助碑	……	二四	藥師寺金堂	……	二五	傍 畝山	……	二四
寺田屋事件記念碑	……	二四	同 東塔	……	二五	畝傍山東北御陵	……	二四
醍醐寺本堂	……	二四	同 本尊藥師如來像	……	二五	檀原神宮	……	二四
同 藥師堂	……	二四	頭塔家石佛	……	二五	同 一の鳥居	……	二四
三寶院勅使門	……	二四	十輪院魚養墓	……	二五	同 一の燈籠	……	二四
同 庭園(一)	……	二四	菅原神社	……	二五	天香久山	……	二四
同 庭園(二)	……	二四	西大寺	……	二五	耳成山	……	二四
男山八幡宮	……	二四	同 奥の院與正菩薩廟	……	二五	綏靖天皇御陵	……	二四
淀城址	……	二四	田道將軍墓	……	二五	懿德天皇御陵	……	二四
淀の水車	……	二四	唐招提寺金堂	……	二五	安寧天皇御陵	……	二四
天王山	……	二四	同 三面僧坊	……	二五	多武峯談山神社	……	二四
妙喜庵	……	二四	同 孝謙天皇勅額	……	二五	飛鳥大佛	……	二四
寶積寺	……	二四	同 鑑真和尚墓	……	二五	當麻寺遠景	……	二四

**大和國**

興福寺及猿澤の池	……	二四	法起寺三重塔	……	二五	同 曼荼羅堂	……	二四
南園堂	……	二四	山背大兄皇子御墓	……	二五	同 當麻曼荼羅圖	……	二四
北園堂	……	二四	神功皇后御陵	……	二五	後醍醐天皇御陵	……	二四
鎌足遺愛の藤	……	二四	孝謙天皇御陵	……	二五	吉野神社	……	二四
奈良の都の八重櫻	……	二四	法華寺十一面觀音像	……	二五	如意輪堂	……	二四
菩提院	……	二四	法華寺	……	二五	吉野川	……	二四
嫩草山	……	二四	法華寺十一面觀音像	……	二五	村上義光碑	……	二四
三笠山下の神鹿	……	二四	海龍王寺	……	二五	藏王權現堂	……	二四
手向山神社	……	二四	同 聖武天皇勅額	……	二五	吉野山一丁目日本	……	二四
春日神社樓門	……	二四	法隆寺	……	二五	竹林院庭園	……	二四
同 廻廊	……	二四	同 夢殿	……	二五			
東大寺二月堂	……	二四	同 壁畫	……	二五			
同 山門	……	二四	中宮寺彌勒菩薩像	……	二五			
同 鐘樓	……	二四	同 天壽國曼荼羅圖	……	二五			
同 大佛	……	二四	長谷寺	……	二五			

**河内國**

推古天皇御陵	……	二五
聖德太子御陵	……	二五
孝德天皇御陵	……	二五
用明天皇御陵	……	二五



狭山の池	大坂城	伊人鬼貫墓
四條囃子神社	豊臣秀頼筆蹟	有馬温泉
四條囃子古戦場	淀君墓	寶塚温泉
楠木正行墓	淀君筆蹟	寶塚風景
和田賢秀墓	太融寺	箕面の瀧
木村重成墓	天満橋	楠木正成墓
後藤基次墓	天満天神社	湊川神社
枚岡神社	天神橋	湊川舊址
樟葉宮古址	中の島公園	廣嚴寺(楠寺)
涸院古址	大鹽平八郎父子墓	楠木正成肖像
渚の森	西山宗因墓	和田岬
絶間の池	安治川口	布引の瀧
源頼信墓	阿彌陀ヶ池	神戸諏訪山
源頼義墓	本願寺南御堂	打出の瀧
源義家墓	本願寺北御堂	阿保親王墓
金剛山葛城神社	高麗橋	生田神社及生田森古蹟
天野山金剛寺	道頓堀	梶原景季形見の梅
観心寺	天下茶屋	須磨の浦
楠木正成首塚	茶臼山古戦場	須磨の關古址
後村上天皇御陵	真田山	須磨寺
赤阪城址	鶴野古戦場	須磨内裏舊蹟
千早城址	森の宮	敦盛塚
楠公誕生地	真田幸村筆蹟	松風村雨塚
櫻井輝楠父子訣別の舊蹟(攝津)	住吉神社	鶴越古戦場
楠公筆蹟	同 高燈籠	一の谷古戦場
	同 反橋	眞光寺
	兼松原	平清盛塔
	阿部野古戦場	平經盛毘毘塚
	阿部野神社	松王人柱碑
	天王寺	
	生國魂神社	
	高津神社	
	高津宮址	
	一心寺	
	昆陽寺	
	同 開山塔	
	昆陽池	
	近松門左衛門墓	
	同 筆蹟	
	墨染寺女蔭墓	

和泉國

南海道

淡路國

阿波國

攝津國

同 夫婦岩	同 頂上	日高海岸の景
小松島辨財天濱	伊佐庭神社	有田柑橋園
勝 浦	靈の石、御車寄の杉	高野山金剛峯寺
撫養港妙見山	圓満寺	同 金堂
		同 山門
		同 奥の院

讃岐國

土佐國



濱寺公園	六九	昆陽池	六九	阿波國	
大濱公園	六九	近松門左衛門墓	六九	大瀧山公園	六九
		同筆蹟	六九	鳴戸海峽	六九
		墨染寺女龍墓	六九		

同 夫婦岩	六八	同 頂上	六九	日高海岸の景	六九
小松島辨財天濱	六八	伊佐庭神社	六九	有田柑橋園	六九
勝 浦	六八	靈の石、御車寄の杉	六九	高野山金剛峯寺	六九
撫養港妙見山	六八	圓満寺	六九	同 金 堂	六九

讃岐國

土佐國

高松市街	六八	高知城址	六九	同 女人堂	六九
高松港	六八	桂濱海邊(一)	六九	同 美福門院御陵	六九
栗林公園(一)	六八	同 (二)	六九	同 一の橋	六九
同 (二)	六八	尾長雞	六九	同 刈萱堂	六九
同 (三)	六八	山内一豊筆蹟	六九	同 弘法大師筆蹟	六九
丸龜市街	六八	同 夫人筆蹟	六九	九度山真田昌幸墓	六九
善通寺	六八	吸江船舶岸	六九	田邊 港	六九
飯の山	六八	吸江の舟遊	六九	同 鬼橋岩	六九
屋島古戰場	六八	五臺山より吸江を望む	六九	同 獅子舞岩	六九
五剣山八栗寺	六八	吸江の青柳橋	六九	同 瀬戸崎奇巖	六九
琴平神社	六八	浦戸港狭島の景	六九	同 關難神社	六九
同 櫻の馬場	六八	五臺山夫婦岩	六九	同 椿崎の景	六九
雲井御所址	六八	清水 港	六九	同 八丁	六九
松ヶ浦崇徳院舊蹟	六八	龍串の景	六九	湯崎温泉御幸芝	六九
長命寺	六八	紀貫之舊蹟	六九	同 圓月島	六九
寒霞溪	六八	野中兼山墓	六九	那智の瀧	六九
同 蟾蜍巖	六八	同 筆蹟	六九	熊野横杭岩	六九
同 錦屏風	六八	山内容堂筆蹟	六九		
琴林公園(一)	六八				
同 (二)	六八				
水主神社	六八				
百襲姫命御墓	六八				

紀伊國

山陰道

丹波國

丹後國

和歌の浦	六八	和歌の浦	六九	篠山城址	六九
同 東照宮	六八	不老橋	六九	保津川	六九
不老橋	六八	觀海閣	六九	出雲神社	六九
根上り松	六八	和歌山城址	六九	法常皇寺本堂	六九
小竹行宮址	六八	日前國懸神社	六九	同 勅使門	六九
日前國懸神社	六八	龜山神社	六九		
龜山神社	六八	紀三井寺	六九		
紀三井寺	六八	道成寺本堂	六九		
道成寺本堂	六八	同 山 門	六九		
同 山 門	六八	清姫安珍木像	六九		
清姫安珍木像	六八	日高川	六九		
日高川	六八				

伊豫國

目次

松山城址	六八	伊勢太神宮舊社籠神社	六九
宇和島港	六八	天の橋立	六九
和靈神社	六八	切戸の文珠	六九
石 穂 山	六八	文珠渡船場	六九
高濱港	六八	成相山傘松の股覗き	六九
星ヶ岡表忠碑	六八		
別子銅山	六八		
道後温泉	六八		
同 内部又新殿	六八		
道後公園	六八		



橋立公園の千貫松……………101  
舞鶴軍港……………101

但馬國

玄武洞(一)……………103  
同(二)……………103  
城崎温泉……………103  
生野銀山……………103

因幡國

若櫻古城址……………103  
荒木又右衛門墓……………103

伯耆國

太神山神社……………103  
名和神社……………103  
日野川より大山を望む……………103  
大山寺……………103  
夜見ヶ濱……………103

出雲國

米子清水寺……………103  
出雲大社……………104  
美保の關辨天岩……………104  
美保神社……………104  
宍道湖……………104  
松江城址……………104

石見國

濱田港外の浦……………105  
同 鶴島……………105  
断魚溪嫁ヶ淵の景……………105  
同 川越不動瀧……………105

隱岐國

黒木御所址……………106  
黒木行在所跡黒木神社……………106  
後鳥羽院御火葬所(焼火山)……………106  
同 宸翰……………106  
津戸港……………106

山陽道

播磨國

明石城……………106  
明石の浦……………106  
尾上の浦……………106  
尾上の鐘……………106  
尾上相生の松……………106  
高砂の松……………106  
舞子濱……………106  
曾根の天神……………106  
曾根の松……………106  
石の寶殿……………106  
別府手枕の松……………106  
千歳の松……………106  
赤穂城址……………106  
大石良雄舊宅……………106  
大石神社……………106  
大石良雄遺愛の櫻……………106  
大石良雄名殘の浦……………106  
赤穂鹽田……………106  
書寫山全景(一)……………106  
同(二)……………106  
大野山御陵……………106  
姫路城……………106  
班鳩寺……………106  
觀瀆所……………106

備前國

岡山城……………106  
後樂園……………106  
同 中の島釣殿……………106  
同 太鼓橋と島の茶屋……………106  
同 唯心堂遠見……………106  
藤戸の渡……………106

備中國

吉備眞備祖母藏骨器……………106  
彈琴石……………106

備後國

吉備津神社……………106  
高松城址……………106  
清水宗治首塚……………106

安藝國

福山城址……………106  
鞆の津……………106  
福禪寺……………106  
阿伏兔觀音……………106  
帝釋堂永明寺……………106  
同 鬼の坊門……………106  
同 神橋……………106  
同 城ヶ島……………106  
同 賽の河原……………106  
尾の道市街……………106  
千光寺……………106  
同 玉の石……………106  
仙醉島……………106  
長井浦水調の井……………106  
神功皇后船繫の松……………106  
廣島城……………106  
同 城内明治大帝玉座……………106  
縮景園……………106  
興樂園……………106  
饒津神社……………106  
廣島市街……………106  
國泰寺……………106  
宇品港……………106  
頼春水一族墓……………106  
洞雲寺……………106  
陶全姜首塚……………106  
宮島紅葉谷公園……………106  
同 嚴島神社大鳥居……………106  
同 嚴島神社社殿……………106  
同 同 反橋……………106  
同 管絃船……………106  
宮島遠望……………106  
同 嚴島神社千疊敷……………106

豐後國

同 舞樂殿……………106  
同 三笠濱……………106  
同 長濱……………106  
同 毛利元就墓……………106  
博多市街……………106  
栴田神社……………106  
黒田如水筆蹟……………106  
箱崎八幡宮……………106  
頼山陽筆蹟……………106  
別府温泉……………106



隱岐國

黒木御所址……………10x  
黒木行在所跡黒木神社……………10x  
後鳥羽院御火葬所(焼火山)……………10x  
同 宸翰……………10x  
津戸 港……………10x

同 太鼓橋と島の茶屋……………22  
同 唯心堂遠見……………22  
藤戸の渡……………22

備中國

吉備眞備祖母藏骨器……………23  
彈 琴 石……………23

宮島紅葉谷公園……………28  
宮島嚴島神社大鳥居……………28  
同 嚴島神社社殿……………28  
同 同 反橋……………28  
同 管絃船……………28  
宮島遠望……………28  
同 嚴島神社千疊敷……………28

同 舞樂殿……………29

同 三笠濱……………29

同 長 濱……………29

同 毛利元就墓……………29

同 小早川隆景墓……………29

周防國

錦 帶 橋……………30

龜山公園毛利公銅像……………30

金鷄の瀧……………30

長門國

松下村塾……………33

吉田松陰筆蹟……………33

毛利輝元廟……………33

前原一誠墓……………33

聖賢堂及村田清風碑……………33

萩 城 址……………33

安徳天皇御陵……………33

古壇の浦……………33

平家七盛墓……………33

御 裳 川……………33

平家蟹……………33

下の關市街……………33

春 帆 樓……………33

赤 間 宮……………33

龜山神社……………33

關門海峡……………33

西海道及琉球

筑前國

香椎宮樓門……………34

同 綾 杉……………34

都府樓址……………34

海の中道……………34

芥屋の大門……………34

名島の橋石……………34

瀬岡城址……………34

瀬岡西公園……………34

目次

筑後國

高良山……………36

高良神社……………36

筑後川……………36

久留米城址……………36

水天宮……………36

高山彦九郎墓……………36

同 筆 蹟……………36

篠山神社……………36

井上傳女墓……………36

將軍梅……………36

豊前國

宇佐神宮大鳥居……………38

同 勅使門……………38

門司海峡……………38

甲宗八幡宮……………38

佐賀の關、白濱……………38

同 黒濱……………38

耶馬溪山陽擲筆峯……………38

同 犬岩……………38

同 鮎歸り……………38

同 佛坂……………38

頼山陽筆蹟……………35

豊後國

別府温泉……………35

同 海地獄……………35

作原神社……………35

同 境内神樹……………35

鶴谷城址……………35

長曾我部信親墓……………35

大分城址……………35

由布山……………35

齒 齧 灣……………35

沈隨の瀧……………35

春日公園……………35

肥前國

佐賀城址……………36

運池公園……………36

松原神社……………36

鍋島開叟銅像……………36

高 傳 寺……………36

江藤新平碑……………36

多布施川の石樋……………36

川 上 橋……………36

川上實相院……………36

川上川の鮎築……………36

成富兵庫水功碑……………36

鎮西八郎矢根石……………36

興賀神社樓門……………36

松浦川及松浦山(領巾振山)……………36

玄海の玄武門……………36

七ツ釜より玄海を望む……………36

立 神 岩……………36

虹の松原……………36

唐 津 港……………36

佐世保市街……………36

田島神社……………36

大村灣より箕島を望む……………36

玖 島 岬……………36

平 戸 灣……………36



呼子港	.....	一三〇
名護屋城址	.....	一三〇
同 本丸址	.....	一三〇
廣澤寺蘇鐵	.....	一三〇
島原城址	.....	一三〇
島原港	.....	一三〇
長崎港	.....	一三〇
同 高鉾島	.....	一三〇
諏訪神社	.....	一三〇
同 拜殿	.....	一三〇
崇福寺の大釜	.....	一三〇
同 檳榔樹	.....	一三〇
都農一の宮神社	.....	一三〇
生目神社	.....	一三〇
平景清廟	.....	一三〇
佐多岬	.....	一三〇
霧島神社	.....	一三〇
鹿兒島神社参道	.....	一三〇

大隅國

薩摩國

肥後國

熊本城	.....	一三〇
水前寺	.....	一三〇
本妙寺	.....	一三〇
加藤清正筆蹟	.....	一三〇
細川忠興筆蹟	.....	一三〇
同 夫人筆蹟	.....	一三〇
阿蘇山遠望	.....	一三〇
同 噴火の景	.....	一三〇
球磨川	.....	一三〇
同 遙拜の瀬	.....	一三〇
五家の庄	.....	一三〇
鶴丸城址	.....	一三〇
城山全景	.....	一三〇
島津公爵邸	.....	一三〇
祇園の洲	.....	一三〇
島津齊彬筆蹟	.....	一三〇
大久保利通誕生地	.....	一三〇
同 筆蹟	.....	一三〇
岩崎谷洞窟	.....	一三〇
西郷隆盛墓	.....	一三〇
同 誕生地	.....	一三〇
同 筆蹟	.....	一三〇
同 洞中潜伏址	.....	一三〇
月照上人墓	.....	一三〇
櫻島と鹿兒島市街	.....	一三〇
可愛山陵	.....	一三〇
和氣清麿筆蹟(大隅)	.....	一三〇

日向國

對馬國

琉球國

鶴戸神宮	.....	一三〇
月知梅	.....	一三〇
油津港	.....	一三〇
梅ヶ濱	.....	一三〇
檣原橋	.....	一三〇
高千穂峰天の岩戸神社	.....	一三〇
同 高天ヶ原	.....	一三〇
同 神代古文字	.....	一三〇
狹野神社	.....	一三〇
同 杉道	.....	一三〇
宮崎神宮	.....	一三〇
檣原神社	.....	一三〇
内海港	.....	一三〇
青島全景	.....	一三〇
嚴原港	.....	一三〇
首里舊王城	.....	一三〇
同 首禮門	.....	一三〇
那覇市街	.....	一三〇
琉球の列舟	.....	一三〇
琉球の墳墓	.....	一三〇

「史蹟名勝天然記念物」前編目次終



●紫宸殿 (京都)

桓武天皇以來、四神相應の地として選定せられ歴代の天皇茲に宸居し給ひたる所謂舊大裏は、曩に明治二年車駕東幸の後皇居を東京に遷され給ひたるを以て、爾來別居として京都御所と稱せらるゝに至れり。紫宸殿は即ち此の御所内に在り。殿は御所の門内更に宮垣を繞らし、承明日華、月華、の三門を設けて階下に通ず。殿は九間四面にして屋根は東西の二方を檜皮葺とし、中央を身舎とす、四方に廂を有し、欄干を設く、南階十八級、四隅の階は凡そ九階、身舎の中央には玉座を設けたり、北廂の隙子には聖賢像、負文龜の繪あり、其裏面には飛鸞桐花の紋様を描く、南階を挟みて、左右に櫻橘兩樹を植ゆ所謂右近の橘、左近の櫻即ち是なり。紫宸殿は一に南殿と稱せられ、其庭を南庭と云ふ。古來諸種の典儀多く茲處に於て行はれたり。『月清集』に曰く

後京極

むらさきの庭の春風長閑にて  
花にかすめる雲の上かな  
是れ蓋し紫宸殿を詠せるものなり

●建禮門 (京都)

京都御所の南門を稱して建禮門と云ふ。京都御所は上京區の東北部に存し、東西百三十七間南北二百四十六間に亘る宏壯なる一大結構にして、周圍に建春、建禮、宣秋、朔平の四門を設く、建禮門の前殿は即ち紫宸殿にして其正門は承明門とす。

因に云ふ御所は永祿の兵火に延焼したる後、造營し、天正五年更に修造を加へ天明八年又火災に罹りたるを以て當時幕府の老中松平定信、大内裏の規制に基き之を考量して修造せり、即ち是れ寛政の改修なり、其後嘉永七年炎上し安政三年

造營して以て今日に至れるものなり

●仙洞御所 (京都)

往時上皇の宮居したまひたる所にして舊内裏の東門に在り。西は大内東垣に接し南は下立賣東は寺町西北は大宮御所に隣りす。總面積二萬二千五百六十二坪あり徳川氏後水尾天皇の爲めに本御所を造營したるが、其後炎上三回に及べり。而して其の最後に於ける炎上の際、當時上皇御在さゞりしを以て、徳川幕府は唯だ僅に其の外垣のみを修理して宮殿を造營せず故に其の往時の結構を窺ふこと能はざるも、而かも其の林泉は舊觀依然として尙存し、東西約一町、南北約三町に亘り中に大池を設け、鴨川の水を導きて飛泉を造り奇岩怪石其の間に按排せられ。幽邃閑雅、俗寰を脱却するの觀あり

●清涼殿 (京都)

西樓月落花間曲、中殿燈殘竹裏音と和漢朗詠集に載せられたるもの、即ち是れ清涼殿なりとす。清涼殿は中殿にして紫宸殿の西方に位置す。昔は天子此殿に宸居し給ひしを以て、總て昔時の造營なり。殿は九間四面にして東に向ひ、屋根は檜皮葺とし南北營にして中央を身舎とし御帳を建て晝御座とす、其南方に東廂あり、東廂の南に石灰壇あり、身舎の西方に臺盤所あり、其南に鬼間あり、晝御座の北方に夜御殿は設けられたり、其北に藤壺、上御局、萩戸、弘徽殿上御局あり、二の間は夜御殿の東に位し、朝餉間は西に在り、御手水の間は其の北方に當れるなり。

東廂の外に孫廂あり、南廂は之れを殿上と稱す。孫廂の外に簀子あり、欄干を設けたり。清涼殿の南に校書殿あり、昔は天子之に臨みて政事を省みたまひし事あり藏人之に參候するを以て藏人所殿内に在りたりと云ふ。

●蛤御門 (京都)

舊内裏の築地外なる御苑に設けられたる九門の一なり。御苑の街路に接する方面は石壘を築き、之に石薬師、清和院、寺町、堺町、下立賣、蛤、中立賣、乾、今出川の九門を設けたり。明治維新後、蛤、乾、石薬師の三門を移して御苑の地域を擴張し、苑内一面の芝生と爲し、泉水樹華を按排して、以て衆庶の遊園地となせり。因に曰ふ、凝華洞征、錦流亭、後水尾天皇御遺愛の車返しの櫻、光嚴天皇御愛の紅梅等、皆この御苑内に存す。

幕末紛擾の際、幕府に於て長州征討の事決定せりとの報一度長州に傳はるや、激越せる長藩の尊王黨は佛然として切齒扼腕し、元治元年六月軍を率ゐて京都に殺到せり當時京都守護の任に在りたる、會津藩兵は九門を鎖して防戦に力め双方激烈なる戦鬪を交へ、就中蛤御門に於ける交戦最も劇甚を極めたり。是れ所謂蛤門の事變なりとす。左に其の梗概を敘すべし。曩に尊王攘夷黨の中心となりて京都に勢を振ひたる長藩は大和行幸の停止と共に失脚し、歸國の已むなきに至りたるが、志士等は是れ會藩の策なりとして大に憤り、元治元年六月十七日眞木保臣、久坂玄瑞、福原越後等は兵數百を率て上京したるより、徳川慶喜、松平容保等は事の重大なるを察し、俄に九門を鎖して龜を備へ、同時に大垣、彦根、會津、桑名諸藩の兵に命じて長軍に當らしめたり。此際堺門には越前藩、寺町門には肥後藩、蛤門には會津藩あり長軍は主として會津藩主松平容保を討取るべき目的を以て猛然として蛤門に殺到し、茲に劇甚なる戦鬪は演ぜられたるが、此時同門の守備は崩壊したるも結局長軍の戦敗に歸して長藩志士の軍は潰走するの已むなきに至れり。

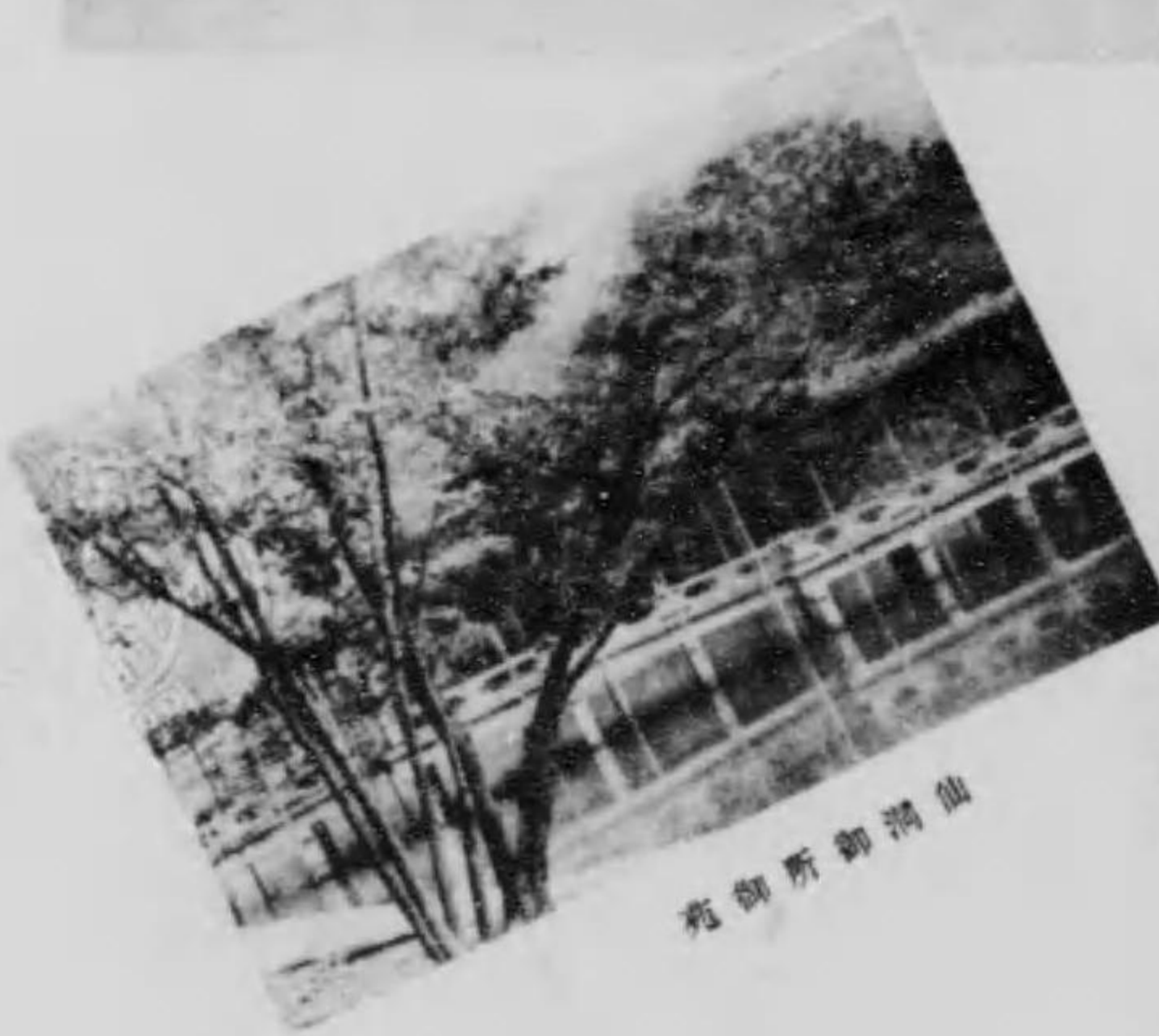




殿涼清



櫻の近左 櫻の近右及殿宸紫



苑御所東清



門禮建



門御始

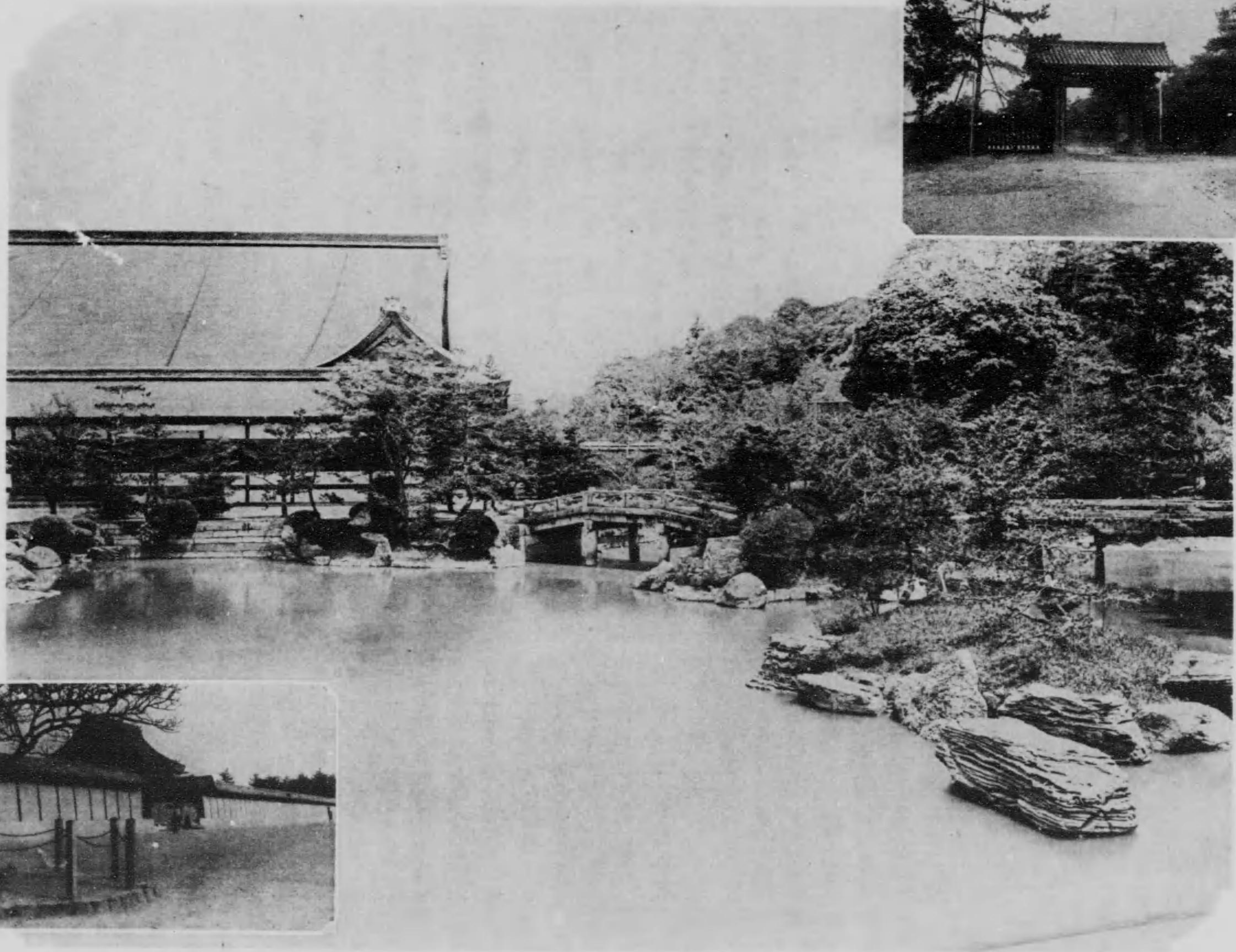
る後、造營し、天正五年更に修造を加へ  
天明八年又火災に罹りたるを以て當時幕  
府の老中松平定信、大内裏の規制に基き  
之を考量して修造せり、即ち是れ寛政の  
改修なり、其後嘉永七年炎上し安政三年

上と稱す。孫廂の外に簀子あり、欄干を  
設けたり。清涼殿の南に校書殿あり、昔  
は天子之に臨みて政事を省みたまひし事  
あり藏人之に參候するを以て藏人所殿内  
に在りたりと云ふ。

然として蛤門に殺到し、茲に劇甚なる戦  
闘は演ぜられたるが、此時同門の守備は  
崩壊したるも結局長軍の戦敗に歸して長  
藩志士の軍は潰走するの已むなきに至れ  
り。



宣秋門



清和院門

京都御所禁苑

● 京都御所禁苑 (京都)

「兩殿規矩に應じ、四門總て崔嵬燕雀齋

踏え東は萬里小路に及び南は土御門大路  
を踏えたるなり。永祿年間正親町天皇の  
時代には朝廷衰微を極め畏くも御即位の

而して皇居を圍むに長壁を以てせり。

● 清和院門 (京都)





### ●京都御所禁苑（京都）

「兩殿規矩に應じ、四門總て崔嵬燕雀齋を繞り、櫻橋階に接して栽へらる」とは寛政の昔、光格天皇が新に造營竣成を告げたる皇居へ還御あらせられし際に於ける御吟草なり、即ち是れ御所の光景を賦し給ひたるもの此の皇居は當時の老中松平樂翁が大内裏の規制に基き新營せる所謂寛政の改修なりとす、其後嘉永七年炎上し、現存せる京都御所は安政三年修理せるものなり

御所は御苑の内、所謂禁苑内に在り、御苑は京都市の中央北部に位置し、外部に九門を設け、御所は此の九門の内に構へられたり。而して其外廓東は寺町通りに起り、西は烏丸通に至る、南は丸太町を界とし、北は今出川に臨む面積二十五萬餘坪あり、内廓は外廓の中央に位し、南門を以て其正門とし別に唐門御門公家門等あり、門内更に又宮垣を繞らしたる内に紫宸殿、清涼殿、清所、常御殿、二對室、一對室、内侍所、記録所、小御所、女院御殿、御學問所、御休所等の諸宮殿設けらる。

今、京都御所に就き少しく歴史を遡りて記する所あるべし。

近代京都御所は古高倉殿の地にして、其南を土御門東洞院殿と云へり、文保二年醍醐天皇此殿に於て受禪あり、光嚴天皇又茲に居らせ給ふ、南北兩朝分立の後足利氏光明天皇を此に奉じたりしが爾後變轉定まらず、或は土御門烏丸内裏に御し、又一時の假居を一條南北處々に移されたりと云ふ。斯くて第百五代正親町天皇の永祿初年に至り此地に御造營ありしより以來永く此地に定まり以て明治の初年に及びたりき

高倉殿の北を正親町殿と云ふ。正親町天皇の時此二殿を併せ、北は一條大路を

踏え東は萬里小路に及び南は土御門大路を踏えたるなり。永祿年間正親町天皇の

時代には朝廷衰微を極め長くも御即位の大典舉行も意の如くならざりしが毛利元就深く之れを慨し獨力費を獻じて大典の料を進め、又皇居御造營の資をも献納せり。其後永祿十二年織田信長亦足利氏を援けて天下に號令するや先づ皇居を修理す、元龜四年信長の兵火を京師に放つに當り皇居爲めに延焼せしを以て又造營せり次で天正五年京中の町人に命じて宮垣を築かしむ東西凡そ百一間南北百十間なり同十三年豊臣秀吉大に京都に修造を加へ内裏の面目茲に大に一新せり。其後徳川氏時代に至つて屢々炎上したるが其都度幕府は造營の役に服したり。

御所は東西凡そ二町餘、南北四町許、其北隅には天正中の遺構なる土藏三字を存す。明治元年八月二十七日明治天皇は茲に於て即位の式を擧げさせ給へり。同二年車駕江戸に幸せられ、其後東京に御遷都ありし後、同十年故都に行幸あらせられ此に御駐在ありし時、後來大禮は此地に於てすべしとの教旨ありたり、故に皇室典範中にも即位の禮及び大嘗會は京都に於て之を行ふの條を置かせられたり。是を以て大正四年今上陛下には京都に於て御即位の大典を擧げさせ給へり。

- 上苑西風送桂香 柴野 栗山
- 何人今夜清涼殿 承明門外月如霜
- 宮漏沈々月在空 夾街萬樹玉玲瓏
- 紫苑朱雀知何處 一曲霓裳奉御觴
- 賴山 陽

### ●宜秋門（京都）

皇居を圍む四門の一にして西面して建てられたるもの即ち宜秋門なりとす、南正面なるを建禮門と云ひ、東面せるを建春門と云ひ、北面せるを朔平門と云ふ、

而して皇居を圍むに長壁を以てせり。

### ●清和院門（京都）

御苑に設けられたる九門中の一なり、九門とは即ち堺町、下立賣、蛤、中立賣、乾、今出川、石藥師、清和院、寺町の九門を云ふ、此の門内御苑には明治維新前には諸親王を始め諸紳の邸第多く建てられ所謂公卿屋敷と稱せられたるが明治十一年に至り此地を開きて御苑地となし、蛤、乾、石藥師の三門を移して地域を擴張し以て乘廡の遊園地となしたり。

因に云ふ、公卿屋敷の定封は天正年中豊臣秀吉の設けたる規制にして、正親町天皇の時とす、徳川氏に至りても亦此制に倣ひて毫も變る所なし。皇后、仙洞を中心に置きて、皇族、公卿の邸宅悉く茲に築めて、其間に基布せしめたり。九門を置きて外に通ずる疊壕の設備、甚だ固からざるは缺點と謂ふべし。

- 還宮 光格 天皇
- 蓬幕周文圍 不羨漢文臺 舊章一是從
- 新築本非催 百工忽告竣 整質自東回
- 拭目向城雉 城雉亦美哉 兩殿應規矩
- 四門總崔嵬 燕雀繞齋集 櫻橋接階裁
- 豈其爲逸豫 講禮共徘徊 委佩群僚會
- 將幣九州來 素心既已足 起臥感鹽梅
- 欣然歌思動 乙夜薄言裁
- 平安上巳書成 賴山 陽
- 吹血東風聞萬蹄 角雄秦晉送排擠
- 九門今日放金鑰 春苑縱民觀國鷄
- 望外夜露、是夕爲新嘗祭 梁川 星巖
- 宮溝流水凍無聲 燎火搖光雪忽晴
- 知是移來仙躡近 依微風遞玉鑾鳴
- 正月十九日、上南殿、閱樂舞、
- 今士民縱觀 同 人
- 天門曉開日革新 一曲承雲萬國春
- 共喜聖朝恩溥遍 布韋濫得近櫻宸



●平安神宮 (京都)

桓武天皇、地を平安に相し給ひて遷都ありし以來春秋一千年に相當せし明治二十八年、之が紀念祭を舉行し、同時に京都岡崎町の西方に一神宮を建設せるもの即ち是れ平安神宮なり。桓武天皇を祭り官幣大社に列せらる。境域一萬六六百坪、本殿は檜皮葺にして南面す。其の構造總て往時八省院、大極殿の制に模擬し建築壯麗を極め疏水の清流潺湲宮城を繞り肅然として敬畏の念を起さしむ

明治廿八年三月平安神宮成、十五日奉安桓武帝靈位、時征清之師海陸大捷、振古未曾有之偉勳、千載一時之盛典、恰同其時、誠是幽顯齊歡、人神共抃、恭賦以記 小野 湖山 千古平安地 平安宮始成 聖朝追遠典 群姓奉崇情 金碧相輝映 山河亦顯榮 威靈及殊域 登晉鎮東瀛

●平安神宮應天門 (京都)

應天門は結構凡て古制の式に則る、桁行六十尺梁間二十四尺、高さ六十四尺、五間三戸、兩層にして土壇の上に立てり、垂木は反を成して破風の形を示し、木材は皆塗るに丹朱を以てし、白壁碧瓦を以て之に配す。門より北方三十三間にして龍尾壇あり、龍尾壇は東西に亘り、長さ二百八十尺、朱欄を設く、左右に登路あり三級の石階あり、是より二十五間を距て、大極殿は建てられたり。

●大極殿 (京都)

是れ平安神宮拜殿の稱なり。蓋し其結構様式總て古への大極殿に模擬せるを以てなり、又一に記念殿とも云ふ。金碧燦爛、丹木の梁柱は相映して頗る壯觀を極む、殿は桁行百十尺梁間四十尺、儼然として土壇の上に立つ、三級の石階あり。

但し古制の二分の一なりといふ。中央を身舎とし、之を周りて入側あり、五十二

の丹楹之れが分界を爲せり。天井は板を用ひずして化粧垂木を露出す、床は飯甕を四半に割り合せたり。是れ大和唐招提寺金堂の式に依るものなり。殿の左右には歩廊ありて東西に走ること各七十尺、折れて南下すること又九十尺に及ぶ、廊は連子を以て二分し其の終端には各小樓を起す、東を蒼龍と云ひ、西を白虎と云ふ、東西の構造同一なり。桁行梁間各三十二尺、中央及び四隅には大小の層樓を成す。大極殿の背に一字あり。是れ即ち神靈を奉安する内殿なりとす。明治二十六年の起工に係り二年を経て竣工せり。

●神泉苑 (京都)

二條離宮の南方に在り。往時は其の疆域甚だ廣大にして、東は大宮、西は壬生北は二條、南は三條に及びたるも、今は減少して、東西三十五間、南北四十六間に過ぎず。此地桓武天皇以來、天子遊覽の御苑にして近衛次將を別當としたり。天長元年、僧空海苑中に於て請雨讀經を修し其後仁海、範俊の二僧も勅を奉じて請雨し、小野小町亦苑池に臨みて雨を祈りしと傳ふ。苑は年と俱に漸く荒廢に歸したりしを、承久の亂後、北條泰時門垣を修築したる以來、風霜數百年荒廢愈よ加はりて舊蹟殆んど絶滅せんとしたりしが、元和年間、筑前の僧覺雅大に之を慨し官に請ふて苑の一部を修補し、茲に眞言宗の一靈場を開きたり、現時の神泉苑は是れなり。苑内の池を法成就池と云ふ池に三島あり。一は善女龍王を祭り一は二重塔を築造し、一は辨財天を祀る。慶長年間、京都所司代板倉勝重、片桐且元、僧快我、禁中の旨を奉じて苑を修造したる事あり。又此苑に於て屢々勅修の御靈會を催されたる事は續日本後紀、三代實錄等に記載せられたり。

●二條離宮 (京都)

舊二條城を云ふ、現境域は八萬三千坪、東西五丁餘、南北四丁に亘り、堀川以西二條南北に跨る。疊壁整然として儼容を示し、本丸、二の丸の二區に分れ、殿園は其の中間に存す。慶長五年徳川家康關西諸侯に賦課して城を茲に造營したるも、即ち二條城にして、當時徳川氏は此城を以て上京せる際に於ける駐蹕の所と爲しにり、其後天主閣は火災の爲めに焼亡したるが、其他の殿舎諸屋は屢々修繕を加へて今尙存せり。本城の建築は紫野孤蓬庵なる小堀遠州政一の設計に係るものなり

慶應三年十月徳川慶喜上洛して茲に居城したるが暗雲全國を蔽ひ形勢益々危急に瀕せるより深く前途を慮る所ありて遂に大政返上の奏請を斷行し、茲に局面一大幅開を爲したるは實に此の二條城に依つて行はれたりき。維新後一時京都府廳を茲に置きたるも後他に移し修理を加て改めて離宮となれり。

●縣井 (京都)

御苑内に在る清泉なり。傳へいふ、舊縣宮の祠宇茲に在りしに基きて名くと、「井戸殿一條北東洞院西角、號縣井、在縣官故也」と拾芥抄に載せたり 後鳥羽院

蛙鳴くあかたの井戸に春暮て 咲やしぬらん山吹の花

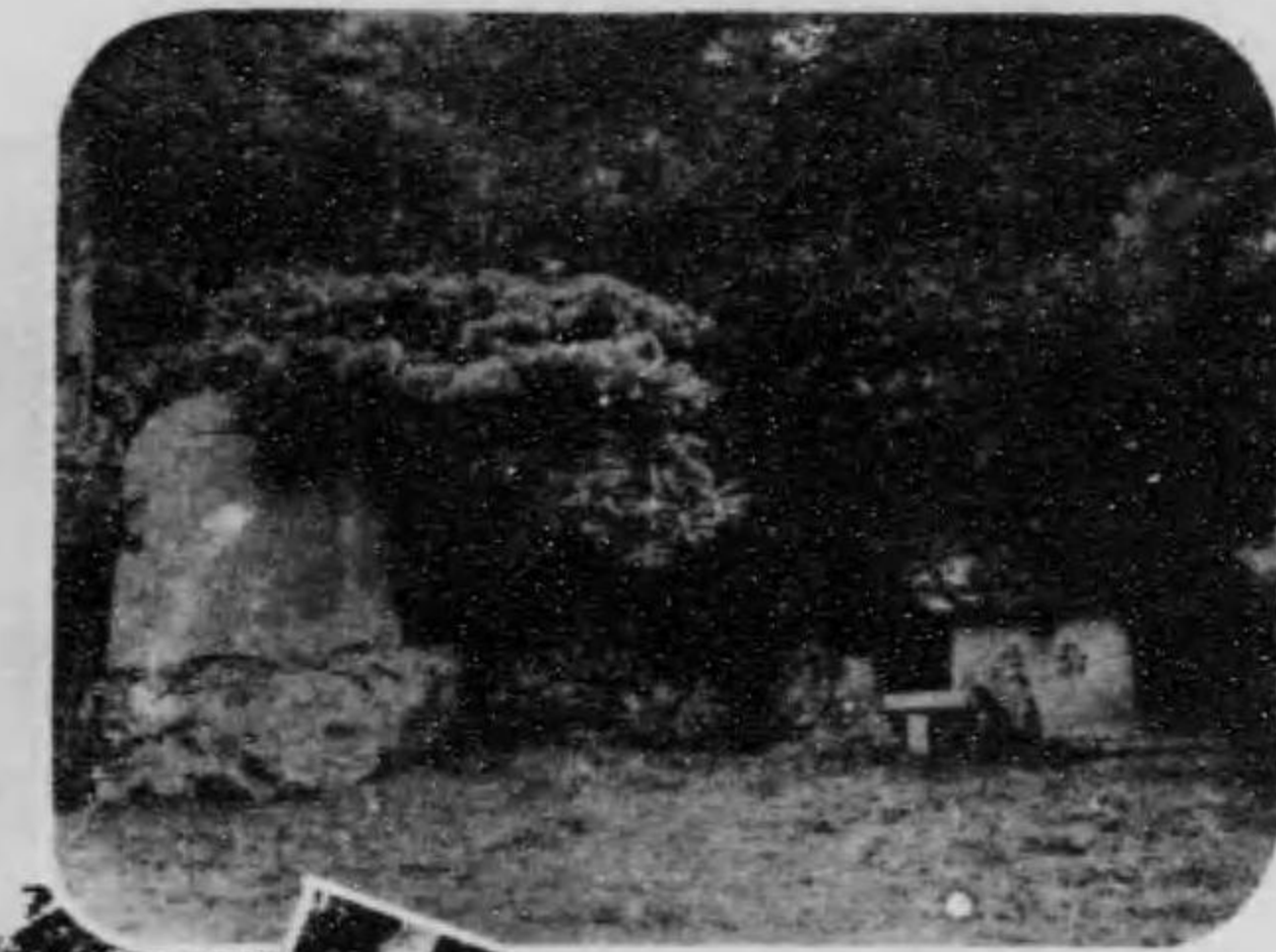
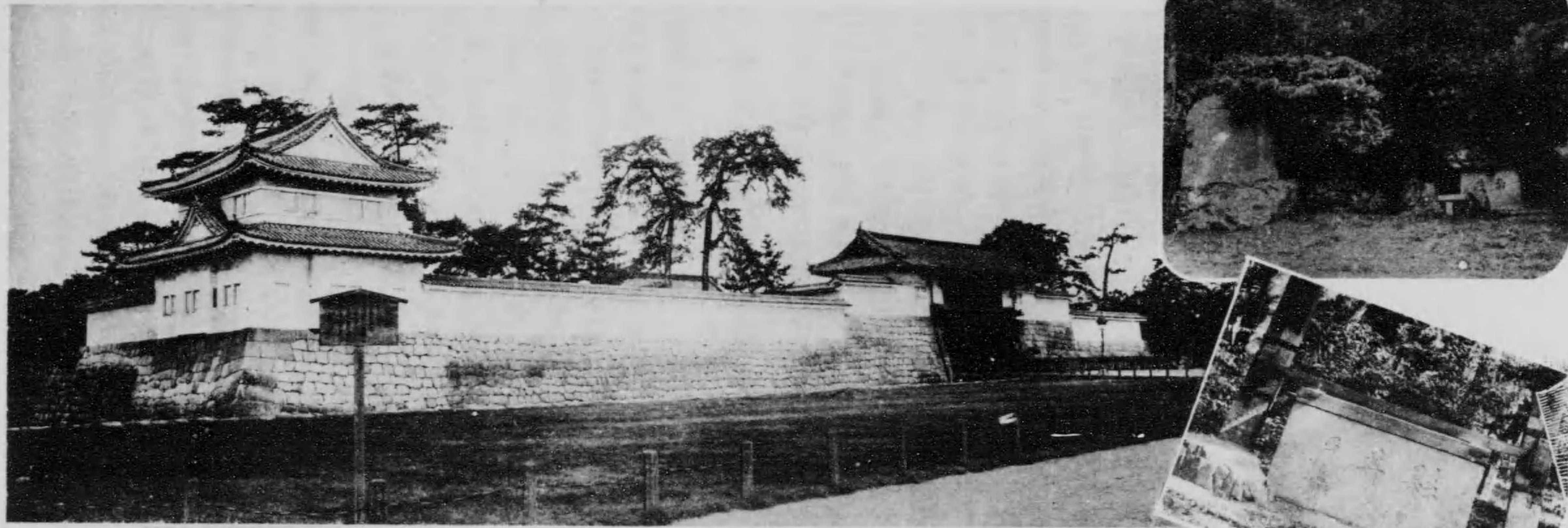
●祐ノ井 (京都)

日の御門の北方、舊中山邸址に在り、是嘉永五年九月二十二日明治天皇中山忠能邸に於て御降誕ありし際、産湯を茲に汲み奉りし井戸なり、天皇は御父孝明天皇より御名を祐齋と賜はりしを以て、以來此井を「祐の井」と稱し今碑を茲に建て、標す。

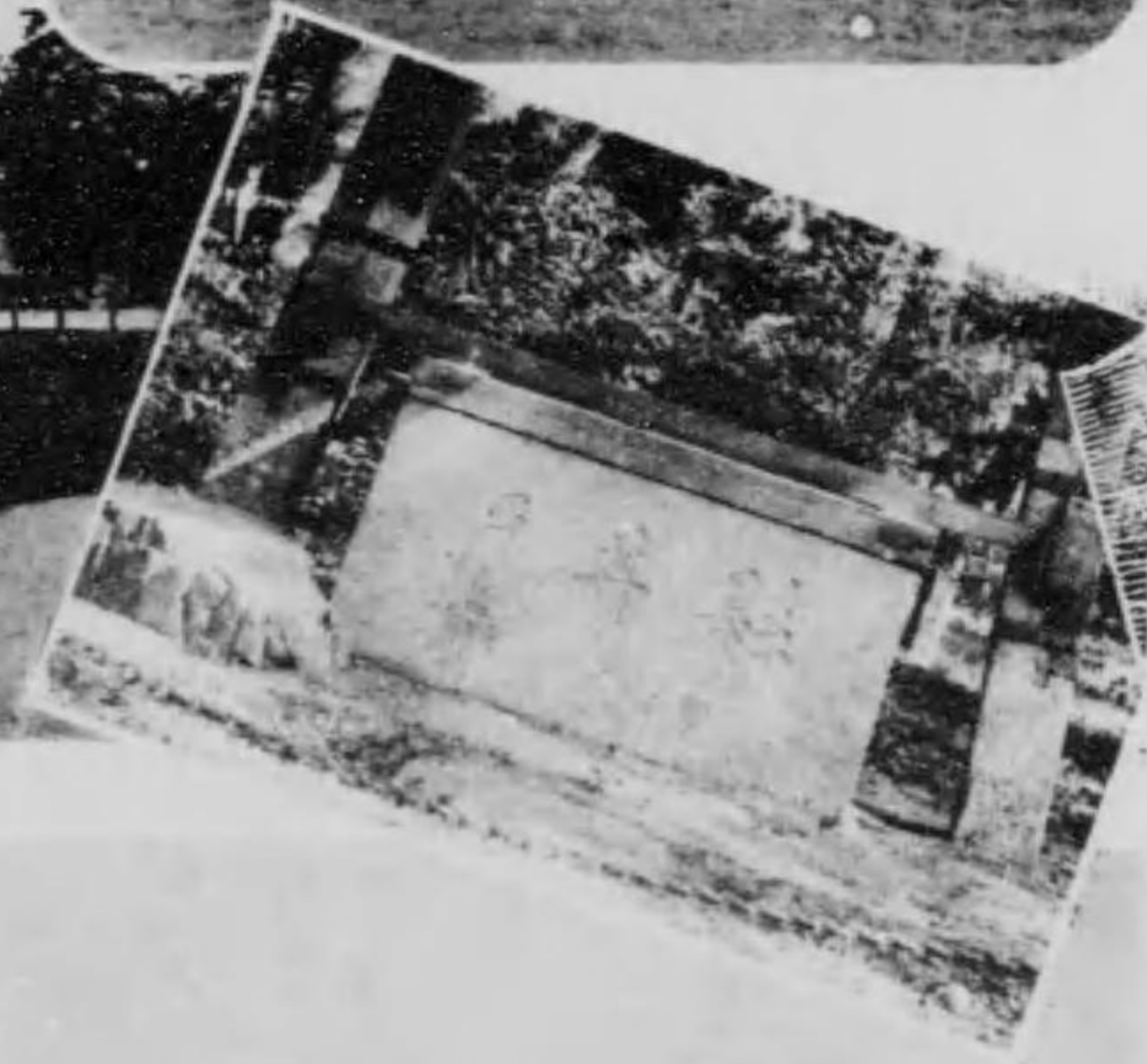




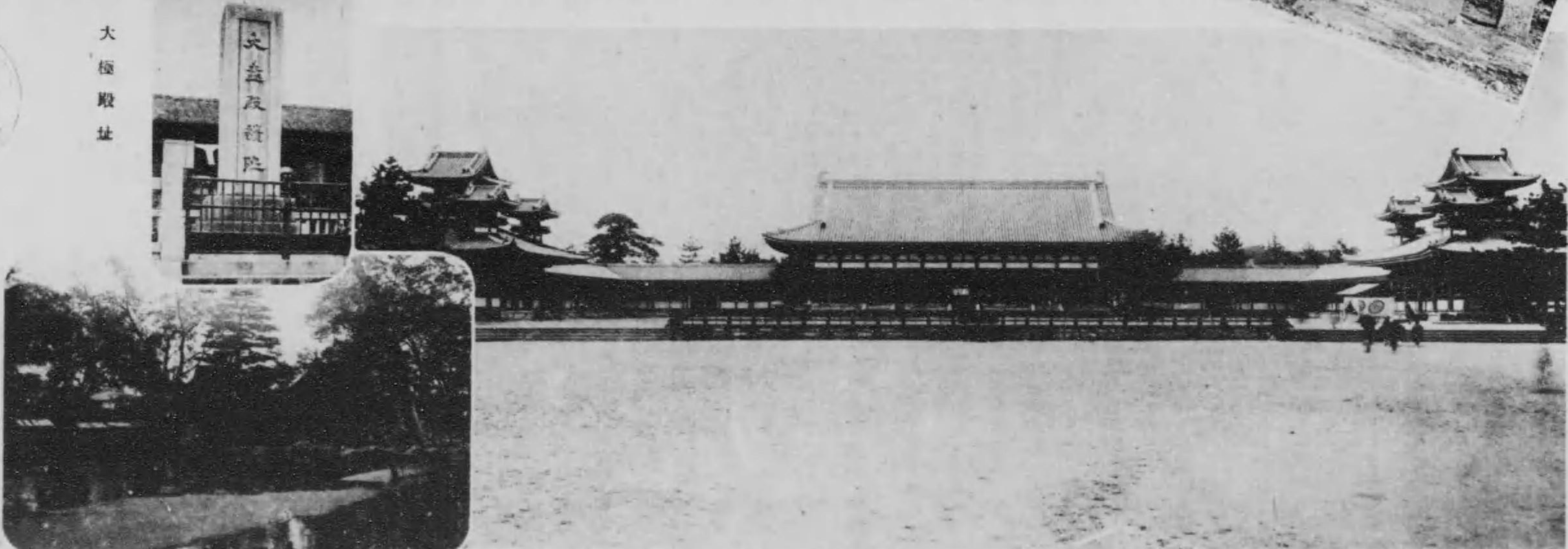
二條離宮



明治天皇産湯井



縣井



平安神宮



大極殿址

神泉苑

上ノ三

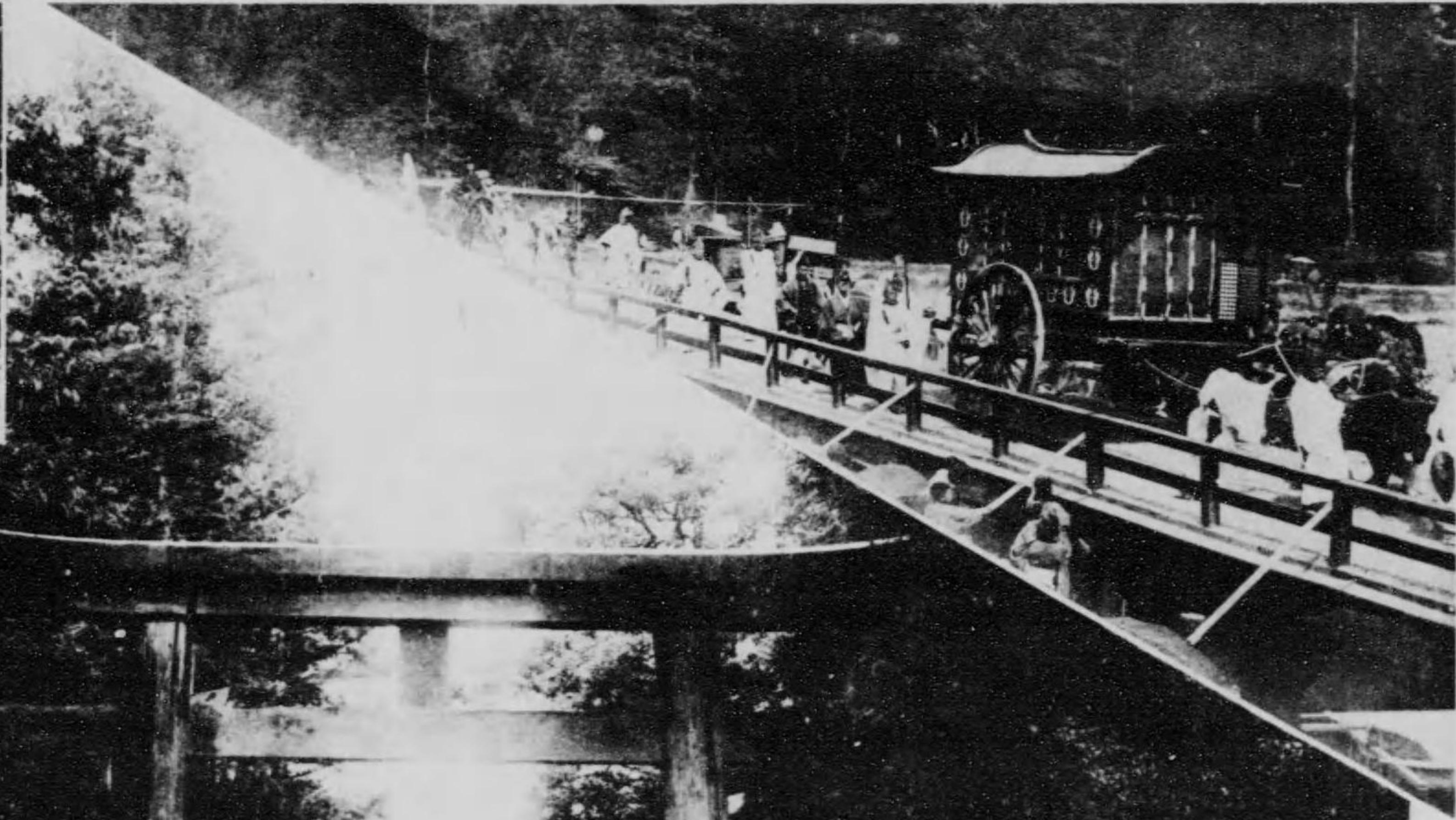
丹木の梁柱は相映して頗る壯觀を極む、殿は桁行百十尺梁間四十尺、儼然として土壇の上に立つ、三級の石階あり。

る事あり。又此苑に於て屢々勅修の御靈會を催されたる事は續日本後紀、三代實錄等に記載せられたり。

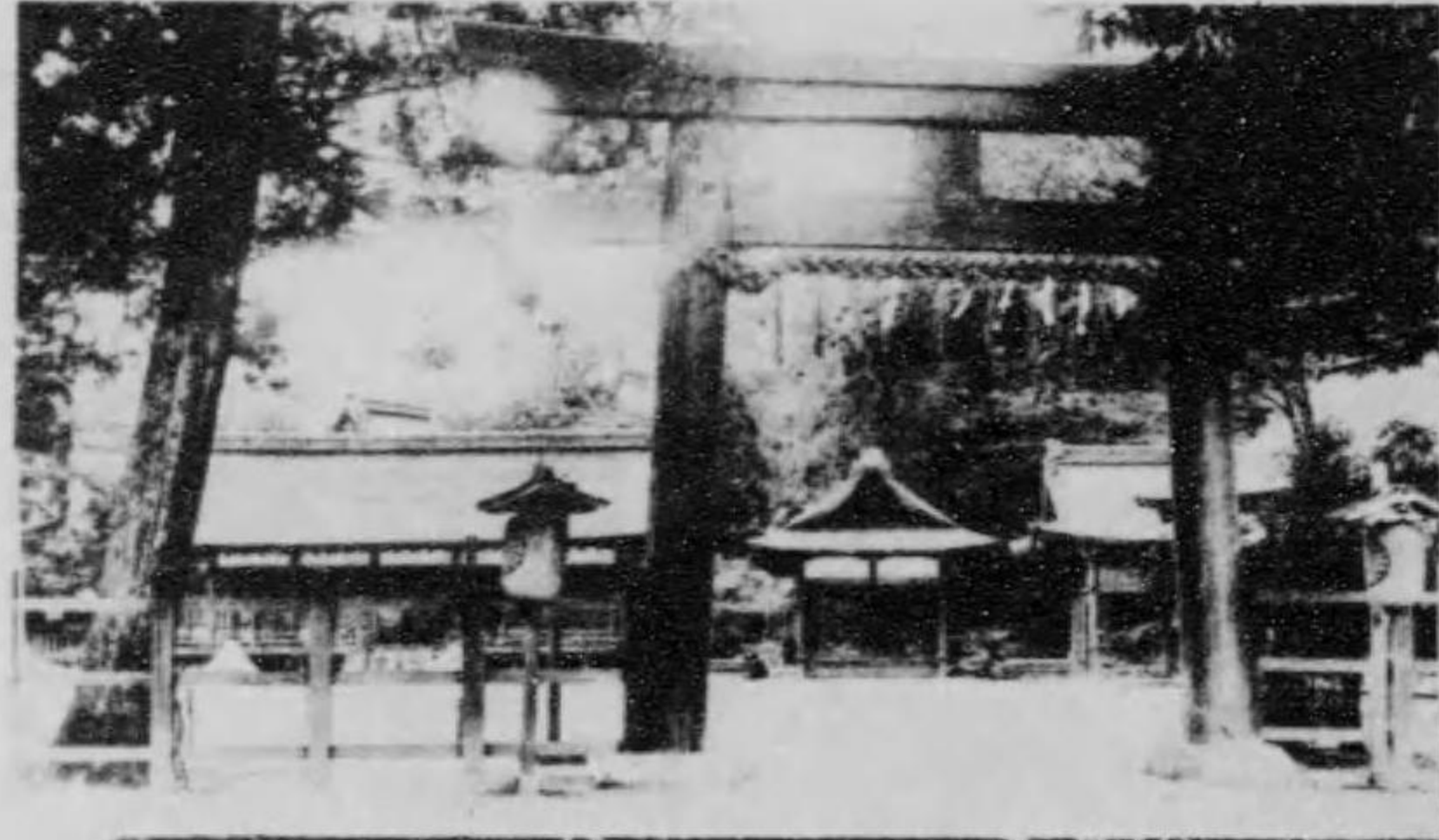
皇より御名を祐齋と賜はりしを以て、以來此井を「祐の井」と稱し今碑を茲に建て、標す。



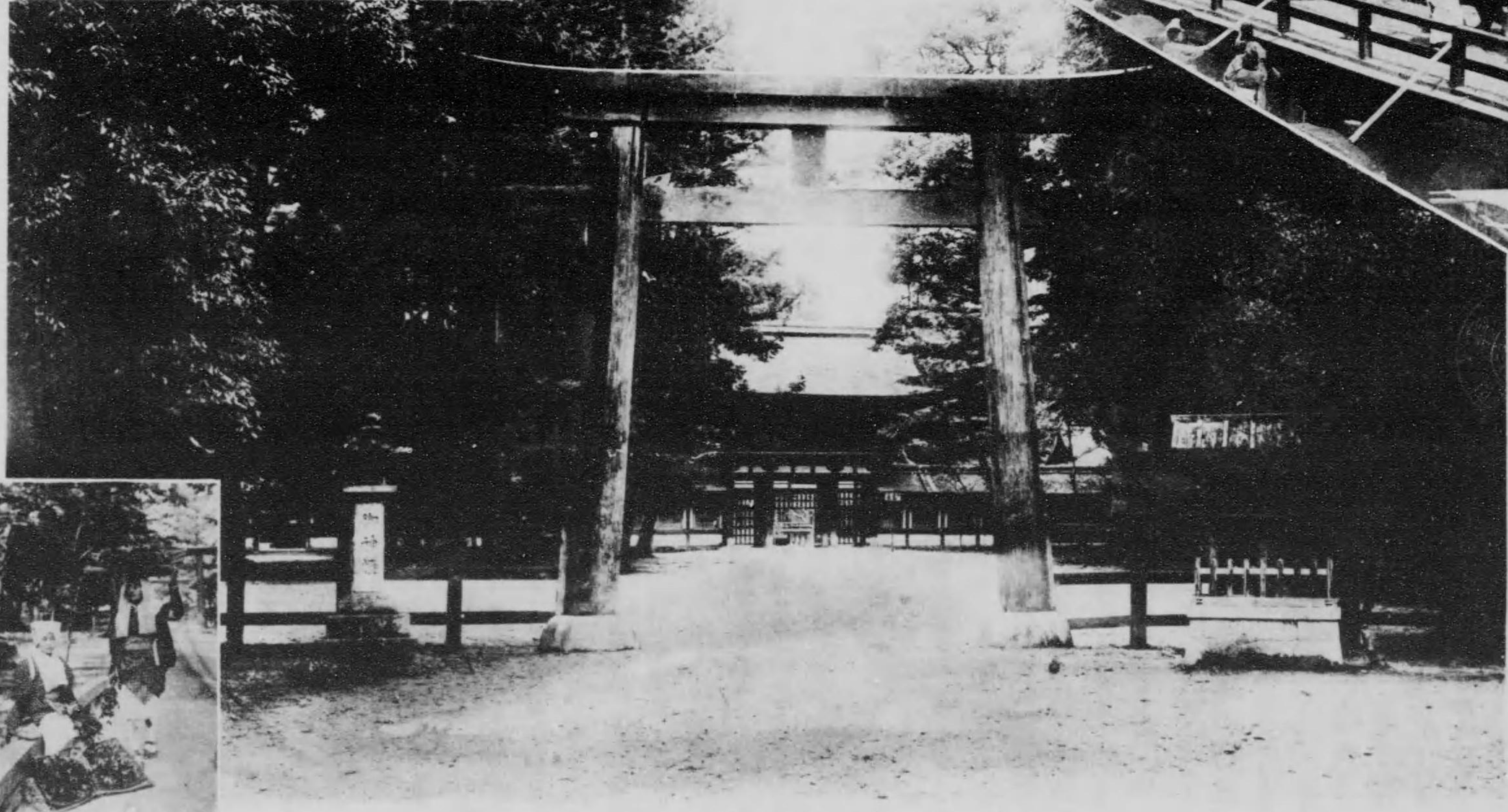
加茂の祭



上加茂神社



下加茂神社



大原女風俗

●加茂御祖神社（京都市外）

桓武帝奠鼎以前の古祠たる加茂御祖神

社は愛宕郡下鴨村糺之森に鎮坐す。

其社頭は加茂高野の兩川相合する地な

千鳥とほたつ聲きこゆなり

●加茂別雷神社（京都市外）

神社は上加茂村御生山の麓に在り、俗

に御祖神社を下加茂神社と言ひ此社を上

四

事あり、之れは往昔大内裏武徳殿に於て

執行せられたる騎射の古例より起りしも

のにして、馬數十二雙以て一年の數に象

り神官等黒赤二種の裝束を着け之に騎し

て勝敗を争ふ、彼の筒袖袴袴洋風の馬具





俗風

### ●加茂御祖神社（京都市外）

桓武帝奠鼎以前の古祠たる加茂御祖神社は愛宕郡下鴨村糺之森に鎮坐す。

其社頭は加茂高野の兩川相合する地なるを以て糺川原と言ひ、其森を『糺之森』と呼ぶ、糺川原には別に御手濯川の一本、神社の社頭より流る、社殿の造營は白鳳五年にして明治四年官幣大社に列せられたり、火雷神並に多々須玉依咩賣命を祭神とす、一の華表は高野川を渡りて一町餘の北に在り、社境に入れば二小溪の右し左するあり、右するを泉川、左するを瀬見の小川と言ふ、二川の西に河合神社あり、攝社の一なり、二の華表を入れば正面に樓門あり、檜皮葺にして丹雘を施し左右に四廊を繞らす、之を入れば舞殿あり、亦其左右に勅使殿、細殿、橋殿あり更に進めば中門あり其奥は本殿なり、殿は南面にして東西二殿に分れ、丹雘粉碧を以て之を彩し、燦爛殆ど人目を眩せしむ、御手濯池は本殿の東にあり、清水湧出して其透徹せること瑠璃の如し。

伊藤 仁齋

遊歴叢祠下 長吟日未暈 酒携新釀至  
題取古詩分 細雨林偏淨 斜風草自薰  
更添廟前水 應是北山雲

頼山陽

兩水縱橫燕尾分 平林古廟數家村  
瀨多石處知魚脆 天稍寒時愛酒溫  
吟坐怕驚橋鳥起 醉歸愁闖板橋翻  
密陰避暑尙 昨 早已稀疎露月痕

衣笠内大臣

風吹けばたゞ洲の川に立つ波の  
ゆふかたかけて御そきをぞする  
藤原 俊成  
いにしへを忍ぶ心をそふるかな  
御祖の杜に匂ふたち花

西行 法師

月のすむみちやが原に霜冴へて

千鳥とほたつ聲きこゆなり

### ●加茂別雷神社（京都市外）

神社は上加茂村御生山の麓に在り、俗に御祖神社を下加茂神社と言ひ此社を上加茂神社と言ふもの其上流下流に鎮坐するを以てなり、本社も亦官幣大社にして御祖神社と同じく白鳳五年の造營に係り別雷神を祭神とす、社殿の結構決して御祖神社に譲らず、社は後に御生の翠巒を負ひ、一帶の御手濯川其前を流れて山水の靈氣侵すべからざるものあり、而して巖々たる社殿、幾多の堂宇境内に峙立し攝社末社の如き其著名なるもの少なしとせず。

### ●加茂葵祭（京都市外）

兩社の例祭は世に『葵祭』と稱へ欽明天皇の御宇始めて之を執行せられてより、毎年四月第二酉の日を以て内裏より奉幣使を特派せられ、盛んに祭典を挙げ來りしが、明治維新後暫く斷絶して爲めに京都の一壯觀を殺さし、近來再び之を復興し儀式總て舊様に據り五月十五日を以て官祭を執行する事となれり、蓋し彼の祇園會は専ら華美を旨とし葵祭は偏へに古雅を主とす、二者大に韻致を異にすと雖も共に偏廢すべからざる京都好一對の神事なり、祭日は兩社共同日にして其日勅使先づ御祖神社に下向し其れより行裝を整へて本社に參拜す、此葵祭の起源は欽明天皇の御宇天下風雨淫しかりしが、卜部の奏上により、加茂明神の崇りなりとて四月の吉日を撰み、馬に鈴を懸け人に猪懸を被らしめ、驅馳の狀を爲して以て祭祀を行ひしに五穀成就し天下豊平なりしかば、著して恒例とせり、後、神告によりて祭日には神に葵を捧げ人々は葵桂の鬘を懸く、之より葵祭と稱す、別に陰曆五月五日を以て本社境内に競馬の神

四

事あり、之れは往昔大内裏武德殿に於て執行せられたる騎射の古例より起りしものにして、馬數十二雙以て一年の數に象り神官等黒赤二種の裝束を着け之に騎して勝敗を争ふ、彼の筒袖袴袴洋風の馬具を用ひて之に騎する者に比すれば扮裝の優美なる霄壤の差のみならざるなり、舊記に依れば嵯峨天皇弘仁元年始めて皇女有智子内親王を賀茂齋院と爲す、蓋し伊勢大神宮に准じ其祝齋を重んじ給へるなり、之より天皇の即位に必ず齋王を卜定せらる、後三百九十年土御門天皇の時齋院廢絶す云々とあり。

下加茂御祖神社の西に『賀茂齋院址』野之宮址ありと傳ふるも、齋王帷舎蹟なるや詳かならず、凡そ齋王は祭事の日の外は參社せず、其本院は紫野に在れど其常居は歴代相異ありて今考定すべからず、とは大日本地名辭書の記する所なり。

紫野齋院址に就て袖中抄の記する所は『有栖川は齋院のおはします本院の傍らにある小川なりと見ゆ』。

### ●八瀬の大原女（京都市外）

八瀬は比叡山西麓の一村にして、昔天武天皇大友皇子と戦ひ敗れて此地に走る皇子の軍之を追ふて射、矢其背に中る、之れ矢背の地名の起る所以なり、此八瀬より以北大原に至るまで女子に一般の風あり、紺地の衣服を腰高く褰げ、脚半手甲を穿ち、脚半は脛の前面にて合せ、手甲と共に其色の白きを貴ぶ、髪は皆な東ねて後に垂れ、白色の手拭を被るを通常とし、重き物を運ぶには之を頭上に戴き、設令疾歩することあるも其權衡を失せず、是等の女子常に梯子横槌若くは黒木の類を頭上に戴き京都に出で、之を賣り、他の需要品に易へて歸る、市人は目して八瀬の大原女又略して、單に八瀬大原と呼ぶ、亦是れ京都風俗の一なり。



●相國寺 (京都)

今出川通に在り、京都の巨刹として知らる。臨濟宗にして五山の第三に位す、寺域二萬餘坪に亘る、永徳三年足利義滿、後小松天皇の勅を奉じて創建し、夢窓國師を開基とす。明徳三年佛殿供養を行ひ萬年山相國承天禪寺と稱し釋迦三尊を安置す、又夢窓國師足利義滿の木像を置く。應永元年火災の爲め焼亡せしが義滿之を再建し。七級の浮塔を設け殿閣壯大を極む、大塔高さ三百六十尺、七級浮圖洛北東、登臨縹緲步晴空、相輪一半斜陽影、人語鈴聲涌晚風」と五風集に詠せられたるもの是なり。其後應仁の兵火に罹り、以來復興したるも大塔は存せず、其址を塔之墳と稱す。慶長年間豊臣秀頼修造を加ふ、本堂は其再建に係る。後水尾法皇三重塔を建立して御齒を此に納め玉へり天明年間大火に罹り寺中法堂層塔を除くの外、概ね焼失に歸し又舊時の壯觀に接する能はず。本寺は舊寺領一千八百石、其盛時に在りては支院四十九宇と註せられしが、今尙ほ二十餘宇を存す。相國寺供養日記に記して曰く「昔者竹園槐門、棘署蘭若、結宇數百間、今者金殿玉堂、朱樓寶閣、廿餘也」と以て當時の壯觀を想像し得べし。境内に東征戦亡の碑あり、戊辰の役に於ける薩藩士五百二十四名の名を碑背に刻す。西郷南洲の筆に係る、又法然水、定家卿墓等の舊蹟あり、

●鶯宿梅 (京都)

傳ふる所に依れば此梅素と古西京紀實之が家にあり、後世寺と爲し林光院と號く、應仁の後、相國寺に移すと云ふ。鶯宿梅の殘種は方丈の庭に移植さる。『大鏡』に曰く、天曆の御時清涼殿の御前の梅の木が枯たりしかば求めさせ給ひしに西京に色濃く咲きたる木の侍り

しを掘りとりしかば家のあるじ出で、其木に是れゆひ給ひてまゐれといはせたまひしかばあるやうこそはとてもて參り候ひしを何ぞと御覽じければ女の手にて書いて侍りける。

勅なればいともかしこし鶯の宿はととはいいかゞ答へむとあるけるにあやし思はれて何者の家ぞと尋ねさせ給ひければ貫之のぬしのみむすめの住所なりけり。

●足利義政墓 (京都)

足利八代將軍義政の墓にして相國寺境内に存す。同寺は義滿以下足利歴代の靈碑を祀る。義政は常に東山に在りて茶を點じ鞠を蹴けて悠々閑日月を消しつゝありしを以て世に東山殿と稱せられたり。延徳二年正月七日病を以て薨す

●藤原惺窩墓 (京都)

戰國時代に於ける碩儒として知られたる妙壽院藤原惺窩を葬むる墓なり。惺窩、名は庸、字は欽夫、惺窩は其號なり、又別に柴立子、廣胖窩の號あり。嘗て鞍馬の邊りなる市原野に住みたるが其居妹背山に近かりしを以て北肉山人とも號せり。其先藤原定家より出づ。父を冷泉爲純と云ふ。惺窩幼にして穎悟、非凡の資を備ふ。七八歳の時、僧東明に従ふて讀書し、後僧となつて名を舜首座と改め、東明の師九峰に就て學ぶ。其家播州細川の庄に在りしが天正六年別所長治の爲めに侵掠せられしを以て京都に逃れ來り、相國寺中の妙壽院に寓し、孜孜として佛典を研鑽し、名聲漸次著はる。後翻然として儒道に志し、大に宋學を鼓吹す。林羅山、松水昌三、那波活所、堀杏菴、菅得庵等の諸子皆其門に出づ。又豊臣秀次、金吾秀秋、直江兼續、石田三成

等の諸將何れも惺窩を師として崇敬せり嘗て播州龍野城主赤松廣道、惺窩の才學德行に敬服し、招いて厚遇を極む。天正十九年豊臣秀次五山の詩僧を會して聯句を闘はしむ。惺窩一度は該會に臨みたるも兩び往かず、衆關白の旨に忤ふを説いて勸むれども肯んせずして曰く凡そ物は類を以て集る、韓愈孟郊才相並ぶが如くにして聯句を爲すは可なり。然らざれば隻脚草鞋を穿くが如しと、後去つて豊後に赴き尋で京都に歸る。惺窩其師とすべきの人なきを以て斷然明國に航して師を求めんとするの意あり。海に航して筑紫に到るや、風濤に遭ふて鬼界ヶ島に漂着し其物々たる雄志を遂ぐる能はずして空しく歸京し、爾來戸を閉ぢ客を謝して専ら意を經史の研鑽に傾け、聖道を興すを以て自ら其任とせり。

慶長四年、石田三成佐和山城に在りて惺窩を招く。惺窩將さに赴かんとして果さず、其翌年三成關ヶ原に敗死す。九月徳川家康京都に入り、屢々惺窩を招きて貞觀政要、漢書、十七史等の書を講せしむ。後ち意を仕官に斷ち、深く自ら隠れたるも、其隆々たる名聲は噴々として傳へられ弟子の門に集るもの多し。十九年門人林羅山、惺窩を奉じて學校を創設せんとしたりしが、時恰かも大阪陣の役に際して果さゞりき。斯て天和五年九月十二日遂に歿す。遺骸は相國寺に葬る。陰して妙壽院と云ふ。明治二十六年十二月正四位を贈られたり。

花時遊大原訪豊臣長嘯

藤原 惺窩

君是護花花護君 有花此地久留君

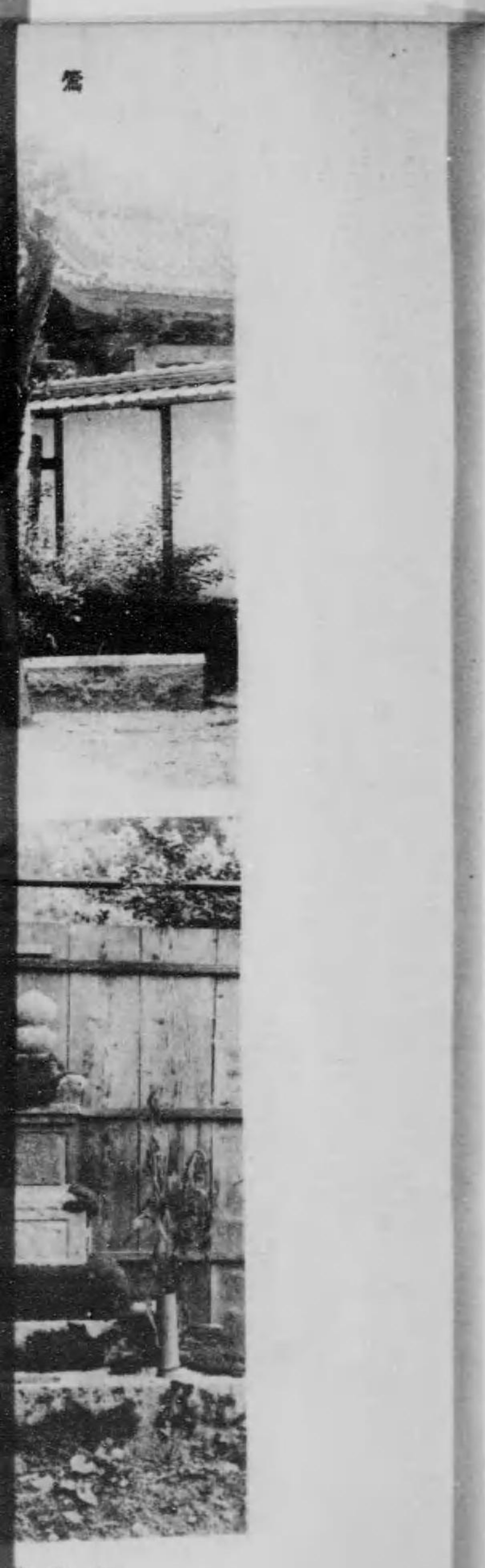
入門先問花無恙 莫道先花更後君

舟中即事 同 人

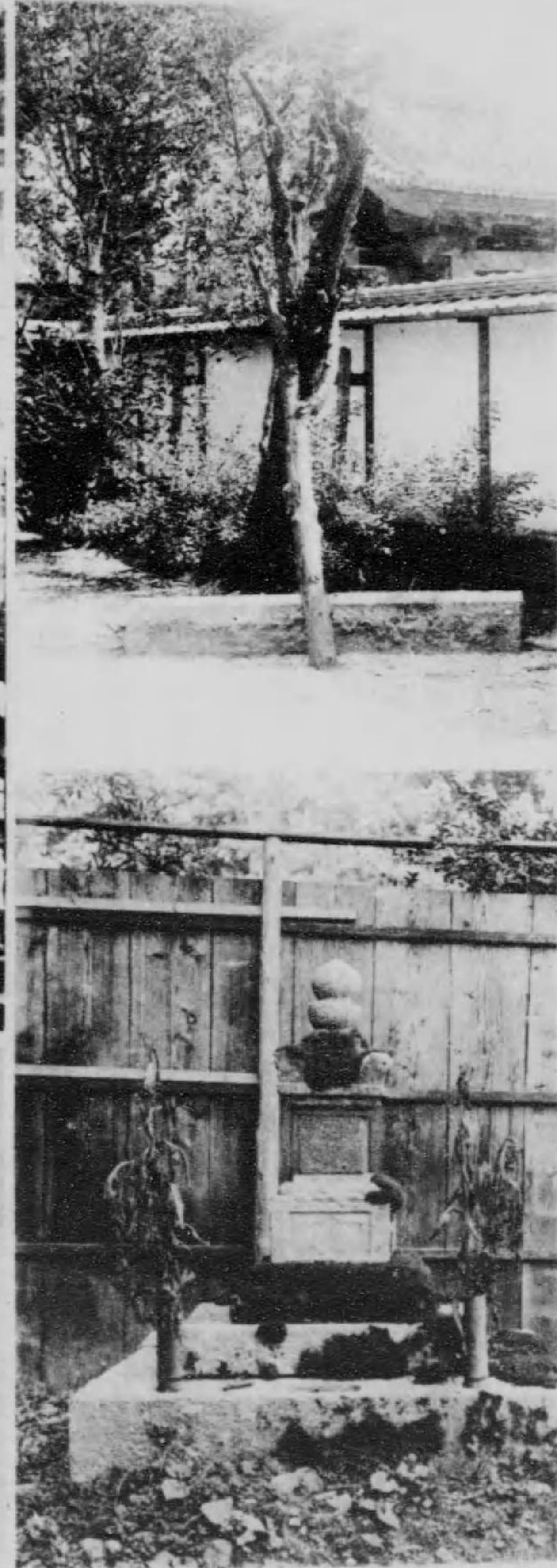
遊遊諸客海城傍 漱澗水光連彼蒼

潑瀾跳魚新出網 一聲欸乃逐斜陽

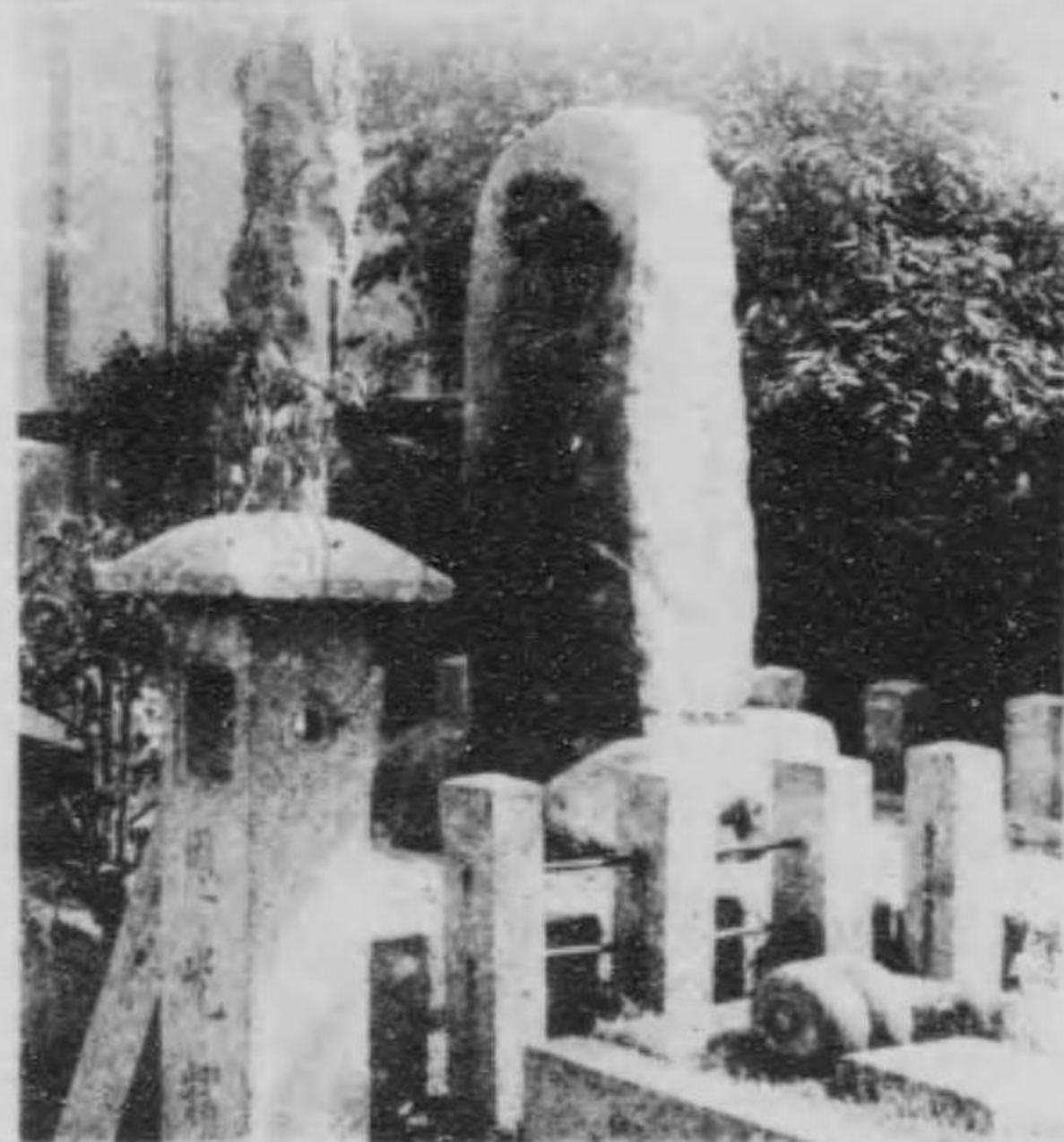
因に筆蹟は角倉玄達氏所藏に係る。







墓收義利足



墓窩登

当世司馬 聖行  
 文則 長徳  
 一十二冊 世  
 適老瑞 六十二冊  
 皇明 萬曆 廿九年  
 二月 廿二日 卒  
 復次北野 一山 隱居  
 越日津 外世波 登  
 一端 亦川 府 登  
 詳 亦 該 探 亦  
 亦 亦 亦 亦

殿筆窩登原藤

宿梅の残種は方丈の庭に移植さる  
 『大鏡』に曰く、天曆の御時清涼殿の御  
 前の梅の木が枯たりしかば求めさせ給  
 ひしに西京に色濃く咲きたる木の侍り  
 翻然として儒道に志し、大に宋學を鼓吹  
 す。林羅山、松永昌三、那波活所、堀杏  
 菴、菅得庵等の諸子皆其門に出づ。又豊  
 臣秀次、金吾秀秋、直江兼續、石田三成

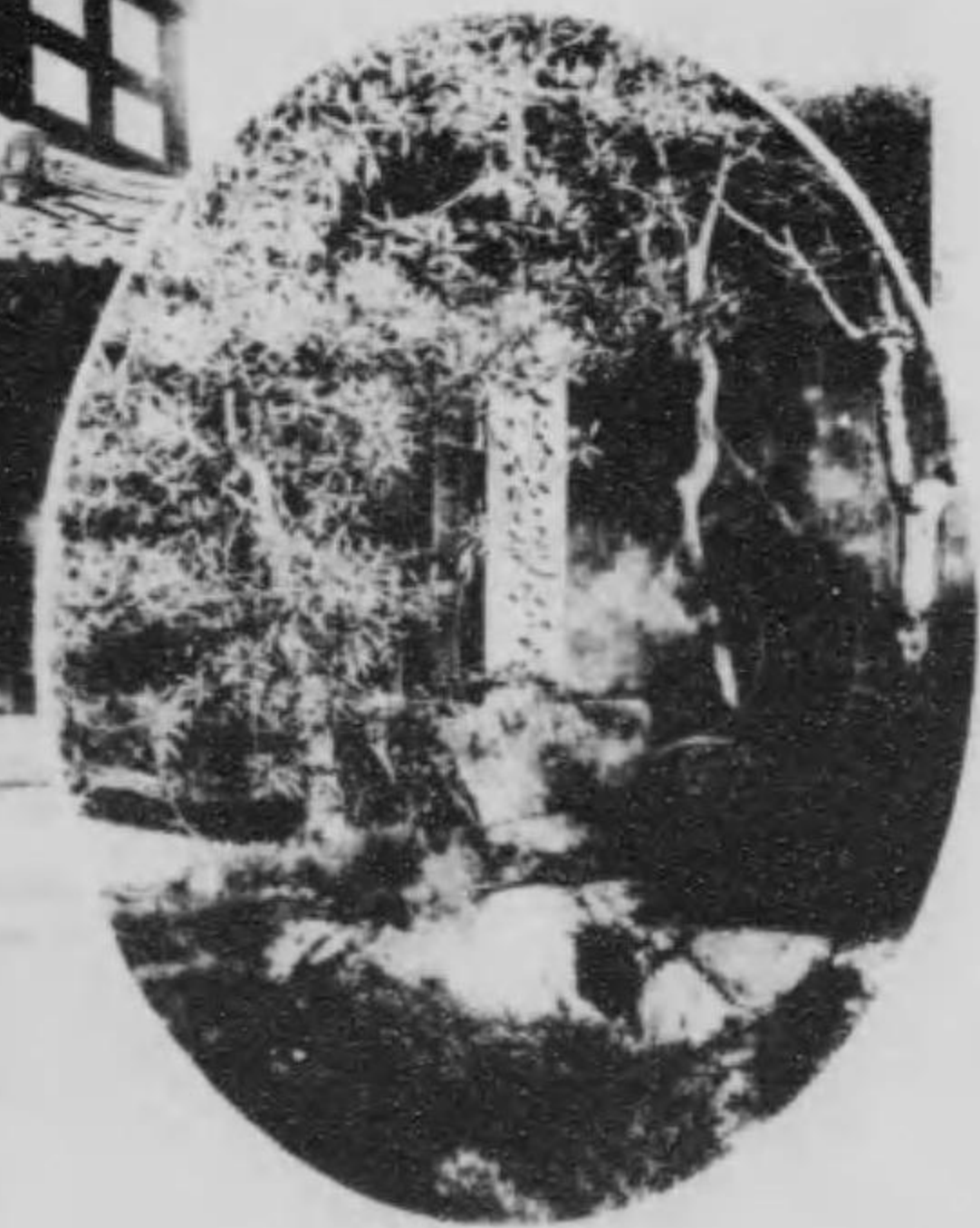
舟中即事 同人  
 遊遊諸客海城傍 漱澗水光連彼蒼  
 潑潑跳魚新出網 一聲欸乃逐斜陽  
 因に筆蹟は角倉玄遠氏所藏に係る。



寺 國 本



社 神 木 梨



井 湯 産 公 管



堂 角 六



井 午 女 佐

● 本國寺 (京都)

堀川の西、松原通の南に在り。日蓮宗  
一致派の大本山なり。境内東西三丁、南  
北六丁。塔頭三十有餘を有し京都有數の

光寺の遺物なりと。

● 六角堂 (京都)

六角通り烏丸東に在り。天台宗に屬し  
延暦遷都以前の創建に係り聖德太子の開

● 梨木神社 (京都)

三條藤原實萬公を祀れる別格官幣社に  
して上京區寺町通りに在り。此地、素、三  
條家の邸地にして梨木本町と云へり。明





女午井

### ●本國寺（京都）

堀川の西、松原通の南に在り。日蓮宗一致派の大本山なり。境内東西二丁、南北六丁。塔頭三十有餘を有し京都有數の巨刹たり。初め鎌倉松葉谷に於て、日蓮の嫡弟日朗創建し、其師日蓮上人を開基とし法華堂と稱せり。文應元年諸宗の道俗に破却せられ日蓮暫く下總に蟄居し。弘長元年再び出で、法華堂を修し宗風弘通に力む。同年五月伊豆に謫せられ、赦免後再び同堂を再興し、改めて大光山本國寺と稱せり。文永八年作法に謫せられ十一年赦免されて歸後松葉谷の廢地を日朗に託し自ら身延山に閑居す。斯て日蓮上人入寂後日朗松葉谷に移り、法華堂を修理せり。徳治二年久明親王四町四方の地を賜ひて當寺を重興し以て足利將軍の祈願所とす。四世日靜上人は尊氏の叔父にして曆應四年松葉谷より京都に移り、更に法華堂を興して本國寺と稱したり。或は曰ふ貞和元年光明天皇の勅によりて京都に移り爾後勅願所たりしと。

本堂は元の大宮殿にして本尊は中央に法華經、左方に釋迦佛、右方に多寶佛を安置す。本寺の建材は始め江州安土城に在りしを大和中納言秀俊の館に移し、秀俊の歿後當寺に移したりと傳ふ。又妙法華院の額は水戸光圀の揮毫に係り、上段の畫は狩野永徳の筆なり。祖師堂には日蓮上人の影像を置き脇壇には日朗、日印、日靜、日傳各上人の像を置けり。祖影は上人存生中の脱齒三莖を藏むと云ふ。生御影堂には日朗作の祖師像を置く。釋迦堂には黄金佛の立像釋迦を本尊とす。蓋し當寺靈寶中第一の尊像なり。其他加藤清正を本尊とする清正公堂、皇諦天女を安置する阜天堂、鬼子母神堂、三光堂、鎮守堂あり。

因に云ふ。祖師堂の舊瓦は八條堀川戒

光寺の遺物なりと。

### ●六角堂（京都）

六角通り鳥丸東に在り。天台宗に屬し延曆遷都以前の創建に係り聖德太子の開基にして寺稱を六角堂頂法寺と云ふ。本尊如意輪觀世音は往時淡路國岩屋浦の海中より獲たる一寸八分の金銅像にして聖德太子七生の持尊佛なりと傳ふ。太子奇夢に感じて茲に堂宇を造立す。其堂六角なるを以て六角堂と號く。東門入口に石と稱する圓形凹狀の石あり。傳へ曰ふ往時京都の中心を測りて此石を設置せしと。現今の石は近年の据付けに係る。一説に依れば、六角堂は舊名雲林寺と稱し、文安四年茲に移したるなりと、因に六角堂は西國巡禮の札所にして住持は代々挿花の家元を以て知られ居れり。

### ●菅公産湯の井戸（京都）

西洞院高辻の北方なる菅大臣社東の垣内に在り。是れ菅原道真の産湯の井戸なりと云ふ。明和二年建立せし標石あり。篆して「誕浴井銘」の四字を題し、左の文を刻す。

誕浴之水再見 澄清汲焉不竭 注焉奚盈 法律取象不 槩自平鳴乎神德水仰其明

明和二年乙酉 東都鳥石葛辰書并篆額

### ●佐女牛井（京都）

六條堀川醒ヶ井通西に在り。水質清冽を極む。古來茶家の爲めに賞用せらる。此の井周圍の礎石は織田有樂齋の築造する所なりと云ふ。

因に云ふ。有樂齋は織田信長の弟にして長益と云ふ。本能寺の變後世を遁れて茶道に隠れ、剃髮して有樂齋如菴と號す。本國寺内の龜井鶴井の兩名水も亦茶の湯に可なりとて有樂齋これを賫せり。

### ●梨木神社（京都）

三條藤原實萬公を祀れる別格官幣社にして上京區寺町通りに在り。此地、素、三條家の邸地にして梨木本町と云へり。明治十八年の創建に係る。毎年十月十日を以て祭日とす。因に、三條公の墓所は蘆山寺内に在り。三條實萬は父を公修と云ふ。享和二年二月生る。文化九年首服を加へ右近衛權少將に任じ天保二年累進して議奏となる。資性謹厚、職務に周密にして、典故舊章に通じ、時弊を除革する等、献替の功頗る多し。仁孝天皇深く之を器とし給へり。天皇の崩御後、孝明天皇を輔佐し奉り、次で武家傳奏となる。是より先、米艦浦賀に來航せし以來國事に際し、實萬其間に在りて屢々献策する所あり。安政四年右大將を兼ね外國事務を掌り次で内大臣に陞任す。

當時在廷の大臣中、其器識才德實萬の右に出づる者なく、朝野齊しく望みを實萬に屬す。五年三月内大臣及右大將を辭したるも尙外國事務を執掌する事務の如じ。其後水戸藩士入京して諸公卿の間に遊説し、所謂密勅下賜の事あるや、幕府は之を以て國家の秩序を擾亂するものと爲し幕府の政策に反抗する公卿諸侯等を假借するなく處罰せり。實萬亦幕府の忌憚を蒙り、職を辭して其采邑なる上津屋野村に屏居し、次で一乗寺村に移る。六年五月落飾して濂空と號す。同年六月病を以て遂に薨す享年五十八。天皇深く悼惜し給ひ、爲めに朝を廢する事三日に及ぶ尙特旨を以て従一位に叙す。越へて十三日小倉山に葬る。明治二年詔して忠成と云ふ。同十八年更に梨木神社を賜ひ、三十二年正一位を贈らる。明治の功臣にして鎌足以來の名相と稱せられたる三條實美は實に實萬の子なり。



### ●本能寺（京 鄂）

織田右府戦死の史蹟として著名なる佛刹なり。信長の事變當時は六角南油小路東に在りたるが天正十九年以來現今の寺町通姉小路東側に移りたり。日蓮宗にして永應二十五年日隆上人の開基に係る創建當時は本應寺と書したりしが後、本能と改む。舊所在地は元本能寺と呼べり。本能寺北は即ち空也堂の東なり。

史を按ずるに天正十年五月、羽柴秀吉叢岐の高松城を攻圍したるが此時毛利氏大舉して高松を救ふに及び、秀吉は援を其主織田信長に請ひたるより信長は決然起つて自ら往きて毛利を討たんとし、大に兵を徵し、諸將をして先發せしむ。其臣明智光秀また先發を命せらる。而して信長は自ら近臣百餘人を率ゐ、安土を發して京師に入り、本能寺に宿泊せり。是より光秀は信長の已れに對する行爲に就き多大の不平を抱き、爲めに怨みを霧さんと隱忍時機を待ちつゝありたるに際し、中國征討を命せらるゝに及び此機失ふべからずと爲し、斷然意を決し六月二日の昧爽兵を率ゐ來りて本能寺を圍み、大に叫びて門内に攻入りたり。此時信長寺院の奥深く臥床に在りたるが驚起して侍臣森蘭丸を呼び、出で、反者の誰なるを窺はしむ、蘭丸還りて明智光秀なるを報す。信長大に怒り直ちに自ら弓を執つて出づ、蘭丸以下宿直の侍士近臣悉く出で防ぎ戦ふ。信長親ら射て數人を斃したるも絃切れて射る能はず、直ちに槍を執て闘ひ右脇を傷きて其萬事休するを自覺し、走つて方丈に入り、侍妾等を逃走せしめ、自ら火を放ちて自刃す、時に年四十有九、蘭丸始め侍臣等又悉く茲に戦死す。織田信忠また妙覺寺に宿しありたるが同時に光秀の爲めに攻圍せられて戦死す。是れ實に天正十年六月二日なり。本

能寺變即ち是れなり。

### ●織田信長塔（京 都）

是れ傳へて織田右府の墓なりと云ふ。信長は本姓平氏、織田信秀の二男にして天文三年古渡城に生る、幼名を吉法師と云ふ、少壯大志を抱き豪縱不羈にして勇斷なり。十七歳にして元服し名を信長と改む。父の歿後老臣の極諫に依りて大に自覺し、爾來武を鍊り慨然天下を平定せんとするの志を起し、永祿三年今川義元を桶狭間に撃ち、四年京都に入り皇室の式微を慨し。七年齋藤義興を降し勅を奉じて松永、三好等の賊子を亡ぼし、元龜元年淺井朝倉を姉川に敗り、二年延暦寺の僧徒を鎮壓し以て近畿を靜穩に歸せしめ、功に依りて累進從三位參議に任せらる。次で右大臣に任じ正二位に累進す。天正十年中國征討に際し端なく其臣明智光秀の爲めに弑せらる。天皇深く悼惜し給ひて太政大臣從一位を贈らる。因に本書掲ぐる處の肖像は紫野大徳寺、信長の筆蹟は田邊伊之助氏の所藏に係る。又光秀筆蹟は前田侯爵家の珍藏也。

### ●信忠、信雄墓（京 都）

織田信忠、織田信雄の墓亦本能寺境内に存す。信忠は信長の嫡子にして信雄の兄なり。天正十年六月二日信長と共に秀吉の中國征討の援軍として出征し、妙覺寺に宿次したるが、明智光秀突然信長を本能寺に攻めて之を弑すと聞き、信忠直ちに馳せて之に赴きたるも既に及ばず、還りて妙覺寺の寺門を鎖して防守したるも敗られて遂に自殺す。

信雄前名具豊、後ち信雄と改む。信長の第二子なり。初め北畠具教の養子となり北畠氏を冒し伊勢船江城に居る。天正二年七月舟師を率ゐて桑名より發し、長

島一揆を攻む。三年具教に代つて國司となる。八年伊賀を平げ依て以て同國に封せらる。十年六月本能寺の變に際し連々として發せず。秀吉の捷を報するに及びて僅に封内の土寇を平ぐ。是を以て深く秀吉の怒を買ひたり。其後信忠の遺孤三法師の立ちて織田家の嗣となるや、信雄は其弟信孝と俱に補翼し、信雄は尾張伊勢の北部及び江田の地百萬石を領して清洲城に居れり。信雄常に信孝と權を争ひて隙あり、十一年四月岐阜城を攻む。信

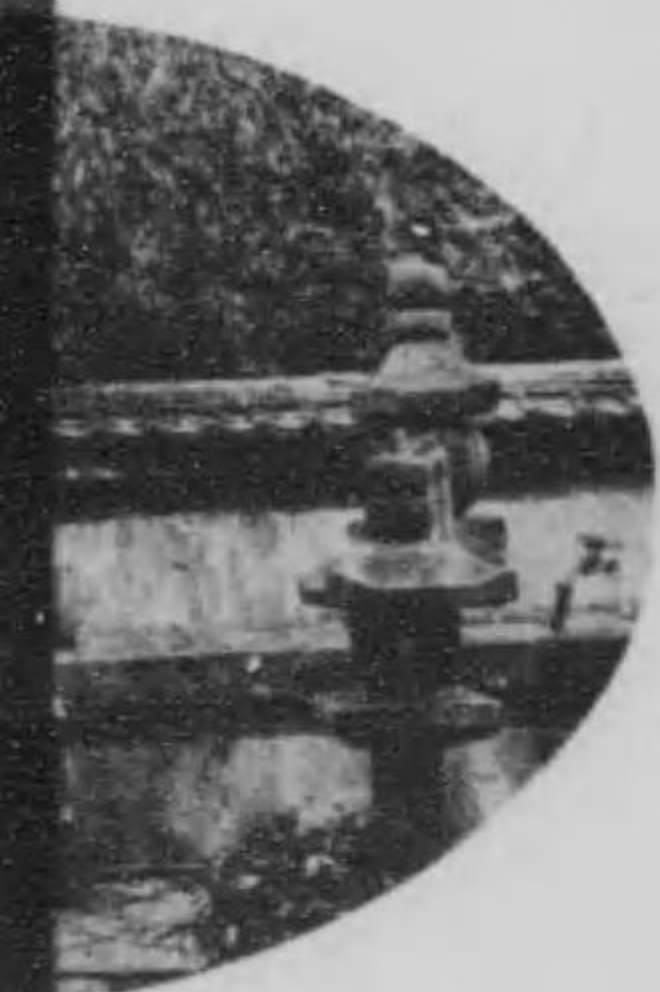
孝内海に走りて遂に自殺す。同年六月長島城に治す。十二年正月群臣安土に行きて賀正す。秀吉至らず、信雄之を含み遂に秀吉と隙を構へ援を徳川家康に乞ひ小牧山に秀吉の軍を敗る。次で秀吉と和を講ず。十三年累進して正二位内大臣となり清華の班に列す。十八年小田原征討に従ひ秀吉の旨に忤ひて那須に放逐され二萬石を食む。後ち出羽秋田に移る、明年赦免に逢ひ伊勢朝熊に歸居す。秀吉の薨後伏見に迹を晦ましたるも關ヶ原の役に際して舊臣の擁する所となりて西軍に應じ、事平ぎて後、罪を赦され京師に還る。其後、淀君信雄を大阪に迎へて厚く遇し、事を擧げんと謀りたるも應せずして京師に奔り、元和元年七月松山小幡に封せられ、寛永七年四月七十三歳を以て薨す。

### ●建勳神社（京 都）

山城國愛宕郡舟岡山の東面半腹に在り。織田信長を祀る。明治八年の創建にして別格官幣社に列す。天正十年信長本能寺の凶變に遇ひ其志業中途にして挫折したるも、秀吉其後を承繼し、朝廷に奏請して舟岡山に天正寺を經營すべく勅許を得たりしが何故にや其舉を果さずして止みたり。爾來數百年、明治二年に至り追賞の典を擧げ同時に建織田の神號を賜りたるが同八年本神社を創建せり。



建



織田



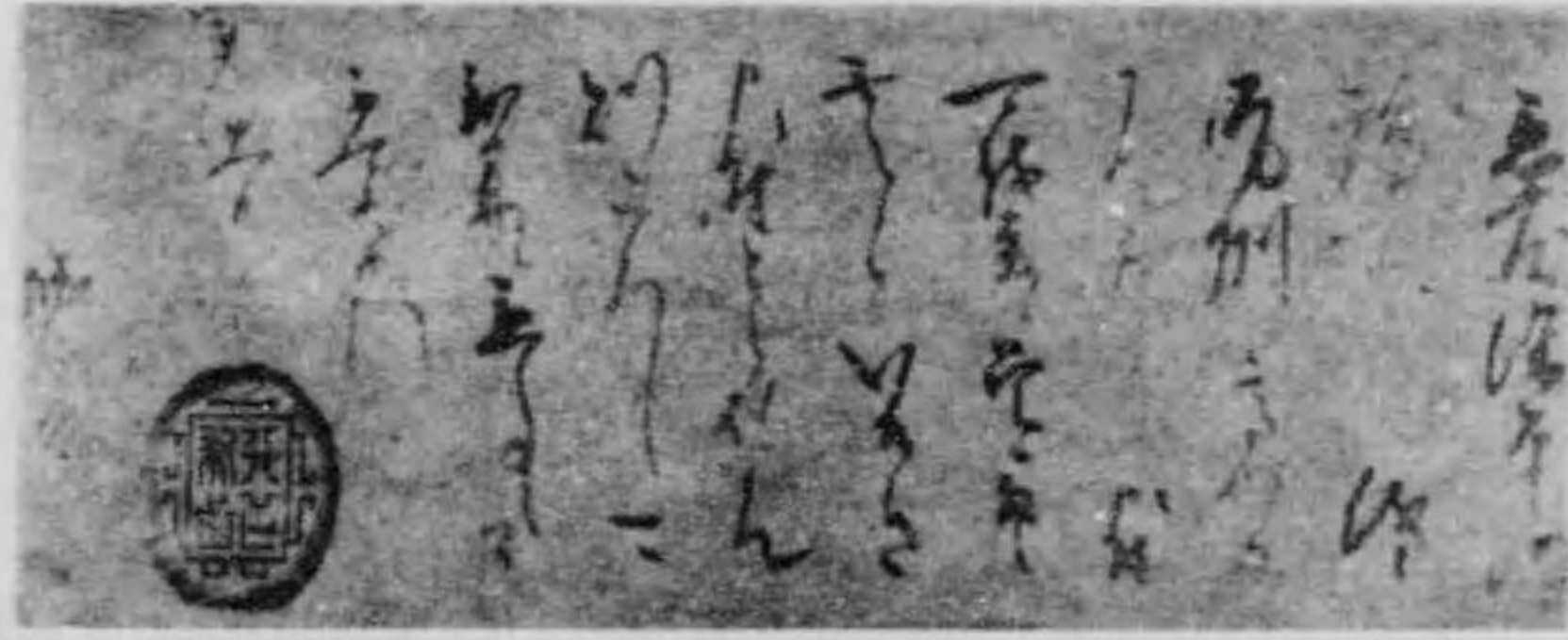
十有九、關丸始め侍臣等又悉く茲に戦死す。織田信忠また妙覺寺に宿しありたるが同時に光秀の爲めに攻圍せられて戦死す。是れ實に天正十年六月二日なり。本

信雄前名具豊、後ち信雄と改む。信長の第二子なり。初め北畠具教の養子となり北畠氏を冒し伊勢船江城に居る。天正二年七月舟師を率ゐて桑名より發し、長

許を得たりしが何故にや其舉を果さずして止みたり。爾來數百年、明治二年に至り追賞の典を擧げ同時に建織田の神號を賜りたるが同八年本神社を創建せり。

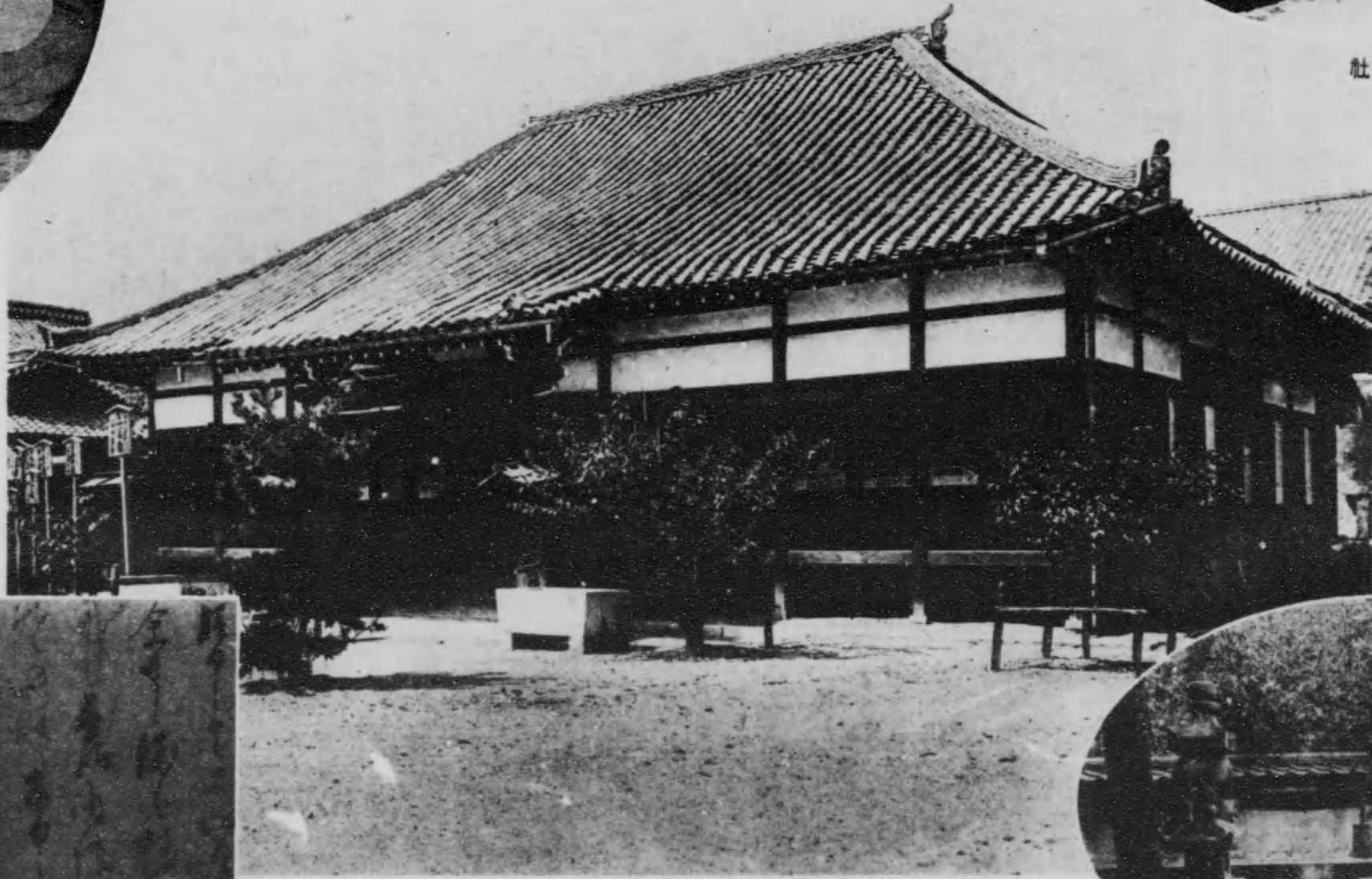


建織田神社

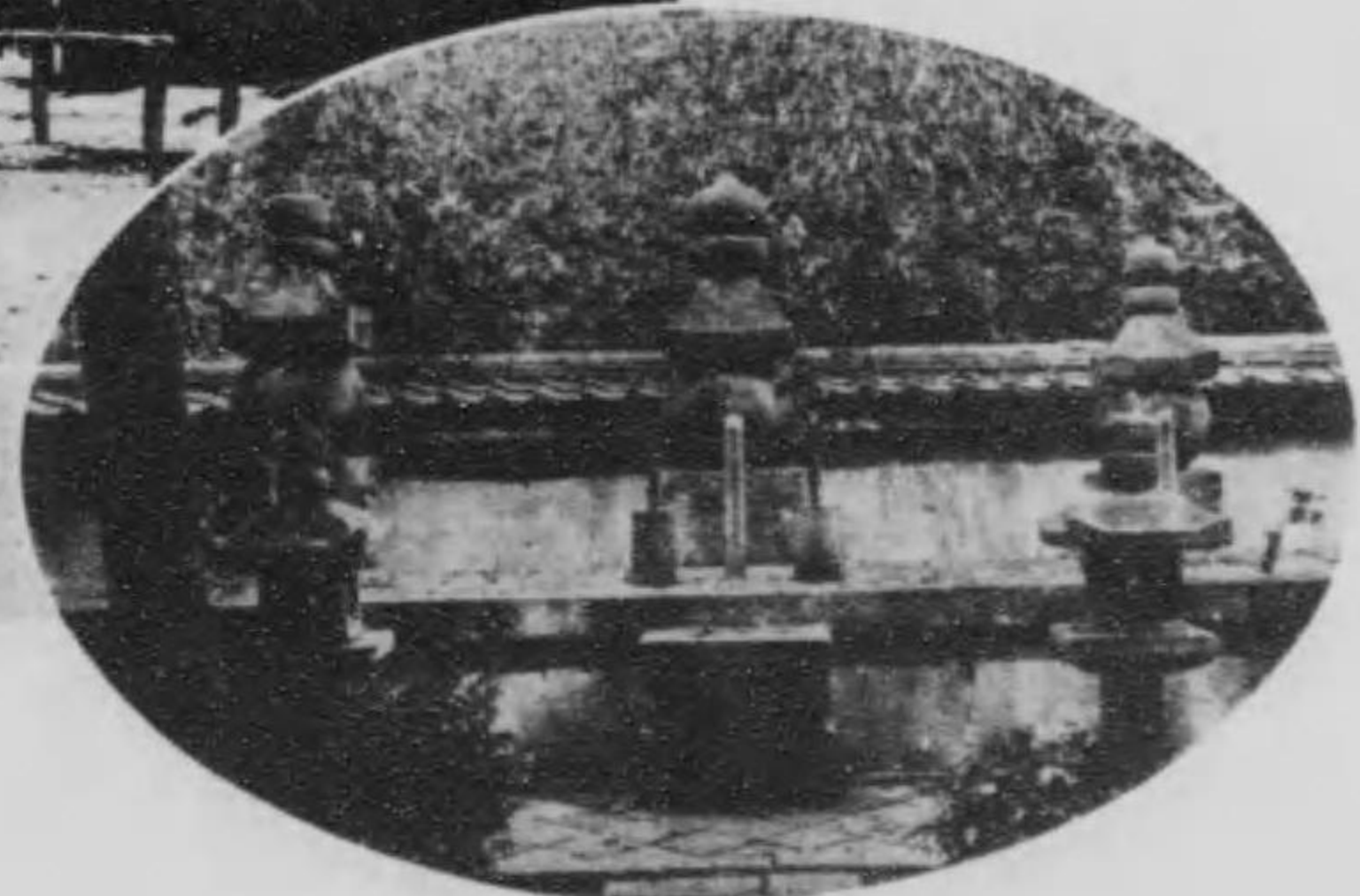


織田信長筆蹟

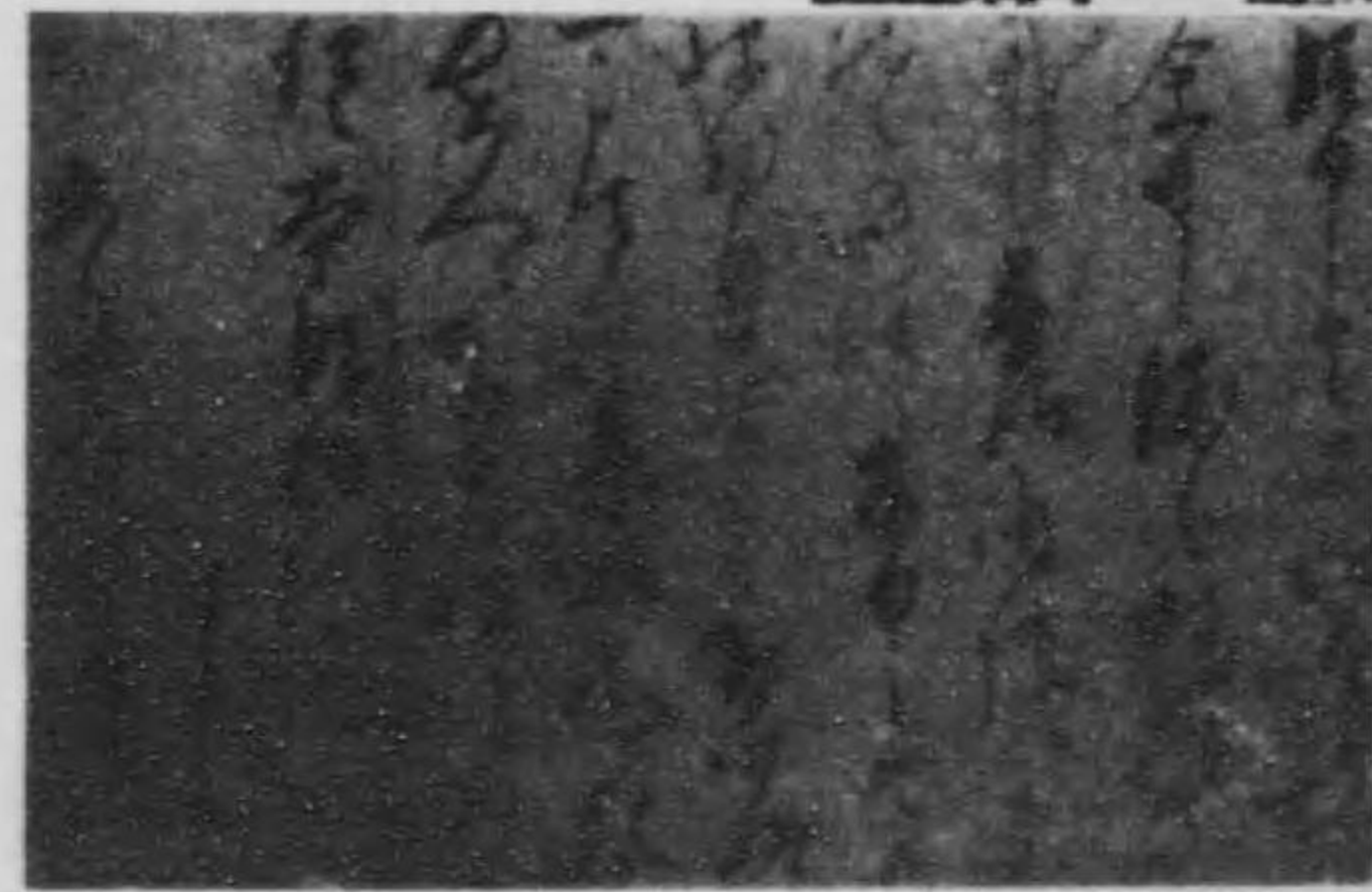
信長肖像



本能寺



織田信長父墓



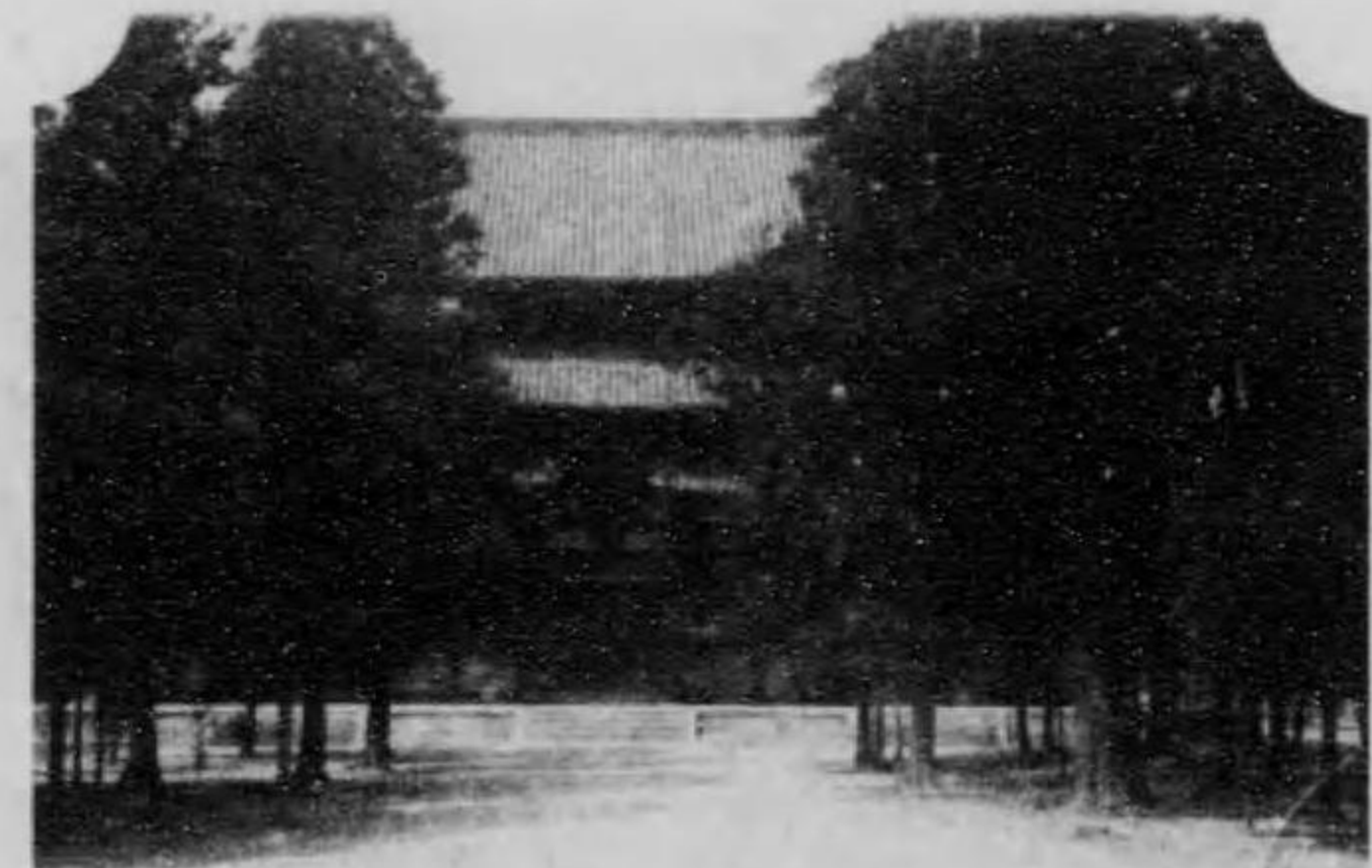
明智光秀筆蹟



東寺南大門



東寺金堂



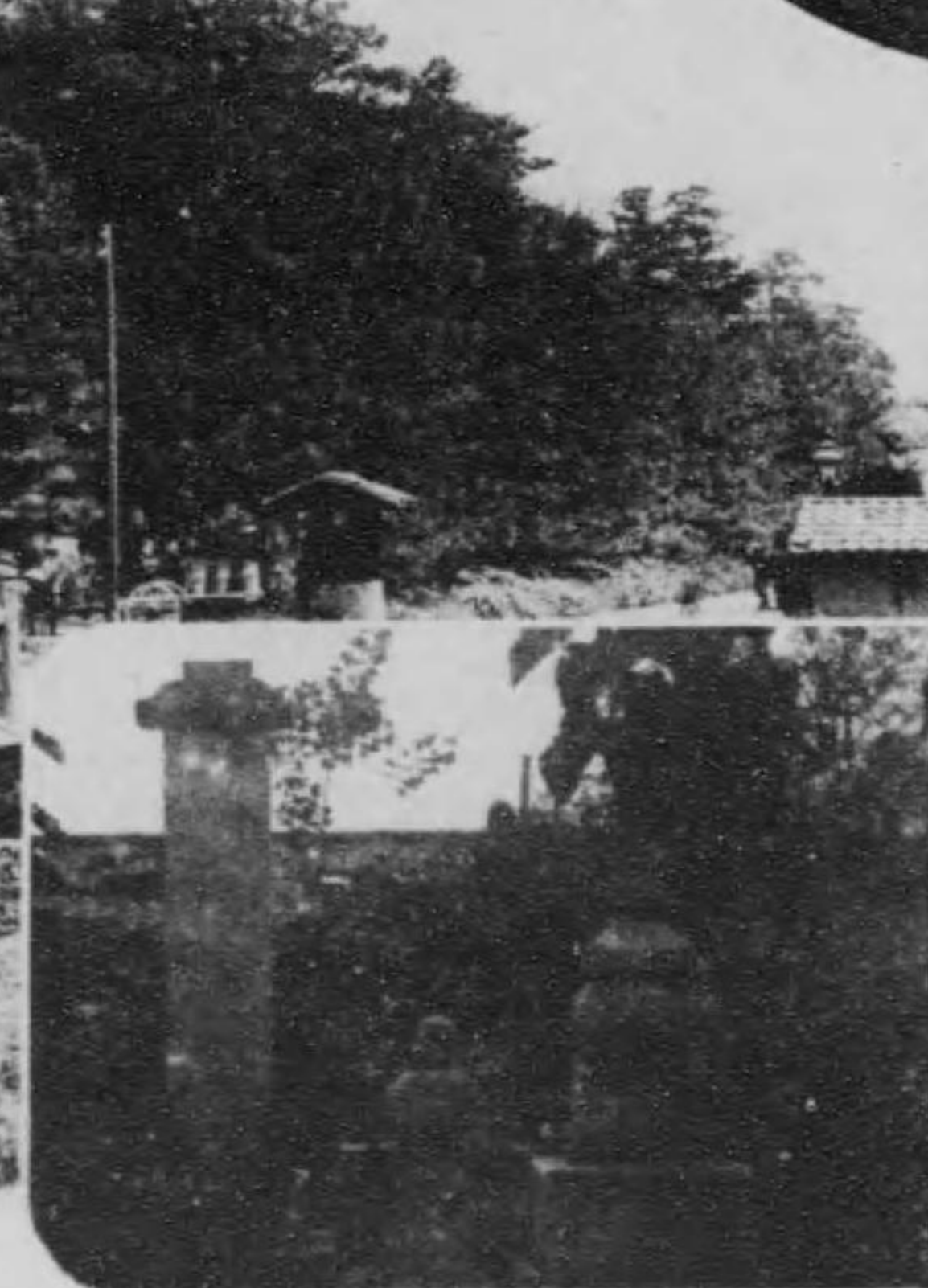
六孫王經基廟



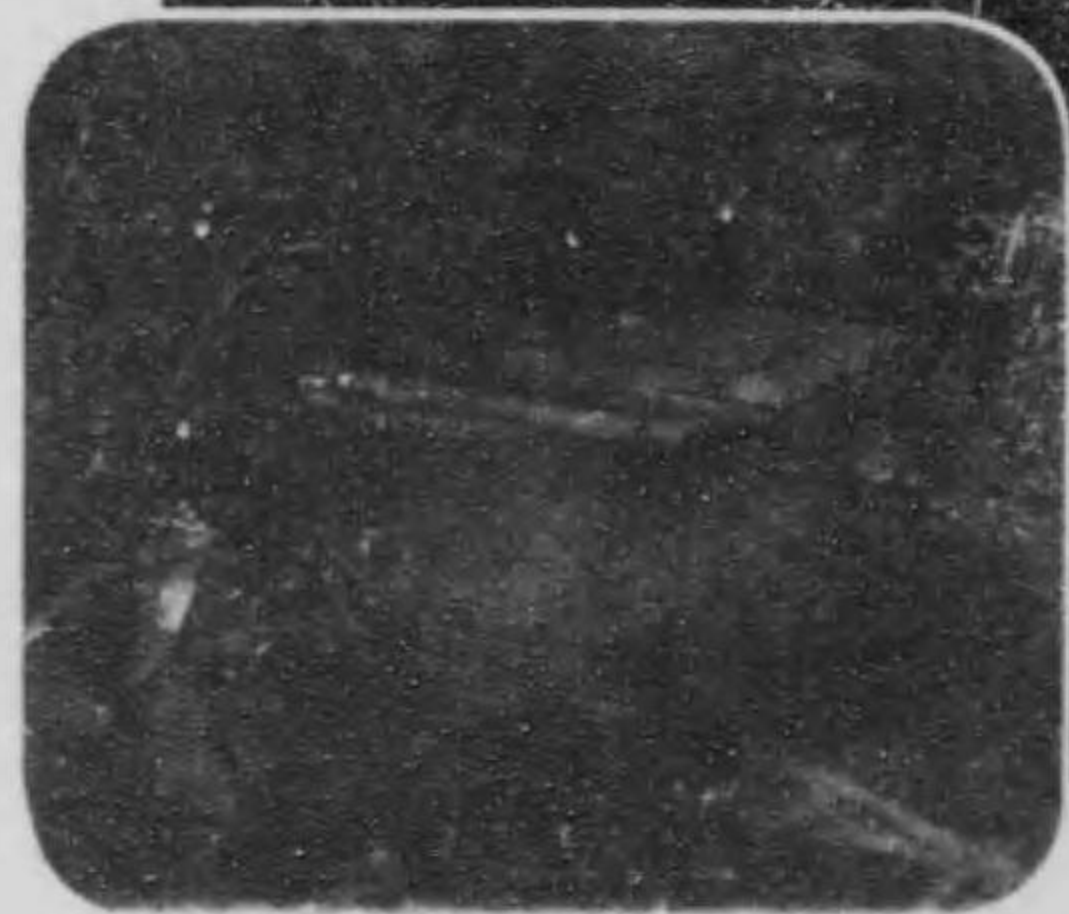
東寺五重塔



羅城門址



源為義墓



多田滿仲産湯井

上ノ八

●東寺(京都)

西八條に在り。眞言宗の總本山にして八幡山平護國寺と云ふ。弘法大師を開祖とす。始め桓武天皇、羅城門の東西に伽

上人、念佛の流行を憤慨し、其の反抗として古教興立の目的より、本寺の堂舎に修理を加へたる際、南大門亦之れを修理せりと云ふ。今尙は舊時の觀を存す。

寸と仰せ候へば始め御覽じ損ひたるには候はず五寸隠して切り候はずと申す御門かしこく見てけりこぼち切らば都遷の日近くなりてえあはせじさらば其通にてあ





井湯産仲滿田

### ●東 寺 (京都)

西八條に在り。眞言宗の總本山にして八幡山平護國寺と云ふ。弘法大師を開祖とす。始め桓武天皇、羅城門の東西に伽藍を建立し給ひ、東方を東寺と稱し、西方を西寺と稱せり。僧空海(弘法)入唐し密教を修めて歸朝するや、勅して之を東寺に置けり。弘仁十四年東寺長者職を以て空海に賜ひ瀝頂道場とす。茲に於て空海は健陀國袈裟及び念珠を置きて寺鎮とせり。天長年中、師資相承の官符を賜はりて秘密傳法貫主の住院と爲す。空海特に嵯峨天皇の推獎を辱うしたるを以て官家の崇仰厚く百世に亘りて朝野の重んずる所となれり。

寺域凡そ三萬餘坪、南大、蓮華、慶賀四足の諸門あり。南大門を入れば金堂、食堂、講堂あり。食堂には丈六の千手觀世音を安置せり。往時該觀音開眼の際は宇多天皇の行幸を辱うしたりと云ふ。又同所に安置する毘沙門天は、元羅城門の樓上に在りしを茲に移したりとぞ。

東寺は一千餘年火災を蒙む事なくして以て今日に至る。其經像、圖書の寶藏豊富なること海内第一と稱せらる。

### ●大 塔 (京都)

是れ寛永年間の造立に係る。基方三丈高さ二十三丈四尺と註せらる。今、國家特別保護物に編入せられ居れり。

因に、五重塔は金堂の東南に在り、天長三年の造立に係る。

### ●金 堂 (京都)

五重塔の西北に在り。講堂と共に豊臣氏の造進に係る。桁行七間、梁間五間、重層屋根入母屋なり。亦是れ塔と共に東寺著名の建築物なり。

### ●南 大門 (京都)

東寺四門の一にして、建久年間、文覺

上人、念佛の流行を憤慨し、其の反抗として古教興立の目的より、本寺の堂舎に修理を加へたる際、南大門亦之れを修理せりと云ふ。今尙ほ舊時の觀を存す。

### ●羅城門址 (京都)

千本通四塚に存す。素と平安城外郭の南門にして朱雀大路九條に在り。今尙ほ東寺南大門の西二百間餘、民家の傍に其斷礎あり。四塚は辻にて西は藪の渡に向ひ斜に馳せ、南は上鳥羽村鴨川まで道路にて造道と稱す、共に攝津に通ずる西國街道なり。

羅城門に就て『小世繼物語』に記して曰く「柏原の御門(桓武天皇)の御時に平の宮作らせ給ふ間長岡の宮より時々行幸して新しく作らるゝ都を御覽するにらせい門の邊にて御輿をとめ工を召て仰せられけるやういと善く門は建てたり但長な一尺切るべき風早き所にひとつ屋にて建てたれば風の爲めに危きなり長今少しまさり劣りに從ひて防がるゝ事なれば地の體に隨ひて長の程は建つるを此頃の工はこれを知らで屋を建つれば此門壹尺切れさらば善かりなんと仰せられて歸らせ給ひぬ造り果て、遷都近くなりて初の如く門の前に御輿を止めて御覽するに瓦葺きに白土皆塗はて金物許うたざりけり工を召して仰せらるゝやう我れ初め恐しく見て一尺切れと言ひてけり一尺五寸切らすべかりける今五寸切るべし高く見ゆると仰せければ工ふし轉び怖ぢかんじて淺猿しくふるやうにすれば怪しく思召て如何に斯はするぞと問はせ給へば工申すやう此門の長は本の門のやうに立合せ候を一尺切れと仰られしが仰の儘切りては無下に低くなり遠く見上るに高やか候にそきさらしく候へかゝるはなれやの平に見えたらんは見苦敷候ひぬべしと思ひて五寸を切て候ふなりそれに今五

寸と仰せ候へば始め御覽じ損ひたるには候はず五寸隠して切り候はずと申す御門かしこく見てけりこぼち切らば都邊の日近くなりてえあはせじさらば其通にてあるべし但風にともすれば吹倒れんと仰せありければ工いみじく作りて候ものなり五寸切り候ひぬれば危き事候はじと申けり扱都うつりの後末の世に至りて三度許吹き倒されたり御門の御覽じたる事かなひにたりいみじうおはしましけり扱圓融院の御時大風に吹き倒されてけり其後は作る事なし。」

### ●六孫王靈廟 (京都)

清和源氏の祖たる六孫王源經基を祀れるものにて、八條壬生の西に在り。此地素と經基の邸宅にして其後靈廟を茲に建て六孫王權と崇め又六宮と稱したり。後ち鎌倉右大臣實朝の後室三位禪尼大壇越となり眞空律師を請じて開基とし戒律三論眞言兼學の梵刹となしたり。其後荒廢したるを元祿年間徳川氏再興し、朝廷極位を授けられ、以來大いに著名の社となれり。明治維新前神佛混合の當時は、大通寺照心院に屬し、大通寺の鎮守たりき。

### ●多田滿仲の産湯井 (京都)

大通寺門内なる辨天祠の傍に在り。一名誕生水と云ふ。即ち是れ多田滿仲が呱呱の聲を揚げたる際、用ゐたる産湯の井なりと傳ふ。尙ほ六孫王經基靈廟の右側に滿仲を祀れる多田權現あり。

### ●源爲義墓 (京都)

是れ六條判官源爲義を葬むるもの。蒼然たる古色の墳に對して陵ろに保元當時英雄の末路を偲ばしむるものあり。



●西本願寺 (京都)

是れ眞宗本派本願寺派の大本山にして西六條に在り。其の西本願寺と云ふは、東六條なる大谷派本願寺に對しての稱なり。文永九年、宗祖親鸞上人の季女覺信尼、勅に依り門徒と協力して東山大谷に初めて上人の廟堂を建立せり。此年勅して久遠成實阿彌陀本願寺の號を賜ひ勅願所と爲れり。宗祖の外孫覺如留守職と號して寺務を執掌し、爾來子孫相傳へて寺主となる。文明年中、寺主蓮如上人大いに宗風を發揮し、本願寺はより大いに旺盛を致せり。文明元年近江國大津近松に移り同七年山科に影堂を新建して遷住す當時一向、法華の二宗勢威隆々として漸く他宗を壓し、宛も武士の一敵國の觀あり。天文元年六角定頼、山門三井寺衆の徒を語らひ來りて山科本願寺を燒毀しにるを以て。當時の寺主證如上人眞影を奉じて攝州難波に移る。石山本願寺即ち是なり天正八年顯如上人石山を織田氏に附して紀州鷲之森に移り、同十一年更に泉州貝塚に轉じ、同十三年又攝州中島天満に移り同十九年八月五日現今の地に移りたるなり。其間屢々戦亂に會し兵火に罹り、元和三年悉皆燒失し翌四年本堂再建成り、寛永十年大師堂を建つ。今尙之れを存す。本堂は東西二十一間、南北十二間、蓋し寛延二年の改築に係る。本尊は阿彌陀佛、別に大師堂、經藏、鐘樓、接待所、鼓樓等あり。庭園は有名なる滿翠園にして、庭内に黃鶴臺、滄溟池等の勝あり。庭の一隅に三層樓あり飛雲閣と號く。是れ豊太閤聚樂庭内のものを此に移したるなりと云ふ。後柏原天皇の時、天下大に亂れ、朝廷即位の大禮を行ふを得ず。時に實如上人其料を進獻し、斯くて大永元年に至り其典を擧ぐるを得たり朝廷此の賞として上人に紅衣を賜はり、

青蓮門跡の執奏を被り、其子證如上人始めて權僧正に任じ、證如の子顯如上人更に青蓮院門跡の准位を賜りたり。

飛雲閣

僧敬雄

飛閣層々壯 雲梯曩碧空 平臨星斗上 遙望京都中 圍郭千山合 抱城二水通 春風倚欄夕 坐覺入天宮

●西本願寺唐門 (京都)

京都東山なる豊公廟の舊構造を移したるものなりと傳ふ。人物走獸を彫刻し、其の美術的精巧なる、頗る華美にして莊嚴を極む。蓋し近代得易からざる逸作なるべし。

記事の序を以て蓮如、實如兩上人の墳を左に記す事とす。(都名所圖會の所載に據る)

蓮如上人の墳は山科本願寺舊地の西に在り。「二水記」に載する所に依れば享祿五年八月二十四日山科本願寺に於て合戦し、早且巳の刻既に陥落せり。本願寺は四五代に及びて寺域益々擴張し、其莊嚴佛國を觀るの思ひあり、今や一朝にして滅亡すと云ふ。

九月十三日おもしろかりければ東山を見て 蓮如 上人

大宮や山科つゞく小野山の ひかりくまなき庭の月影

實如上人の墳は同所東野村の東に在り上人は本願寺第九代の寺主にして蓮如上人の八男なり。光兼法印權大僧都大永五年二月二日遷化す

奉贈日本山科實如老上人

上人德行是問何、一箇禪門大丈夫、心裏要容天外善、此生渾似竹中虛、

大明正徳八年五月

杭州鐵冠道人詹仲和

大明詹仲和自ら竹を畫き實如上人を賞するの讃なり。今西本願寺の寶藏にあり。大明正徳八年は日本の永正十年に當る。

●東本願寺 (京都)

東六條に在り。即ち是れ眞宗大谷派の大本山にして、西六條の本派本願寺に對して東本願寺と云ふ。本寺は本願寺十世顯如上人の長子教如上人、慶長七年中始めて建立する所なり。後屢々火災に罹る。大師、阿彌陀の兩堂は明治二十二年に建築落成せり。大師堂は南北三十五間、東西三十二間、棟の高さ二十一間餘、建坪千百八十六坪、中央に宗祖見眞大師自作の木像を安置す。本堂は東西にして南北二十六間、東西二十一間、棟の高さ土間建坪六百十三坪、本尊阿彌陀佛を安置す。其他鐘樓、大寢殿、小寢殿、白書院、黒書院、鷲問等あり。東本願寺の東方三町を隔て、相對し庭園は涉成園と稱す、西本願寺の滴翠園と共に其の結構の妙、風趣の美を稱せらる。該園は一名枳殼邸と稱し、往時河原左大臣融の舊址にして、後ち豊臣秀吉の伏見の舊建築物を茲に移し、寛永九年之を造營す、其後元治元年兵火に罹りたるも尙舊時の觀を存せり。天正年間、蓮如上人織田信長に反抗し屢々織田氏の軍を惱ましたるが、就中其子教如の軍強勇を以て稱せられ、之れが爲めに信長の忌む所となる。後ち講和するに及び教如は身を退くに至れり。信長の薨後、豊臣秀吉、教如の少弟光昭を立て、法嗣と爲さしむ。其後慶長五年徳川家康大いに西軍を關ヶ原に破り京師に入るや教如上人出で、厚く之を迎ふ。家康教如に謂つて曰く、長者本當に嗣ぐべきなりと、茲に於て別に一寺を六條に創建せしむ。是れ即ち東本願寺なり。是れより門徒分れて東西に屬し、殆んど本支の區別を設けざるなり。東本願寺の堂宇華麗にして雄偉壯觀なる事は天下無双と稱せらる其唐門は亦是れ堂宇に準じて建築の美を誇るに足る。



東本願



移したるなりと云ふ。後柏原天皇の時、天下大に亂れ、朝廷即位の大禮を行ふを得ず。時に實如上人其料を進献し。斯くて大永元年に至り其典を擧ぐるを得たり。朝廷此の賞として上人に紅衣を賜はり、

大明正徳八年五月  
杭州鐵冠道人詹仲和  
大明詹仲和自ら竹を畫き實如上人を賞するの讃なり。今西本願寺の寶藏にあり。大明正徳八年は日本の永正十年に當る。

り門徒分れて東西に屬し、殆んど本支の區別を設けざるなり。  
東本願寺の堂宇華麗にして雄偉壯觀なる事は天下無双と稱せらる其唐門は亦是れ堂宇に準じて建築の美を誇るに足る。

寺 願 本 東



閣 雲 飛



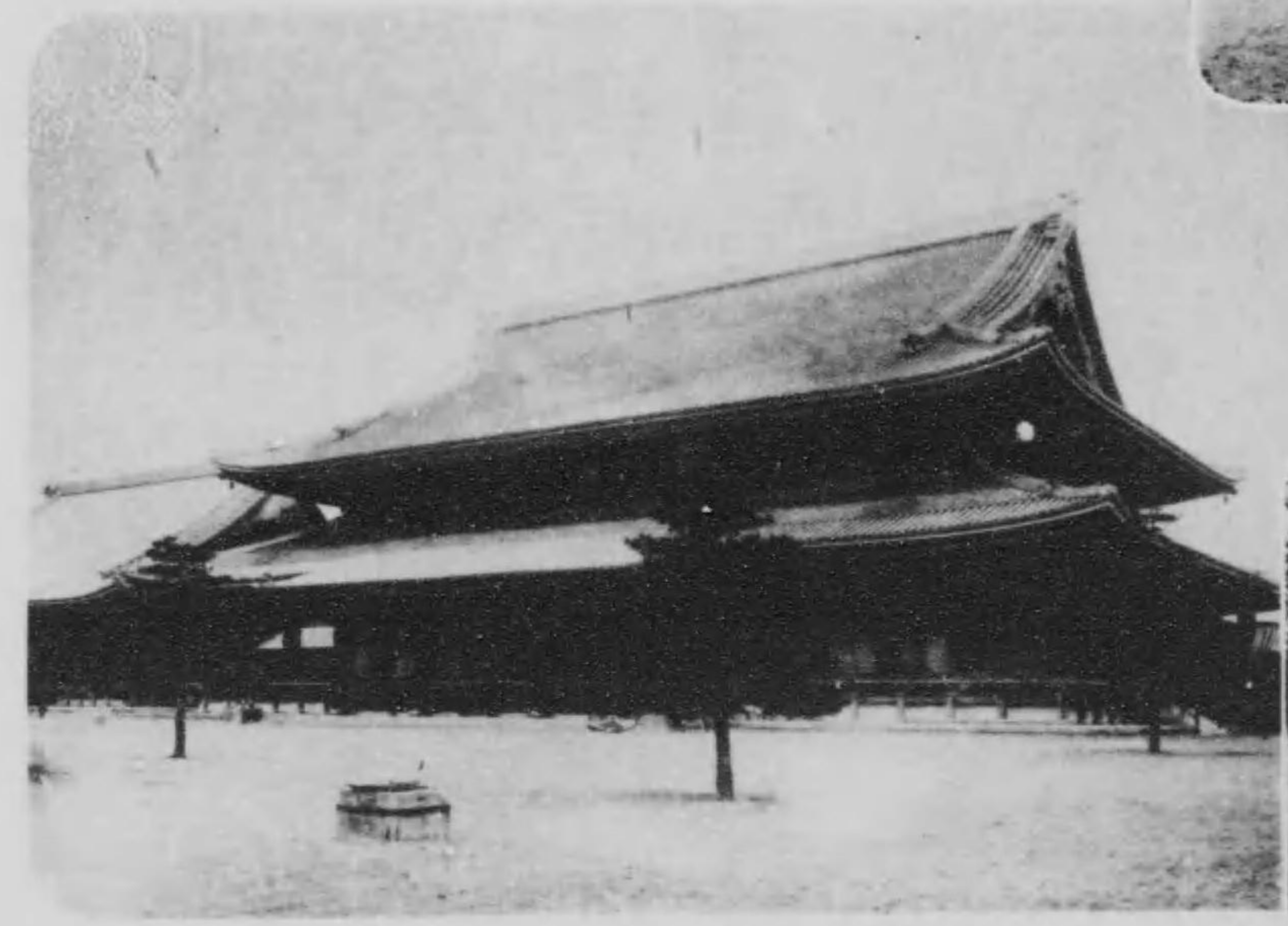
門 伎 勒 寺 願 本 東



門 御 寺 願 本 西

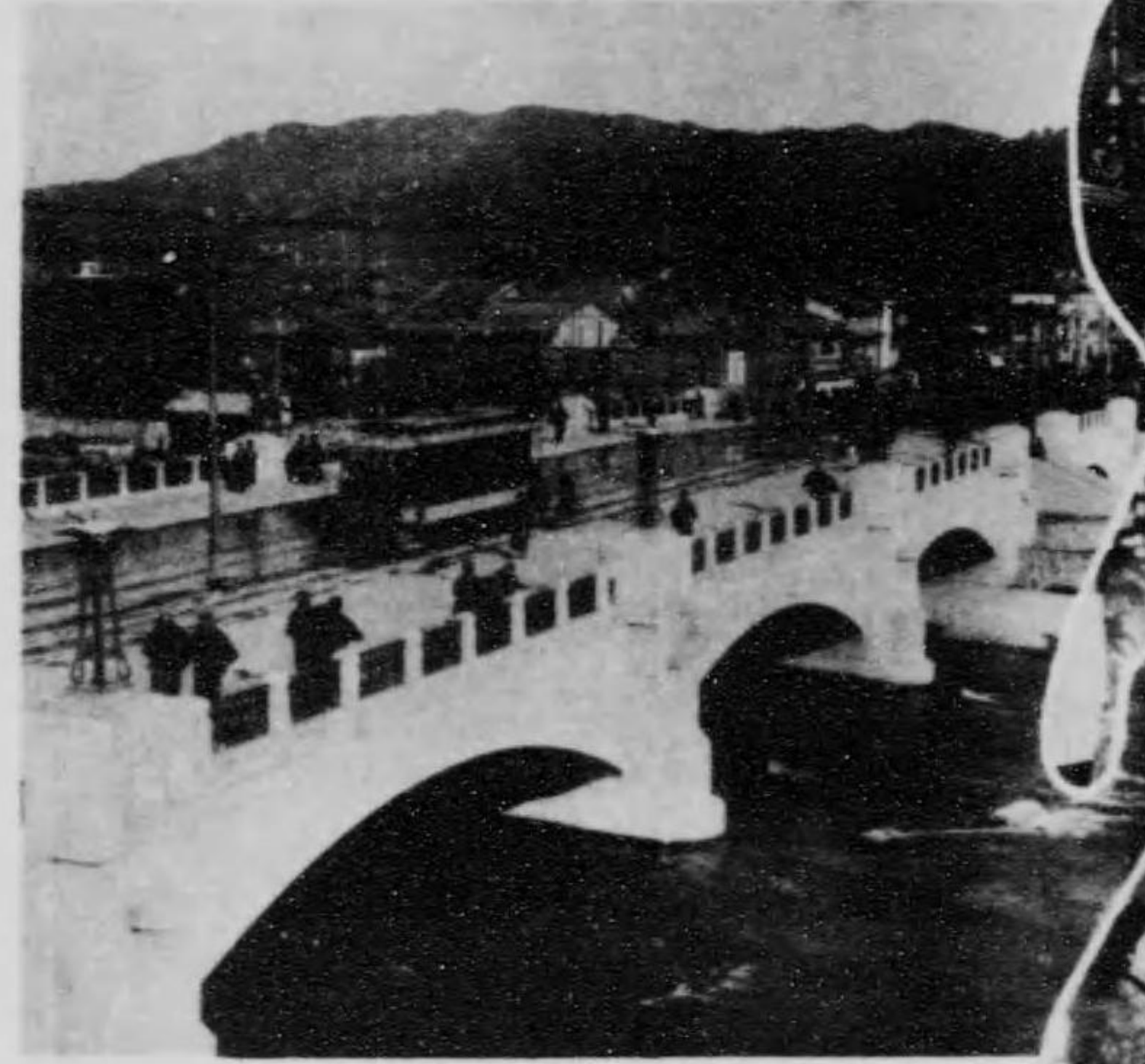
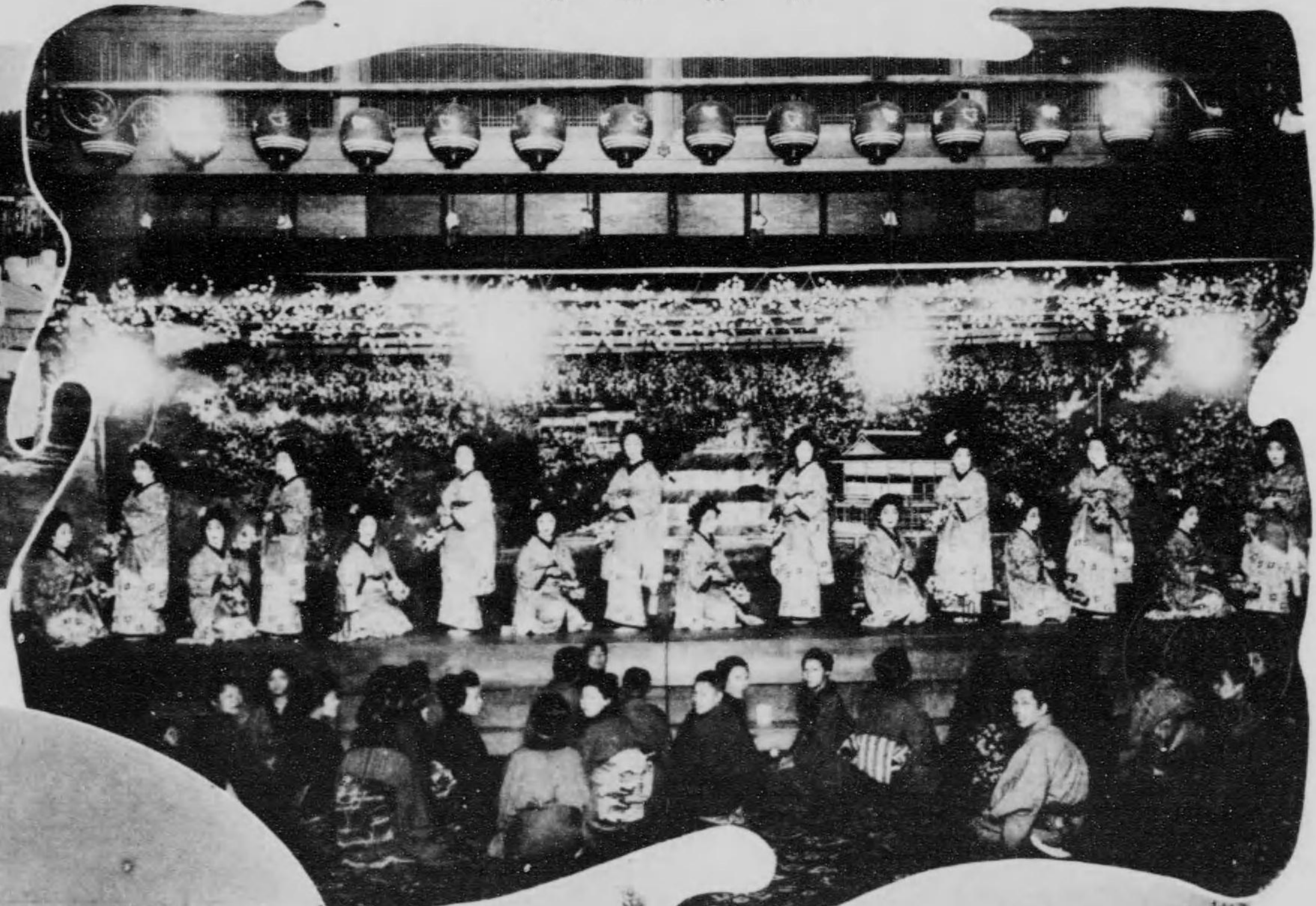


寺 願 本 西

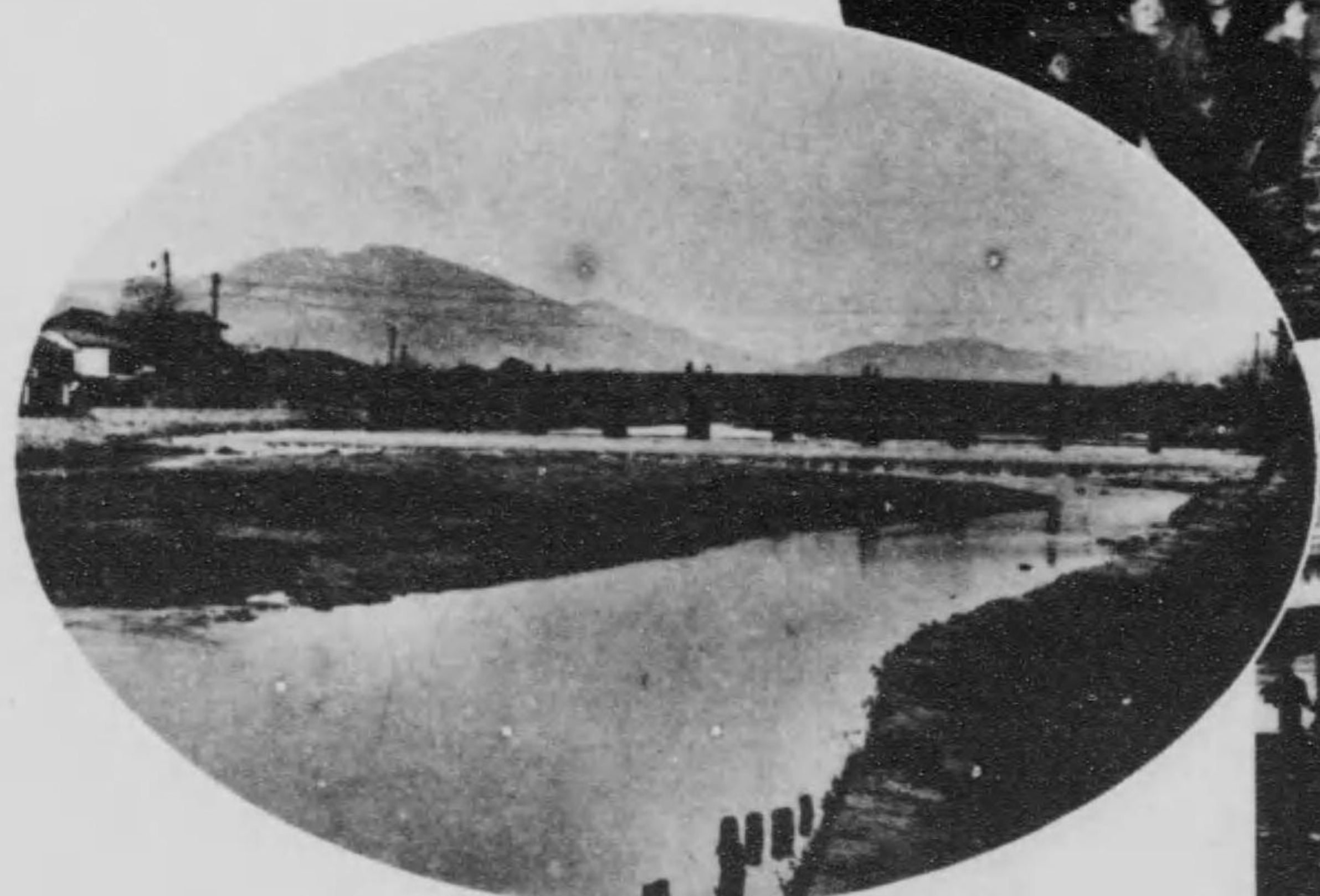




加茂茂川



四條橋



五條橋と山東



三條大橋

上ノ一〇

●三條大橋 (京都)

京都三大橋の一たる三條大橋は三條通

午後に及んで漸く散す。東は祇園の狭斜に接し西には般眼の街衛四條通を控ゆる此橋は、夏期の「四條の

「雲井の庭」と言へる長歌なりき、當時踊の振附は名人として聞へたる篠塚文三、三味線は杵屋六三郎、鳴物は杵屋萬蔵等





橋



### ●三條大橋 (京都)

京都三大橋の一たる三條大橋は三條通鴨川に架す、長さ五十六間幅四間半にして、初め天正十八年豊臣秀吉増田長盛等をして之を架設せしむるに當り大に勞費を盡し、橋柱の如きは總て花崗石の圓柱を用ひ其數六十三基、基底の地下に没すること凡そ五尋、欄干の擬寶珠は皆な紫銅を以て造れり、橋銘に曰く「洛陽三條之橋」後代に至りて住道人を化度す、盤石之礎地に入る事五尋、切石之柱五十三本蓋し日域に於て石柱之濶鴈也、天正十八年庚寅正月豊臣之を初め、御代奉増田右衛門尉長盛造之」と今の橋は明治十四年更に之を修築せるなり、三條大橋は京都諸街道の起點にして其橋畔は里程起算の元標あり、建武二年新田義貞尊良親王を奉じ東國征伐の時三條河原を過ぐとある河原は三條京極以東の舊名にして、今の新京極寺町一帶の地即ち是れなり。

石井南橋

勤王廢弱志無他。沿革如今果如何。  
擧頭應嘆一驚去。闕下碧瞳紅髮多。

### ●四條大橋 (京都)

鴨川の水潺湲として流るゝ處に壯麗の鐵橋を架す、之を四條大橋と呼ぶ、其長さ五十四間幅四間に亘り、明治七年の架設に係る、鐵柵の上 高く八基の街燈を掲げ、張るに紅白の玻璃を以てす、夜に入り遠く之を望めば蛟龍一躍水上に遊び戯れに數個の珠を弄するに似たり。

川風や薄衣着たる夕涼みと吟せらるゝ、夏期に入れば、兩岸の青樓及割烹店は水に臨んで假床を設け以つて遊客の納涼に便ならしむ、河中の磧上亦無數の假小屋を列ね縦横幾條の小市街を爲し飲食店あり、劇場あり、雜貨店あり、毎夕薄暮より軒頭各燈火を燒き納冷者絡繹喧々囂々

午夜に及んで漸く散す。

東は祇園の狹斜に接し西には般眼の街衢四條通を控ゆる此橋は、夏期の「四條の納涼」なしとするも、常に熱鬧を極む。

頼山陽

笑靨翠眉幾送迎 一橋箇處太多情

軟沙細石春流駛 裙影忽々碎後生

巖谷 一六

山叛紫翠日收紅 醉坐絃聲水韻中

最是情人斷恨處 流螢數點夜靡風

鱸松塘

流管清絲夜未央 家々水榭接風廊

他年留作銷魂地 狼籍酒痕衣上香

河野 春風

樓々歌拍散長空 秋色平分在鴨東

柳外離開窓六扇 瑠璃水對月玲瓏

芭蕉

川風や薄かき着たる夕すゞみ

蕪村

春雨や四條五條の橋の上

嵐雪

たなはたや鴨川わたるうしくるま

### ●鴨川踊 (京都)

二條以南三條以北、高瀬川を帯び東山鴨水を望む潔清の巷を木屋町と言ふ、其木屋町と相接し鴨川の清流に臨める花街を先斗町と呼ぶ、三條四條の二大橋に跨れる遊廓地なれば最も般眼なり、鴨川踊は此花街の美觀にして都踊と共に其名著る、今ま其沿革の梗概を記さん。

鴨東に艶麗の美妓あれば、鴨涯にも亦瀟洒の歌妓あり、踊に於ても一は都踊と言ひ一は鴨川踊と稱す、等しく是れ花は花なりと雖も、花に幾多の種類あると同じく、舞踊の上にも撰を異にするものあり、都踊を觀たるもの亦鴨川踊を觀て鴨東鴨涯に咲く花の特色を知る、兩踊とも明治五年の創始にして、都踊第一次の歌は「十二調なる長歌、鴨川踊の初聲は

「雲井の庭」と言へる長歌なりき、當時踊の振附は名人として聞へたる篠塚文三、三味線は杵屋六三郎、鴨物は杵屋萬藏等にして其開催毎に好評を博し、明治八年には歌舞練場の新築成り、爾後引續き開催せしが明治十六年四月の開催後、長らく中絶せしが同廿八年平安神宮記念祭に際し、取締出雲房次郎、副取締楠小三郎等協議の上之を再興し、同三十三年六月には副取締田中市太郎議員島崎顯允高野徳藏等建築委員となり、女工場を今の歌舞練場に改築し、翌年二月其竣工を告げたり、踊師匠は橋本みと田中喜代、三味線は津田たみ北川しげ、鴨物は福富はつ小畑みつ、茶儀は千家流馬淵宗治擔任し、専ら斯道獎勵に努めつゝあり、大正九年五月開催の「琵琶湖めぐり」は唐橋、浮御堂、長命寺、筑摩神社、引拔雀踊なりしが、其置歌と唐橋の唱歌は如左

### 置歌

敷島のやまと心の、種まきて、世にこそうまれ、ことの葉の、花の都のたゞ中を、流るゝ水も、澄ぬらん。

### 唐橋

陸にも舟の、昇り降り、蹴上日の岡山科や、四の宮小關、ふみ越て、むかふ遙かに三尾が崎、打出の濱由、矢橋への、渡りに船の、幸よりも、急げば廻れ、瀬田の橋、長き蟻蛉の、世がたりの、俵をつめる、賤が家の、軒端の梅の、花ざかり、うつる田の面の、ひもかみ。

### ●五條橋頭より

### 東山を望む (京都)

北、如意ヶ嶽より稻荷山に至るまでの東山三十六峰は、其山容甚だ優雅なり、鴨川の下流より五條橋を隔て、之を望まば所謂「蒲團着て寝たる姿の東山」たる觀あり。



### ●祇園夜櫻 (京都)

京都祇園八阪神社の近傍は渾て櫻樹多し然れども祇園櫻なるものは神社の東方知恩院に至らんとする道路の角に在る絲垂櫻にして巨幹繁枝一株以て林を爲す、花爛漫の候に至れば花下爛醉の客を絶たず、夜に入れば高く篝火を焼いて花神の眠りを擾し遊人群を爲して夜色の幽艶を賞す、祇園の夜櫻の名ある之れが爲めたり、

天與の公園圓山は東山三十六峰を左右に負ふて勝更に勝を加へ、殊に外客は好んで茲に集る、圓山公園より知恩院に出でんとする東山の半腹に三層の高樓を見る、之れ圓山鑛泉にして其前庭に泉石を疊み浴場其他盡く洋風に模擬し頗る美麗を極む、此高樓の欄頭に凭れば京都の繁華渾て双眸の中に攢まり、西南の峰巒亦指呼の間に落つ眺望の絶佳なる蓋し京都市内の最たり。

圓山鑛泉の下方及北方に數軒の旅館旗亭貸席等あるは古へ安養寺の宿坊にして今尙也阿彌、左阿彌、蓮阿彌、正阿彌、眼阿彌、端の寮等の名を存す其中也阿彌は初め多群庵又一乘院と稱し慈鎮和尚開棲の地にして圓光大師亦曾て此に住したる事ありと、庵下石塔の傍に清水あるを『吉水』と言ふ。世に慈鎮を稱して吉水和尚と言ふは之れが爲めなり。

圓山公園の絶頂を左すれば知恩院鐘樓堂を経て知恩院に下る、長樂寺より高臺寺を経て『將軍塚』に登れば亦風光掬すべきものあり、塚は桓武奠鼎の初め地を東山の巔に卜して長八尺の土偶に鐵甲を裝ひ且つ弓箭を携へしめ、之を西面に埋められたり、是將軍塚にして王城の守護神たらしめんとの叡慮に出でしものなりと塚上凹形にして老松簇生し遠くより望むも直ちに其所在を辨すべし、嶺上山城の

半部を脚下に望むべく眺賜最も雄偉なり

### ●長樂寺 (京都)

長樂寺は圓山安養寺の南に在り、初め天台の別院にして隆寛律師此に住し法然上人の淨土門に歸依し一流の専修教を弘む天文年中慈覺和尚之を時宗に改む、後水尾天皇堂宇を重興せしめ給ふ、寺中眺望の佳なること洛東第一と稱す。

其本尊は騎龍大士なりと傳ふる外、千手八臂十一面觀音及文殊像を安置す、今昔物語に由れば一條院御代巨勢廣隆東山新堂の壁に地獄畫を描けり、今ま長樂寺と言ふは其畫を書ける堂也とあり、平相國清盛の女と生れ高倉の中宮となりて榮華を身に集め、雖て國母と仰がれ給ひしを一門西海に亡びて幼冲の安徳天皇龍都に幸し給ひしに遅れ、京都に送られし建禮門院は文治年中當寺皆空上人に就き落飾し故帝の御衣を施入して十六歳の法幢と爲し給ふ。

### ●頼山陽墓 (京都)

頼山陽墓は長樂寺の山腹に在り、頼氏一家の墓多く茲に列なる、山陽先生の偉材を慕ひ三樹氏の節烈を憶ふ者宜しく登つて之を吊す可し、墓側に諸名家の碑文を讀むも亦一快事ならん、況んや眺望快豁、心身自ら爽なるを覺ゆるものあるに於てをや。

### ●大雅堂洞址 (京都)

大雅堂の舊址は雙林寺境内門前芭蕉堂の北方に在り、大雅堂の名は夙に世人の喧稱する所にして俗名を池野秋平と言ひ和歌及書畫を善くし安永五年四月此地に歿す、歿後門下生等舊居の址を空しくせんことを恐れ古昔天叢翁長嘯(豊臣若狹守勝俊)が靈山に築きたる『詩仙堂』の古柱礎礎の在りしを請ふて茲に修築し樓上

樓下各々六疊の一室を構成して大雅堂と號せり、軒瓦には大雅堂とある篆印を瓦に造りて葺けり、大雅堂は和歌を冷泉家に學び最も蘊奥を極む、洛北西陣に生れ中年二條東樋之口町に住み後聖護院に移り更に知恩院の西袋町に轉じ遂に祇園の南葛原に終焉を告ぐ、

### ●西行庵址 (京都)

柴の庵ときくは賤しき名なれども世にこのもしき住居なりけりとは西行法師が東山に住める僧を訪ねたる時の歌なり、芭蕉は此歌を讀み如何なる住居なるや先づ其坊懐かしとありて『柴の戸の月やそのまゝあみた坊』の句あり。

西行庵址は雙林寺境内芭蕉堂の西に在り、其雙林寺は安井金毘羅社の南方鷺尾町に在りて初め沙羅雙樹林寺法華三昧無量壽院と稱せりと、天台の別院にして傳教大師の開基に係る、至徳年間國阿上人の移住するに及んで時宗に改め俗に東山道場と稱せり、坐像三尺の藥師佛を本尊とし阿彌陀佛及脇士の三尊釋迦の立像を安置す、西行俗名佐藤義清通世の後此寺内に閑居し建久九年二月十五日卒す年七十三、曾て詠じて曰く『願はくは花の本にて春死なん其きさらぎの望月の夜』と竟に其言の如し、西行在俗の時武名あり、後入道して顯密の教に通ず、僧慈圓教を請ふ對へて曰く道義を窺はんとせば當さに先づ和歌を學ぶべしと、西行庵と言ふは守塔の一字なり、西行櫻の遺蹟を存す。

### ●祇園女御塚 (京都)

雙林寺の西北、祇園祠の東南に祇園女御塚在り、一堆の叢塚にして方二間餘、三條天皇中宮の墳なりと言ふ、俗に女御殿と稱す。

相 摸

あはれ君雲のよそにも大谷の  
けふりとならん影とやはうし

双輪寺女御殿址





ひ且つ弓箭を携へしめ、之を西面に埋められたり、是將軍塚にして王城の守護神たらしめんとの叡慮に出でしものなりと塚上凹形にして老松簇生し遠くより望むも直ちに其所在を辨すべし、嶺上山城の

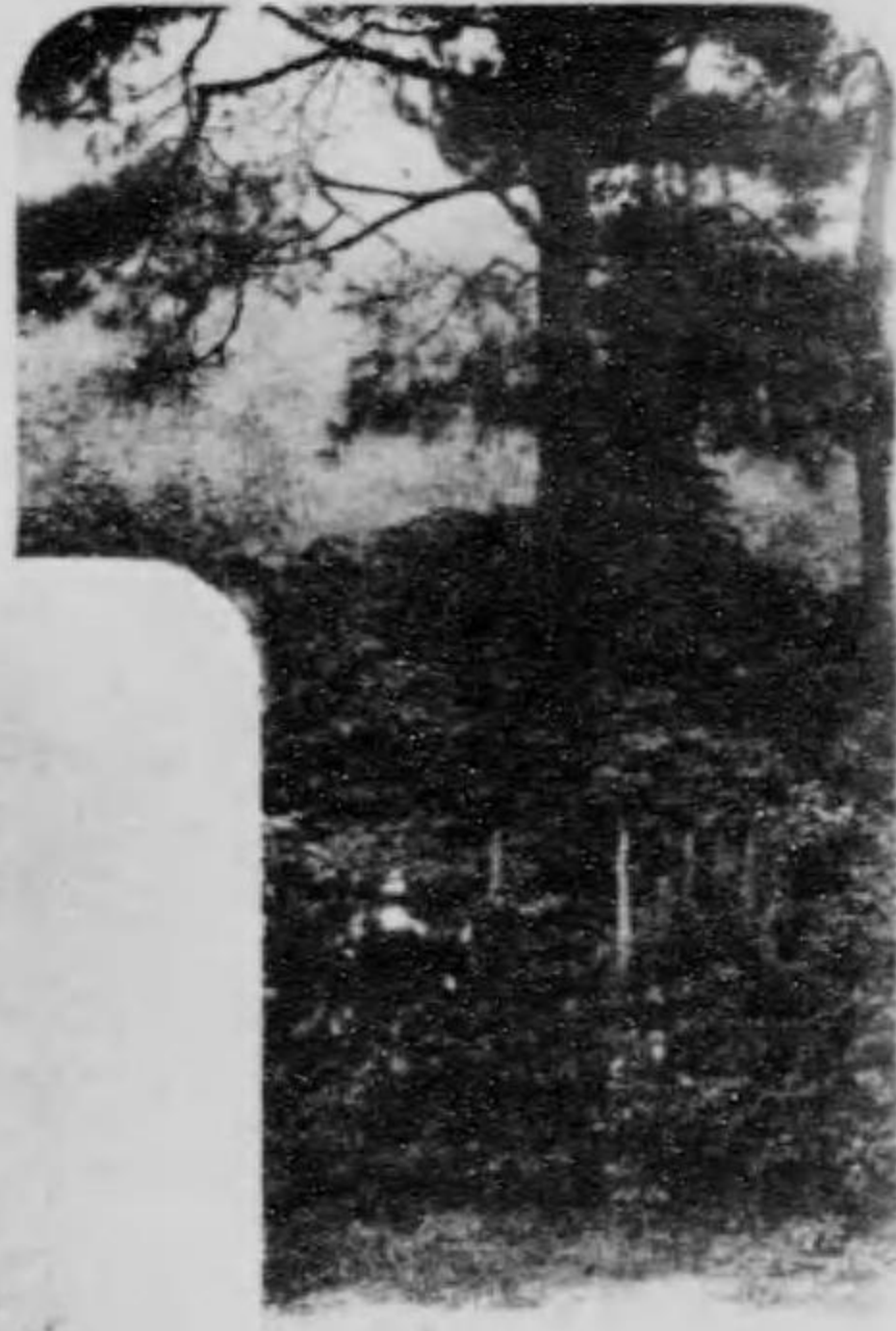
和歌及書畫を善くし安永五年四月此地に歿す、歿後門下生等舊居の址を空しくせんことを恐れ古昔天哉翁長嘯（豊臣若狭守勝俊）が靈山に築きたる『詩仙堂』の古柱礎の在りしを請ふて茲に修築し樓上

御塚在り、一堆の墓塚にして方二間餘、三條天皇中宮の墳なりと言ふ、俗に女御殿と稱す。

相摸

あはれ君雲のよそにも大谷のけふりとならん影とやはうし

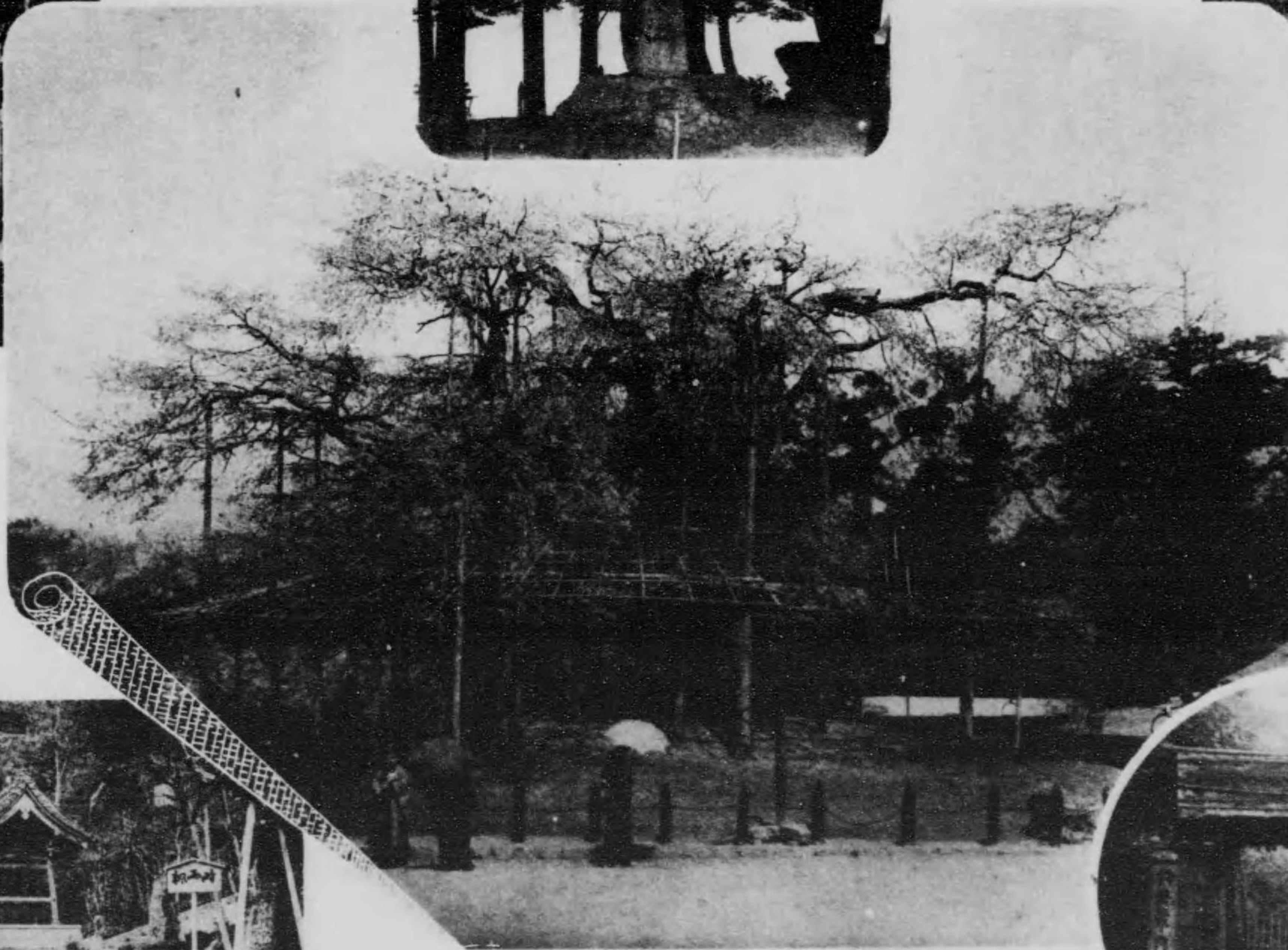
双輪寺女御殿址



大雅堂舊址



額山陽墓



丸山公園祇園の櫻



西行



長樂寺



八坂神社

八坂五重塔



部 踊

祇園の祭禮

(中) 山志士墓 (下) 一カ樓

上ノ二

● 八坂神社 (京都)

祇園町の東端に在り。祭神は素盞雄尊

さ十丈餘、下に車輪二双を施し、左右に大繩を付け數十人にて之を引く、其年役に従ふ小兒其上に乗り首に寶冠を頂き腰

神風の届く地球の隅々迄も分けて都は明らかく治る年の五ツ日はいよ睦しく七重八重けふ九重に咲花の彌生を開く初に





踊

### ●八坂神社 (京都)

祇園町の東端に在り。祭神は素盞雄尊、稲田姫及其八王子にして、社格は官幣中社たり。社傳に據れば、初めは社神播磨國明石浦に垂跡したるを吉備大臣之を同國廣峰に勧請し、後又茲に遷座したるにて一名を祇園社と云ふ。本社は殿舎作りにして床下には金網を張り、傳へ云ふ床下に龍穴ありと。境内には後見殿、拜殿、繪馬堂、相光天王社、三光社、美御前社、蘇民將來社等、諸般の小祠本社を圍繞して建てられたり。毎年六月例祭を執行す。之を祇園會と稱す。即ち是れ有名なる祇園祭なり。祇園會は清和天皇の貞觀十八年京都疫病流行せる際、卜部比良磨京洛中の男女を率ゐて疫神を神泉苑に送りたるに基因すと云ふ。而して其神輿を藏めたる殿舎を精舎と名けたるより祇園會と呼ぶに至りしとぞ。

### ●八坂の塔 (京都)

庚申堂の東方に位す。五層にして高さ十六丈方三間あり。塔の下層には大日、釋迦、阿闍、寶勝の四像を安置す。聖徳太子の草創に係り、日本寶塔の嚆矢なりと云ふ。其後屢々池魚の災に罹りたるが建久年中、源頼朝之れを再建し、爾來又幾多の修理を経て、元和四年板倉勝重、徳川幕府の命に依つて造營す。今建仁寺の保管に屬せり。

### ●祇園祭禮 (京都)

古來六月七日より同十四日に至る間執行されたり。舊記に依り其次第を記さんに、七日の朝大鉾六本各四條通りを東洞院の西に渡る、鉾は各稱號あり、長刀鉾、函谷鉾、洲濱鉾、雞鉾、菊水鉾、月鉾、船鉾と云ふ。此日大神山を始め十三本の山渡る、長刀鉾は三條宗近の作にして長

さ十丈餘、下に車輪二双を施し、左右に大繩を付け數十人にて之を引く、其年役に従ふ小兒其上に乗り首に寶冠を頂き腰に羯鼓を繋ぎて踊躍す、左右侍立の小童團扇を以て之を箴揚す、笛太鼓等にて囀す、斯て五條松原通りより各本所に還る。神輿旅所に至て神を假宮に移す。十四日朝、辨慶外八本の山渡る。西は三條より東は京極を歴四條通を過ぎて本所に還る。同日午の刻三社の神を神輿に移し旅所を出て四條通の西を経て大宮通御供町に至り三社の神輿を奉安し御供を献す。終りて後、東方三條通を過ぎ京極を経て四條通より本山に入るなり。

### ●一力樓 (京都)

祇園町に在り。元祿の昔、赤穂浪士大石良雄、主君淺野長矩の爲めに復讐を策して深く隠忍持重し、遊里に韜晦して故らに屢々京都祇園の歌吹海に出入し、常に同地の旗亭一力樓に遊びたり。當時の同樓今尙存して營業を繼續し、良雄が紋所に因みてニツ巴の紋を襲用し、頗る繁昌しつゝあり。良雄が元祿復讐の快舉を追懐し、興味を以て同樓に一遊を試むるもの尠からず。

### ●都踊り (京都)

京都の一名物として有名なるものなり。明治五年京都に博覽會を創設せるに際し當時の京都府知事長谷信篤參事榎村正直等祇園の各樓主に懇懇し祇園の衰頹を復活する爲め團結して舞踏を演せしめたり。是れ都踊の創始なりとす。踊は祇園の歌妓に依て演ぜらるゝものにて嚙啞たる鼓樂は宛轉たる謳歌に伴ひ花下遊蝶の舞踊は宛も梅櫻桃李一時に滿開の盛觀を呈し艶麗殆ど言語に絶す。左に創始當時の都踊唱歌の全文を掲ぐ。

都踊十二調 (榎村正直作)

神風の届く地球の隅々迄も分けて都は  
明らけく治る年の五ッ目はいよ睡じく七  
重八重けふ九重に咲花の彌生を開く初に  
て十重二十重とも群れ競ふ名にし八坂の  
まが玉揃へ色麗しき朝霞あつき情に薄化  
粧何のかはらん瓦は嫌よたまのお出の異  
邦人に光輝く初日出見せて素顔のすんが  
りしやんと末の末迄とげきに契り中に優  
しきおぼこは含み含み笑顔に愛持枝を翳  
し並べて東方亞細亞大日の本と夕から祇  
園生に遊ぶ夜を花にあしたを忘てや汲  
め共盡ぬめでたき御代の新に進む酒樽嫌  
よいや洋洲あし元さへもよろしくめきし  
歐羅巴空も長閑や天地の亞米利加困る日  
和ぐせ曇の御代の花曇り少しは濡れて亞  
弗利加も香に匂ふなる花吹雪人の山見る  
博覽會押な〜埃太利亞孰れもお揃あめ  
でたい深く智識の魁に其支那かたち緩々  
と豊に並ぶ一と踊り囀揃へて十二律合す  
調子は御國振り光る一越上無調神仙盤沙  
鸞鏡調黃金龜鐘と續ては双調下無勝絶調  
拍子揃へてヒイト、リがんは平調斷金調  
花を見るなら祇園町情は八坂新地振りお  
國土産や京土産めつたにひきは鳥が啼東  
男に未だ負ぬ花の都の京女郎一夜に千代  
の數重ね物數言ぬ色は其花山吹の花の數  
柳櫻の實と實誠競べを花競べ色より香よ  
り信實を洗ひ上たる水上は清き流を汲め  
ば尚水も洩さぬ花屏風風も通さぬ玉の緒  
を君の眺めに雪月花

### ●靈山招魂紀念碑 (京都)

高臺寺の上方、山の半腹に在り。傍に建立せる一祠は靈山招魂場にして、嘉永安政以降王事に盡瘁せし死者の靈を祀れり。碑は是等勤王志士の招魂紀念として建てしものにて志士の姓名は一々枚舉に遑あらず、其重なるものは木戸孝允、品川彌二郎、梅田雲濱、坂本龍馬、平野國臣、藤本鐵石、梁川星巖等なりとす。



●東大谷本廟 (京都)

長樂寺の南隣に在り、即ち東本願寺の祖廟なり。堂宇頗る華麗を極む。宗祖親鸞上人の廟舎は本堂の上方に位し、文祿年間創建に係る。塔上虎石と號くるものを安置す。是れ見真大師(親鸞上人の謚)の遺愛石なりと傳ふ。本願寺縁起の記す所によれば、親鸞上人の寂後、東山の西麓なる鳥部野の南邊延仁寺に葬事して遺骨を鳥部野の北邊、大谷に納むとあり。後ち吉水に移して鳥部野西に復したり。

智 肇

京洛東山鳥部山 吾師踪跡久相傳  
請看石虎墳前色 芳草春風五百年

●西大谷廟 (京都)

親鸞上人の廟舎は往時智恩院の境内に在りしを、同寺の伽藍造營の際鳥邊山に移して營み、其舊名を用ひて大谷御廟と稱したるもの、即ち是れ今の西大谷なりとす。本願寺縁起に曰く「親鸞上人、東西麓鳥部野南邊延仁寺奉葬、遺骨を拾ひて鳥部野北邊大谷に之を納む、文永九年墳墓を改めて猶西吉水北邊に遺骨を掘渡し佛閣を建て影像を安す、上人息女覺信尼建立也、寺務は覺信の息覺惠なり。」此地風景頗る佳趣に富み池上花崗石を疊みて眼鏡橋を架し、樹石泉水甚だ韵致あり、亦是れ洛東の一勝地たるを失はず。

親鸞上人は一向宗の始祖にして東西兩本願寺の開祖なり。幼名を松若庵と稱し出家して範宴、綽空、善信など、號し、後更に親鸞と改む。父を藤原有範と云ふ親鸞承安三年四月一日を以て京都に生る四歳にして父を喪ひ、八歳にし母亦死し哀慕の情禁する能はず、漸く遁世の念を生じ、九歳の時遂に青蓮院慈圓僧正の門に入て出家し、叡山に居る事十年、後ち南都に赴き三論、法相諸宗の學を研鑽し、

深く感奮する所あり、刻苦して出離の要諦を求む。建仁元年正月頂法寺六角堂に參籠する事一百日、偶々途上聖覺に逢ひ、始めて源空上人の念佛易行の法門を弘通するを聞き直ちに源空上人を吉水に訪ひ其教示を受けて門人となり名を綽空と改め岡崎に住す。同三年三十一歳にして藤原兼實の女玉日姫を娶る承元元年住蓮、安樂の事あるや之に連坐し特に死一等を減せられて越後國府に配流せらる。茲に於て藤井善信と改名し配處に在る事五年自ら愚禿親鸞と稱す。建曆元年赦に遇ひ明年四月將に京都に歸らんとして途中測らずも師源空上人の寂報に接し踵を轉じて再び化を東北諸國に布かんと欲し、越後より更に常陸に赴き、同國下妻、小島等に居住する事數年、後ち稻田に留る事十年、元仁元年正月稻田の坊に在りて始めて『教行信證文類』六卷を選す、時に其妻玉日既に京都に於て死せるを以て更に三善爲教の女を迎ふ即ち是れ慧信尼なり。斯くて常野の間に在留する事約十餘年、後京都に歸らんとして途次相模の足柄沼津に到るや信徒切に留まらん事を請ふ者多く爲めに滞留七年に及び既にして沼津を發し美濃近江の諸國を経て嘉禎元年八月歸京せり。親鸞流罪の當時より前後二十九年具さに辛酸を嘗め教法弘通に多大の努力を傾注せり、後京都岡崎より西洞院に移り爾來二十有餘年間は専ら教法上の述作に従事し弘長二年八月富小路善法院に轉じ同年十一月二十八日病を以て遂に示寂す。享年九十、明治九年詔して見真大師の諡號を賜ふ。著はす所の『書教行信證文類』和讃『淨土文類聚鈔』愚禿鈔『入出二門偈』等何れも教旨の歸趨を闡明し、長へに一宗の寶典として崇讀せらる。

●青蓮院 (京都)

三條通り白河橋の東南、即ち智恩院の

北に在り。粟田御所又は東山御所とも稱す。延曆寺の別院にして天台三門跡の一たり。傳教大師の草創にして行玄大僧正を以て開祖と爲す。嘗て美福門院の祈願所となりて仙洞御所に準せられたる事あり堂宇は仁平三年鳥羽法皇の建立に係る法皇の第七皇子覺快親王御入定以來三十九世尊融法親王(故久運宮殿下)に至るまで、七百餘年連綿法號を繼がせ給ふ。歴代天台座主に職せられ、一に法義三昧院と云ふ。是を以て宮廷の御縁故淺からず、天明八年皇居炎上の際光格天皇の假皇居となり、又嘉永七年には皇女門院の假御所となれり。又慈鎮和尚の時、親鸞上人得度の遺迹あるを以て爾來本願寺法主は歴代當院法親王に隨つて得度せらるるの例なり。故に維新後年々四月には西本願寺法主は當院に參詣して、得度會を修し謝徳の意を表する事となり居れり。

往時伏見天皇の皇子尊圓法親王當院に住し書道に精通し入木道なる一派の筆法を興し給ふ、是れ粟田流又は御家流と稱するものなり。殿堂は曩に燒失し明治二十七年の再建に係る。尙青蓮院の北方に植髮御影堂あり。是れ親鸞上人が得度剃髮當時の童形の像に剃りたる髮を植ゑしものにて長二尺許り、本尊阿彌陀佛の右方に安置せり。

●青蓮院庭園 (京都)

青蓮院は粟田御所の別稱あるほどなれば其庭園の莊麗林泉の風趣、技巧の粹を盡し、一石一樹の排置に至るも間然する所なし。明治二十七年、殿堂再興後更に修理を加へて一層庭園の風韻を深からしめたり。

一説に云ふ、青蓮院は昔時又十樂院と稱したりと 而して龜山天皇の皇子慈道法親王、伏見天皇の皇子道熙法親王等は茲に住し給ひしとぞ。





栗田青蓮院舊小御所



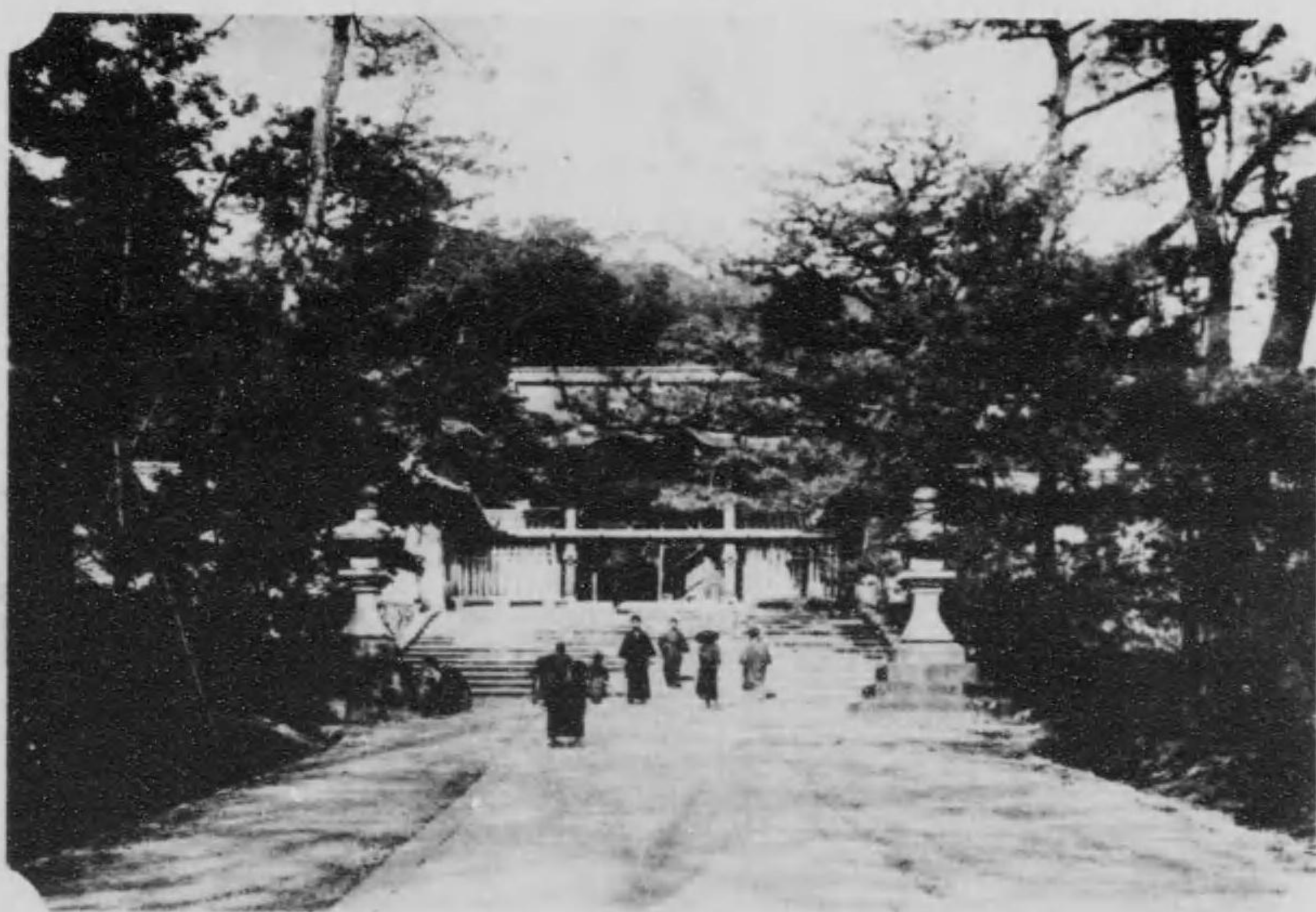
親鸞上人肖像



青蓮院庭園



西大谷本廟



東大谷本廟

上ノ三

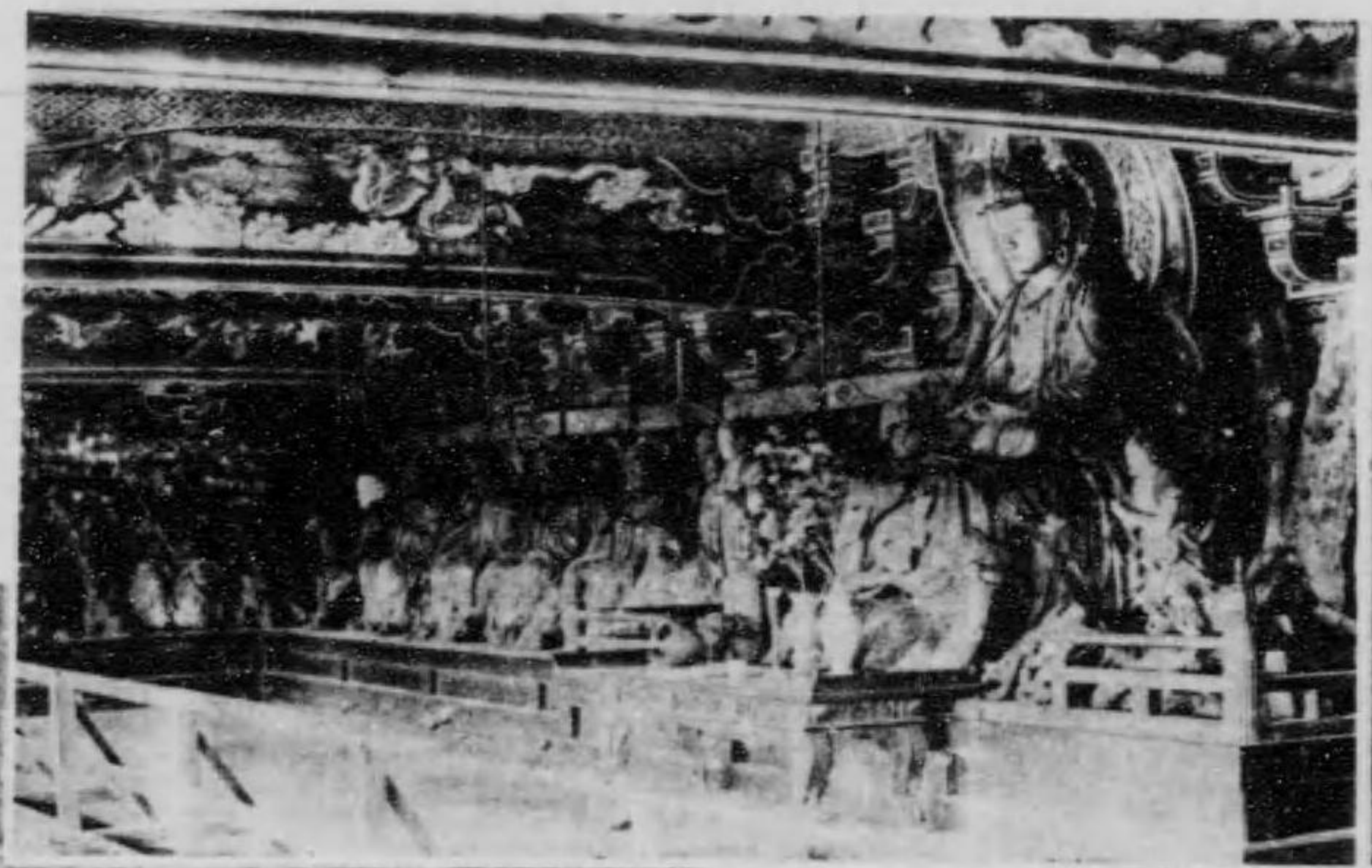
四歳にして父を喪ひ、八歳にし母亦死し 秃鈔「入出二門偈」等何れも教旨の歸趨  
 哀慕の情禁する能はず、漸く遁世の念を せらる。  
 生じ、九歳の時遂に青蓮院慈圓僧正の門 に入る。  
 に入て出家し、叡山に居る事十年、後ち 三條通り白河橋の東南、即ち智恩院の  
 南都に赴き三論、法相諸宗の學を研鑽し、 青蓮院（京都）  
 一説に云ふ、青蓮院は昔時又十樂院と  
 稱したりと 而して龜山天皇の皇子慈道  
 法親王、伏見天皇の皇子道觀法親王等は  
 茲に住し給ひしとぞ。



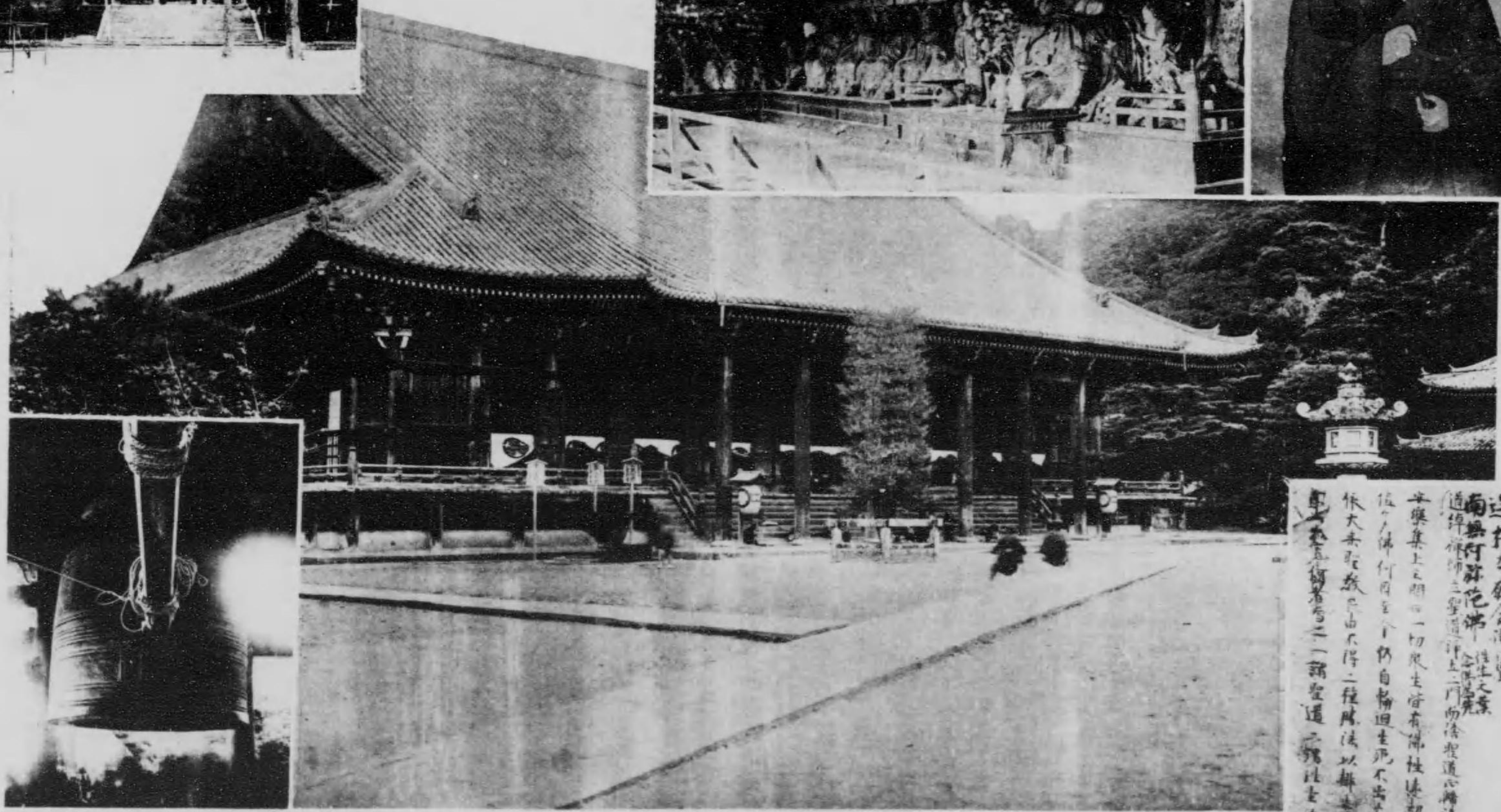
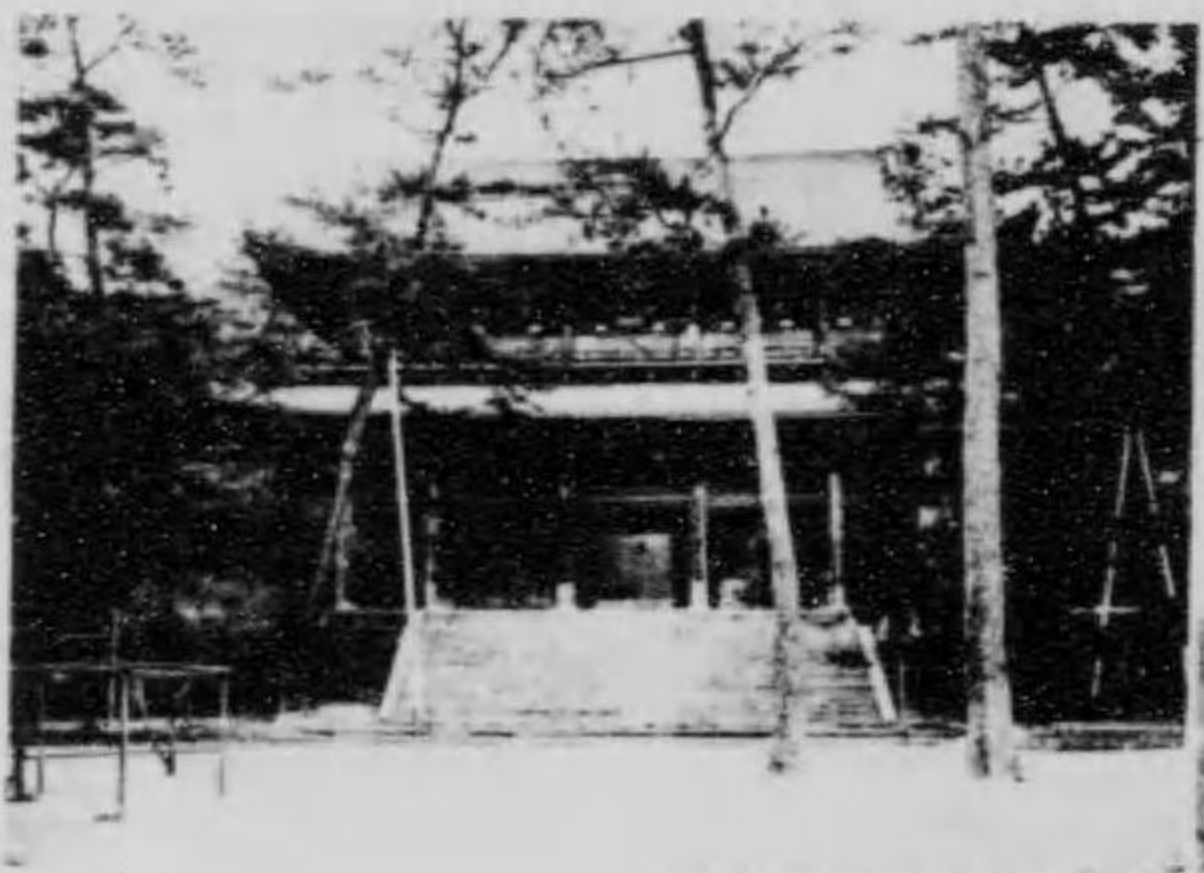
法然上人像



知恩院内陣

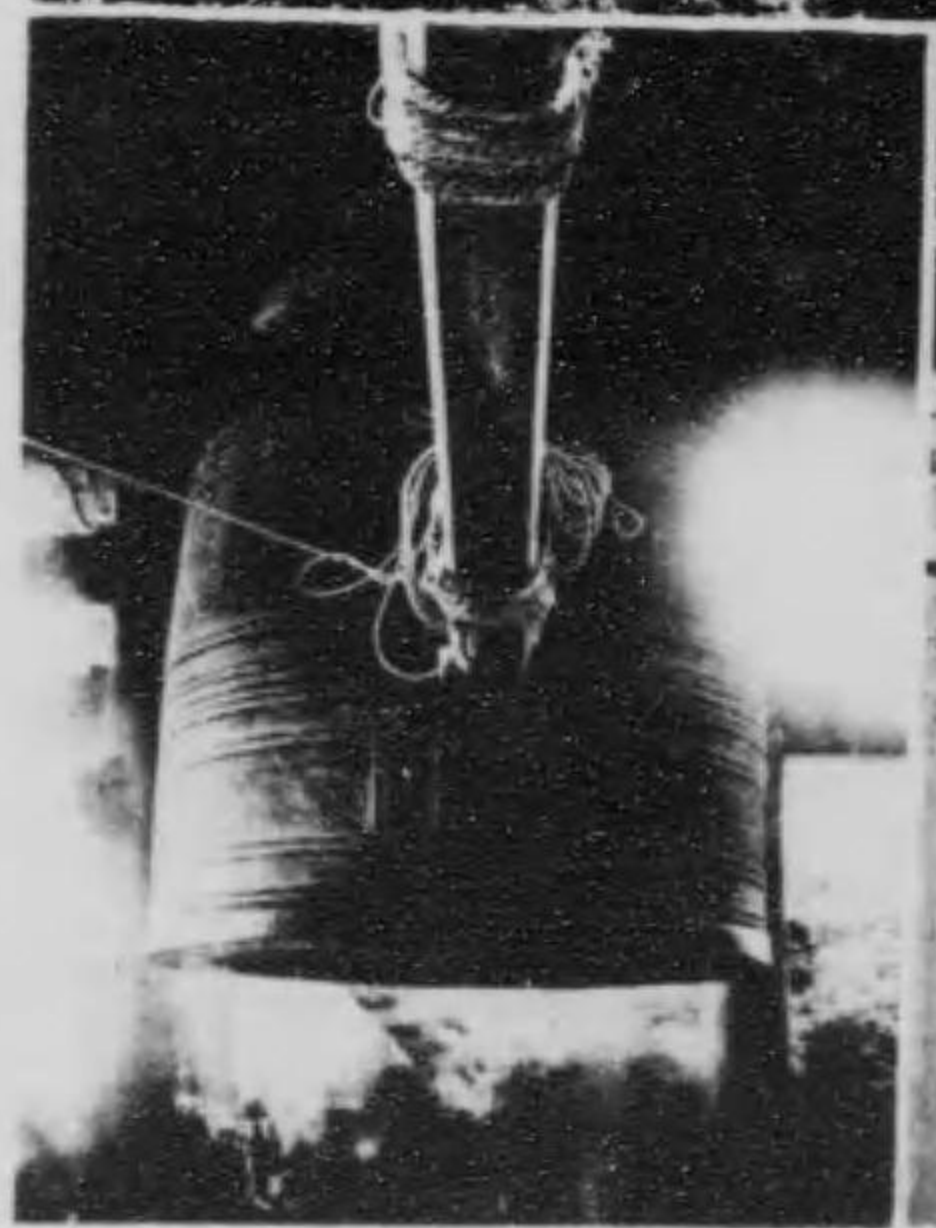


山門



知恩院本堂

釣鐘



蓮華公願念誦  
南無阿彌陀佛  
法然上人遺教  
法然上人遺教  
法然上人遺教  
法然上人遺教  
法然上人遺教  
法然上人遺教  
法然上人遺教  
法然上人遺教  
法然上人遺教

法然上人筆蹟

●知恩院(京都)

智恩院の所在は華頂山と號す、八阪神社より真葛ヶ原即ち圓山公園を經、一小門を入れば其右方は櫻門にして、幾百級

二月工を起し同十七年七月を以て完成し業成るや皇子八宮を請じて門主と爲し華頂宮と稱す、爾後世々法親王を以て門主と爲せり。

て市民の耳を澄さしむ、故に午砲なきも智恩院の鐘あれば足ると言はる。淨土宗の始祖にして智恩院の開山たる法然上人は初め法然坊源空と稱す、俗姓は淡州氏小字勢至と言へり、父は美作國



### ●知恩院 (京都)

知恩院の所在は華頂山と號す、八阪神社より真葛ヶ原即ち圓山公園を經、一小門を入れば其右方は樓門にして、幾百級の石礎を躋れる所に巍然たる殿堂あり。

淨土宗鎮西派の總本山たる智恩院は又洛東第一の巨刹にして、源空法然上人を開祖とす、高倉天皇承安四年法然上人叡山より出で、東山吉水に草庵を結び淨土宗を弘通せざるに門徒漸次加はり、中之坊東之新坊西之本坊等鼎立して宗風盛んとなれる時、上人は法難に遭ひ流誦七年に間はれ、其恩免歸洛せる時は三坊既に荒廢に屬せしかば栗田青蓮院慈鎮和尚より之を南禪院に寄進せり、南禪院は永觀年中天台慈惠大師の開基に係り、後改めて智恩院と號す、今の勢至堂即ち是れなり、時に安貞元年延曆寺の僧徒等淨土宗を妬みて來り其堂宇を破壊す、當に堂宇の破壊に止まらずして、法然上人の遺骨を發掘し之を西山光明寺に移さしむ、文曆元年に至り遺弟源智奏請して更に殿廟を建つ、四條天皇勅して本殿には大谷寺勢至堂には智恩教院、總門には華頂山の勅額を賜ひ永世勅願所と爲し給へり。

後、永享三年に及び火を發して殿宇悉く灰燼となりしが足利義教之が再興に資し幾ばくならずして舊觀に復し、應仁の亂又兵燹に罹り足利義政之を修復し、永正年中又回祿の災に罹れり、後柏原天皇其再興を爲し給ふ、享祿四年後奈良天皇改めて勅額を本殿、勢至堂、總門等に賜ふ、今存する勅額は實に後奈良天皇の宸筆なり、後、天正年中豊臣秀吉修理を加へ、徳川家康に至り更に其規模を擴大し、徳川秀忠山門及經藏寺を造營す、然るに寛永十年又火を發して山門經藏を除くの外悉く灰燼に歸せり、現時の佛殿方丈庫裡等は徳川家光の建築にして寛永十年十

二月工を起し同十七年七月を以て完成し業成るや皇子八宮を請じて門主と爲し華頂宮と稱す、爾後世々法親王を以て門主と爲せり。

### ●山門 (京都)

智恩院の山門は特別保護建造物にして其梁行六間桁行十四間餘、樓上には法冠の釋迦佛、善財童子須達長者及十六羅漢を安置す、山門の東方に立てる正觀世音は行戒和尚の記念なりと、又山門の前より西に通ずる廣衢は櫻の馬場と言ひ櫻樹多し、花時、此馬場の躰金櫻を觀んと來りて集まるもの夥しく頗る雜鬧を極む。

### ●本堂と方丈 (京都)

本堂は南向にして梁行十九間桁行二十四間、堂を上げれば中央の厨子に圓光大師自作に係る影向を安置し、室内の宏壯なる多く他に其比を見ず、本堂の東南隅に大傘を掲ぐ、是れ有名なる『智恩院の傘』なり、本堂の背後より廻廊を渡れば衆會堂方丈に至る、其椽は俗に鶯張と稱し歩む毎に妙音を發す、左甚五郎作と傳ふ。衆會堂は亦俗に千疊敷と稱し、正面に阿彌陀佛を安置す、之に隣りて大方丈、小方丈、拜之間、上中下段鶴之間、梅菊鸞柳の各間無數連続す、大小方丈の襖繪は狩野諸大家の名畫なりと林泉も亦小堀遠州の案に成り。家光手植の樹と稱する姫小松あり、本堂の前南側に茶所あり『泰平亭』の額を掲ぐ、門徒宗徒參詣の時の休憩所なり。

### ●知恩院の鐘 (京都)

東南の山上に鐘樓あり、高一丈八尺直徑九尺厚九寸五分の洪鐘を懸く、之れ所謂『智恩院の鐘』にして、寛永年間の鑄造に係り、靈巖上人筆六字名號を鐫りて鐘銘とす、一たび之を撞けば鐘聲殷々とし

て市民の耳を澄さしむ、故に午砲なきも智恩院の鐘あれば足ると言はる。

淨土宗の始祖にして智恩院の開山たる法然上人は初め法然坊源空と稱す、俗姓は漆間氏小字勢至と言へり、父は美作國久米押領使漆間時國と言ひ、母は秦氏なり、源空長承二年四月七日を以て生る、九歳の時父時國源空明なる者の爲に害せらるゝや、源空怒つて其仇敵たる空明を射て眉間に中つ、後父の遺言に従ひて出家し、叔父觀覺法師に就き研鑽業を修む次で叡山に登り源光和尚に隨從し、十五歳に迫んで功德院の皇圓に就て薙髮し、且其教を享け致々として暱むる所あり、台教を學ぶこと三年此間又密乘及大藏律を黒谷の若空和尚に享け、傍ら三藏の經卷を翻譯せり、廿四歳にして大藏の經卷を始め他宗の疏章に至るまで悉く之を繕閱し盡して大に自得する所あり、爾來研鑽數歲、承安四年東山吉水に庵を結び圓頓菩薩の大戒を說法し以て嶄然として新たに淨土宗の一派を創興せり、茲に於てか四方の人心靡然として淨土宗に歸し、長くも高倉天皇は非常に崇敬し給ひ、特に詔して源空を宮廷に召させられ、菩薩戒を受けさせ給ふ、後白河後鳥羽土御門諸天皇の信仰亦淺からざりき、時の相國藤原兼實の如きは崇信最も厚く、源空を館第に請じて親しく淨土の法を問ひたるより源空は『選擇本願念佛集』を著して以て之に答へり、傳へて一宗の基礎と爲す。

源空法難に坐して讖岐に誦居するや具さに辛酸を嘗めたるも元氣衰へず諄々として教法宣傳に盡瘁せり、建暦元年赦されて京に歸り翌二年正月廿五日遷化す享年八十元祿十年朝廷圓光大師の諡號を賜ひ、其後東漸、慧成、引覽、慈教大師等の諡號を賜はる育像に係り筆蹟は盧山寺所藏也。



●南禪寺 (京都)

岡崎の東、日岡峠の北即ち上京區南禪寺町に在る南禪寺は境太だ幽邃にして伽藍寂寥、樹語泉聲、人寰を隔つ。

其總門は遠く岡崎廣道橋南より東に入る所松並木の中にありて遙かに之を望む總門より三町餘にして中門あり、中門の隣に勅使門あり明正天皇より「日華門」を賜はりしものと傳ふ、山門は中門の北東に位し天下就門と號し樓を五鳳樓と稱す寛永四年藤堂高虎の再建に係り、樓上多くの佛像を藏し四壁天井の畫は狩野士佐兩畫伯の合作と傳へらる、石川五右衛門が住みしと歌舞伎に傳ふる門は是なり。

山門の東に佛殿址あり、明治二十八年一月焼失後近年漸く建築成る、大方丈は其東にありて特別保護建造物たり、慶長十六年徳川氏皇居造營に際し、後陽成天皇より下賜せられたるものにして、即ち豊臣氏が天正年間造營せし宮殿の一部なり、鶴之間、御晝之間、麝香之間、西之間、柳の間等あり、襖の名畫は狩野諸家の描く所なり前庭は小堀遠州の作成に係り虎の子渡しと稱し布置自ら雅致に富む、小方丈は大方丈に續き資福堂と稱す元伏見桃山の別殿なりしが徳川氏寄進せり。

佛殿址の南に在る南禪院は龜山上皇「上宮の舊蹟」にして其庭續きに龜山天皇御陵あり、後嵯峨院中宮陵は同山中溪間に在り古來名寶塔と稱す、境内には鐘樓金地院、天授院、眞乘院、聽松院等の支院點在し、金地院の客殿は桃山城の遺材を以て造れるものなりと、院内東照宮の廟門あり、南禪寺の地は初め龜山上皇の宸居にして正應の初め宮中怪異多かりし時東福寺の無關和尚禱りて之を除きたる功に依り、宮殿の一部を割き之に賜ひて佛寺を建て瑞龍山太平興國南禪寺と號せしめたり、開祖を大明國師とし臨濟宗の

大本山にして多くの支院末寺を有す。

●細川幽齋夫妻墓 (京都)

南禪寺天授院内に細川幽齋及其夫人の墓あり、幽齋は三淵伊賀守晴員の第二子にして、天文三年四月二十二日を以て晴員の岡崎別墅に生る。

天文八年六月將軍義晴の命に依り細川播磨守元常の養嗣子となる同十五年十二月將軍義藤(後義輝)の一字を賜ひ細川與一郎藤孝と稱せり、十八年三月神樂岡の役父播磨守に従つて戦功あり、二十二年四月從五位に叙し兵部大輔に任せられ、二十三年六月相續す、先是父祖以來將軍家の遺難に服事し領地たる阿波、讃岐、播磨、備前、備後、和泉、攝津の國は多く敵に押領せられ存する所は山城乙訓郡勝龍寺近傍三千貫の地に過ぎざりき、永祿八年五月三好松永の徒將軍義輝を弑す、變を聞き藤孝勝龍寺より馳せて難に赴きしも力及ばず、是に於てか徐ろに再舉を圖るに若かずと爲し、密かに幽閉中義輝の實弟覺慶を南都一乘院より援ひ出し以て江州に走り淺井氏に倚る、九年八月松永等再び義秋(覺慶)を圖らんとす、藤孝之を覺り、義秋を奉じて若狹武田義統に走り之を寄託せしも、義統國小にして力足らざるの故を以て之を辭せり、更に越前に赴き朝倉義景に倚る、十年義秋は義景の居城安養禪寺に於て名を義昭と改め將軍と號す、十一年織田信長の聲望漸く盛んなるを見るや、藤孝は明智光秀を介して將軍入洛の事を信長に謀り其領承を得たり、信長先づ將軍を岐阜に迎へ近江の諸城を陥れ藤孝と共に將軍を奉じて京師に入れり。

爾來藤孝は將軍を輔けて盡す所少ならず、天正元年將軍義昭寵臣上野清信の言に動かされ武田信玄等に謀り信長を討たんとして、藤孝之を諫めて却つて怒に觸

れ勝龍寺城中に謹慎せり、三月將軍信長征討の命を下す既にして信長大軍を率ゐて京師に入り和を請ふ、將軍信長の威に懼れて之を容る信長使を勝龍寺に遣し藤孝を招く、藤孝遂に之に屬す、後信長本能寺に死するや翌三日薙髮して幽齋玄旨と稱し國政を其子忠興に譲る、慶長十五年八月二十日七十八歳を以て京都東屋町の邸に逝去す。

●山名宗全墓 (京都)

山名宗全墓は南禪寺中天授院に在り、宗全始めの名は持豊薙髮後宗全と稱す世に赤入道と言ふ其顔緒きを以てなり、應永十二年七月を以て生る、永享七年封を繼ぎて但馬、因幡、伯耆三州の守護となり次で彈正少弼に任じ左衛門督に補す、嘉吉元年赤松滿祐を播磨白旗城に圍みて之を抜き滿祐を誅す、功に依りて播磨を賜ひ赤松氏の封悉く山名氏に屬し勢威日に盛んなり後薙髮して宗全と稱せり、文明五年三月年七十にして病で卒す。

●梁川星巖夫妻墓 (京都)

近世の大詩人と稱されたる梁川星巖及其夫人香蘭の墓は亦南禪寺中天授院内に在り、星巖名は孟緯字は公圖通稱新太郎美濃安八郡曾根崎の人、寛政元年を以て生る、彼れは唐詩を學びて其淵源に溯り六朝織麗の習氣に陥らず、歐蘇の病に失せず、王李の弊に墮ちず徐袁の俗に流れず、其詩眼詩才、其詩品詩格、一個獨自の本領より出で、一面には模擬膚淺の弊を破り、又一面には淫靡鄙俚の風を洗ひ以て詩道中興の祖となる、所謂「一闢千古詩道否」の功ある者なり、而かも勤士の志篤く佐久間象山藤田東湖等當年の志士と交り、克く國事に盡瘁し又曠壇の明星たり、安政五年九月四日七十を以て逝く、夫人香蘭亦詩に長じ内助の功を擧ぐ。



山名宗全墓



山名宗全墓



梁川星巖

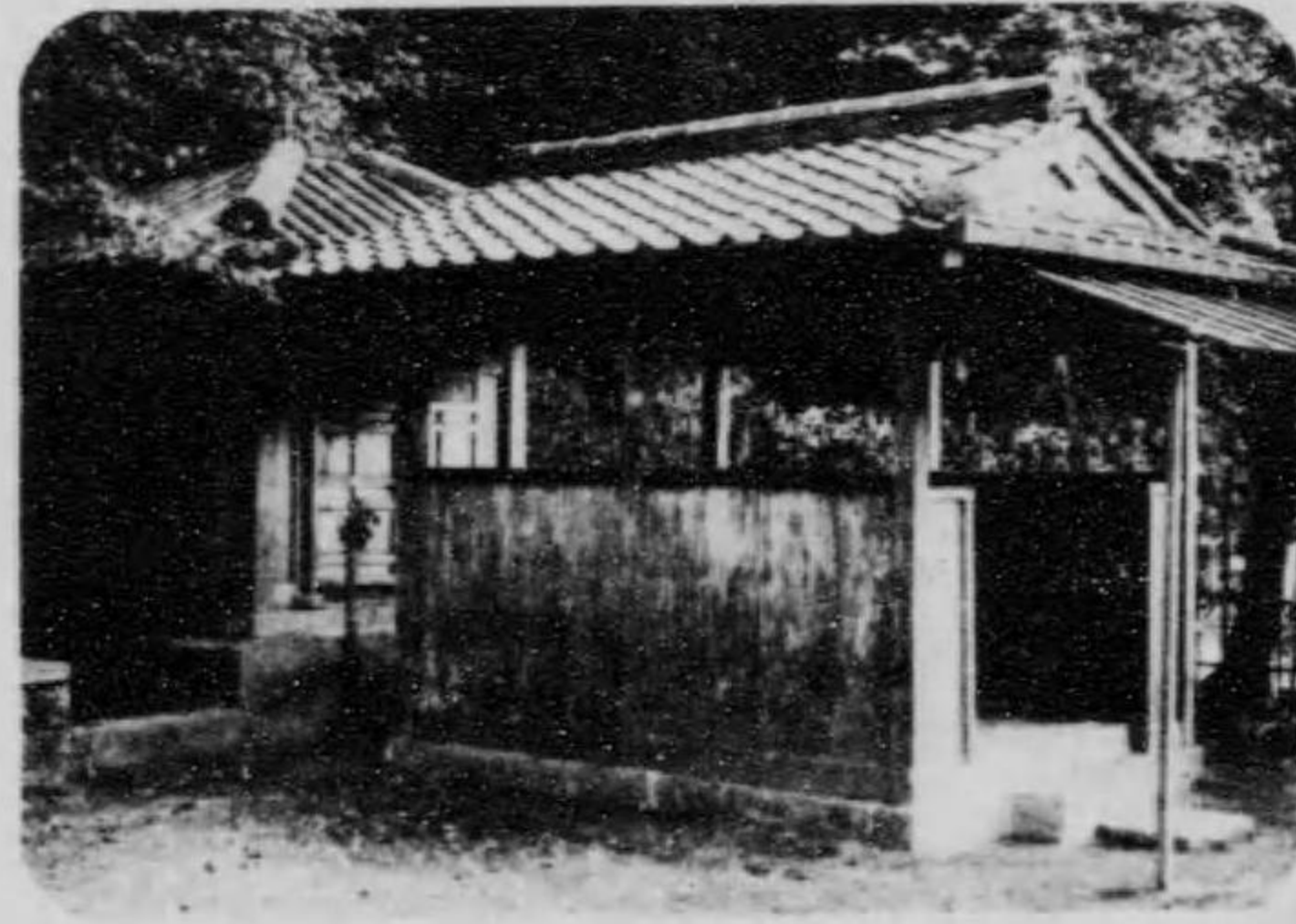


南禪寺山門



星川星巖夫妻墓

細川幽齋夫妻墓



南禪寺大方便丈



南禪寺五鳳樓

居にして正應の初め宮中怪異多かりし時  
 東福寺の無開和尚禱りて之を除きたる功  
 に依り、宮殿の一部を割き之に賜ひて佛  
 寺を建て瑞龍山太平興國南禪々寺と號せ  
 しめたり、開祖を大明國師とし臨濟宗の  
 爾來藤孝は將軍を輔けて盡す所少なか  
 らず、天正元年將軍義昭寵臣上野清信の  
 言に動かされ武田信玄等に謀り信長を討  
 たんとす、藤孝之を諫めて却つて怒に觸  
 詩道否』の功ある者なり、而かも勤上の  
 志篤く佐久間象山藤田東湖等當年の志士  
 と交り、克く國事に盡瘁し又騷壇の明星  
 たり、安政五年九月四日七十を以て逝く、  
 夫人香蘭亦詩に長じ内助の功を擧ぐ。



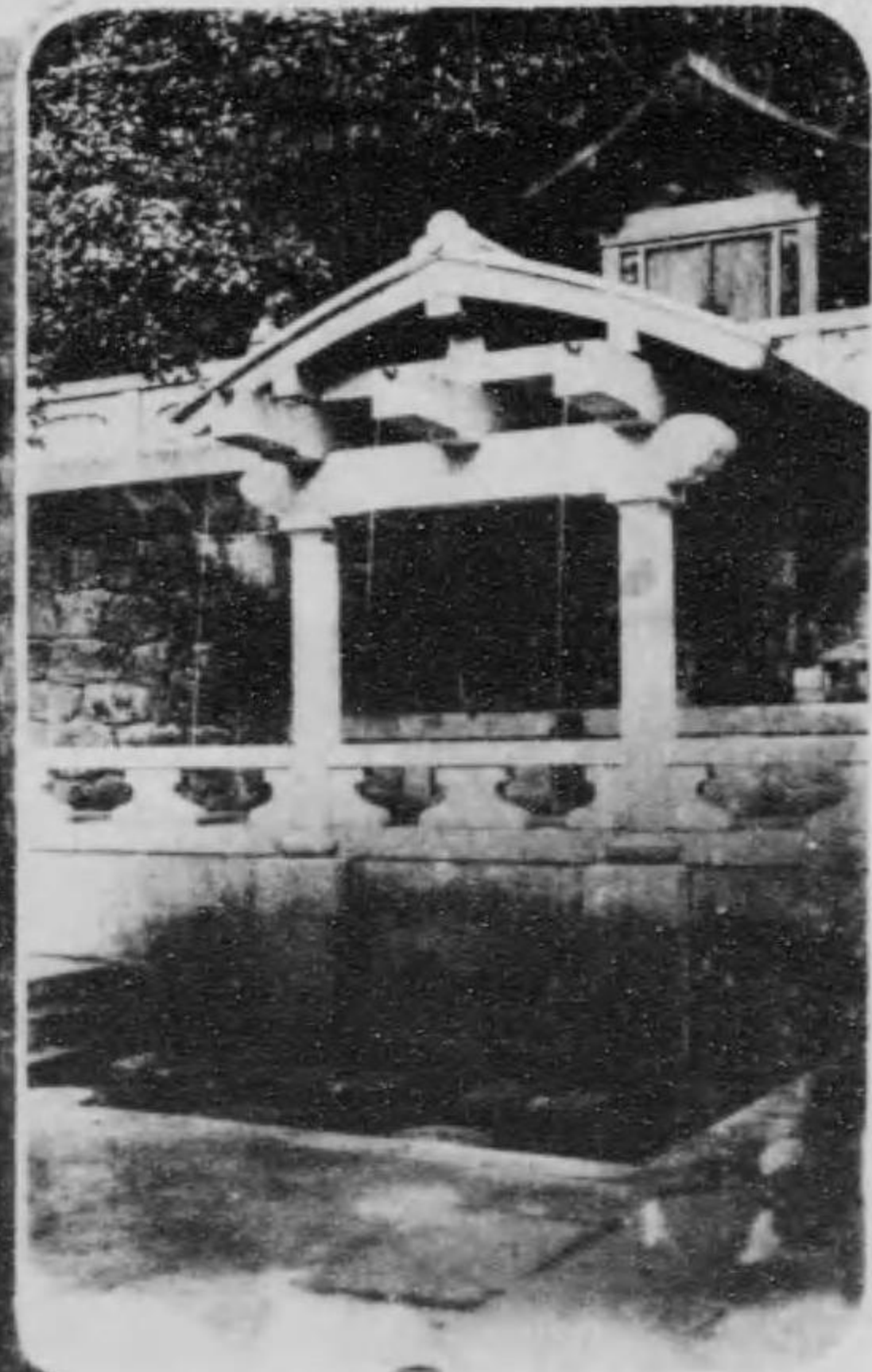
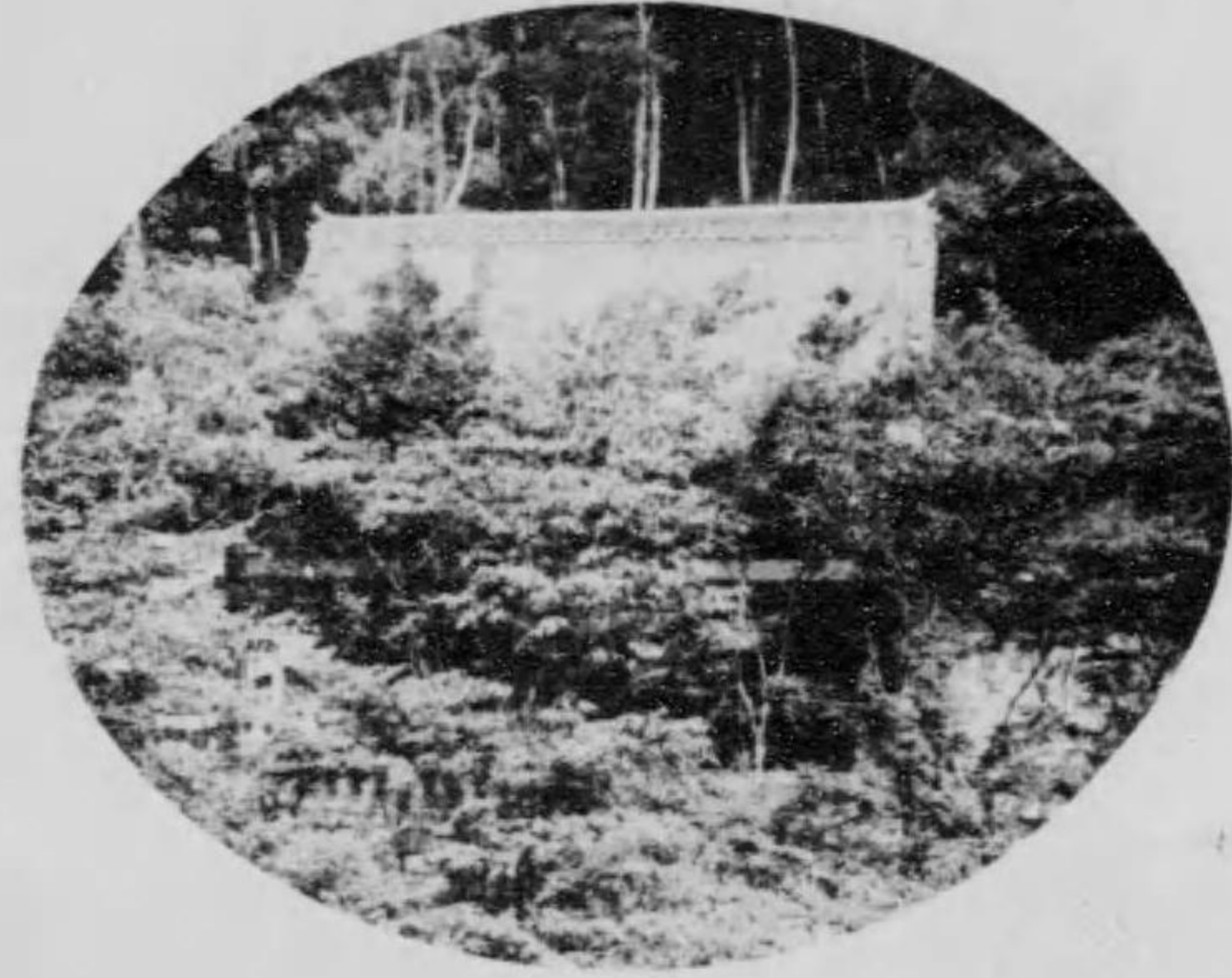
田村堂



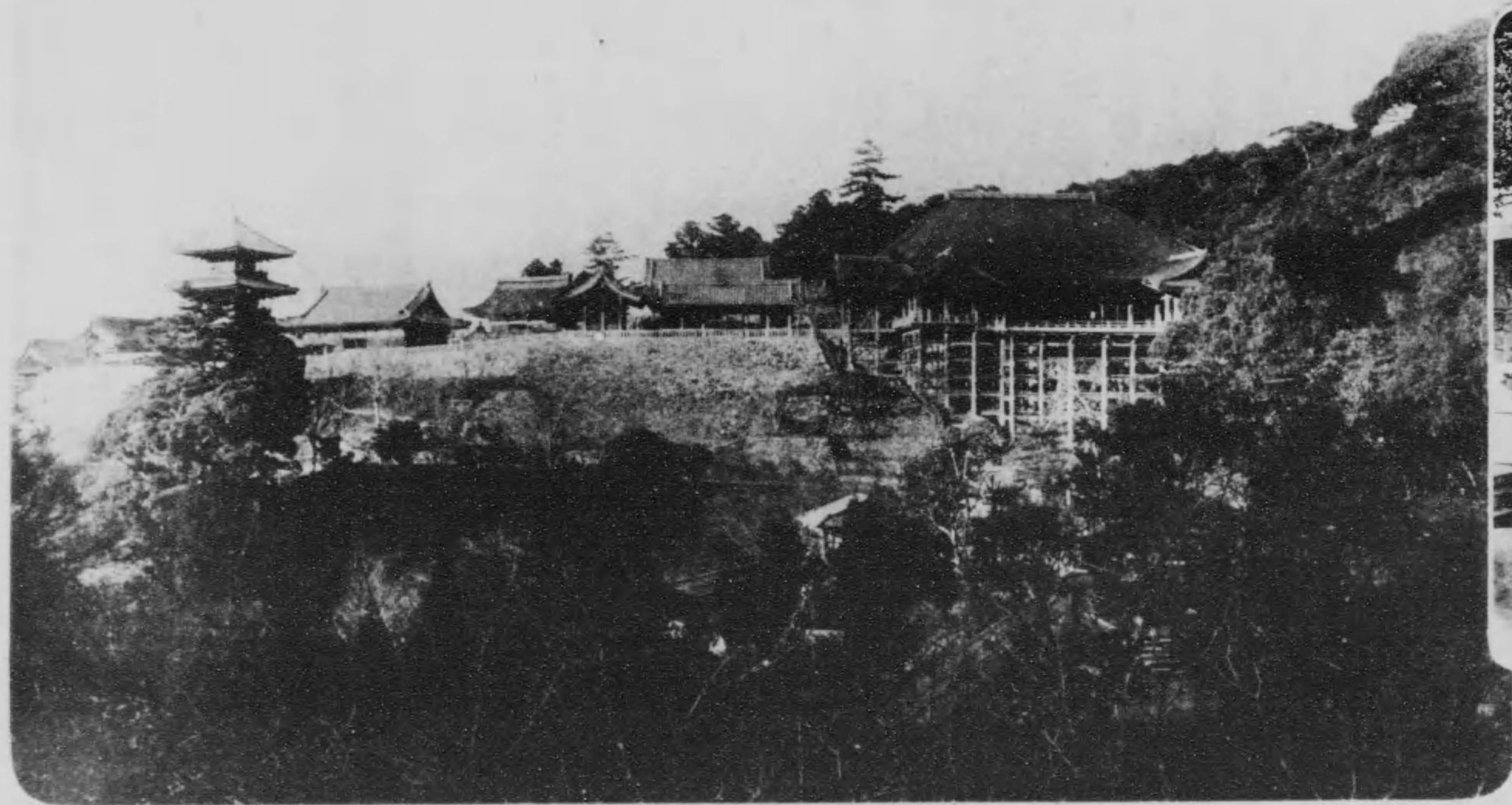
清閑寺



阿彌陀堂



清水の瀧



清水寺全景

●清水寺（京都）

香羽山清水寺と號し、清水坂の東端に在り。法相眞宗兼學の名刹として洛東第一の靈場なり、延暦十二年長岡より平安城に遷都ありたる際、坂上田村麿に殿舎

膾炙せるもの、本堂に接續して絶壁懸崖に架して構作せられたり。臺上遠く眼を放てば、天空遙かに河内の金剛山を望み、淡路島また模糊を縫ふて詩姿を現するを見るべし、若し夫れ一躍雲を招かんには羽化登仙も敢て難からざらんとす。

次で侍從兵部卿に任じ從三位に叙せらる。其後弘仁元年藤原仲成の亂に際し殊功を立つ、二年五月病を以て遂に栗田の別業に薨す享年五十四天皇深く悼惜し給ひ爲めに朝を廢する一日、詔して從二位を贈られ、山城國栗栖村墓に域を賜ひ、厚く



●清水寺 (京都)

音羽山清水寺と號し、清水坂の東端に在り。法相真宗兼學の名刹として洛東第一の靈場なり、延暦十二年長岡より平安城に遷都ありたる際、坂上田村麿に殿舎を賜ひ、勅して觀音堂を造營せしめらる

後十四年を経て平城天皇の御宇、大同元年田村麿に紫宸殿を賜ひて清水寺に移し用ひて伽藍となさしめらる。今の清水堂は即ち紫宸殿の模倣なり。桁行九間、梁間七間、屋根四注す。本堂は懸崖に架して南面す。本尊は十一面十臂、千手千眼の觀世音にして、脇士は勝軍地藏及び勝

敵毘沙門天(延鎮作)なり。本堂の外、重要なる堂宇、名勝を舉ぐれば、田村堂、朝倉堂、轡橋、鼻の水、釋迦堂、阿彌陀堂、奥の院、音羽瀧、法華三昧堂、三重塔、隨求院、地主權現、爪形觀音、成就院等あり。因に曰ふ、現今の堂宇は寛永十年、徳川幕府の造營に係り、其樓門は文明年中の遺構なり。明治三十年特別保護建造物に編入せらる。

右府 道長  
清水寺深東嶺頭 暫辭塵境草堂幽  
雲端鐘響逐嵐去 澗口泉聲穿石流  
禮佛獨憐霜葉老 伴僧同入暮山秋  
輪廻世々纏煩惱 今仰大悲豈有愁  
宇都宮遷庵  
天畔高登閣 倚欄回白頭 蒼々鳩嶺樹  
脈々鴨川流 官舎兼民舍 城樓又寺樓  
望中無遠近 富庶帝王州

慈鎮 和尚  
くりかへし亂れて人を渡すかな  
清水寺の瀧の白糸 許 六  
清水の上から出たり春の月

●舞臺 (京都)

所謂これ清水の舞臺として通く人口に

膾炙せるもの、本堂に接續して絶壁懸崖に架して構作せられたり。臺上遠く眼を放てば、天空遙かに河内の金剛山を望み、淡路島また模糊を縫ふて詩姿を現するを見るべし、若し夫れ一躍雲を招かんには羽化登仙も敢て難からざらんとす。

實田 雨香  
憑空傑構架崖崑 群嶺搖光眼底開  
晴旭烘衣花氣暖 煦々春日上层臺

●阿彌陀堂 (京都)

京都清水寺境内の一堂宇にして、一名瀧山寺と稱す。往時安元年間、源空上人(法然上人)淨土の二宗を創始したる際、此地に於て専ら念佛三昧を開闢鼓吹したる歴史を有し、佛縁淺からざる靈場と謂ふべし。

●田村堂 (京都)

是れ古への北觀音寺にして、堂内には坂上田村麿を始め、行叡居士、延鎮法師聖徳太子、鈴鹿權現寺の像を安置す。本堂は素と田村麿の邸宅を移したるものなり。傳へ曰ふ、往時木津川の上流大和國に在りしが、僧延鎮なるもの、異人行叡居士に値遇し、居士に代つて其草庵に住すること五年に及ぶ、後ち延暦二年田村麿が同地へ出遷せる際、延鎮圖らず田村麿に會して相語るところあり、田村麿大に信心渴仰の念を起し、翌三年佛閣を建立せり。延暦三年桓武天皇都を長岡に遷し給ふ時、靈夢に依りて田村麿の邸宅を移し、本尊を安置して北觀音と稱したるもの、即ち現今の田村堂なりとす。

田村麿は父を刈田麿と云ふ、其先阿智使主より出づ、幼より武藝を好み長じて弓馬軍術に通じ延暦中從五位に敘し累進して近衛少將となり越後守を兼ね、桓武天皇の朝、征夷大將軍を拜し勅を蒙りて蝦夷を討ち平げ功に依て近衛大將に陞り

次で侍從兵部卿に任じ從三位に叙せらる其後弘仁元年藤原仲成の亂に際し殊功を立つ、二年五月病を以て遂に粟田の別業に薨す享年五十四天皇深く悼惜し給ひ爲めに朝を廢する一日、詔して從二位を贈られ、山城國栗栖村墓に城を賜ひ、厚く之を葬る、東山々上に存する將軍塚即ち是なり。

●清閑寺 (京都)

清水寺の東南、久々目路の北側に一寺院あり、之を清閑寺と云ふ、延暦年間、眞言宗の僧、銘繼法師の草創する所なり其後年を経て荒廢せしが、一條天皇の御宇に於て佐伯公行之れを再興す。本尊は菅原道真作の千手觀音なり。當寺は始め天台宗なりしも、今は眞言宗智積院に屬せり。其地甚だ幽邃にして俗塵自から去るの思ひあり。寺内に六條、高倉兩天皇の御陵あり。高倉院の寵姫小督當寺に幽棲したりと傳へらる。其墓亦高倉天皇御陵の傍に存す。

世に當寺を稱して俗に「歌の中山清閑寺」と呼ぶ。是れ清閑寺の附近は、即ち清水寺に通ずる山徑の稱にて其の所在の頗る密接すると共に、又一條の傳説に基くものなり。往時清閑寺に眞燕なる僧あり或時門前にて垂髻の女兒に逢ひ忽ち戀着の心起り女兒に接近して親しく語らんと欲するも其便を得ざるなり、辛ふじて清水寺への道は何方なるやと問ふ。女兒は乃ち。

見るにだに迷ふ心のはかなくて  
誠の道をいかで知るべき。  
との一首の歌を詠み捨て、其姿を隠したりと云ふ。是れ蓋し此地を歌の中山清閑寺と稱するに至れる由縁なるべし。

奥田 香雨  
夕陽樓閣彩雲深 香火綠牽煩惱心  
姉後妹前春澹蕩 迷花人亦賽觀音



### ●高臺寺 (京都)

京都下河原鷺尾町に在り。慶長の初め豊臣秀吉夫人北政所、亡母の爲め一字を建立し康徳寺と號けたるが、秀吉の薨後夫人は薨髪して高臺院と稱し、秀吉の冥福を祈らるが爲め、一大伽藍を建立し、曩の康徳寺をも之に併合して、高臺寺と稱したるもの、即ち當寺なり。山號を鷺峰山又は岩清水不動山と云ふ。建仁寺派に屬す。開基は建仁寺の僧弓鏡禪師にして中興の祖は三江和尚なり、寺域壹萬七千四百坪を有す。殿堂頗る壯麗なりしも屢々回祿の災に罹りて多くは燒毀し、今は僅かに其一部なる豊公廟開山堂及び支院六字を存するのみ。然かも尙當時の偉を偲ぶに足るものなり。就中豊公廟及び北政所の廟は金銀を鑲め、燦然として人目を眩せんとす、且つ其の楹間に掲ぐる三十六歌仙の書畫は、後陽成天皇の皇弟智仁親王と土佐光信との筆に成る稀世の貴什と稱せらる。

### ●高臺寺本堂 (京都)

裝飾壯麗を極め、其の天井の如きは高臺院の車蓋を用ゐて頗る絢爛の趣を凝したり、又方丈の唐門は豊太閤の船樓を以て造營せるものにて、嘗て朝鮮征伐凱旋の祝宴を此に設けたる殿舎なりしを茲に移したりと傳へらる。小方丈の上段は光明皇后の白菊の屏風を寫し、松の間には四季の松、右左の間には草花を描く、總て狩野永徳の筆に係る。翠簾下の屏風は古法眼元信の筆にて、住吉行幸の圖は土佐光信の描く所なり。又方丈より靈廟に至る間に有名なる臥龍の廊下なるものあり。

### ●高臺院靈廟 (京都)

豊太閤夫妻の影像を安置す。豊公の像

は寶冠持笏せる坐容にして、丈二尺五寸許、豊國大明神の贈號は後陽成院の宸翰なりと。夫人高臺院の像は法體に花の帽子を被り、薄紫の衣に金紋蒔黄地の袈裟を着け、右膝を立て、念珠を持せり。又山上に政所公塔あり。法號高臺院殿從一位湖月禪定尼寛永元年九月六日薨去と記せり。

### ●傘の亭 (京都)

高臺寺庭園中の一名勝にして、園内の獨秀峰に在り。其構造は時雨亭とともに千利休が意匠考案に成るものなりと云ふ。該庭園は小堀遠州の設計に係り、菊淵の水を引き、一樹一石の按排配置、巧妙を極む。

豊臣秀吉夫人北政所は、幼名を「ね、」と云ひ、後ち寧子と改む、又吉子とも稱す、剃髮して高臺院湖月尼と稱せり。尾張の人、木下肥後守定利の女にして、幼時淺野彌兵衛に養はる。資性穎雋貞淑にして夙に賢婦人を以て稱せらる。秀吉の未だ名を成さざるの時に方り、經營辛酸能く内助の功を擧げ遂に秀吉をして異數の榮顯を遂げしめ、其身また宣下を蒙りて北の政所と呼ばるゝに至れり。秀吉との交情亦常に濃やかにして終始渝ることなく、彼の征韓の役に際し、秀吉は肥前の名護屋に出陣中、屢々陣中より親書を高臺院の許に贈りて慰むる所ありたり。高臺院又深く將士の尊敬を受く、後ち准三后從一位に叙せらる。秀吉の薨後薨髪して京都三本木に位し、秀吉の冥福を祈り、庶子秀頼をも厚く慈みたり。徳川家康、高臺院を優遇して爲めに養老料壹萬六千石を與へ、尙高臺寺建立の際も、其敷地を相し、領地をも寄附したりき。斯くて高臺院は靜かに當寺に晩年を送り、寛永元年九月六日八十三歳を以て薨じ、高臺寺に葬る。

因に云ふ、高臺寺の寺寶として同寺に藏せる秀吉及政所の消息の消息文書等は、曩年國寶に編入せられたり。又、高臺寺境内には木下長嘯子の墓あり、天哉翁長嘯塔と云ふ。長嘯子は豊臣若狭守勝俊と云ふ、世を遁れて長嘯子と號し靈山に隱棲し、和歌を咏じ後ち大原野に移り、慶安二年六月卒す。俳人關吏の墓また此境内に在り。

高臺寺境内には多く萩を植へ、盛花期には枝々錦繡を結び白珠紅玉秋風に搖られて美觀言ふべからず。

西行法師京城野の萩を慈鎮和尚に奉りし其萩今に残り侍りしを草庵にうつしうへ侍し花の頃其國の人きたり侍りしに。

露けさややども宮城野萩の花 宗祇  
小萩散れますはの小貝小盃 芭蕉

江村北海

豊公遺跡洛城東 曾擬長楊五柞宮  
環珮凄凉亡國後 樓臺無恙淨園中  
秋香滿庭離花紫 霜色入林廟樹紅  
落日松聲禪寂地 使人猶自想雄風  
因に曰ふ。古へ高臺寺の地に雲居寺岩栖院と稱する道場ありしと云ふ。雲居寺は八坂東院とも稱す。岩栖院は大治二年の創建に係り中興の祖は弓鏡和尚なり。古の雲居は菅野真道の創建に係り中世に及びて斷絶に歸したり。

惠 慶

ひさかたは手にとるばかりなりにけり  
雲の居るてふ寺に宿りて。

高臺寺十境なるものあり即ち左の如し  
白山嶺、菊潭水、岩栖洞、蟠龍池、  
湖月堂、安閑窟、相哆墳、雙林溪、  
祇園林、長樂鐘、

因に曰ふ。世に謂ふ高臺寺詩繪と稱するものは、當寺の殿堂内部の裝飾に用ゐられたる一種獨特の赤黒的の塗漆、所謂金髹塗に起因するものなり。



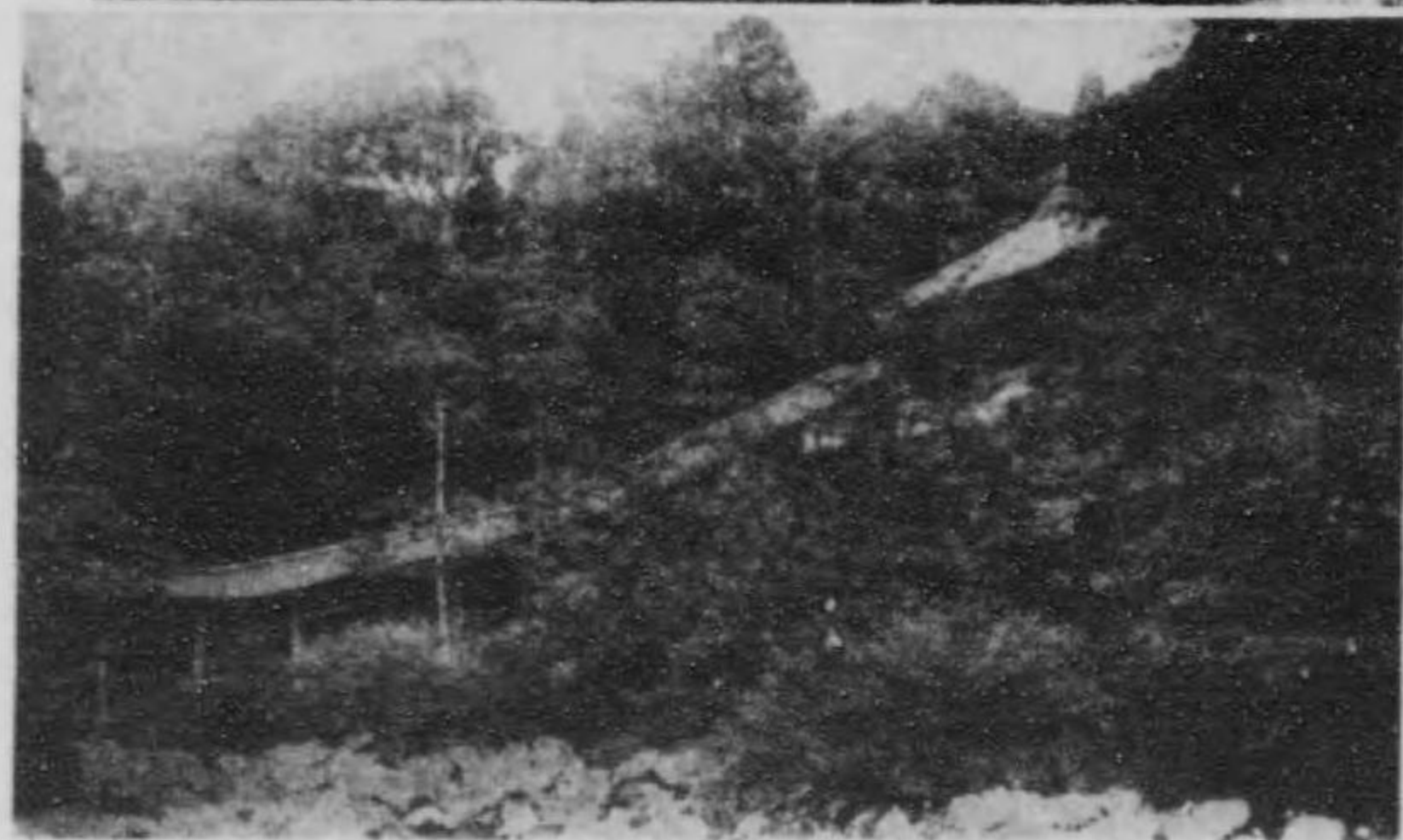
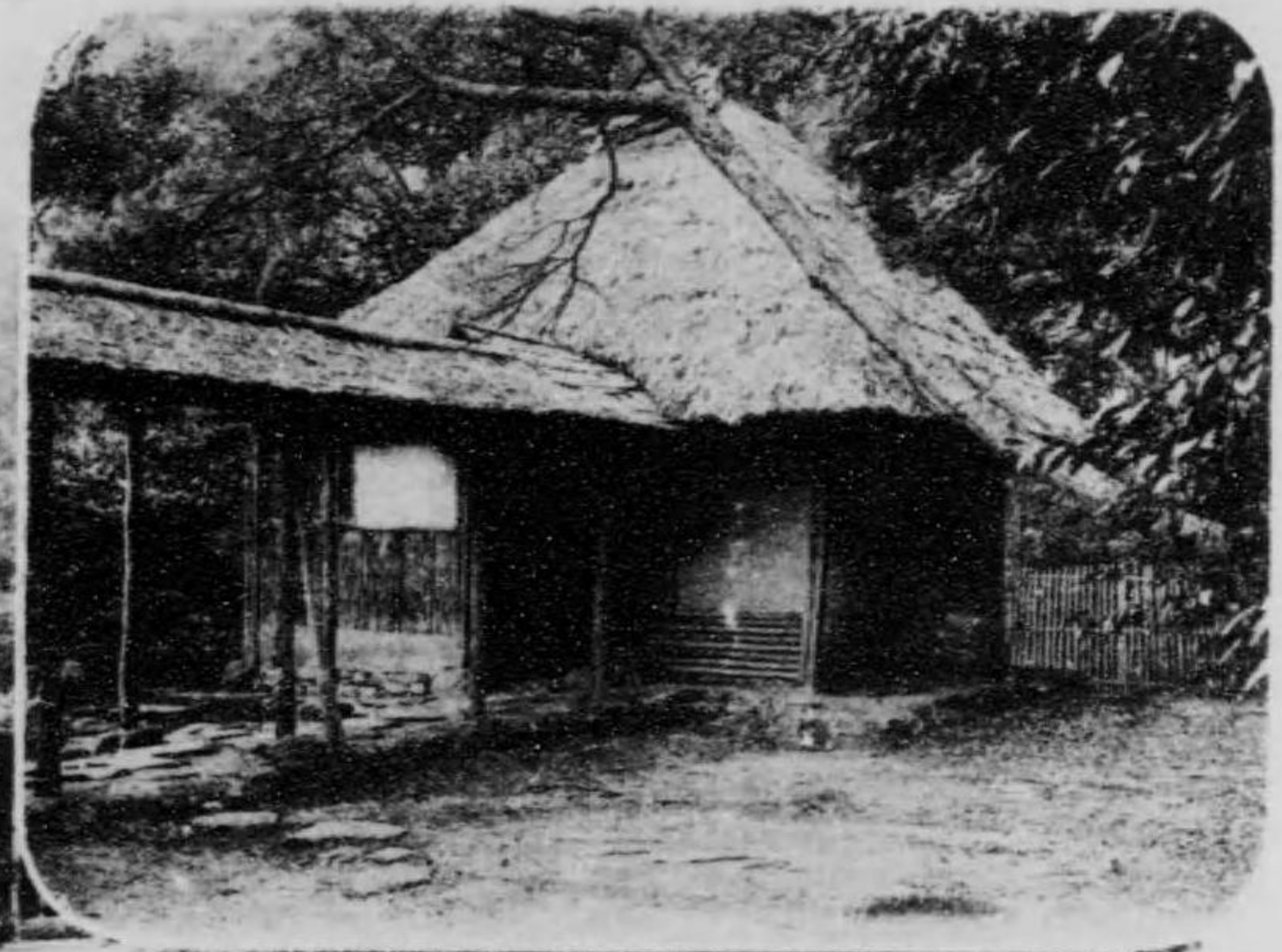
高臺寺



高臺院夫人廟



傘の亭



龍隊の邸下



高臺寺開山堂



高臺寺本堂

●高臺院靈廟（京都）

豊太閤夫妻の影像を安置す。豊公の像

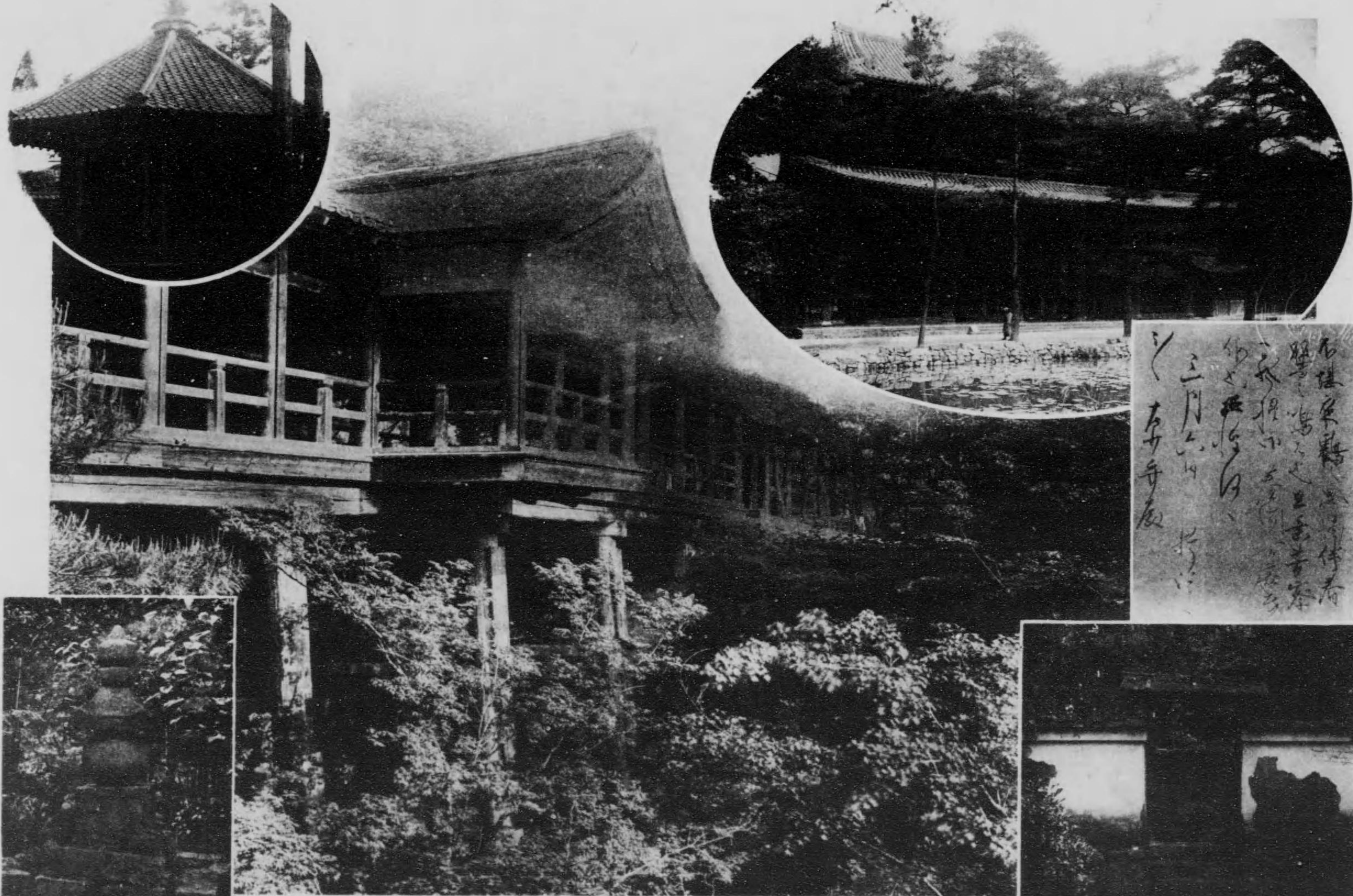
敷地を相し、領地をも寄附したりき。斯くて高臺院は静かに當寺に晩年を送り、寛永元年九月六日八十三歳を以て薨じ、高臺寺に葬る。

因に曰ふ。世に謂ふ高臺寺詩繪と稱するものは、當寺の殿堂内部の裝飾に用ゐられたる一種獨特の赤黒的の塗漆、所謂金髹塗に起因するものなり。



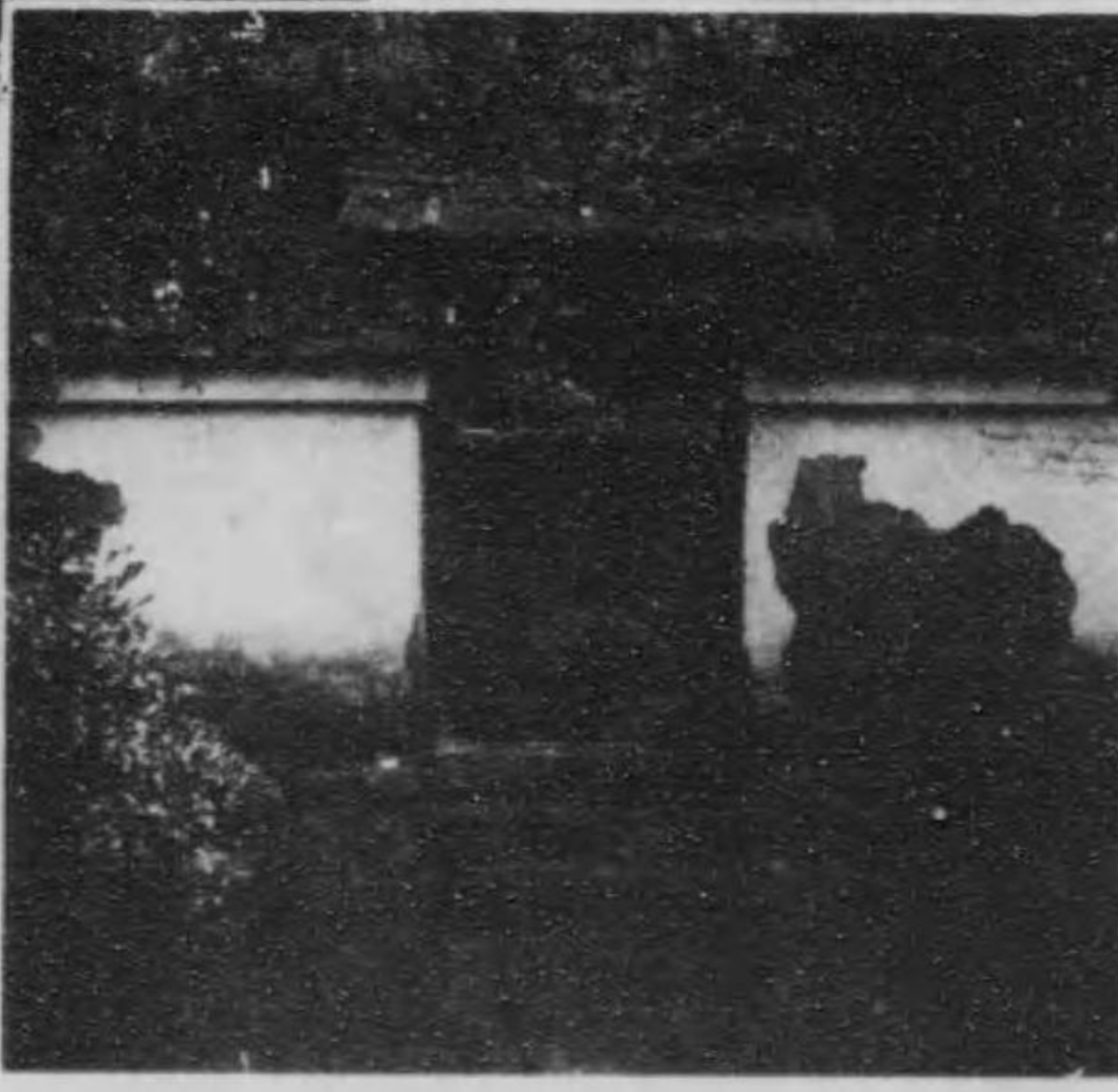
萬壽寺愛染堂

東福寺山門



藤原俊成筆蹟  
 在法華寺...  
 三月六日  
 右寺守殿

藤原俊成筆蹟



藤原俊成墓

東福寺通天橋



光殿司墓

●東福寺通天橋 (京都)

泉涌寺の西南に當り、伏見街道九條の末より南方數町に亘り東山を負ひ凡そ六萬餘坪の地を占むる東福寺は建長七年九

羅漢五十幅は唐畫釋迦文殊普賢三大幅と共に傑作中の傑作と稱せらる、莊園古文書七通は明治三十一年を以て國寶に編入せられたり。

●萬壽寺愛染殿 (京都)

東福寺に屬する萬壽寺は其北門の傍らに在り、此寺最舊の建造物は愛染殿にして、佛殿に惠心僧都作阿彌陀座像を安置し、仁王門は足利義滿の建立に係る。





殿司墓

●東福寺通天橋 (京都)

泉涌寺の西南に當り、伏見街道九條の末より南方數町に亘り東山を負ひ凡そ六萬餘坪の地を占むる東福寺は建長七年九條道長の創建に係り聖一國師を開基とする名刹にして、明治十四年回祿の災に罹り佛殿方堂萬丈等大部分の建造物を焼失せりと雖も爾後修築せる殿堂は巍々として樹間に聳へ幾多の支院と共に幽邃の境に存在す。

構造の精緻を以て聞ゆる山門「妙雲閣」を入れ思園池あり、偃月橋あり、屹然たる十三層は南方山上に在りて思園池と相對す、成就宮古鐘樓の東北深流に長廊下を架せるもの之れ即ち通天橋にして、下流の橋を臥雲橋と稱し、溪を洗玉淵と呼ぶ、紅葉の時に至れば一帯の紅雲碧流に映じ、觀楓者をして歸るを忘れしむ、錦繡の勝地たる高尾桐尾を訪へる者、亦必ず此通天橋を觀ずんば止まず、東福寺は通天橋を有するが爲めに名あり、通天橋は亦東福寺境内に在るを以て其名特に著る、支院二十五末寺三百五十を統ぶる東福寺は曾て五山の第四に位せる臨濟宗東福寺派の總本山なりしかば境域内に仲恭天皇御陵を始め皇嘉門院墓、徳川家康夫人墓、其他高位顯官の墓少なからず、當寺藏する所の寺寶中には得易からざる物多く、兆殿司筆涅槃圖の如き最も能く世に知らる、又虎溪禪師の常住せる海藏院には其自筆の元亨釋書を藏し、右大臣藤原兼實の山莊たりし月輪殿に至りては「月輪右大臣」の名と共に知らる、東福寺中の舊蹟たり、光明峰寺址は當寺方丈の東、偃月橋の奥に在り、而して法性寺觀音は北門の前に在りて其法性寺舊蹟なるものは九條河原に存すと傳ふ。

羅漢五十幅は唐畫釋迦文殊普賢三大幅と共に傑作中の傑作と稱せらる、莊園古文書七通は明治三十一年を以て國寶に編入せられたり。

●兆殿司墓 (京都)

兆殿司の墓は東福寺内に在り、其雄勁の筆を揮つて後世に傑作を遺せる殿司は淡路物部に生れ幼にして東福寺に入り大道禪師を師とせり、應永年間東福寺の殿司となり南明院に住めるを以て兆殿司と呼ばる、名は明兆、破艸鞋、赤脚子と號す。

明兆甚だ書を好み佛法を修めず、師大道之を憂ひて屢々禁ずれども聽かず、竟に怒りて師弟の約を絶たんとす、明兆謂らく、道途に委棄して顧られざれば破艸鞋なり、今ま吾れ書を好むの故を以て師に棄てらる、而して帥の名大道と言ふ吾れは其れ破草鞋の如きかと此時より自ら破艸鞋と號す。

一日師の在らざるを窺ひ紙を展べて不動明王を書き意氣大に昂る、偶々師の外より還るに會ひ倉皇紙を捲きて膝下に覆ひ俯して之を匿す然れ共書ける火焰炎々として膝を繞つて騰るが如し師其神筆に感じ復た問はず、茲に於てか明兆始めて心を書事に専らにするを得たり。

始め東福寺に釋迦の涅槃圖なし、明兆之を憾とし明に航し名書を索めて之を寫さんと企つ、時に一僧より一卷の涅槃圖を得たり、而かも是れ容易に得難き傑作なりしかば明兆大に喜び直ちに模寫せんとし彩色の具に窮せり、深思熟考の結果溪中を窺めて奇石を聚め以て彩具となさんと、溪中に入ること數里、異色の沙石を見、採つて之を磨すれば色彩燦然たり、由りて之を用ひて畫幅を大成す、是れ即ち如上の寺寶大幅なり、永享三年八月二十日年八十を以て入寂す。

●萬壽寺愛染殿 (京都)

東福寺に屬する萬壽寺は其北門の傍らに在り、此寺最舊の建造物は愛染殿にして、佛殿に惠心僧都作阿彌陀座像を安置し、仁王門は足利義滿の建立に係る。

●藤原俊成墓 (京都)

藤原俊成の墓は東福寺内萬壽寺に在り俊成初め顯廣、後俊成と改む、父を俊忠と言ふ幼にして聰敏和歌を善くし初め基俊の門に入りて古今集を研究す、練磨益々努めて斯道に精通し其名大に著はる。

俊成嘗て後白河法皇の勅を奉じて「千載和歌集」を選す、四年を経て脱稿し、即ち文治二年書成りて之を上る、當時歌道盛んにして各々門戸を張り互に相評隨す此時に方り藤原基俊源俊頼と相諧はず常に拮抗せり、而して俊成は其師基俊の學力を稱し俊頼の風體を探りたり、千載集を選するに際しても多く俊頼の歌を採收せり、人或は基俊の感情を害するならんと言ふ、俊成之に答へて曰く我れ唯だ歌を探るのみ、何ぞ師弟流派の別を問はんやと、人其公平に感ず。

俊成歌名隆々として一世を蓋ひ、且つ和歌の批評者として當時に冠たりしが、晩年に至り豁然として悟りて曰く予不才を以て歌詞を判す、或は時に輕重其權を失するなきを保せず、加ふるに老衰年々加はりて朝に聞いて夕べに忘る、恐らくは引證陳謬を免れざるもの亦妙ながらざるべし、而して尙且つ自ら省する所なくして妄りに一己の私意を以て其優劣を判するに忍びずと、爾後又敢て判せざりき而かも俊成老ひて尙精力衰へず耳目聰明にして尙屢々殿中の歌會に侍したり、元久元年九十一歳を以て薨す、又俊成墓の傍に在る淨如尼墓とあるは俊成の母を葬むれるものなりと。

筆蹟は酒井伯爵家所藏に據る。



### ●大佛殿方廣寺 (京都)

大佛殿方廣寺は西大谷の南、正面通に在り、天正十四年豊臣秀吉の創建せし所にして門前巨石を疊みて封境を築き、結構の雄偉なる實に豊公の造營たるを見る可し、元慮遮那の大像を置きたるを以て大佛殿とも號し天台宗妙法院に屬す。

其創造せる時の佛殿は坐像六丈屋宇二十丈なりしも慶長元年七月震災の爲めに破壊し、信濃國善光寺の如來を移したりしも翌年之を還して再造佛の志ありしが果さずして薨去す、七年徳川家康片桐且元をして秀頼に勸め先考の冥福を資けんが爲大佛を興造せしむ、秀頼之に隨ひ工を起し木食僧應其を以て監事とす、鑄工成りて後失火堂宇は灰燼となる、十五年六月に至り又起工す、屋宇の宏麗一に舊に依る、檀柱凡そ二百七十章一椽の大なるは直千五百兩なりしと、十七年春落成す、棟高二十五間桁行四十五間、梁間二十七間、五尺金銅佛高六丈三尺、秀頼又洪鐘を鑄造し將に八月を以て落慶の供養を成さんとす、徳川家康其鐘銘の事を以て問罪出帥の口實と爲し秀頼遂に亡び方廣寺亦衰ふ、即ち其鐘銘は『國家安康、大釋迦迭爲主伴』にして寛文二年徳川幕府貴金を以て像を造るは無益なりとし大佛を鎔解して錢貨と爲し木像を易置す、國家安康の鐘は高一丈四尺口徑九尺一寸厚九寸重量十萬六千二百五十斤なり、今は高く鐘樓に懸りて人の敲くに任す。

### ●六波羅殿址 (京都)

北は五條松原に起りて南は七條通に至り、東は小松谷を籠め、西は鴨川に瀕し、當時大小の屋舎其間に散在せるもの之れ平家の第宅なり、初め平忠盛此に方一町の邸を築けるが清盛に及び増大して一門臣屬の亭館を其周邊に置き、二十餘丁五

千二百餘宇の多きに達せり、壽永二年宗盛西奔の時一炬焚蕩して去る、後北條の子弟茲に築きて住めり。

六波羅殿址に關する舊址としての北御所址は建仁寺の西松原筋南の筋に『字』を存す、而して池殿址は六波羅密寺の西に並ぶ、同寺封堤外西北の敷に近年まで平家の馬沖し場と稱し鑊池と名くるものありき、清盛の弟頼盛の甲第は即ち此池殿にして、安徳天皇此に降誕し給ひ、高倉天皇此に崩御あらせらる、壽永自焚の後源頼朝新たに亭館を置きしが、建仁三年燒亡す。

平家の本邸たりし泉殿址は即ち方廣寺大佛殿址なりと、又泉殿の中に在りし法領寺は一名常光院と稱し清盛の祖正盛の寺塔なりき。

六波羅兩廳なるものは南北二第ありしが故に兩六波羅の稱あり、承久三年鎌倉武家の兵入犯し、三皇を遠流し奉り、六波羅に廳を開き京師西國の政事を視る、號して檢斷職と言ひ北條泰時之に任す、其北方廳址は太平記正慶二年六波羅攻めの條に地藏堂の北の門より五條橋々瓜へ打て出るとあるは北廳の兵の動作を言へるならん、南方廳址は平氏泉殿の地を言ふ今の京都帝國博物館邊は其址なるべしと傳へらる。

### ●建仁寺 (京都)

禪宗濟家派の巨刹にして五山の第三に位する建仁寺は繩手通建仁寺町に在り、土御門天皇の勅願に依り造營せし所、敷地は將軍源頼家の寄附にして建仁三年其土功を竣りたるを以て建仁寺と號せり、開基の祖を千光國師榮西とし境内に佛殿方丈、鐘樓、浴室其他幾多の子院あり、南方の中門を矢立門と稱し扉に飛箭の痕あるを以て名くと是れ數次兵燹に罹れる爲めなり、又平氏の一族門脇宰相教盛の

館門なりしとも傳へらる、南門の傍に在る摩利支天は宋の福州連江の僧清拙和尚が嘉曆二年來朝の時、鶴尾山より齋らし來れる像にして高八寸金色七頭の猪に乗す、釣鐘は『百八聲陀羅尼鐘』と稱し建仁寺の鐘として名あり。

安國寺の塔は域内東畔に在り其住僧惠璣石田三成の逆亂に與せる故を以て加茂磧に鼻首せられたる後首を收めて葬りたる所なりと、禪居庵は大鑑禪師即ち清拙の故栖にして大龍院は入宋僧友梅の寓址曾て赤松入道圓心の塔ありしが後世廢滅し、正傳院は織田有樂の造れる茗室なり

三萬有餘坪の境域を有する建仁寺は最も松樹に富み巨幹枝を接し深翠葉を交ゆ幽邃閑雅にして俗寰を出離し、清風耳を洗ふ時、朗月眸を拭ふの夕、滿目皆禪味ならざるはなし、昔は西面建仁寺町に接する處繞すに竹垣を以てし世に『建仁寺垣』と稱するもの之に起りしも今は人家其邊に連り既に竹垣の跡を存せず、開祖は禪刹の規制に由りて殿堂の配置を定め三堂中に相並び回廊之を繞り西に僧堂を置き、北を方丈と爲し玄關は客殿の門戸として兩扉門を造り瓦を以て之を葺き、門内は登禪を敷きて殿に接せしめたるものなりと、經藏には開祖以來の一切經典を安置すと稱す。

藤原鎌足『遺愛の藤』と稱せらるゝものは建仁寺の裏、安井神社内に存す。當社の祭神は中央を崇徳天皇とし、北方を金毘羅とし、南方を源三位頼政とす、傳へ云ふ、藤原鎌足嘗て此地の幽景を愛し自ら紫色の藤を植へ家門の榮久を禱りしが其枝繁茂して花の寺と號せらるゝに至れり、其後崇徳天皇之を愛して屢々風箏を巡らされ終に宮殿を其傍に築き后妃阿房内侍を居らしむ、保元の亂皇軍利あらず尋で讃岐に崩御し給ふ、後、本社を茲に造營して其靈を鎮し奉りたりと。



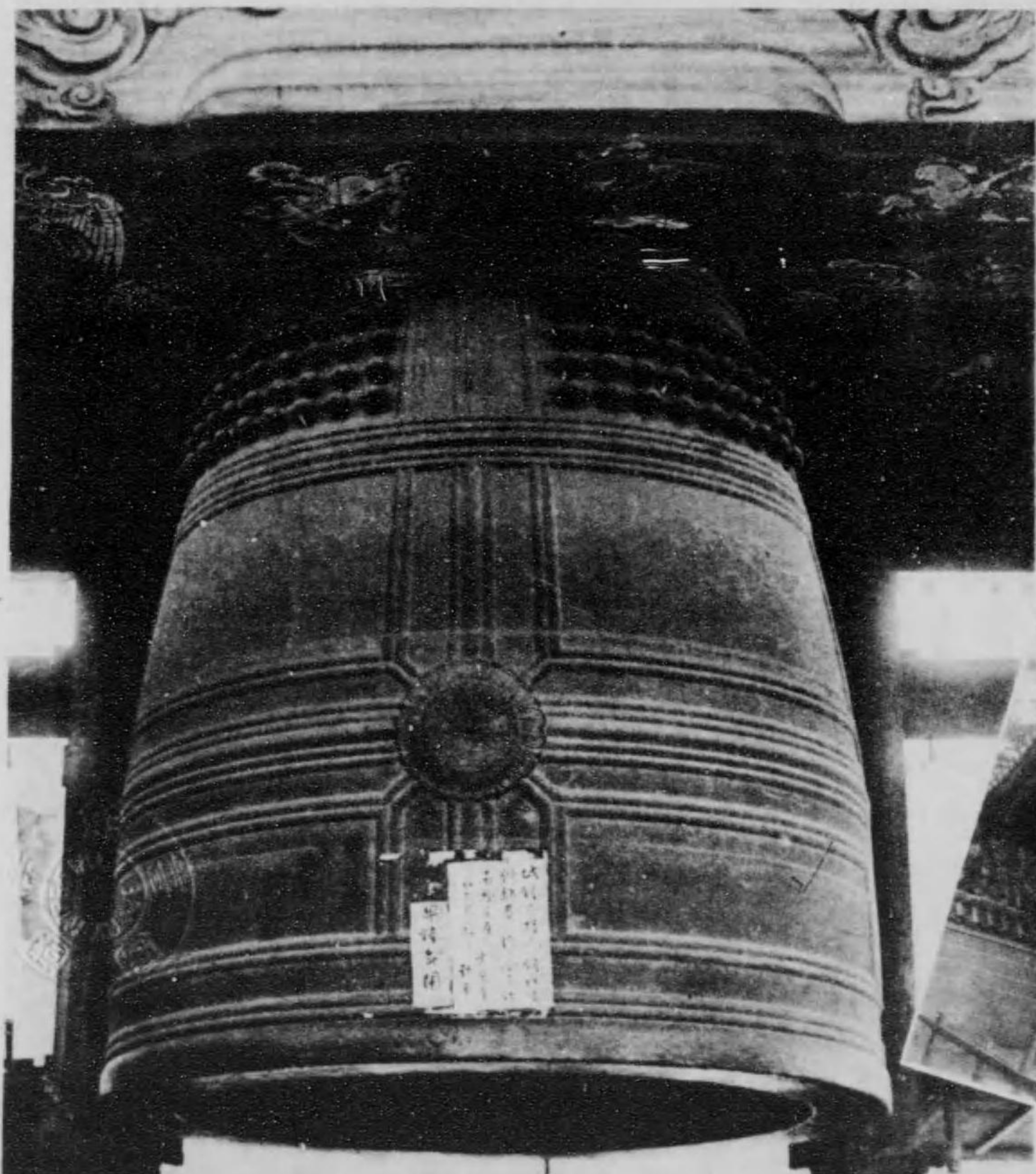
六波羅址



方廣寺大佛殿



方廣寺國安家康銘鐘

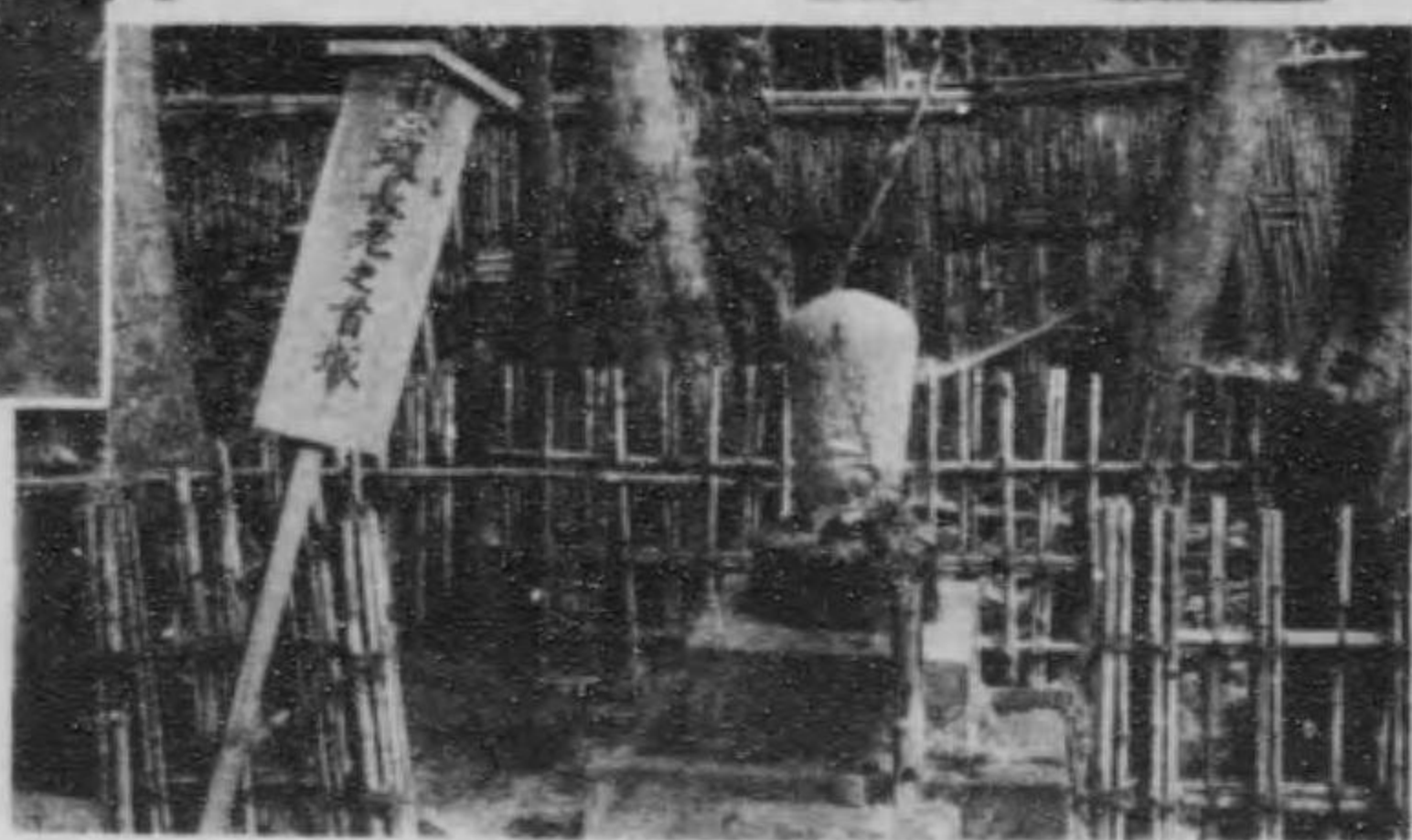


方廣大寺

建仁寺



六波羅址



(中) 建仁寺矢立門  
(下) 安國寺理首塔



方廣寺大佛殿

當時大小の屋舎其間に散在せるもの之れ  
平家の第宅なり、初め平忠盛此に方一町  
の邸を築けるが清盛に及び増大して一門  
臣属の亭館を其周邊に置き、二十餘丁五

開基の祖を千光國師榮西とし境内に佛殿  
方丈、鐘樓、浴室其他幾多の子院あり、  
南方の中門を矢立門と稱し扉に飛箭の痕  
あるを以て名くと是れ數次兵燹に罹れる  
爲めなり、又平氏の一族門脇幸相教盛の

り、其後崇徳天皇之を愛して屢々鳳輦を  
巡らされ終に宮殿を其傍に築き后妃阿房  
内侍を居らしむ、保元の亂皇軍利あらず  
尋で讃岐に崩御し給ふ、後、本社を茲に  
造營して其靈を鎮し奉りたりと。



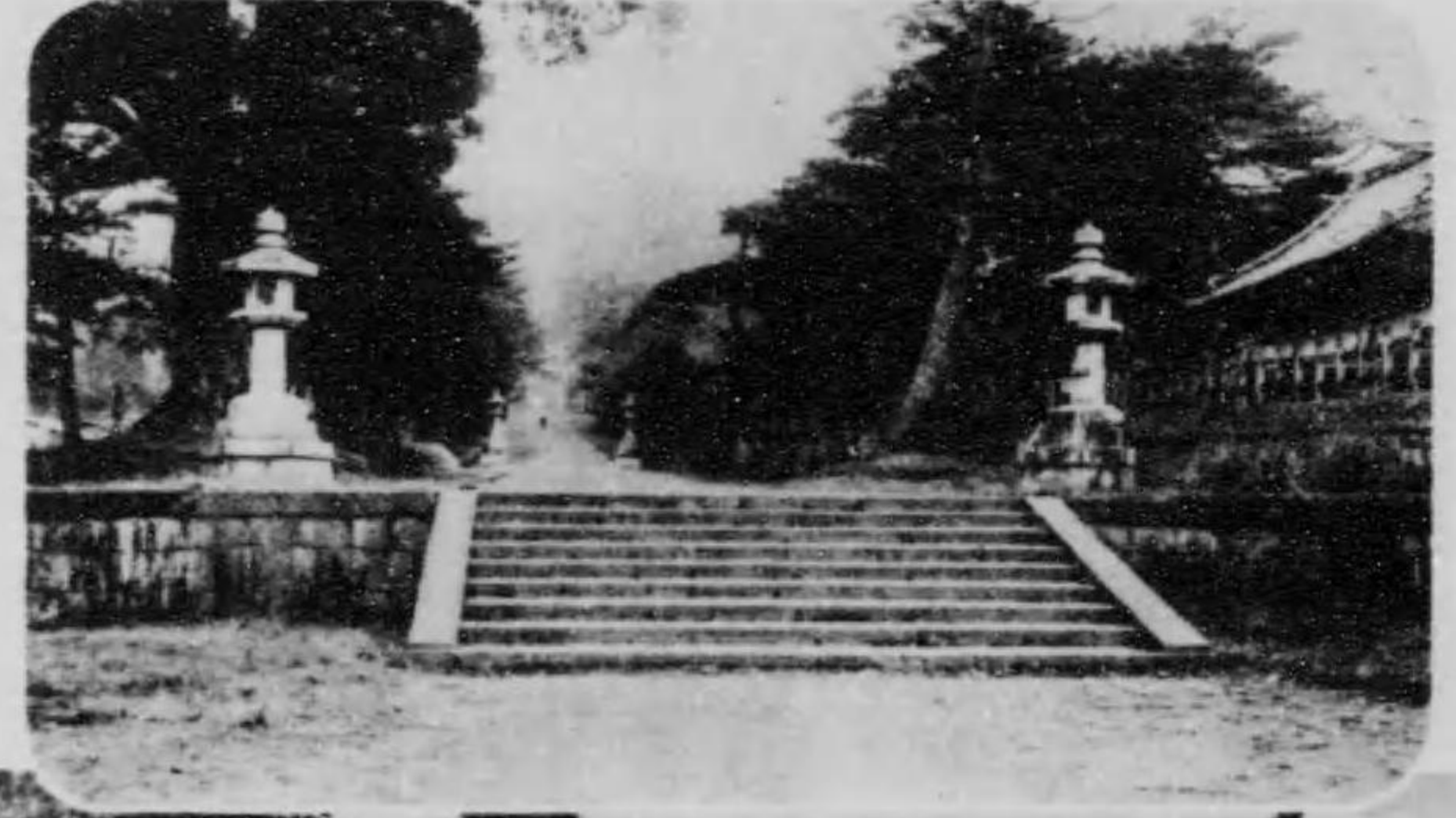
豊臣秀吉像



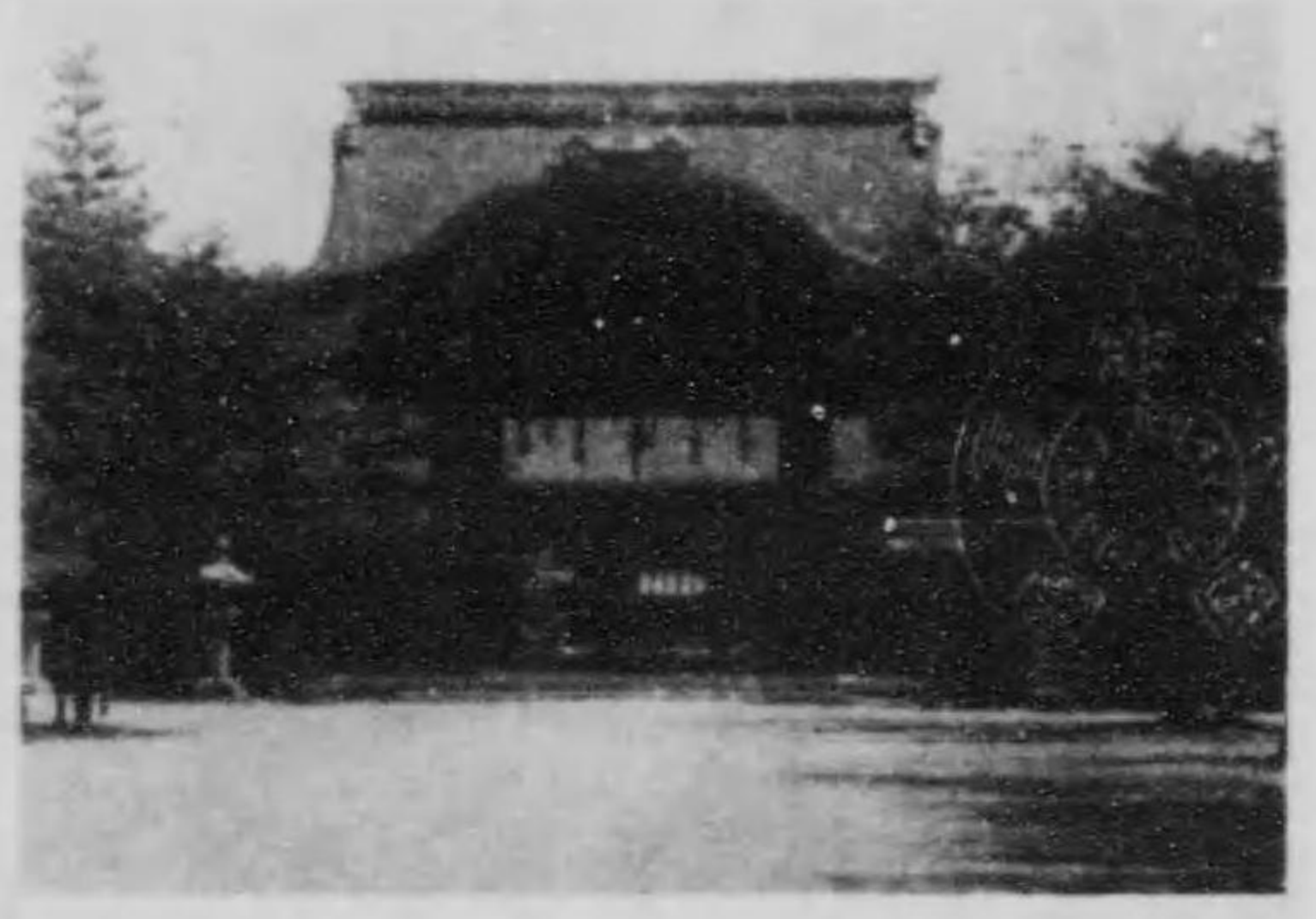
秀吉筆蹟

Handwritten calligraphy in Japanese, including the name '豊臣秀吉' and other characters.

豊臣秀吉廟

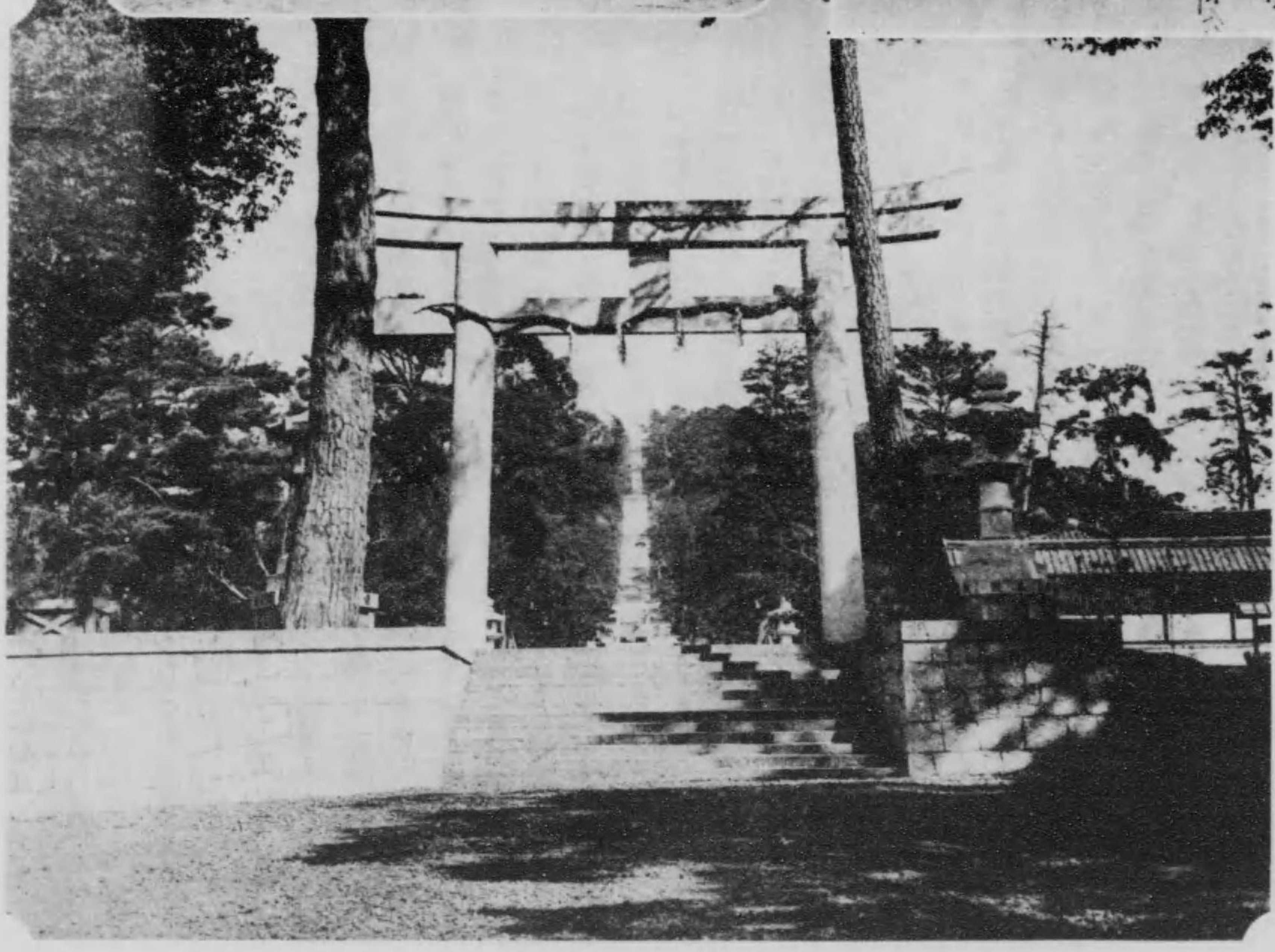


豊國神社唐門



石塔

阿彌陀ヶ峯の豊國神社



上ノ二〇

●阿彌陀ヶ峯 (京都)

曠世の英雄豊太閤埋骨の地は即ち阿彌陀ヶ峯にして、峯は東山三十六峰中に於ける佳域に位す、慶長當時の豊國廟は雄大瑰麗を極めたりと傳へられたるも、風

千山風雨時々惡。只作當年叱咤聲。 頼山陽

萬樹桃花映碧流 豊家誰認舊金甌 春風曾返東征旆 遺恨無人教放牛

三間餘、其上に二丈餘の石塔を立つ、大佛門を出でし左側に在り。

記事の序を以て左に豊公の逸話二三を掲ぐる事とす。 秀吉が征韓の師を發せんとする前、伏





●阿彌陀ヶ峯 (京都)

曠世の英雄豊太閤埋骨の地は即ち阿彌陀ヶ峯にして、峯は東山三十六峰中に於ける佳域に位す、慶長當時の豊國廟は雄大瑰麗を極めたりと傳へられたるも、風雨三百年天縱の英物も墳墓と空しく榛莽荆棘の間に斷礎を留るのみとなり、桃山の殿は荒れて花雨に泣き、聚樂の第は古りて草烟を鎖し、唯だ纒かに輪塔を阿彌ヶ峯に存するのみ。

豊國神社の宮司たりし日野西子爵慨然として之が改修の議を唱へ、豊太閤に縁故深き蜂須賀、淺野、黒田、鍋島、前田の諸侯に就き、遂に豊國會なるものを興し、黒田侯之が會長となり大に資を全國に募りて、其三百年に當れる明治三十一年四月に及んで大祭を行ひ、且つ舊墳の所に就て偉大なる壘域を作れり。

其壘域に登るの順は、大佛妙法院と新日吉神社との間より大道坦々として古松老柏の中を行くこと一町餘、宛かも新日吉神社の山門と相並びて第一の石華表あり高二丈三尺、石隔十數級を度りて更に層翠疊縁の中を行くこと三町餘、又石階あり、階盡れば宏潤なる平地あり之を太閤壇と言ふ、正面に拜殿あり更に進んで石礎を登ること五層凡そ六百級、轟々として雲に入らんとす、礎盡きて平地唐門あり桃山式に依り石階の中に建つ、唐門の中は即ち壘域、五輪の石塔を置く高二丈三尺四寸、壘域を劃るる石の玉垣を以てす、規模雄大蒼涼萬古を懐かしむ、脚下に十有餘萬の人家を見、西山一帶招けば來らんとす、此に登臨すれば臍に毛を生ずるの想あらしむ、實に是れ英雄の埋骨地として崇嚴を極むるの地なると共に、山紫水明の地たる京都に取りての新壯觀たり。

絶海樓 震大明。寧知比地長柴荆。

物徂徠

千山風雨時々惡。只作當年叱咤聲。

頼山陽

萬樹桃花映碧流 豊家誰認舊金甌  
春風曾返東征旆 遺恨無人教放牛

●豊國神社唐門 (京都)

豊國神社は大佛殿の南隣に在り、豊臣秀吉の靈を祀れる所にして別格官幣中社なり、初め慶長四年秀吉に豊國大明神の神號を賜はり方廣寺の城内に其社を造營せしも寛政の火災後再建の運びに至らず唯だ一基の石碑久しく榛莽の中に埋まるのみなりしが、明治十年新たに工を起して今の社祠を建てたるものなり。

其唐門は伏見の城門を徙して之を造り彫鏤見るべきものあり、堂宇亦瀟洒清崇にして本殿拜殿には瑞籬を繞らし、近時又境内に萩を植ゑたり。神社の裏乃ち東阿彌陀峰の西麓に在る智積院は眞言宗新

義派の本山なり、當時の縁起は秀吉其末子稔君の夭折を悲み、爲めに群雲寺を此地に創建せしが、曾て織田信長の爲めに滅亡せる紀州根來寺は其滅亡の儘となり眞言宗覺鑊派の廢絶したるより、新義の徒之を歎き豊臣氏に懇訴す秀吉乃ち群雲寺を授けて智積院と改稱せしめたり、當院の開山は正憲法印にして興教大師作不動明王を安置す、因に新日吉神社は府社にして其祭神は大山咋神外三神なり、元日吉坂に在りて後白河院の勸請に係り又附近に在る妙法院は是亦後白河院中興の故を以て開祖と爲し其以來門跡と稱す、當院の庫裏は照高院大佛供養の際に成り、院内唯一の大建造物なり、書院は元和五年宮中の殿舎を賜りしものと傳へらる、小堀遠州作の林泉を有す。

●耳塚 (京都)

文祿征韓の役、諸將の敵首を獲る數萬即ち削りて監軍の實檢に備へしもの、後、隨にして秀吉に献せるを埋めて耳塚を立てしむと、耳塚は五輪の大石塔にして高

三間餘、其上に二丈餘の石塔を立つ、大佛門を出でし左側に在り。

記事の序を以て左に豊公の逸話二三を掲ぐる事とす。

秀吉が征韓の師を發せんとする前、伏見城の松の丸の普請を起したるが、一日秀吉床几に腰を掛け石田、増田、大谷等の諸士を左右に侍せしめて普請を見物しつゝありたる際、何をか遽に思ひ立ちけん秀吉は突然大肌脱ぎになりて佩刀を抜き石田の頭上に向つて斬り下げんとする氣勢を示したり、斯くて暫くありて秀吉は刀を鞘に納め、肌を入れ、左右の面々に向ひ、平素計畫しつゝある朝鮮征討を實行せん曉には彼國の王どもを引提らへ我れ自ら斯くの如く手討にせんと語りたり。

秀吉、征韓の師を發して肥前の名護屋に陣すべく博多に宿次したる際近習の者に向て曰く「吾れ聞く所によれば、明韓人は男子に鬘あるを尊ぶといふ、然に吾れには鬘甚だ少し斯くては明韓に推し渡りたる後に於ても不都合なれば造り鬘を用ひんとす速かに調製すべしと命じたるより近習は急に市中の細工人を呼出して秀吉殿下の附鬘を造る事を申附けたり、茲に於て細工人は一度殿下の容貌を拜せんを願出でたるを以て、秀吉に斯と告げ、細工人を傍近く呼寄せ、秀吉は自ら顔を突出し予の顔の寸法も調べざれば能はざるべし、遠慮に及ばず、茲へ參つて顔の寸法を計るべしと云へるに細工人如きの争でか秀吉の顔を弄ぶ程の大膽者もあらざれば唯々恐縮し、秀吉の顔を熟視したるのみにて引下りたり。既にして、鬘は調製され下地を組み差出したるに秀吉大に喜び、直ちに其の大鬘を附けて、得意然と博多の市中を押し通り夫れより名護屋の城へ入りたり。豊公が磊落なる性格の一齣を想見するに足るべし。



●三十三間堂 (京都)

三十三間堂は京都帝國博物館の東南に在り、蓮華王院と號し妙法院に屬す。

長承元年鳥羽上皇此地に得長壽院を創建し壹千壹體の觀音を安置せるより、鳥羽十一面堂又は十一面壹千壹體堂と稱せらる、然るに元暦二年の震災に罹りて殿堂倒壊し、後、長寛元年に至り後白河法皇蓮華王院を建立して壹千壹體の觀音を安置せり、寶治二年に及んで蓮華王院も亦火災の爲めに焼燼し、後、十八年を経て龜山院の御宇文永三年四月再建の事あり、其際二院の名稱を合せて蓮華王院の名を存す。

此地舊法住寺殿址なり、法住寺は一條天皇の朝に太政大臣たりし藤原爲光が其女祇子(華山帝女御)の妊娠中病死せるを哀悼して創建せる寺なりき、爲光亦佛乘に歸し此寺に住み正暦三年を以て薨す、世に法住寺相國と稱せらる、鳥羽後白河兩皇此地を收め擴大して離宮と爲し、寺塔を興され舊に依て法住寺殿と稱せられたり、當時の宮城は西は大和大路、北は七條、南は八條、東は溪谷を籠め、今の瓦坂山野は盡く其林泉の中ならんと傳ふ、壽永二年源義仲放火し建久二年源頼朝之を修造する所あり、後白河法皇再び此に御し以て崩じ給ふ。

後白河法皇の御陵は即ち法住寺陵にして、三十三間堂の東、竹叢中に在り、元は小堂の中に御刻影像を奉安せり『法住寺法華堂在三十三間堂東安置聖容。呼爲御影堂。其右側相傳火葬處』と山陵志に見ゆ。

●壹千壹體の薩埵 (京都)

蓮華王院の所謂三十三間堂は、堂の南北六十六間、三十三柱を以て之を支ふ。其内に入れば帳幔深く垂れ晝猶黄昏の

如し、有名なる壹千壹體の觀音菩薩像は廣き内陣に安置せられ、脇立二十八部衆亦相列なりて妙相端嚴、賽する者鐘を敲きて合掌する時、瓔珞珊瑚として鳴る。

本尊千手觀音は其長壹丈七尺の巨像にして、壹千壹體の觀音は各五尺餘の立像、脇立二十八部衆は各四尺、是等は滿慶及雲慶作として著る、又當院の構造は創建當初の舊形により桁行六十五間二尺三寸梁行九間一尺八寸、柱百五十八本、當初、丹を以て之を塗り堂内には繪彩を施せるものなりしも、今は剝落して唯だ雨鏽刻の痕を存するのみ然れ共建築の牢固なると構造の精緻なるとに依り、今や特別保護建造物に加へられ、三十三間堂の名は益々喧傳せらるゝに至れり。

本堂は裏は大矢數の射式に用ひられて古來名高し、其通矢の起源は今熊野觀音寺の別當枳坊射術を好み八阪青塚の的場を通ひ歸路此本堂の後に休憩して射始めたるに由る之より連年諸國の武士此處に來りて其技を競ふ者多く、皆な堂の背後なる南端より北端まで六十六間の射通せる矢數の多きを以て誇る、發射の數は隨意なれ共或は暮より翌曉に至り六十六間に達せし通矢を檢め、抜群の者には當所より檢證を出し、金銀の應を賞し其儀式頗る嚴重なりき、而して古來善射士中、貞享三年四月廿七日紀州和左臺八郎總矢數一萬三千五十三、内通矢實に八千三百十三數なるを第一とす、今猶柱梁等に矢痕の残れるもの多く且つ毀損を防ぐ爲め柱梁等に施したる鐵被及痕跡歴然として存し當時の狀況を追想せしむ。

●鳥邊山 (京都)

清水寺より西南、西大谷に至る路傍山野の稱なり。墳墓累々として古來諸宗の埋葬地たり。白河院を鳥邊野に送りて茶毘に附し奉りし事、又法成寺道長公を茲

にて煙りにしたる事など榮花物語に見ゆ。兼好法師の『徒然草』にて「あだし野の露消ゆる事なく鳥部野の煙立ち去らで云々」と記したるを見れば、其凄慘の光景を追想し得べし。斯くて慶長年間まで茶毘竈散在したるが、豊臣秀吉薨じて其廟所を建立したるに鳥邊野の煙り同廟に風靡するの故を以て、爾來此地に於て茶毘に附する事を嚴禁せり。

●鶴の心の心地こそすれ(後拾遺集)

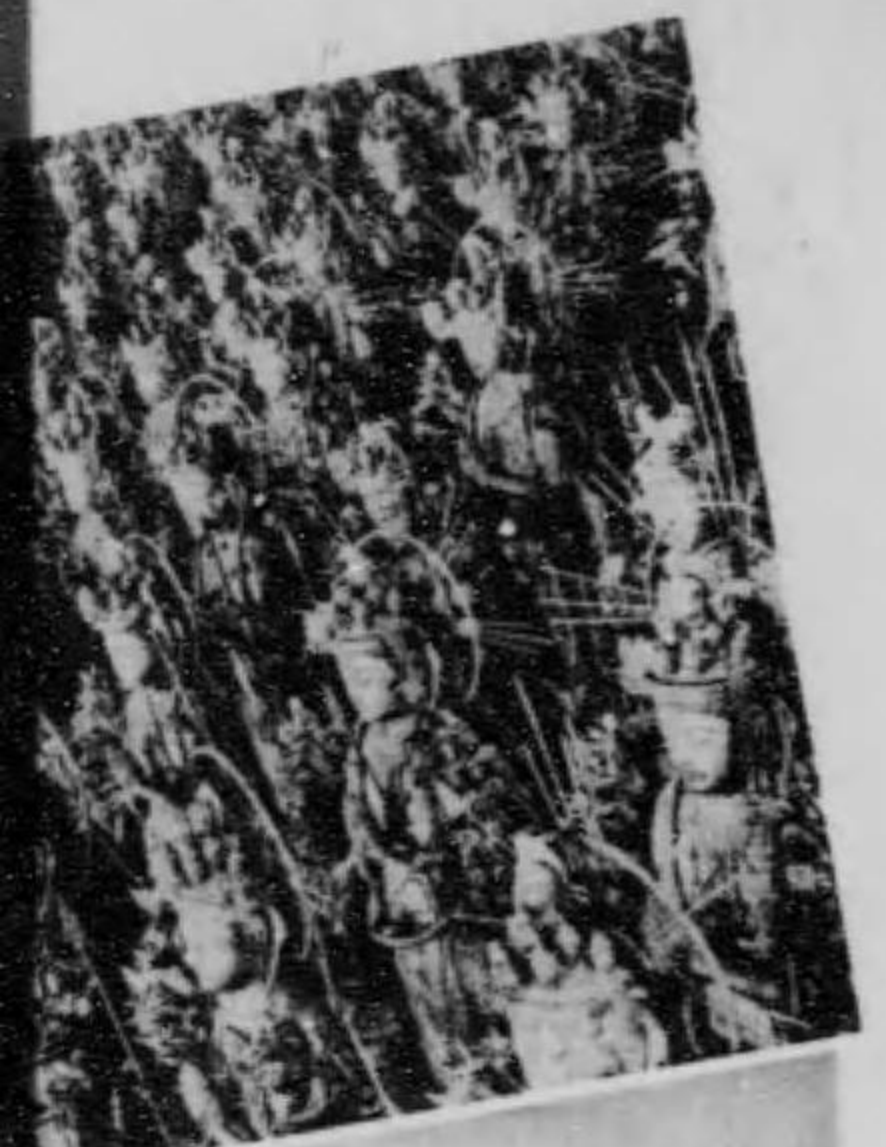
尚西本願寺、要法寺等の墓所此に在り。墓所内に後京極攝政良經の墓あり。昔は之を源義經の墓と誤認したりしが、明和年間、鳥石葛辰なる人、之を辨じたる標石を傍に建てたり。其文に曰く

藤原良經公之墓在于洛東要法寺而歲月悠遠荆榛荒涼不可復識也享保年中並河生奉大樹鼎命脩幾内志時斷木以表而今也朽矣明和二年春鳥石葛辰翁偶遊此地嘆其蕪穢且悲蟋蟀之吟及誅榛艾荆棘脩治墳墓新立標石祭以香醴且賦詩鑄于其寺住持日慈威翁之志請書其事予於是識赤水藤原岳尚撰蒲野谷豊書

●如意ヶ嶽 (京都)

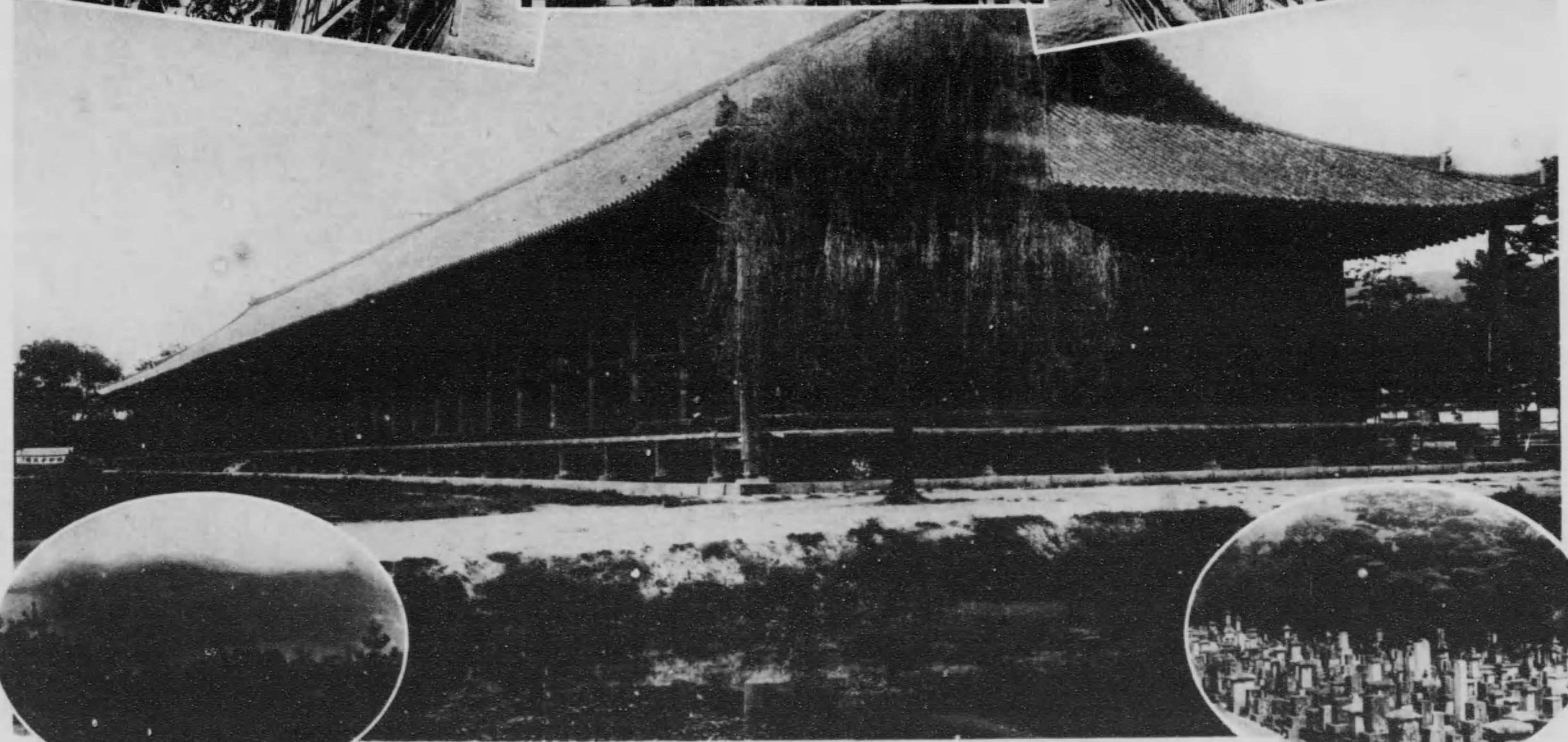
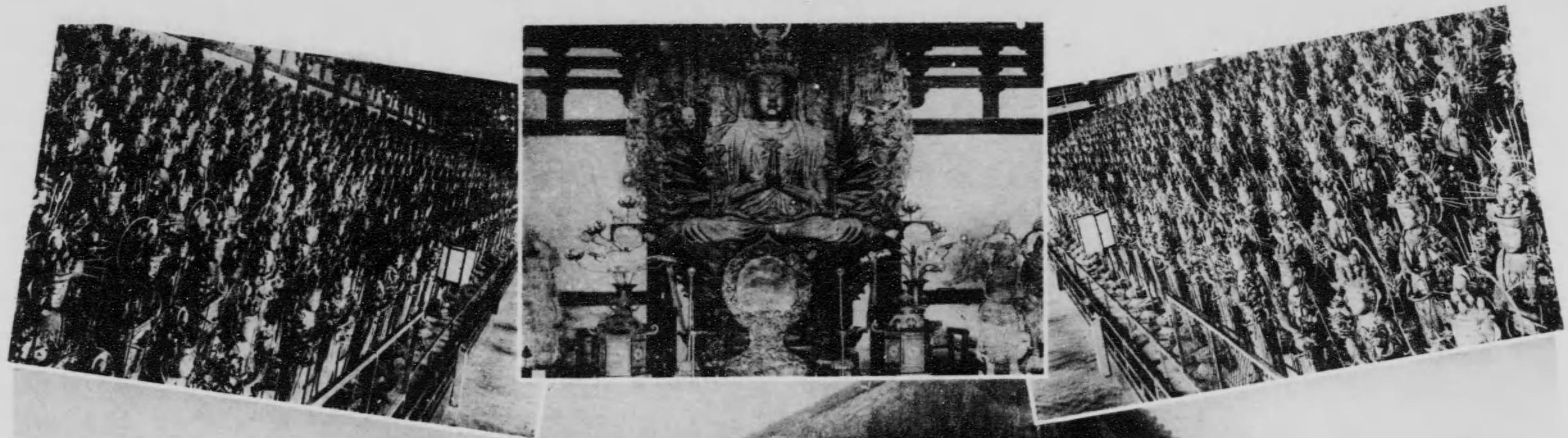
東山より近江の國境に跨る峻嶺、之を如意ヶ嶽と稱す、鹿ヶ谷の上方に當り丹禪空に聳へ巍然として立てり、故事に依り毎年七月十六日火を山腹に點す、其點火の跡自ら赤緒となり更に草木を生ぜざるより、遠くより之を望むも明かに大字形を見るを得、雪中の如きは雪の大字の字山と稱し京都市人の賞觀する所なり。

此大字初畫の一點のみにても實に五百五十餘尺の長さに亘り毎年點火の際之に要する所の薪料甚だ莫大なり、是れ弘法大師始めて火を大字形に焼き時の觀覽に供し、其後中絶せるを足利義政相國寺の横川和尚に命じ之を再興せしめたるなり

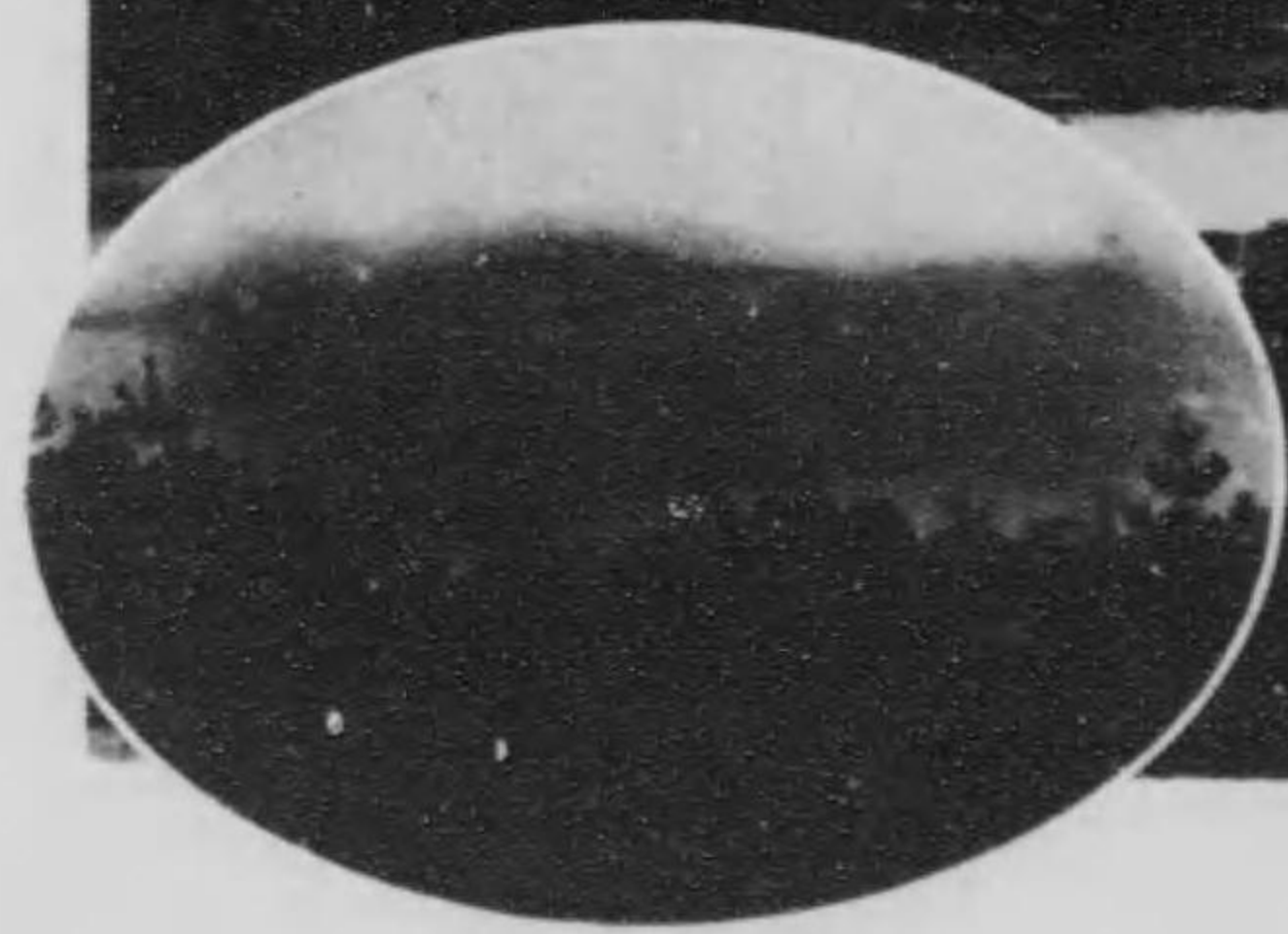




三十三間堂内陣



三十三間堂



如意ヶ嶽



鳥邊野

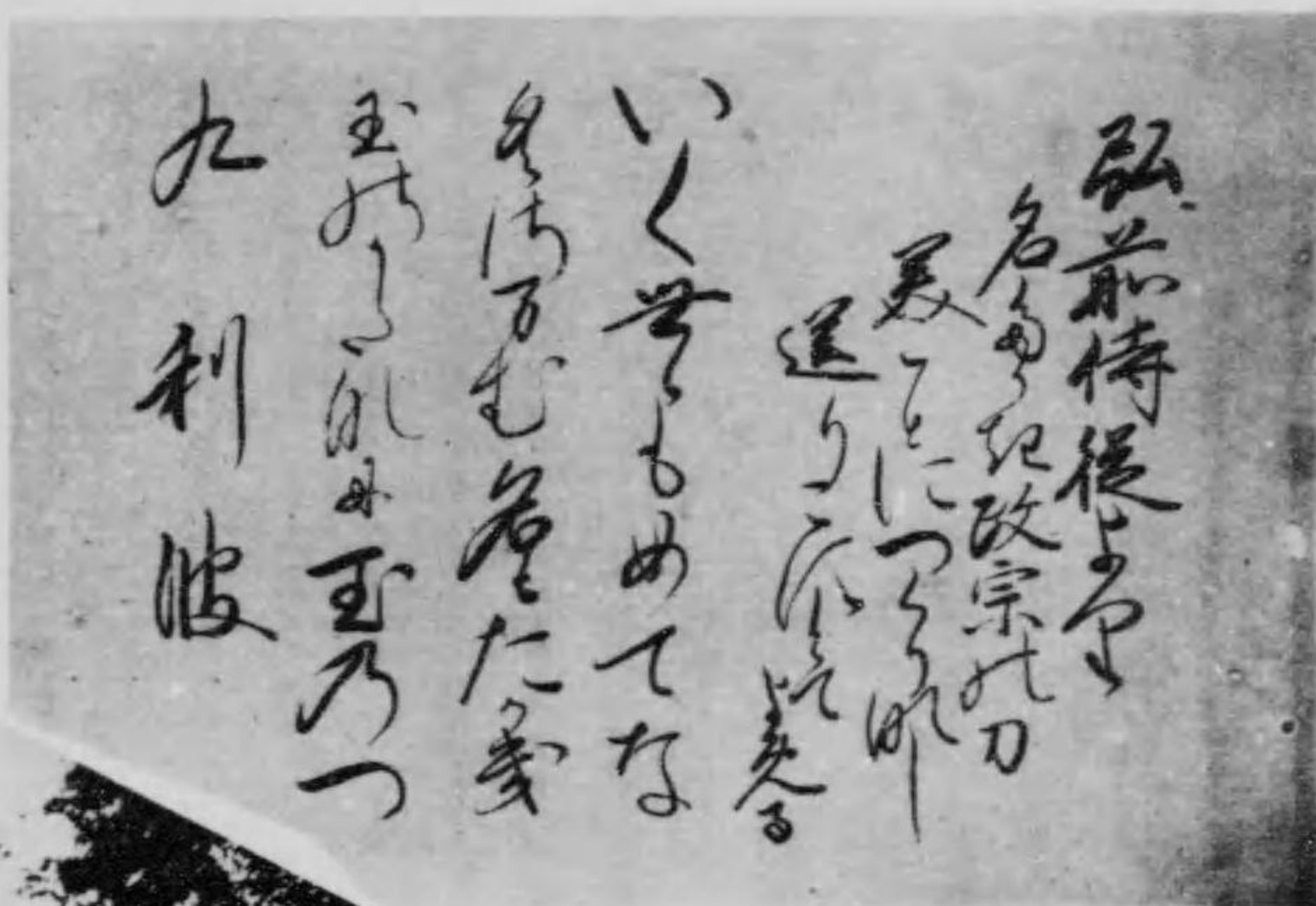
蓮華王院の所謂三十三間堂は、堂の南北六十六間、三十三柱を以て之を支ふ。其内に入れば帳幔深く垂れ晝猶黄昏の

清水寺より西南、西大谷に至る路傍山野の稱なり。墳墓累々として古來諸宗の埋葬地たり。白河院を鳥邊野に送りて茶毘に附し奉りし事、又法成寺道長公を茲

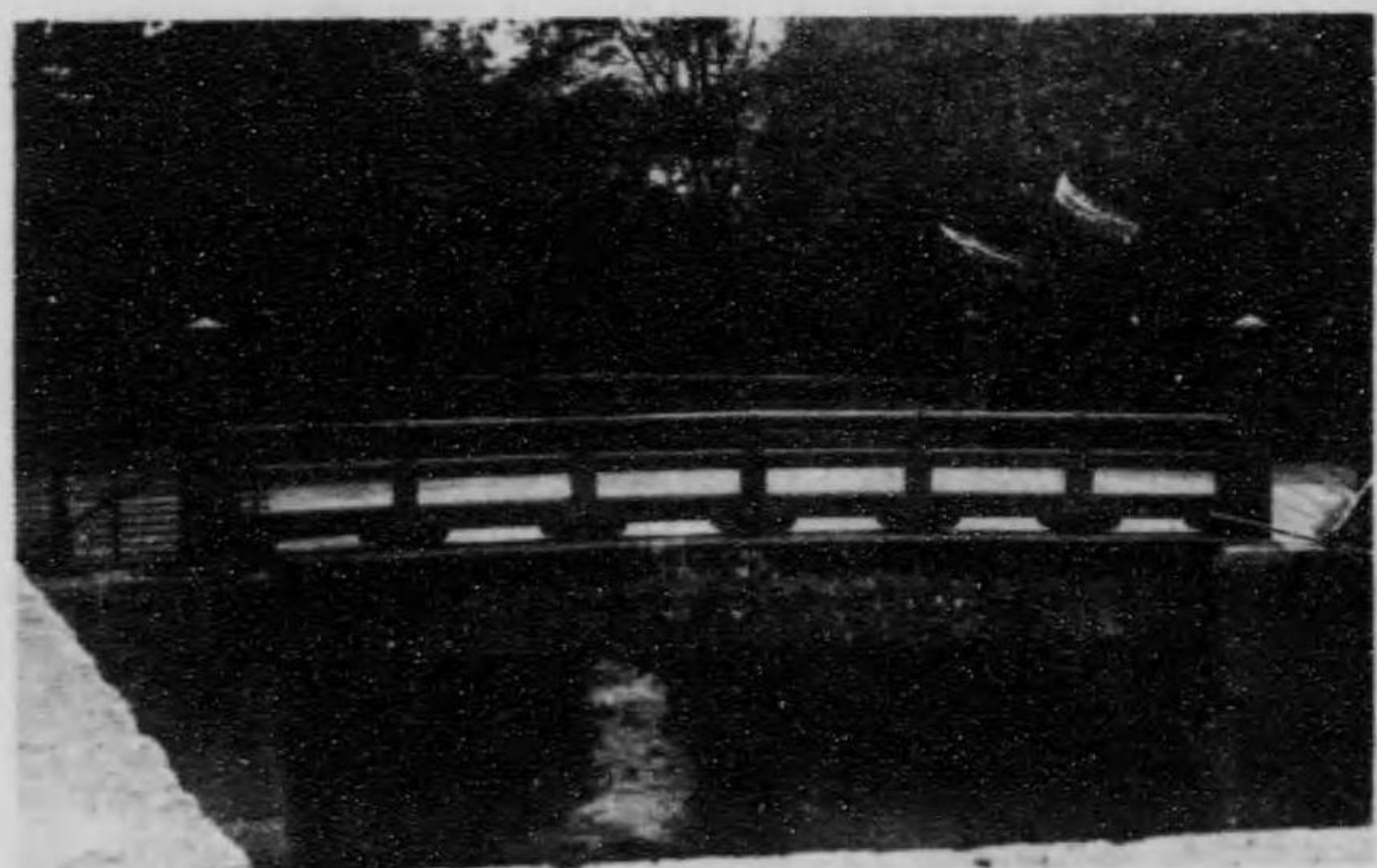
要する所の薪料甚だ莫大なり、是れ弘法大師始めて火を大字形に焼き時の叡覽に供し、其後中絶せるを足利義政相國寺の横川和尙に命じ之を再興せしめたるなり



孝明天皇宸翰



歩の浮橋



孝明天皇御影



今熊野観音寺



泉涌寺

●泉涌寺 (京都)

泉涌寺は三十三間堂の南に當る山上に在り、地を大和大路一之橋東と言ふ。

皇の御尊影を掲げたれば其治世の梗概を記し以て、如何に宸襟を惱まし給へるかを偲ばんとす。

當時の内政外交

我東方日出の帝國が、孤島偏安の夢を

辱的條約を締結せるも、其裏面には虚偽政略の外、何等有益の鐵案なかりき、徳川齊昭夙くに之を看破す是よりして上は朝廷の箝制となり下は攘夷黨の攻撃となり、結局幕府の自滅を招く重なる原因と





### ●泉涌寺 (京都)

泉涌寺は三十三間堂の南に當る山上に在り、地を大和大路一之橋東と言ふ。

翠光滴るが如き東山一帯の南端に位し、伏見山の半腹を擁し遙かに嵐衣笠の山容を望み、南東北の三面に聳立せる京洛風光の因たる諸山は、眉前に其綠嵐翠光を滴らして、地域清酒閑寂、幽禽の聲太古の想あらしむ。當寺の開基は弘法大師にして初め法輪寺と稱す、後、文徳天皇の齊衡三年山本左大臣緒嗣再建して天台宗と爲し仙遊寺と號せしむ、中興は我禪俊にして以來天台真言禪律の四宗を兼修し、且つ境内に靈泉湧出せるより泉涌寺と改稱せり。

貞觀年間に至り勅願寺となるや、一山の衆徒愈々法海の指導を期し幽清なる寺域に高德の名僧集まり、其崇大の法燈は即ち至尊の依信を博するに至り、悉くも仁治三年四月四條天皇を其寺域に葬り奉るを得たり、其後は全國唯一の寺格を得て永く至尊の御陵地となれり。

佛殿は西面にして二重瓦屋なり、彌勒釋迦阿彌陀の三尊を本尊として安置し、釋迦堂は後水尾天皇の建立に係り、堂に用ひたる檜材は隱元禪師が唐の三平山より伐採せしめたるものなりと、又東福門院の寄進せる觀音堂には、玄宗皇帝楊貴妃追福の爲めに自ら妃の貌を模して刻める『聖觀世音』を安置す、相傳ふ玄宗皇帝會を渡來して之を寄進せるものなりと。

靈明殿は即ち歷世天皇妃の尊牌所たり今ま泉山御陵として儼存するものを擧ぐれば四條、後水尾、明正、後光明、後西院、靈元、東山、中御門、櫻町、桃園、後櫻町、後桃園、光格、仁孝の十三陵之を月輪陵と言ひ、後月輪東山陵は孝明天皇英靈の鎮まらせ給ふ所にして、其東北陵は英照皇太后の御陵なり、茲に孝明天

皇の御尊影を掲げたれば其治世の梗概を記し以て、如何に宸襟を惱まし給へるかを偲ばんとす。

#### 當時の内政外交

我東方日出の帝國が、孤島偏安の夢を破りて、五洲鐵火の間に屹立し、内には立憲の鴻謨を立て外には征清征露の偉業を奏せし所以のもの、嘉永癸丑米艦來航せしより、志士仁人、身を殺し生を捨て、頽波を挽き天日を回したるの功に由ると雖も、其一大原動力は、未だ嘗て孝明天皇の盛徳に基かずんばならず、天皇の御製に曰く

朝な夕な民安かれと祈る身の  
幕府の外交日に非にして、動もすれば

國權の伸暢を縮めんとす、當時尊攘の提唱によりて、國民的精神を發揮し、内に對しては幕府の弊政を改革し、外に對しては外國の侮辱を禦ぎ以て尊王の實を擧げんと期したるものは、即ち此朝な夕な民安かれと祈る身の心にかゝる異國の船なる大御心に感發したるのみ、而して幕府の倒るゝ所以王政の興る所以實に此に基くとせば、水を飲む者豈に其源を忘るべけんや。

皇上、内治外交を軫念あらせられ殆ど

寢食を忘れさせ給ふ、一日三條實萬玉體を惱ませ給はん事を慮りて之を諫め奉りしに、皇上には毅然として

本朝百二十代貳千五百年、金匱無缺の國體、朕の世に當りて一缺を生せば、何の面目ありて祖宗に見えんや、朕、屢々幕府に戒飭すれ共幕府従はず。

と詔らせ給ふ、實萬、幕府の嫌疑に觸れん事を言上し奉りしに、皇上曰く『幕府の爲めに此躬を亡ぼさば、亦少しく祖宗在天の靈に謝すべし』と實萬叙慮の辱なきに號泣して地に臥し久しく立つこと能はざりしと、幕府は一時權宜を以て屈辱的條約を締結せるも、其裏面には虛偽政略の外、何等有益の鐵案なかりき、徳川齊昭夙くに之を看破す是よりして上は朝廷の箝制となり下は攘夷黨の攻撃となり、結局幕府の自滅を招く重なる原因となれり、是れ井伊大老及守舊黨の幕吏等、幕政一新、萬國並峙の遠謀駿略を解せず、狂げて天朝に抗し、親藩を疏んじ、俊秀の吏を逐ひ天下の志士を排し、以て天下の事を爲さんとせるに由る、戊午の大獄櫻田の要撃等を経て徳川氏傾覆の端を開けるは偶然に非ざるなり。

時に皇上御不例に渡らせ給ひしが、慶應二年十二月二十九日を以て終に崩御し給ふ、其翌年は諒闇の中に暮れ、明年丁卯正月十六日先帝(明治天皇)陛下御踐祚あらせられ、此年十月に至り徳川慶喜尊王の志を表して政權を奉還せり、後月輪東山陵に拜跪する者誰か感慨なからんや終りに御製中の二首を掲げて一般に拜誦を勸む。

錄とりて守れ武士九重の

みはしの櫻風をよぐなり

雨におもひ風に心を碎くかな

民のしはざのたゞ安かれと

### ●夢の浮橋 (京都)

源氏物語によりて其名高き夢の浮橋は泉涌寺に入らんとする山口に在り、是れ無常所の通路たる義より出でし橋名也。

### ●今熊野觀音 (京都)

泉涌寺の北方に當る山腹に在る今熊野觀音寺は、元山本左大臣緒嗣の邸宅を構へたる舊址にして眺望の佳絶なる此附近に比すべき所なし、其瀟洒たる觀音橋は亦詩材となる、藤井竹外のに曰く  
似報開梨飯正成。午鐘徐度一山鳴。  
記曾送客澁江上。月落烏啼聞此聲。  
因に宸翰は津輕伯爵家の秘藏也。



●平等院鳳凰堂 (京都市外)

平等院は宇治橋より南二里餘の所に在り、地元左大臣源融の別業なりしが、其薨去後、陽成天皇行宮を此所に築きて宇治院と稱し給ひ、宇多天皇及朱雀天皇亦離宮と爲し給へり、長徳年間に及んで復た藤原氏の手へ歸し、永承七年頼通之を改修して寺院と爲し平等院と號するに至れり。

平等院は天台宗にして三井寺に屬す、中央に位し北面せる本堂は即ち鳳凰堂にして、大閣の屋上に左右相對して碧銅の鳳凰を置く高さ凡そ三尺餘、風に順ふて翺翔の狀を爲す、堂形亦鳳凰の羽翼を張るに擬し、大閣の左右更に一間を置き、廊あり之に通ず、落々たる長松、堂を護り。其翠色は朱欄碧楹と映帶す、藤原氏の粹を披きたる建築として名あるだけ、外觀の壯麗、内容の結構、筆之を盡す能はず、堂の南位に佛壇を設け、小組折上二重合天井の欄間に三十五菩薩紫雲に乗じて奏樂する狀を刻し、黒漆丹腹五彩を以て之を飾り、覽者をして其蒼古絶美なるに驚かしむ、此本堂は特別保護建造物なり、又堂中に安置する所の長六尺の阿彌陀佛は法橋定朝作非凡の品なりと、螺鈿の天蓋、天井柱楹の彩色、扉面落書を以て満されたる爲成の筆等、悉く是れ美術上大なる價值を有するものならん、釣殿は河原左大臣垂釣の舊蹟結構甚だ堅牢の瓦屋にして是又特別保護建造物たり、釣殿の側に池あり池畔青芝氈を布くが如く、一松樹下一碑立つ、碑面に『扇之芝』と勒す、風雨七百有餘年短草昔の儘青く茂りて源三位頼政自及の當年を語る、往年補正成火を宇治の町家に放たしめて敵を計れる時、平等院亦兵燹に罹れるも僅かに奥堂寶藏を失へるのみなりき、日本三鐘の一と稱さるゝ古鐘は今猶鐘樓に藏

せらる、阿彌陀堂、法華堂、御堂、五大堂等皆な好位置に點在す。

●源三位頼政墓 (京都市外)

承治四年源三位頼政高倉宮以仁王を奉じ兵を擧げ、平等院に據り邀戦せりと雖も、平軍多數、壯んに肉薄し來るや頼政其敵し難きを悟り、宮を南都へ落し奉れる後

埋れ木の花咲くことのなかりしに

みのなるはてぞあはれなりけり  
の一首を詠じ扇の芝に自及せり、平等院内に在る頼政墓には常に香煙絶へず。

齋藤 拙堂

智勇人推一世雄 白頭舉事戰功空  
九泉不起源三位 枯木花開春風

●井堤の玉川 (京都市外)

玉川は井堤河とも稱せられ、六玉川の一にして、平時は流水なく川床地平より高きこと凡そ一丈俗に所謂天井川なり、近傍の者玉川と呼ばして水無川と言ふ、京都奈良間鐵道線玉水驛の西を流れて木津川に入る橘諸兄の井堤に別業を置ける頃萩及び棟棠を植えたるは此河畔ならんと傳ふ。又著名なる『井堤の玉水』は相樂郡木津町を距る一里三十町餘の所なり、舊記に依れば玉水町は豊臣氏時代要害地として築堤を施され、町の西岸に飯岡山ありて東岸に有玉山あり、慶長十九年大阪勢は玉水と天神森を扼して東軍を拒む計畫なりしを藤堂高虎に先制せられ其事成らずとあり、菅茶山の『玉水路上』の時に曰く

南都山翠北都連 淀水斜通笠置川  
壞道久無鑿略過 當歸芍藥滿春田  
家隆の歌に『さと人も今はみくさを打はらひ螢ばかりも玉の井の水』とあり玉の井は玉水驛の北に當る玉井寺の庭中に存す、玉井寺は律宗にして覺者阿闍梨の

開基に係る、此方面は昔の歌人によりて山吹、螢、萩、月、蛙等を詠まれたるもの、如し、蛙塚なるもの亦同寺に在り。

●井堤左大臣館址 (京都市外)

左大臣橘諸兄井堤の閑地を撰んで別館を築き光風霽月を友とせるより、時人呼ぶに井堤左大臣を以てす、其館址は玉水の東南三町餘字石垣の南、上村の東に西南展けたる山麓ありて稍々高丘の所是れ館址ならんと傳へらる、里民は之を上村臺と稱す、時に石垣礎石等の現はるゝ事ありと言へり。

續日本紀に天平十二年、天皇幸右大臣

(橘諸兄)相樂別業、宴飲酣暢、授大臣男無位奈良廣從五位下、と見ゆ此方面を詠める歌多し。

山吹はあやなく咲そ花見んと

うゑけん君が今宵來なくに

蛙啼く井堤の山吹さきにけり

花の盛にあはましものを

山城の井堤の玉水手にむすび

たのみしかひもなき世なりけり

井堤の山よそながらだに見るべきに

みねの白雲たちなへたてそ

●高倉宮社 (京都市外)

兜八幡の稱ある高倉宮は玉水驛の南鳥居に在り、高倉宮以仁王曾て此に閑居し給ひ頼政兵を擧ぐるや宮亦宇治に進ませられて、士氣の振興に盡させ給へるも、兵數足らざる爲め、味方將さに全滅せんとするや、頼政は殘れる兵の中より精兵を撰び、君は高貴の御身、敵も容易に危害を加へ奉ることあるまじ、臣は此所に於て最後の決戦に及ぶべく先づ撰べる精兵を従へさせられ南都へ赴かせ給へと言上せしかば、宮は宇治を去り此鳥居村の前まで到らせられたる時流矢に中りて薨じ給へり、里人は宮の御兜を奉じ宮祠落成の後之を神靈として鎮め奉りしなり。

源頼政墓

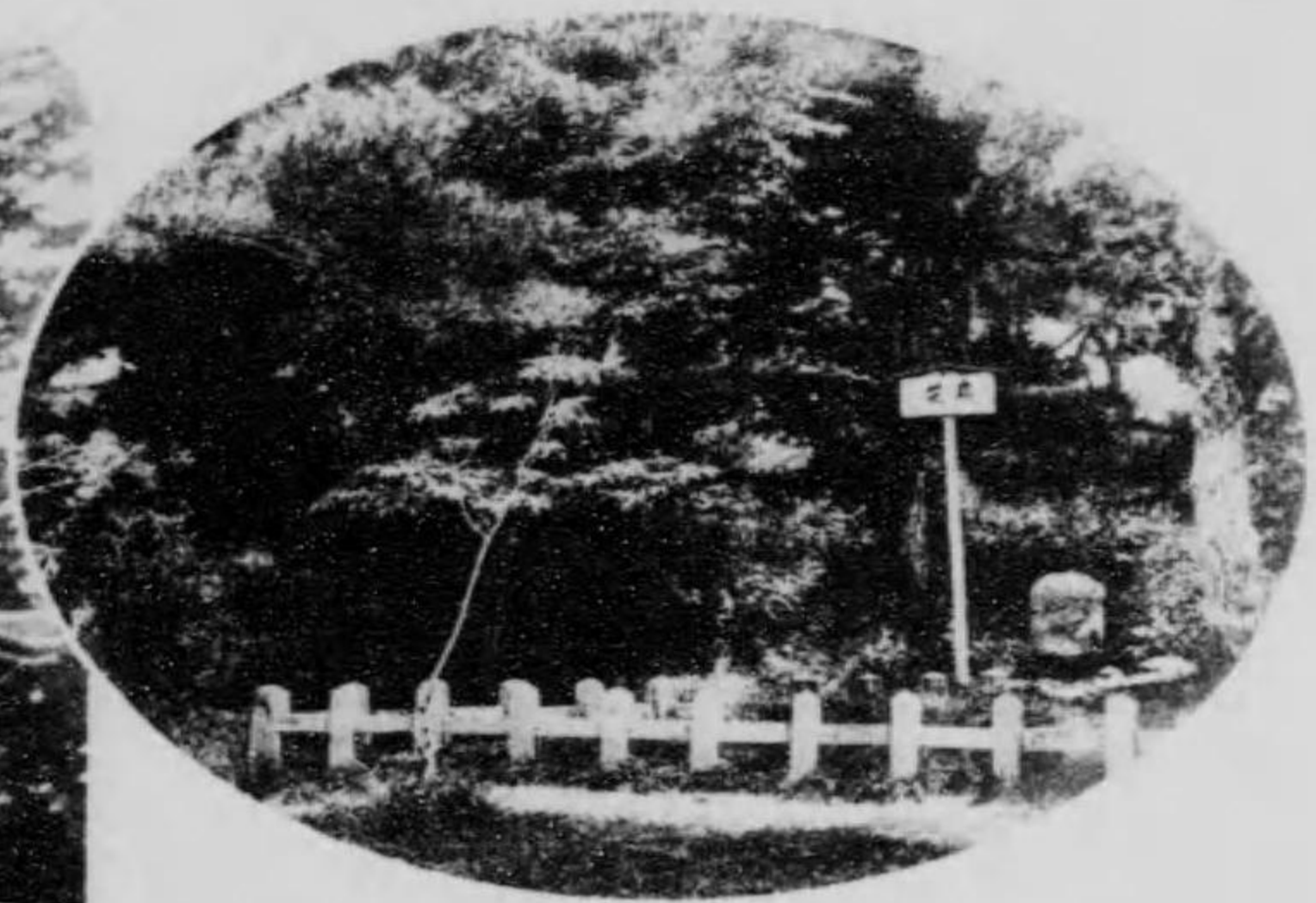
井堤の玉川



堂 鳳 鳳 院 等 平



芝 の 扇



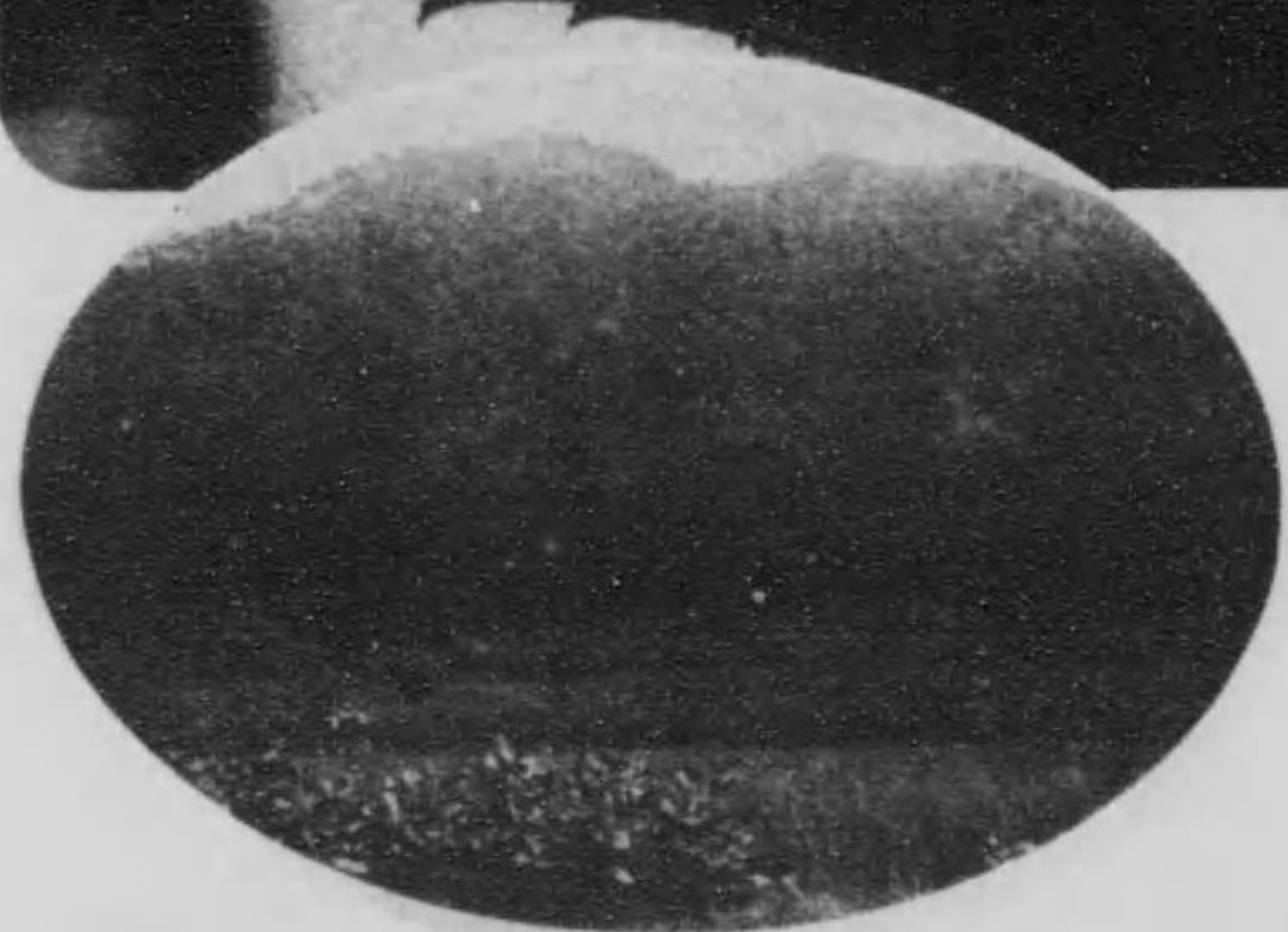
源 頼 政 墓



井 堤 の 玉 川



高 倉 宮 社



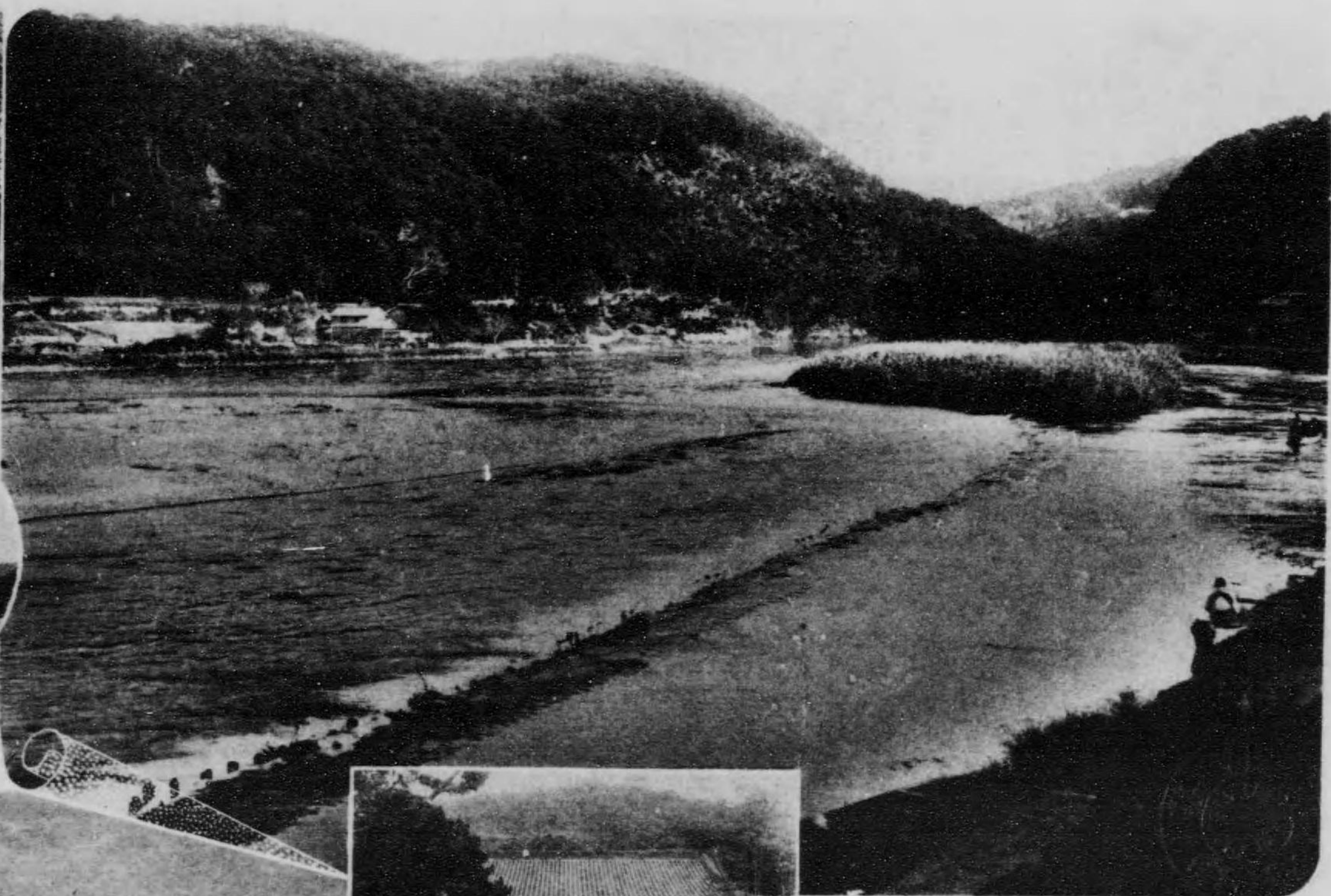
井 堤 左 大 臣 御 址

く、一松樹下一碑立つ、碑面に『扇之芝』の時に曰く  
と勅す、風雨七百有餘年短草昔の儘青く  
茂りて源三位頼政自及の當年を語る、往  
年楠正成火を宇治の町家に放たしめて敵  
を計れる時、平等院亦兵燹に罹れるも僅  
かに奥堂寶藏を失へるのみなりき、日本  
三鐘の一と稱さるゝ古鐘は今猶鐘樓に藏

の時に曰く  
南都山翠北都連 淀水斜通笠置川  
壞道久無變轍過 當歸芍藥滿春田  
家隆の歌に『さと人も今はみくさを打  
はらひ登ばかりも玉の井の水』とあり玉  
の井は玉水驛の北に當る玉井寺の庭中に  
存す、玉井寺は律宗にして覺者阿闍梨の

害を加へ奉ることあるまじ、臣は此所に  
於て最後の決戦に及ぶべく先づ撰べる精  
兵を従へさせられ南都へ赴かせ給へと言  
上せしかば、宮は宇治を去り此鳥居村の  
前まで到らせられたる時流矢に中りて薨じ  
給へり、里人は宮の御兜を奉じ宮祠落成  
の後之を神靈として鎮め奉りしなり。

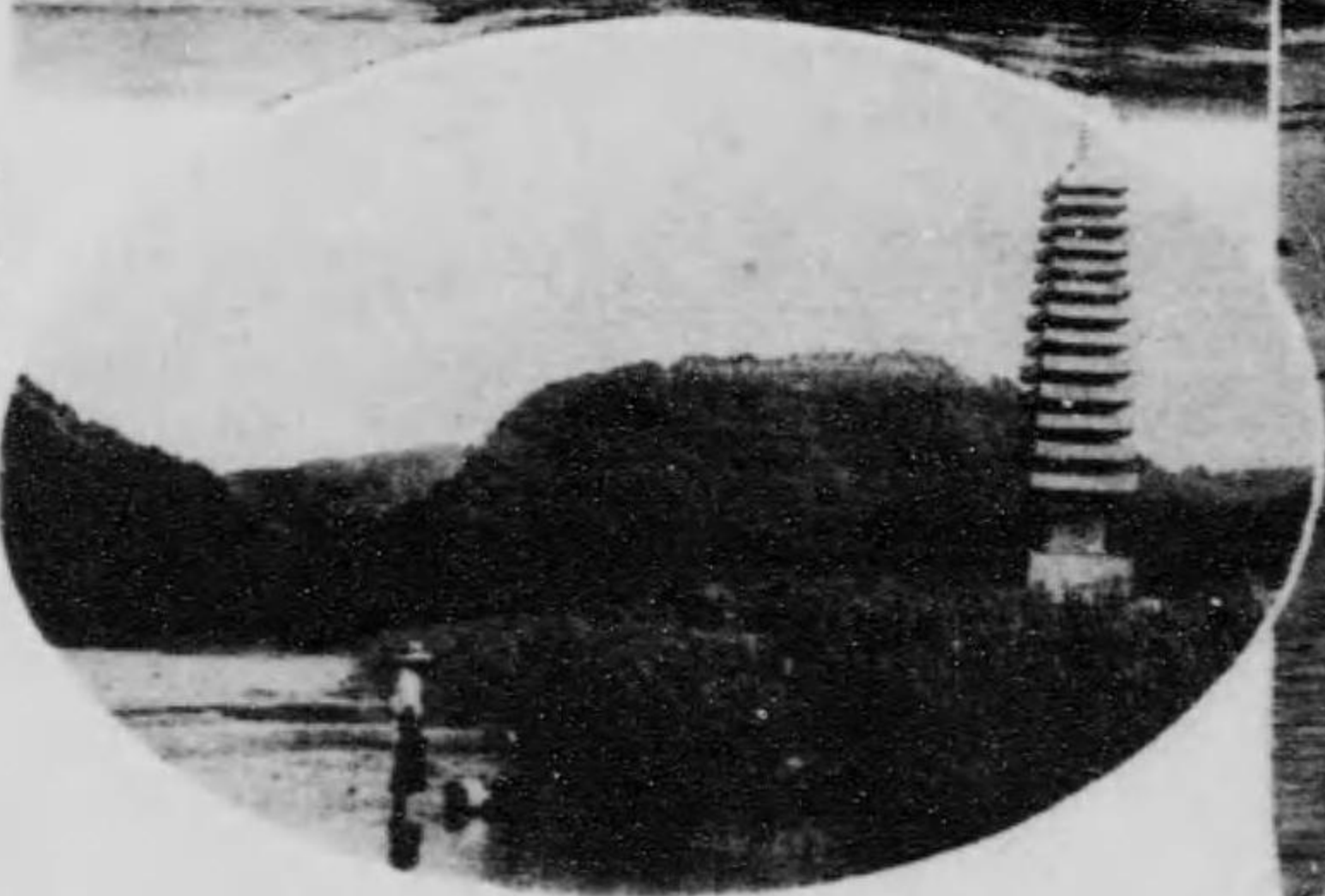




黄檗山萬福寺



浮島の多寶塔



宇治茶採(下) 興聖寺(中)



巨椋池

●黄檗山萬福寺(京都市外)

せしむ。

黄檗派の總本山たる萬福寺は宇治村大字菟道に在り、京都より奈良に向ふ汽車

●宇治橋(京都市外)

將さに宇治橋に近づかんとする前、左方

宇治橋は宇治川に架せる長橋にして、其長さ約百間、橋下の流れは溶々として

銘を撰みたり、然れ共當時碾茶廣く行はれ煎茶の需用狭く、寛政年間に及んで世間靡然として煎茶を好み普く上下に用ゐらる、天保六年に至り六世山本は小倉村





浮島の多寶塔

### ●黄檗山萬福寺 (京都市外)

黄檗派の總本山たる萬福寺は宇治村大字菟道に在り、京都より奈良に向ふ汽車將さに宇治橋に近づかんとする前、左方林篁の缺くる所、逶迤たる粉壁を見る、是れ萬福寺なり、當寺の開基隱元和尚は明國福州の人にして性は林、名は隆琦、隱元と號せり、隱元其母國明の衰ふるや承應三年を以て我國に渡來し、萬治三年公命により此地を賜はり、寛文三年に至り伽藍の建築成る、山門、天王殿、大雄寶殿、法堂、鼓樓、祖師堂、選佛場、伽藍堂、禪悅堂、牌堂、開山堂、浴室、壽藏、舍利殿、華嚴室等總て支那寺院の構造に倣ふ、寺域七萬七千三百餘坪に上る、蓋し近畿有数の巨刹なり。

せしむ。

### ●宇治橋 (京都市外)

宇治橋は宇治川に架せる長橋にして、其長さ約百間、橋下の流れは溶々として藍碧を溶すが如く、東部の山影は一帶の翠嵐を其上に曳き風光頗る秀麗なり、欄干の中央に橋板斗出して小欄を透らすものあるは、曾て豊太閤此處より茶を煎るの清水を汲ましめたる所にして爾來幾たびか橋梁の架換を爲せりと雖も、橋新たになりて構造依然たり、是れ當年を記念するに因る。

重野 成齋

緣野堂荒壁葉紛 相公遺構在河汾

一言價得專權罪 能爲邦家惜聖君

齋藤 拙堂

暫駐歸驂此倚欄 洛城春事已闌殘

新林一草江山面 萬碧樓頭把酒看

藤原 清輔

年經ぬる宇治の橋守こと問はん

幾世になりぬ河のみなかみ

### ●宇治の采茶 (京都市外)

宇治は茶の名産地として聞ゆ、相傳ふ足利氏の初世榊之尾の良種を此に移し裁へたるより名産となり、豊臣氏伏見に居り茶事盛行し貴顯相競ふて之を賞味したるより「宇治茶」の名大に著る。

徳川氏江戸開府に及び宇治を以て茶所と爲し茶師を置く、其精品を朝廷に献じ又江戸に送致せしむ、其運送を茶壺御用と稱し驛傳の特例ありき、宇治茶は其製大別して碾茶煎茶の二種と爲し、碾茶に濃茶薄茶の兩種あり、濃茶は専ら老樹より採製す、茗圃は宇治久世綴喜三郡の山野に散在す江戸茶師山本嘉兵衛は元祿の頃より幕府の命を被むり世襲して其業を弘む、元文三年宇治田原村に一種美色の煎茶を製せる者あり、四世山本嘉兵衛之を賞味して奇品と爲し「天上天下」の

銘を撰みたり、然れ共當時碾茶廣く行はれ煎茶の需用狭く、寛政年間に及んで世間靡然として煎茶を好み普く上下に用ゐらる、天保六年に至り六世山本は小倉村碾茶焙爐中に團珠を成すものを獲たり、香味絶佳なり即ち新製玉之露と號し世に弘む之を玉露製の嚆矢とす、其采茶期に至り、薰風一陣面を吹き快哉を呼ぶ頃、村娘幾隊紅裙を纏へし、桃色の袴に一樣の扮装、茶摘歌を高唱しつゝ、采茶す、亦是れ宇治名物の一なり。

芭蕉

山ふきや宇治の焙爐のにはふ時

### ●浮島の多寶塔 (京都市外)

宇治橋の川上二町餘に當る「浮島」の地は昔網代の在りし舊蹟なりと傳ふ、此島上の多寶塔は久しく河底に埋没せるを、再び發見せられて宇治河畔に屹立す。

### ●興聖寺 (京都市外)

興聖寺は朝日山の山腹に在り、道元和尚を開基とし中興の祖は萬安和尚にして曹洞宗の名刹なり、今の堂宇は慶安二年永井直正の再建に係る、其構造精緻を極め、就中本堂の結構の如き建築界に貢獻する所多しと言ふ、寺域廣く後に朝日山の秀麗を負ひ、麓に宇治の碧流ありて風光佳絶の地たり。

### ●巨椋の池 (京都市外)

巨椋の池は久世郡の北部に在り、其長徑南北四十町東西五十町、凸字形を成し、淀町其狹窄部に當る即ち湖口たり、昔は淀川の水流此に注ぎ一大曲江を成せるより巨椋の入江と稱せらる、平時は池狀を成すも霖雨期に入り宇治の水之に入れば一望浩渺の江灣となる、湖中蓮花多し。豊臣氏の時榊島向島小倉の諸堤防を起し宇治川と相区分し、徳川氏の時木津川の洪水動もすれば淀町を浸し巨椋の流末を激衝するを以て木津川を其南方に利導す、之より湖畔の四周淺淤となれり。



### ●北野天満宮（京都）

北野天満宮を以て開ゆる「官幣中社北野神社」は御前通一條北、字北野に鎮坐す、其祭神は菅公、即ち菅原道真たることは何人も能く知る所なり。

文暦元年村上天皇創めて之を奉祀し、正暦四年に至り正一位太政大臣を追贈せられ、寛弘元年には車駕行幸親しく玉串を捧げ給ふ、之を野行幸の起源と爲す。

現今の本社は慶長十三年豊臣秀頼の改造する所にして、南華表を入れれば石燈籠累々として路を挟み、臥牛の彫型亦甚だ多し、中門は本殿に續けり此門に掲ぐる「天満宮」の巨額は後西院天皇の宸筆に係るを以て「勅額門」と稱す、殿舎八字何れも舍檜皮葺にして特別保護建造物なり、本殿の前に一對の石燈籠あり、是れ靈元天皇の寄進し給へるものなれば其名最も高し。

廣潤なる境内に梅樹を多く植へ、老松蒼鬱として社殿を護り、西境紙屋川に沿へる高堤には亦多くの梅樹を植へ年々其數を加ふ、花時、紅白繚亂翠松の間に點綴し社頭の光景更に一層を添ゆるの觀あり、當社年中行事の主なるものは二月二十五日の梅花祭、四月二十日の明祭、六月九日の宮渡祭、八月八日の官祭等なり。

#### 文神としての菅公

文神としての菅公を叙するに先ちて聊宇多天皇の治世を略述せん。

宇多天皇は前朝に在りて姓を賜ひて臣籍に入り侍從に官せられ、前帝の大漸に臨み藤原基經の奏請に因り皇太子とならせられ遂に登祚あらせ給へり、是に於てか藤原氏の勢威益々加はり、動もすれば不臣の舉に出でんとす然れ共謙徳に富ませられたる帝は先朝の遺臣を優遇し給ひ、専ら國運の隆昌を念とし給へり。

寛平九年瑞雲變せりとの故を以て百

官賀表を上れる時、帝は更に怕び給はず「今や水旱相連り盜賊諸國に起る何ぞ賀すべけんや」とて却て服御供膳の費を減せられたり、帝徳の大なる此一事を以て

萬事を窺ひ得べし、其禪位に臨ませられ藤原時平菅原道真の二人者に輔弼を委ね給ひ、尙ほ訓誡を作りて皇太子に授けらる、世に「寛平御遺誡」と稱せらる、もの即ち是れなり、當時は平安朝の文學最も隆盛を極めたる時にして、良香、道真、廣相の外清行、長谷雄、菅根等ありて詩に文に其巧緻殆ど漢人に譲らず、和歌は萬葉秀渾の體、化して閑麗婉雅となり、遍照、業平、康秀、黒主、喜撰、小町等彬々として見はれたり、道真是朝に在りて輔弼の重任を盡し奉り、野に在りて文學の隆興に努め、渾身の誠を以て内外百般の事に當れり、而かも温厚の長者たりし道真是、事能國家の重大問題と視るや、平素の温厚は熱烈となり、至誠抑ふる能はずして飽くまで論じ、其解決を見ずんば止まざりき、此場合の道真是眼中に權者なく情緒なく唯だ至誠あるのみ。

#### 凜然たる意氣

彼の阿衡問題の起るや、滿朝盡く基經の鼻息を窺ひ、天下皆な藤原氏に阿附す、此時に當り道真獨り正義を持して起ち、威武に屈せず權勢に恐れず、一文を基經に與へて反省を促せり、所論公平にして侃諤、事理井然として割切、一點の私心なく、芳烈なる意氣は凜然として秋霜烈日の如し、暴慢なる基經も理義の前には如何ともする能はざりしなり。

而して檢稅使問題の喧囂を極めたる時に及んで、藤原氏の弊竇を指摘し、以て忌憚なく肉薄し茲に漸く政治的手腕を揮へるが如きは、頗る痛快に屬す、其太宰權帥に遷されてより以降一日も皇恩を忘れざりしは、至誠によりて生き、至誠に

よりて終焉を完ふせるものたらんば、嗚呼偉なる哉神徳。

### ●平野神社（京都市外）

平野神社は衣笠村小北山に在り、官幣大社にして元大和國に在りしを延暦年中衣笠山の東麓に遷し後又現今の所に奉祠せり、本社は朝廷の崇敬最も厚く、圓融天皇以來歷朝聖觀を枉げさせ給ひ、苟も國家異變の際は事大小に拘らず、朝臣をして幣帛を奉せしめ、年毎の平野祭も嚴重なりき、降りて永祿年間大に頽廢せしが寛永年間再び復工し、明治十四年更に修繕を加へ以て現今の莊麗を致せり。

本社は東面にして五棟あり、其第一殿に日本武尊、第二殿仲哀天皇、第三殿仁徳天皇、第四殿は天照太神を祀り東の別殿は縣社と言ひ天穗日命を祀る、拜殿は本社と共に故らに接材を用ひたり、建築上の模範とするに足るべし、

### ●鞍馬山と大杉（京都市外）

京都北方の名嶽たる鞍馬山は三條大橋を距ること三里の地なり、路を鞍馬口に取市原を經るを以て順とす。

山は亭々たる老杉全山を蔽ふて晝猶は暗く夏日と雖も寒さを覺ふ、纒々たる崖岩逕路を造りて攀躋容易ならず、山上一寺あり名けて松尾山鞍馬寺と言ふ、延暦十六年中太夫藤原伊勢人の草創する所にして、今の堂は明治四年の再建に係り毘沙門天を本尊とす堂前より東を望めば比叡山の相輪堂遠く望中に入り、數多の峯巒脚下に起伏して波濤の怒るが如く、眺望壯絶、堂の左方より尙ほ山嶺に攀づれば行くところ十三四町にして大杉あり、其大さ殆ど六圍繞らすに注連を以てす、傳へて天狗の棲處と言ひ、大杉を「御杉」と言ふ、僧正ヶ谷は此所より六町餘の下方なり。

北野天満宮樓門



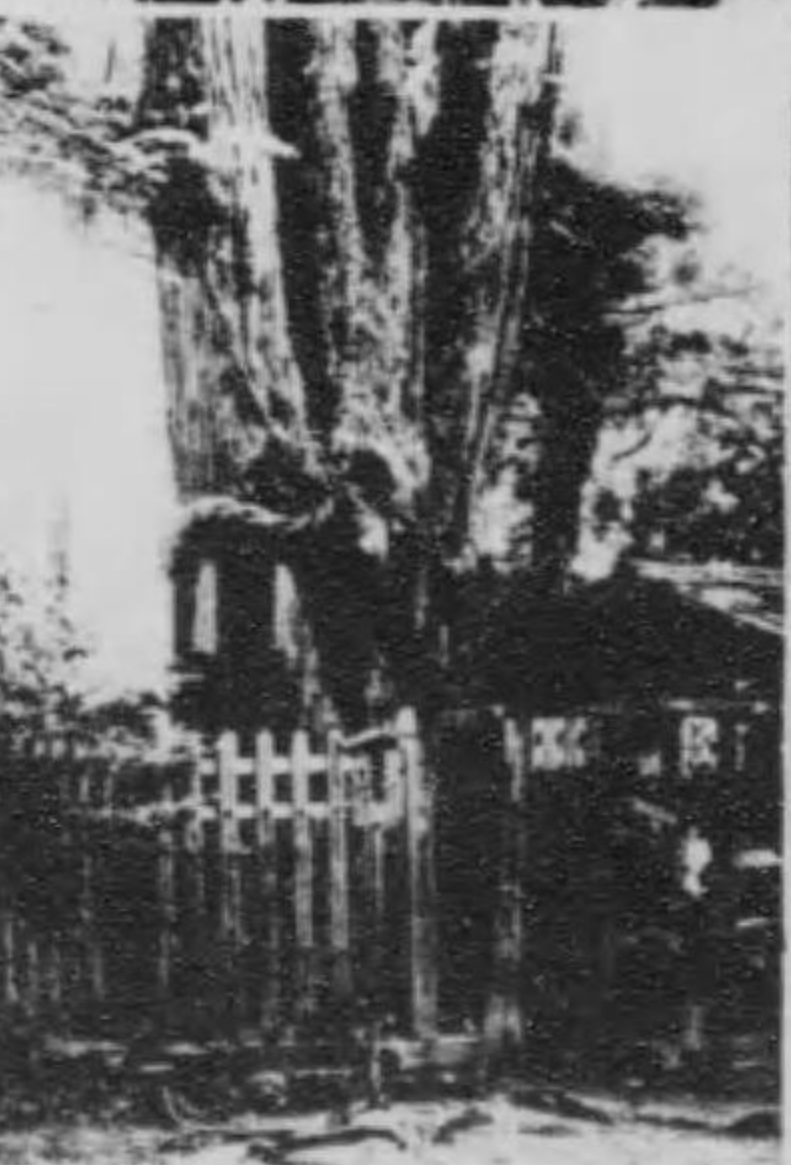
鞍馬山全景



鞍馬寺



平野神社



鞍馬の大杉

上ノ二五



北野天神宮



北野天神宮樓門



鞍馬山全景



鞍馬寺木堂

か藤原氏の勢益々加はり、動もすれば不臣の舉に出でんとす然れ共謙徳に富ませられたる帝は先朝の遺臣を優遇し給ひ、専ら國運の隆昌を念とし給へり。寛平九年瑞雲變起せりとの故を以て百

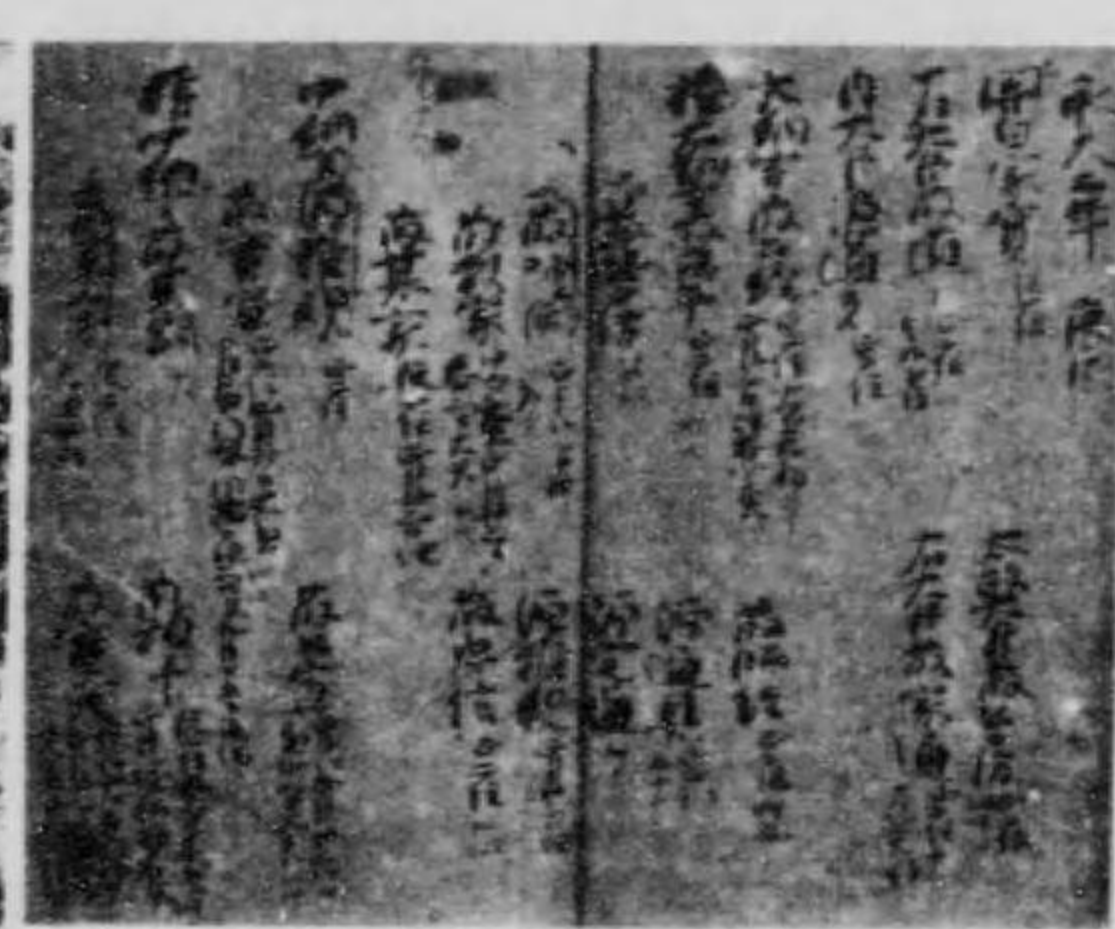
に及んで、藤原氏の弊資を指摘し、以て忌憚なく肉薄し茲に漸く政治的手腕を揮へるが如きは、頗る痛快に屬す、其太宰權帥に遷されてより以降一日も皇恩を忘れざりしは、至誠によりて生き、至誠

れば行くと十三四町にして大杉あり、其大さ殆ど六圍繞らすに注連を以てす、傳へて天狗の棲處と言ひ、大杉を「御杉」と言ふ、僧正ヶ谷は此所より六町餘の下方なり。



院 王 御

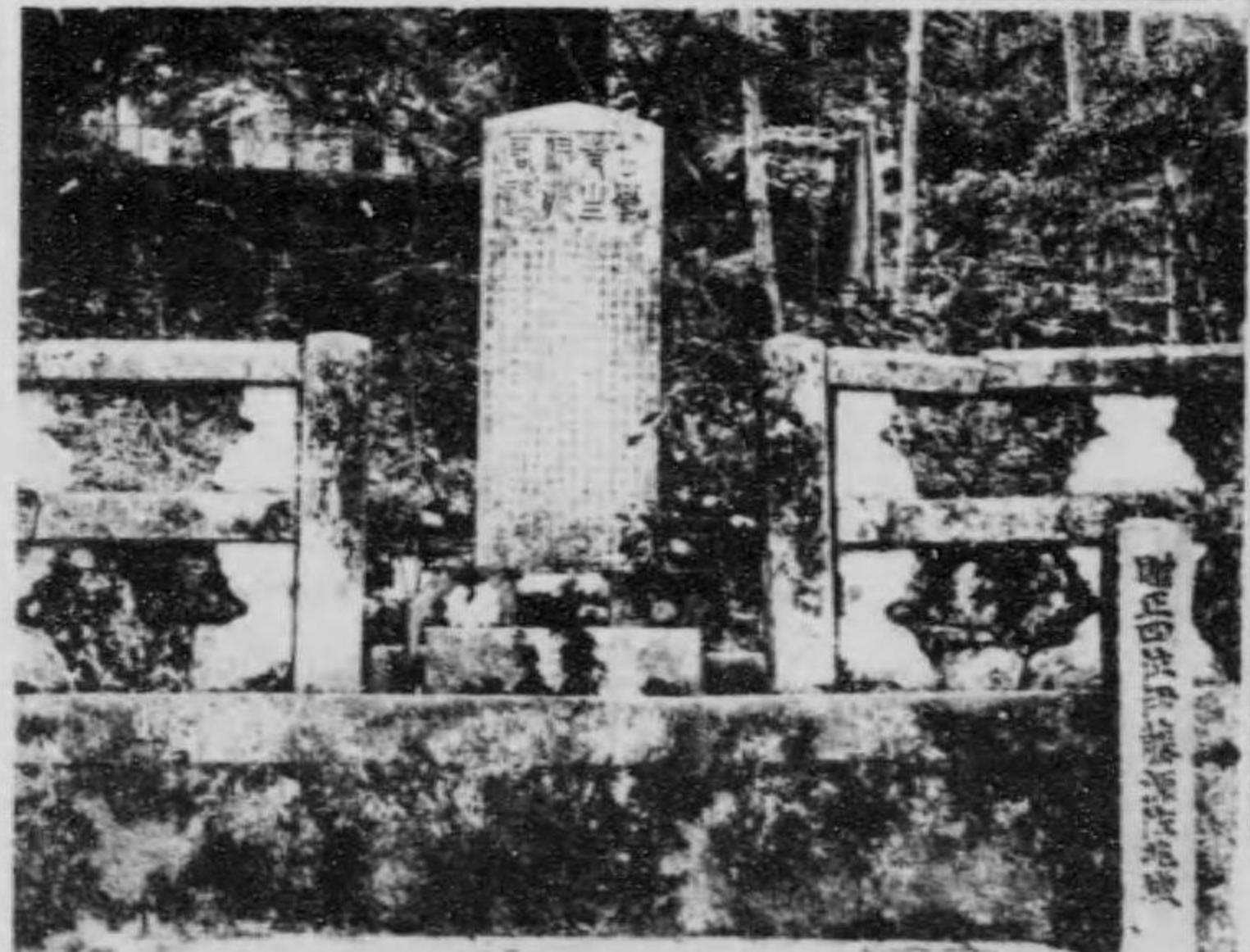
亭 雨 時 跡 遺 郷 家 定



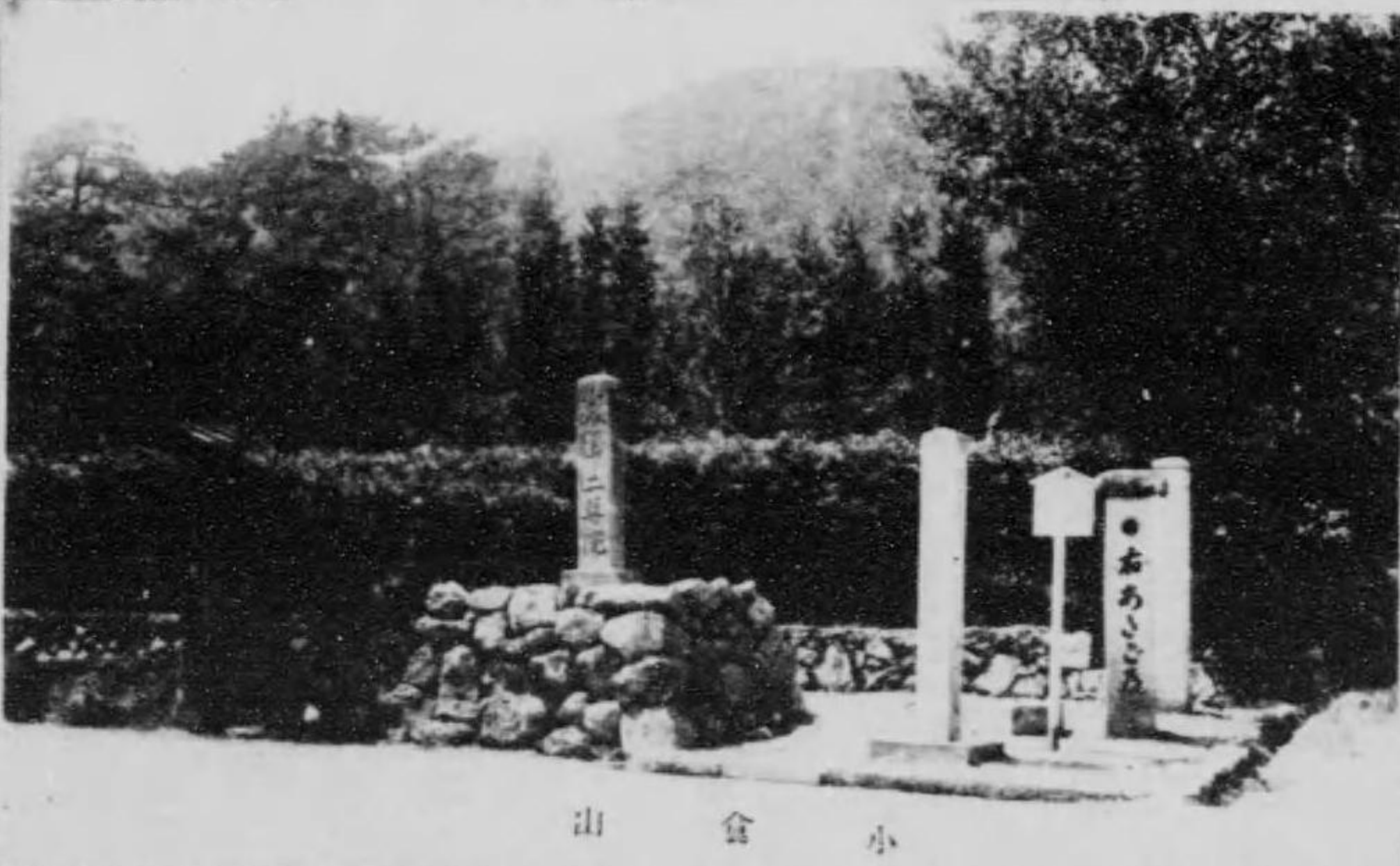
定家郷筆蹟



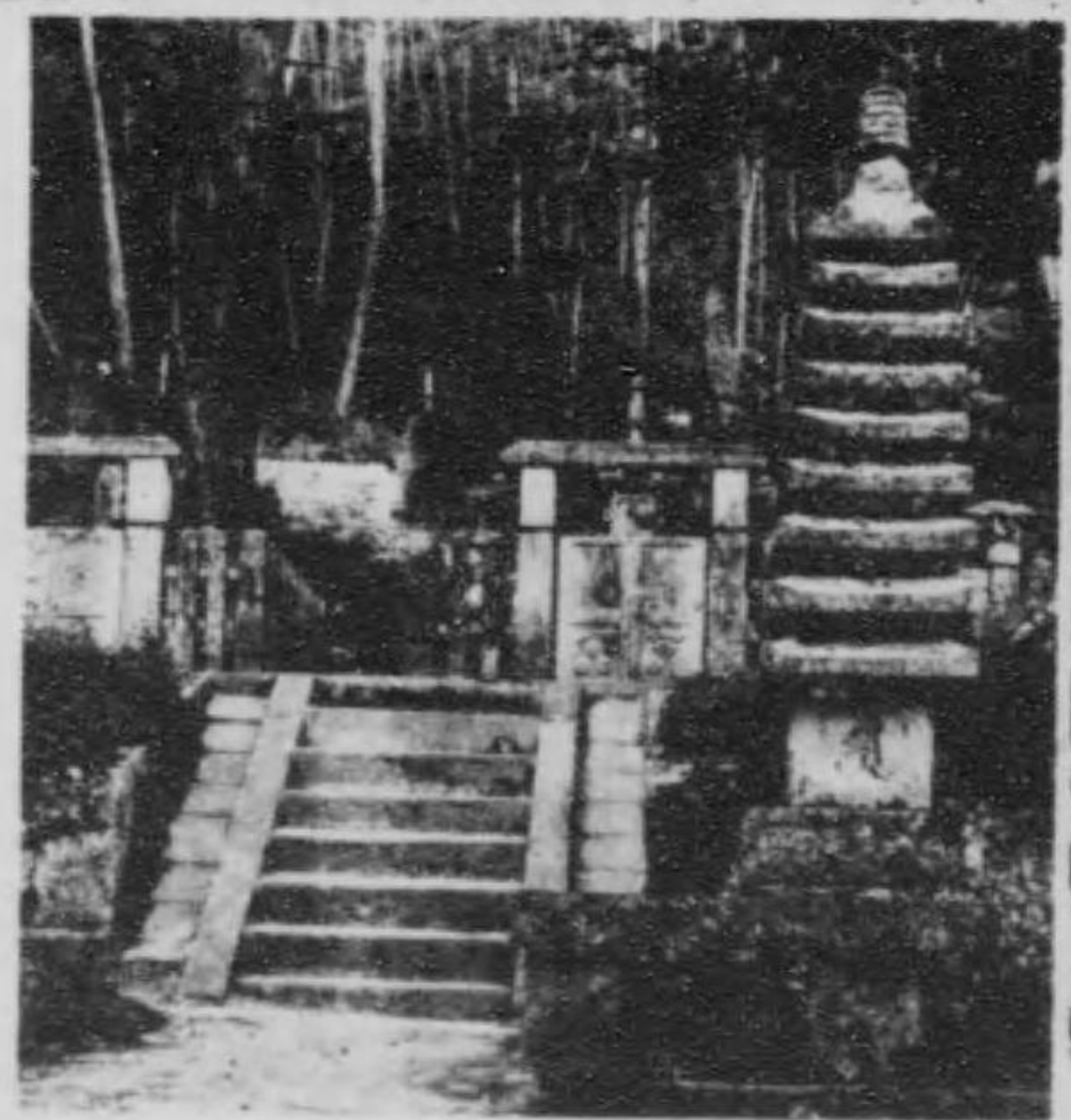
定家郷山莊遺址、柳の井



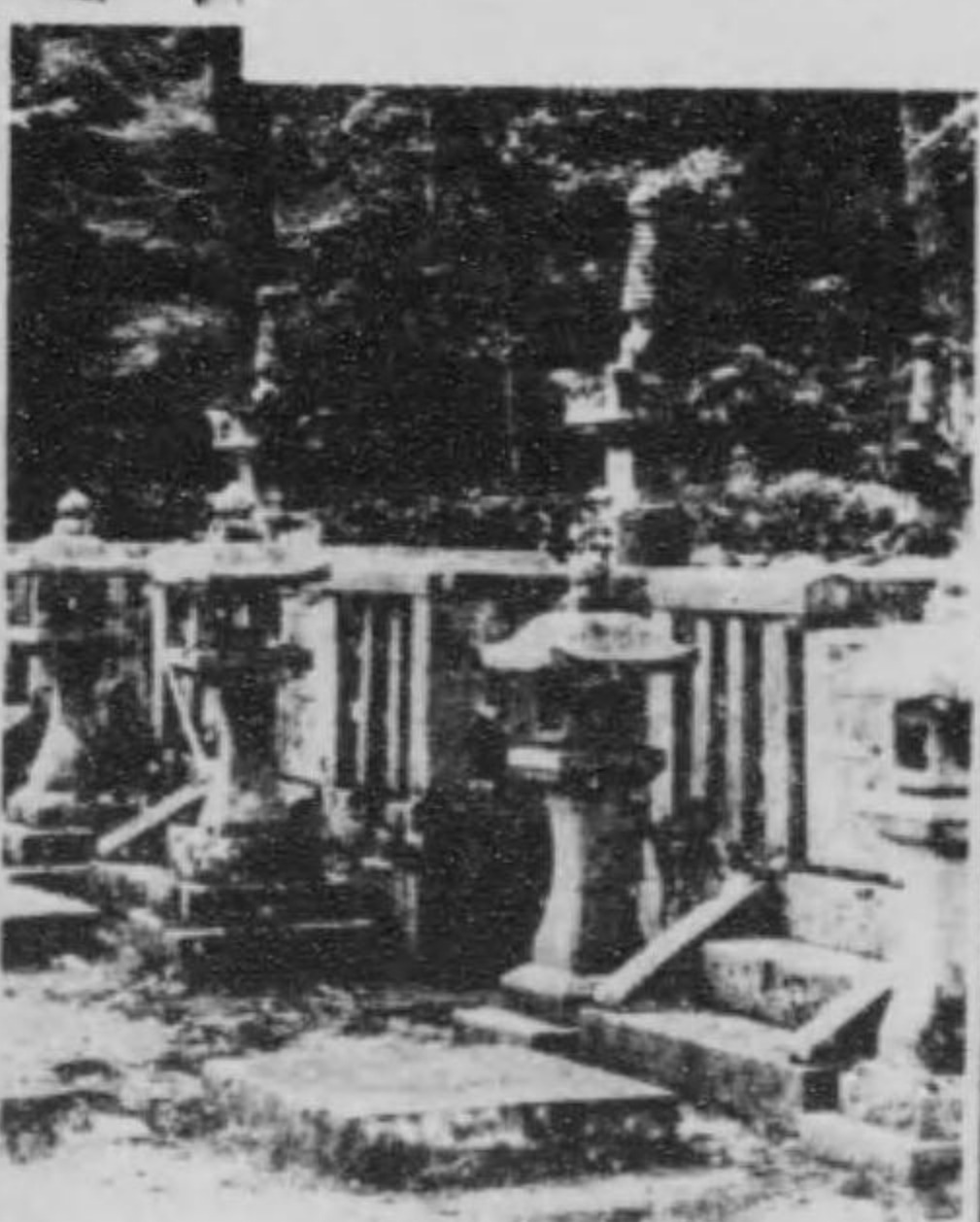
伊藤仁齋墓



小 倉 山



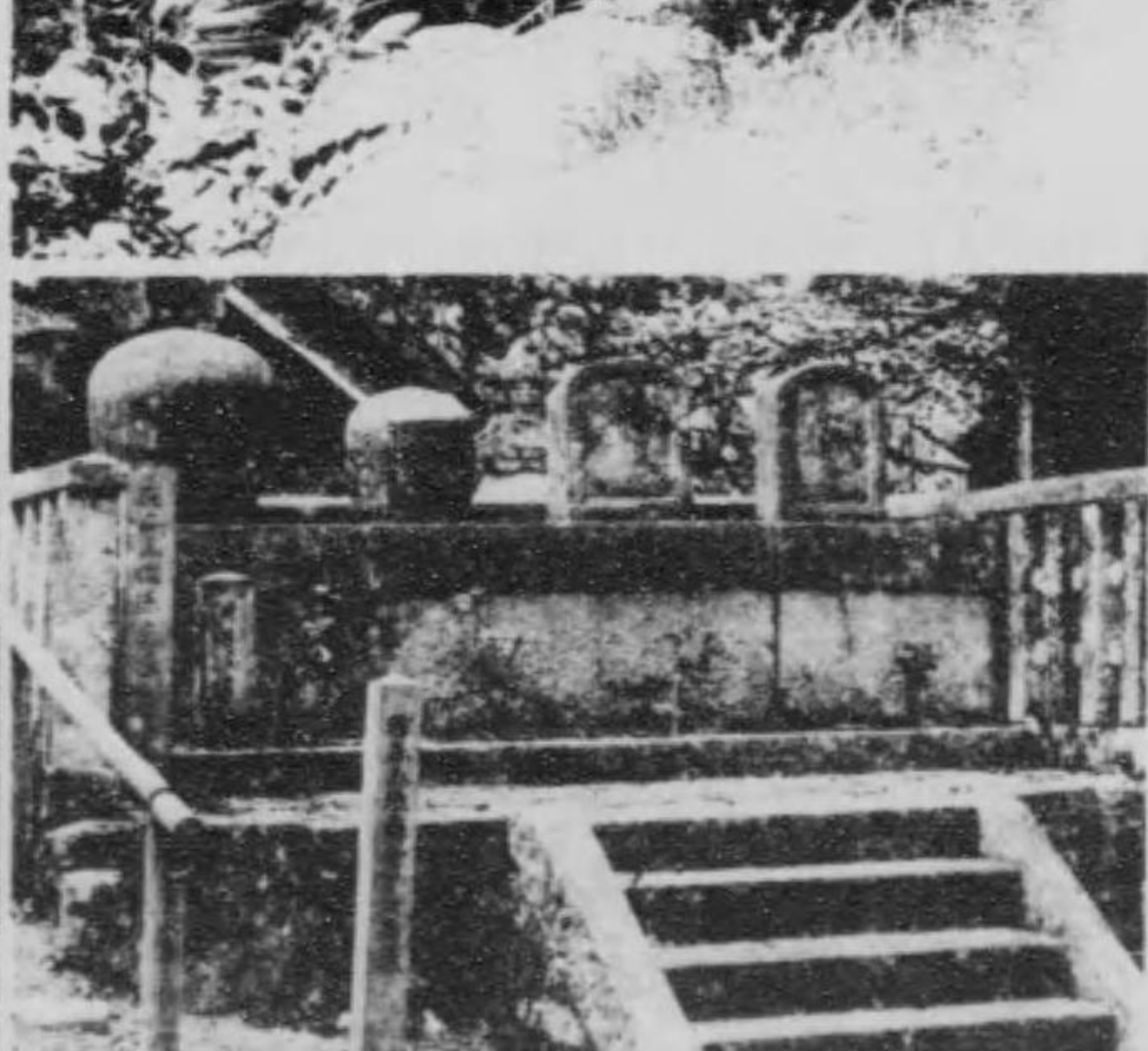
三 條 家 廟



二 條 家 廟



磨 司 家 廟



角 倉 了 以 墓

●小倉山 (京都市外)

嵯峨村の西方に在り。一に隠棕山に作る孤峯にして山甚だ高からざるも風趣に富む。昔は此附近一帯の稱なりしも、今

任ず、後ら堀河天皇の御宇勅命によりて「新勅選集」を選む。定家文學に秀で和歌に長じ詩文を能くし兼て和漢の史傳を涉獵し、學才當時に卓出したるも其性輕佻の嫌ひなき能はず、其歌の如きも往々

に多大の功績ある人、碑石の文は當代の碩儒林羅山の選する所なり。了以、本姓は吉田、後角倉と改む。吉田宗經の子にして初め與七と云ひしが後了以と稱す、天性工事に長ず、慶長九年





伊藤仁齋墓



廟

### ●小倉山 (京都市外)

嵯峨村の西方に在り。一に隱椋山に作る孤峯にして山甚だ高からざるも風趣に富む。昔は此附近一帯の稱なりしも、今に二尊院の上方の山を云ふ。二尊院は其麓にあり。山は東南に延長して龜山となる。西南麓は桂川を隔て、嵐山に對す。

兼明 親王

小倉山かくれなき夜の月影に

明石の濱を要ひこそやれ

貞信 公

小倉山峰のみむち葉心あらば

今一度の御幸またなん

### ●定家山莊の址 (京都市外)

愛宕山路の北傍に在り。即ち清涼寺の西、二尊院の北に當る。藤原定家嘗て茲に山莊を造りて住せり。彼の著名なる百人一首は蓋し此山莊に於て選せるものなり。山莊は小倉中院址と傳ふ。蓋し定家其子爲家ともに中院大納言と稱す。

### ●時雨亭 (京都市外)

是れ嘗て藤原定家の作りて幽棲せるもの一名厭離菴と號す。小倉山中院址に在り。定家後ちに同亭を其子爲家に傳へ領せしむ。古人が嵯峨秋興の時に「風淒素女彈琴宅木落黃門聽雨亭」の句は蓋し時雨亭を吟せるものなるべし。

藤原定家は俊成の子にして後白河法皇の朝に仕へたるが、嘗て源雅行と爭論せる事あり、其際雅行を打撲したる罪に坐して除籍されしに法皇聞し召して憫み給ひ本位に復せらる。建仁中左近衛權中將に任し美濃介となる。定家唱歌の才に秀でたるを以て後鳥羽上皇の寵を得、天文の初め上皇「新古今集」を撰し給ふに當り、異数の優待を蒙りて定家の詠歌を部首に編入さるゝの榮を得たり。安貞元年累進して正二位に陞り、次で權中納言に

任す、後ち堀河天皇の御宇勅命によりて「新勅選集」を選む。定家文學に秀で和歌に長じ詩文を能くし兼て和漢の史傳を涉獵し、學才當時に卓出したるも其性輕佻の嫌ひなき能はず、其詠歌の如きも往々質實を缺くものあり。然かも其手腕技倆に至つては到底當時の平凡歌人の企及する所にあらず。天福元年祝髮して明靜と號し、仁治二年八月二十日八十歳を以て薨す。

### ●鹿王院 (京都市外)

下嵯峨村の北方臨川寺の東に在り、覺王山と稱す、北山鹿苑寺の舊院にして足利義滿の創建に係る。臨濟宗にて普明國師妙葩の開基なり。康曆年中義滿普明の爲めに寶幢寺を創建し、禪家十刹の一に班したり。其後普明北山の鹿苑を興し、寶幢寺は廢絶に歸したるが寶文年間再興して鹿王院と改稱する事となりたるが、今僅に其佛殿を存するのみ。

### ●伊藤仁齋墓 (京都市外)

小倉山の麓なる二尊院中に在り。仁齋は京都の人、十一歳の時大學の治國平天下の章を読み慨然として奮起する所あり、自ら刻苦精勵して學を修め専ら古學を唱道し、門戸を堀川に張りて後進を訓ゆ依て以て堀川學と稱せられ、名聲噴々として傳へらる。仁齋母に仕て至孝、其母病む事三年に及ぶも一日も孝養を忘らす、偶ま細川侯の招聘する所となりしも孝養を缺くの故を以て應せざりき。當時門弟の數三千に上り全國僅に飛騨、佐渡、壹岐の三國を除くの外、其門生の在らざる國なし又京を過る者にして仁齋の門を訪はざる者稀なりき、寶永二年三月十二日病で歿す享年七十九。

### ●角倉了以墓 (京都市外)

小倉山二尊院に在り、是れ保津川凌撃

に多大の功績ある人、碑石の文は當代の碩儒林羅山の遺する所なり。

了以、本姓は吉田、後角倉と改む。吉田宗經の子にして初め與七と云ひしが後了以と稱す、天性工事に長ず、慶長九年事を以て美作國に赴き、途次和計川の高瀬船を見て以爲らく百川悉く舟行し得べからざるもの無しと、直ちに嵯峨に歸り大堰川を遡り丹波國保津川に至る、湍石兩岸に薄り、辛うじて筏の通するのみ、了以其舟行すべからざるを知り、翌年其子玄之を江戸に遣はして河川開鑿の事を幕府に請ふ所あり。該工事にして成功せんに山丹二州の幸福する大なるものにて幕府は之を許可せり。茲に於て了以は慶長十一年三月より鋭意大堰川開鑿工事に着手し、機械動力の未だ絶無なる時代に於て僅に轆轤繩、鐵槌等を使用し、人夫を督勵し、刻苦、慘憺を重ねて同年八月全く竣成し、爾來丹波世喜村より嵯峨に至る貨物の運搬は非常なる便を得て民大に其利福を蒙るに至れり。翌十二年の春又命を奉じて駿州富士川を凌撃し以て岩淵より甲斐に通ずる航路を開鑿せり、十三年更に信州諏訪より遠州掛川に至る天龍川の激流を開鑿す。此年京都大佛殿造立の舉あり、了以また大樹巨名の用材を容易に運搬して世人を驚嘆せしむ、九年富士川工事竣工と同時に病に罹り六十一歳を以て歿す死に臨み遺囑して其木像を作り之を大悲閣上に置かしむ。

### ●三條、二條、鷹司三

家の廟 (京都市外)

是れ亦二尊院に在り、二尊院は境内東に面す、天台、眞言、律宗、淨土の四宗兼學なり、本尊は釋迦、阿彌陀の二尊なるを以て寺號を茲に採る。前記の他に巖峨、土御門、後嵯峨三帝の塔及び法然上人の廟あり。



嵯峨野 (京都市外)

宇多野より紫野に續く汎稱にして、萬野郡に屬す。宇多野以西は上嵯峨、下嵯峨の二村に分れ、往時は嵯峨天皇此地に別館を置かせられたるを以て、歷朝高貴の邸第少からず設けられたり。嵯峨野は即ち此附近に在りて、七條より丹波に通ずる路に當れり。古來此地に幽棲隱遁せるもの少なからず、従つて歴史上亦忘るべからざる地として記憶せらる。

嵯峨懷古 井上 四朗

數里尋幽古帝鄉 吟行先吊入山莊  
王孫不返靡蕪老 驛客空餘蘭芝香  
亭古雨聲添慘愴 林昏松韻鎖荒涼  
廢家名跡知何處 但有閑雲生壁牖

手毎いぞ人は折りける君が爲め

行末遠き嵯峨の野の花

小督局墓 (京都市外)

嵐山の麓、大堰川の北岸、竹林の中に古色蒼然たる一基の古墳あり、傳へ曰ふ是れ小督局の墓なりと

小督局は權中納言藤原成範の女にして容姿優れ、且つ彈琴を善くす、召されて宮中に仕へ、高倉天皇の寵を受けしが、平清盛の爲めに疾まれ、潜に宮中を逃れ出で、嵯峨野に通れたるを高倉帝深く之を戀み給ひ、彈正大弼源仲國を召させられ旨を含めて小督が行衛を索めしめらる、仲國畏みて八月中旬の月夜、嵯峨野に小督の隱家を訪ひし事は「平家物語」に詳記せられて人の知る所なり。斯くて小督は再び宮中に入り以前に倍して寵せられ慶程もなく坊門院を生む。茲に於て清盛益々憎み怒つて小督を捕へて尼となせり、小督後ち終に大堰川に身を投じて死す。

因に云ふ、小督が墓なるもの別に清閑

寺にも存す、蓋し清閑寺は小督が尼となりて佛に仕へし寺なり、其孰れが真正の墳墓なるを知らず。嵯峨には又仲國の塚なるものも存す、或は是れ後人の好事に出でたるものなるやも計り難し。

祇王寺 (京都市外)

中院の西、小倉の北、山下に在り、即ち是れ古への往生院なり、淨土宗に屬する尼寺にして阿彌陀佛を本尊とす。當寺は昔時西方の山上に在りたるが、彼の平相國清盛の嬖妾祇王、祇女、止知、佛等の通世して此寺に隱棲したる以來遂に祇王寺と稱して、往生院とは呼ばざるに至れり。此の四女の事は「平家物語」に詳しく載せたり。尙當寺の佛殿に前舉四女の尼像を置けり、又當寺に清盛塔なるものあり。

祇王、祇女、佛の墓

(京都市外)

共に祇王寺境内に存す。

祇王は近江國野洲郡に生る母を刀自と云ひ、妹を祇女と云ふ、共に京都に出でて白拍子を以て業としたるが、平清盛に召されて西八條の邸に居りたり、後ち寵を佛御前の爲めに奪はるゝに及び「萌出づるも枯るゝも同じ野邊の草何れか秋に逢はで果つべき」の一首の和歌を残して母妹を従へて嵯峨野に通れ、小庵を結びて佛道に入れり、當時祇王年廿一、祇女は十九歳、刀自は四十九歳なりき。

佛は白拍子の妙手として知らる。加賀の人、容姿艶麗、今様歌を善くす。清盛の邸に召されて寵を受けつゝありしが、祇王の去るに臨みて殘せる和歌に感動し、跡を追ふて亦嵯峨野に隠れ、祇王を訪いて剃髮し同居して身を終れり。

勾當内侍幽棲地

(京都市外)

嵐山渡月橋の北詰を西に入りたる北側

に在り。碑面は碧苔蔽ひて古色蒼然たり。是れ延元の昔、新田左中將義貞の嬖妾勾當の内侍が幽棲の地なりと傳ふ。内侍は義貞が北國出征の後、別れて獨り京洛に留まり在りたるが、延元三年義貞越後藤島の戦に於て戦死し、其首級は京洛に送られ三條河原に曝さるゝや、内侍は悲みに堪へず、夜潜かに其首を獲て之れを葬り、其地に幽棲して身を終りたりと云ふ。

新田義貞の首塚

(京都市外)

祇王寺境内に存す、即ち是れ三條河原に曝されたる義貞の首級を勾當内侍が潜に盗み獲て茲に埋葬せるものなり。太平記の記す所に據れば義貞自ら首を掻切て泥の中に隠し其上に横はりて死せるを氏家重國畔を傳ひ走寄て首を取り黒丸城へ馳歸りたりと云ふ。

大覺寺 (京都市外)

嵯峨村の中央、大澤池の西方に在り。此地小字を北嵯峨と云ふ。當寺の歴代法親王入嗣の貴寺たりしを以て境内閑淨にして殿堂高潔なり素と嵯峨天皇の山院なりしが淳和皇后御願に依り恒寂親王開闢して眞言の道場となれり、現在藤殿は貞享三年宮中紫宸の舊稱を移し、御冠の間は後宇多法皇當院聽政の昔御冠を置き給へる典故を傳ふ。

大澤池 (京都市外)

「大澤の池の景色は古りゆけぞかはらず澄める秋の夜の月」と俊成卿の詠みたる大澤池は大覺寺の東に在り池中に築石ありて菊島と呼べり。該池は素と大覺寺内の一觀なりしと云ふ。

紀度 則

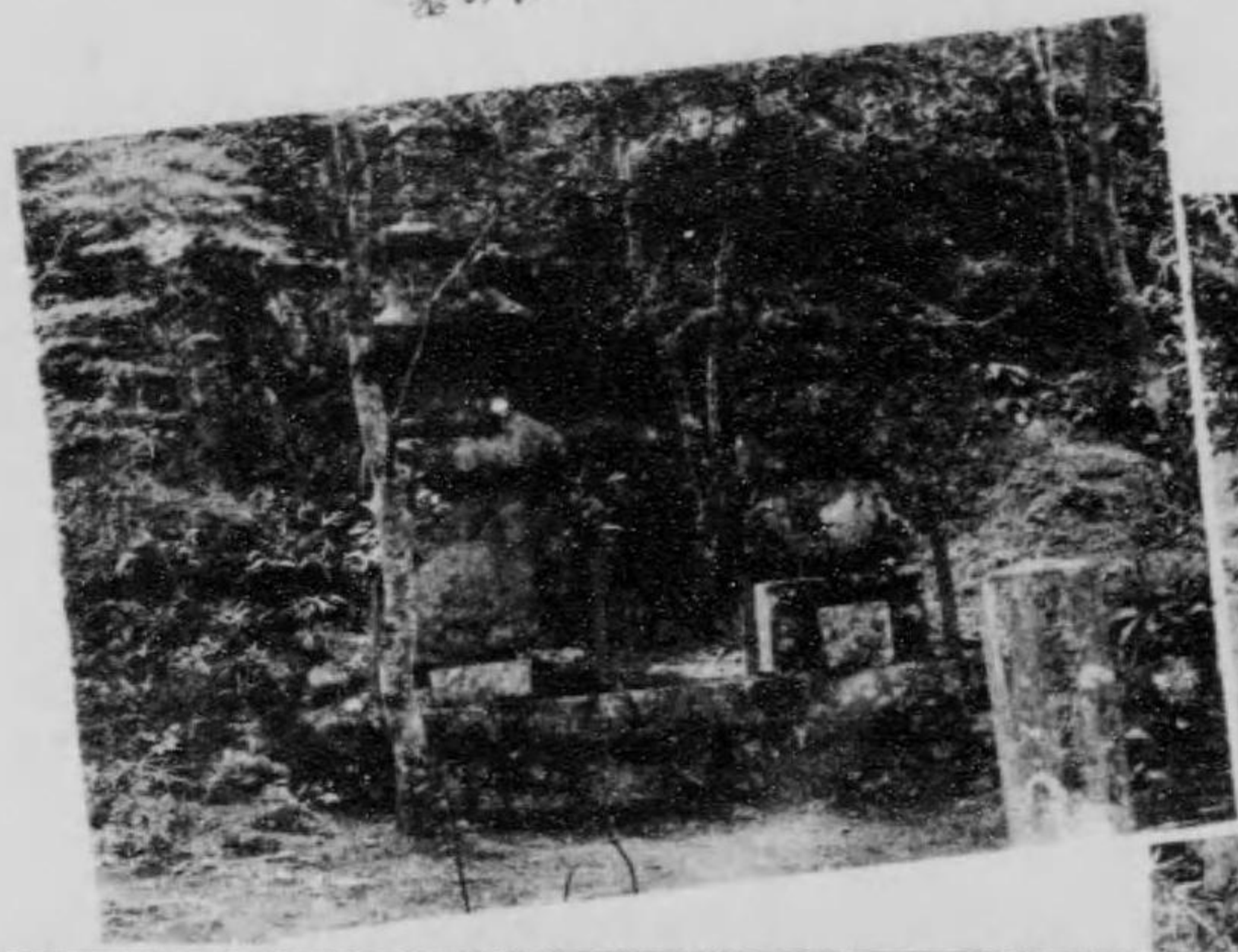
ひともと、思ひし菊を大澤の

池の庭にも詠めつるかな

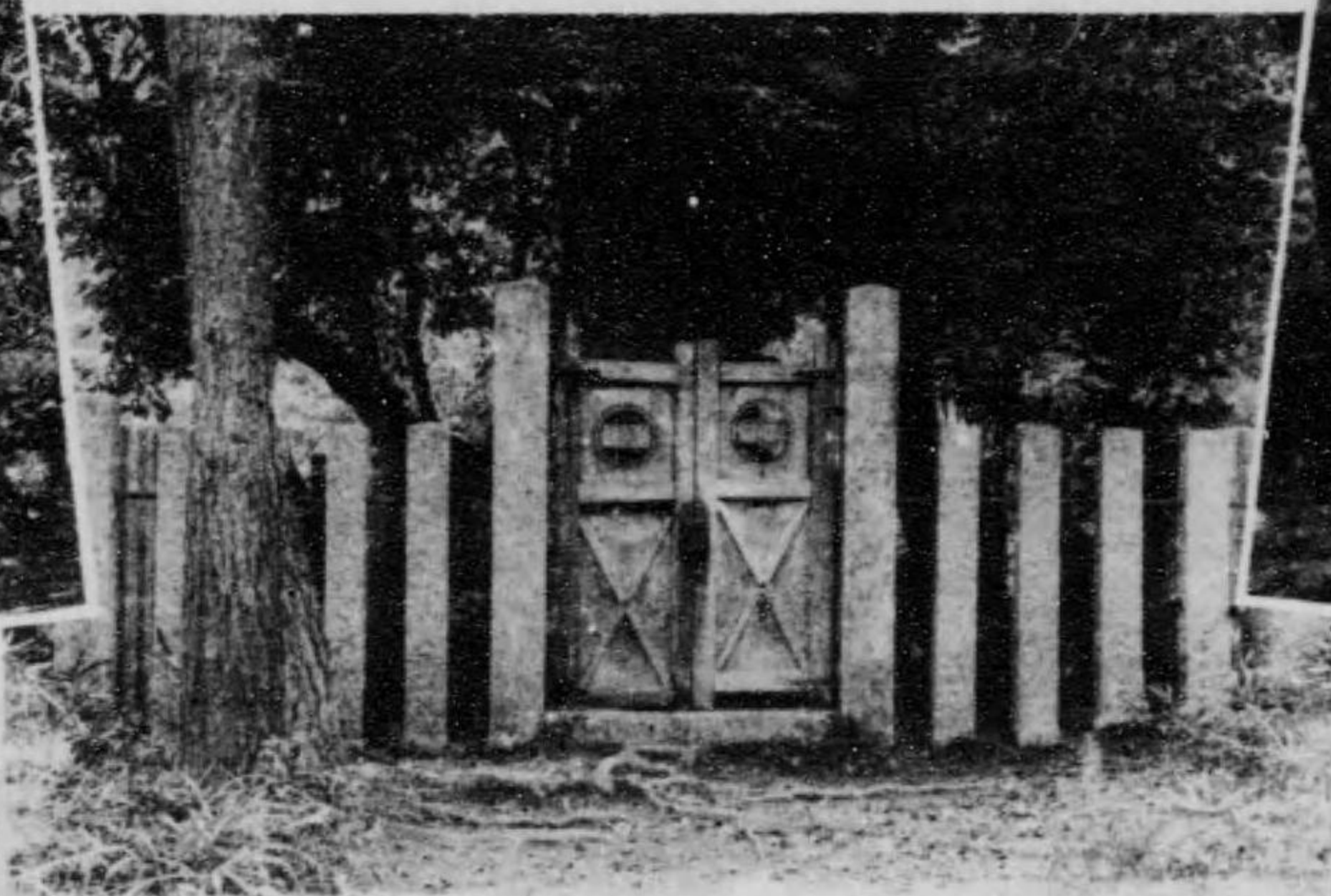




墓の佛及女祇王祇



塚首貞義田新



寺王祇



勾當内侍幽棲地



大覺寺



幾程もなく坊門院を生む。茲に於て清盛益々憎み怒つて小督を捕へて尼となせり、小督後ち終に大堰川に身を投じて死す。

因に云ふ、小督が墓なるもの別に清閑

し、跡を追ふて赤嵯峨野に隠れ、祇王を訪いて剃髮し同居して身を終れり。

●勾當内侍幽棲地

(京都市外)

嵐山渡月橋の北詰を西に入りたる北側

りて菊島と呼べり。該池は素と大覺寺内の一觀なりしと云ふ。

紀度則

ひともと、思ひし菊を大澤の

池の庭にも詠めつるかな

野 岫 嶺



池 の 澤 大

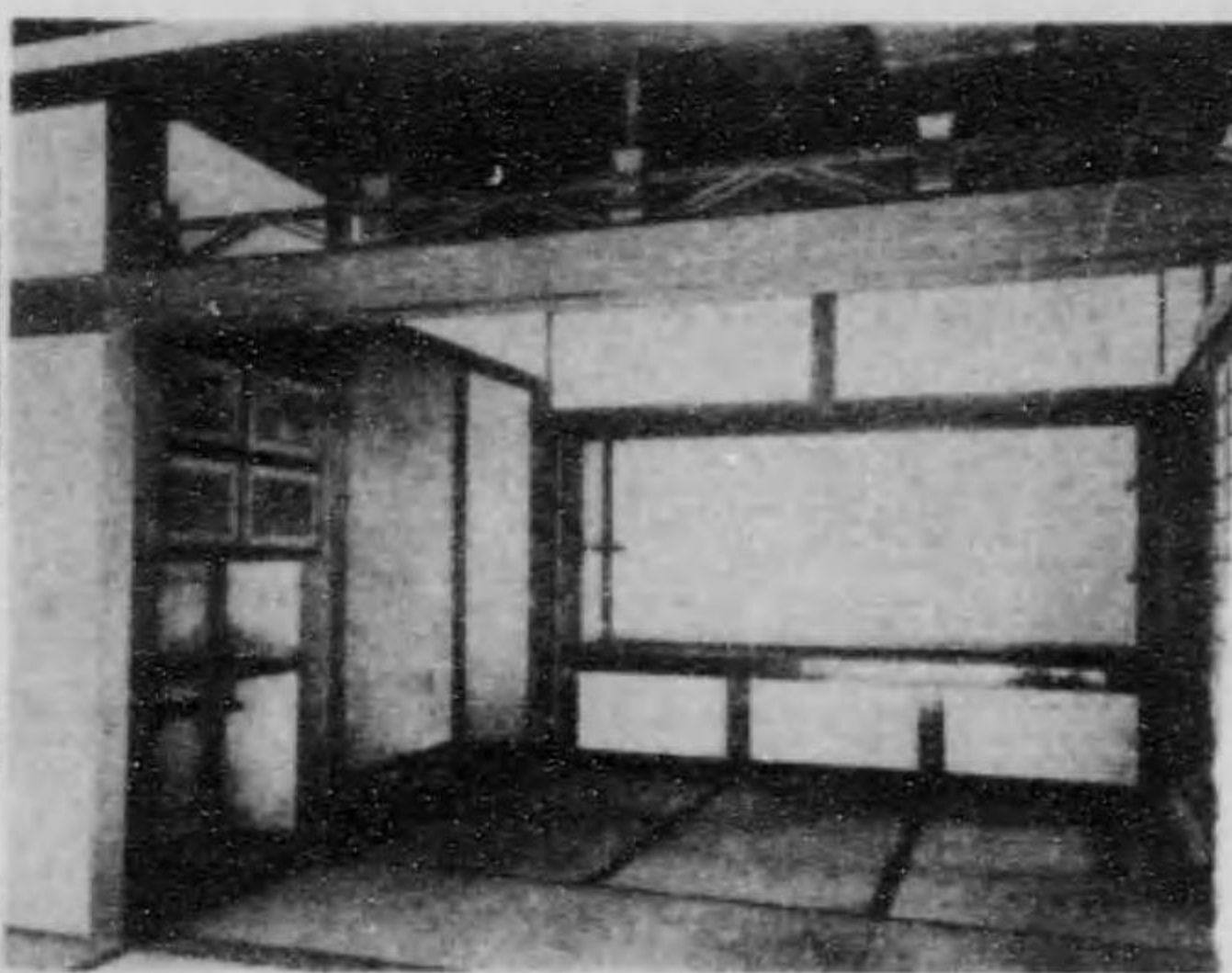


墓 局 督 小





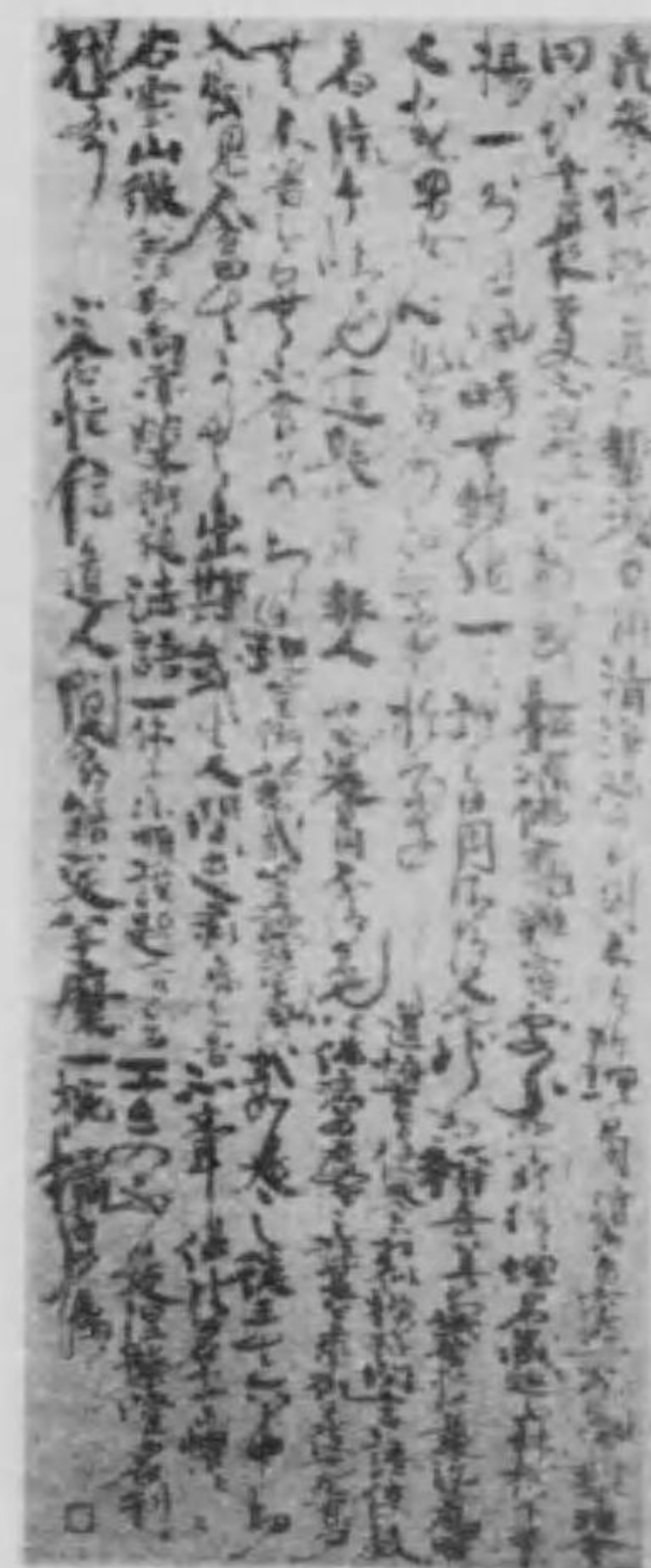
室の休一庵珠貞



寺 德 大 野 紫



像 木 休 利 千

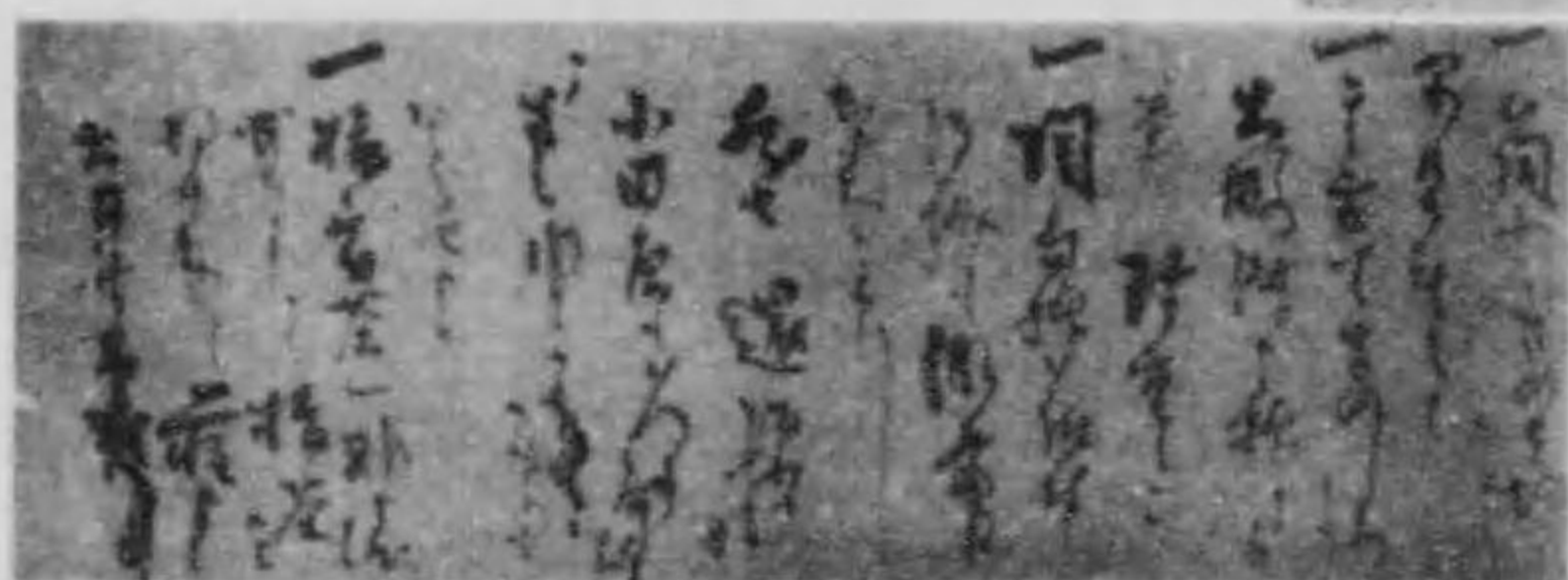


蹟 筆 休 一

千 利 休 墓



利 休 筆 蹟



門 説 解 寺 德 大



● 大 德 寺 (京都市外)

世に紫野大徳寺と稱す、落外、大宮村の中央に在り、舊寺額は二千石、現寺城七萬坪を有し、本邦無双禪苑と稱す、山

り。庵上の額は禪師の直筆に係る、居室は晴暉軒と號し、文明年間創建する所なり。庵に張應麒の一作禪師贊を藏す、其贊に曰く

學通儒典開禪宗爲叢林之表率致舉望之

登峯源を才思啓を心胸觀止水而自安行

て其自像を天子、公卿の上に置く、何ぞ潜越無禮の甚だしきやと竟に人を遣はして利休に死を命ず。

● 千 利 休 墓 (京都市外)

利休の墓は大徳寺中の聚光院に在り、





### ●大徳寺 (京都市外)

世に紫野大徳寺と稱す、洛外、大宮村の中央に在り、舊寺額は二千石、現寺域七萬坪を有し、本邦無双禪苑と稱す、山號を龍寶と云ひ臨濟宗の大本山たり。正中元年大燈國師(妙超)に依つて開基せられたるが、其建立費は赤松圓心、同則祐の喜捨に係ると云ふ。後醍醐天皇更に其地を増賜して勅願所とす。又花園上皇薨變の時、御髮塔を當寺に置かる、即ち開山廟堂靈光殿に在り、後文明六年、一休禪師殿堂を監造せり。爾來年々修營を加へ寛文中に至りては頗る盛大を極めたり、庫裏は天文年間、堺の海商南宗鑑の寄進する所にして、其棟材は明國貿易船の橋なりと傳へらる。北門は其構造最も古く、世に不明門と稱す。是れ舟岡掘井宮の舊材にて應仁以前の作に係る。山門の傍なる四脚門は伏見桃山殿の唐門を移したるものなり。因に此門は明治三十一年政府より特別保護を加へられたり。又當寺の庭園は林泉の按排、樹木の布置、風韻に富み、佳趣を悉くし、幽邃俗氣を脱却するの想あり。

り。庵上の額は禪師の直筆に係る、居室は晴暈軒と號し、文明年間創建する所なり。庵に張懸麒の一休禪師贊を藏す、其贊に曰く  
學通儒典開禪宗爲叢林之表率致學望之尊崇源々才思落落心駒觀止水而自安行藏有定取狂雲以爲號變化無蹤是宜衍兒孫之昌盛續燈焰於海東也耶  
成化乙巳秋七月都臺後人四明仕隱張應麒焚香拜讀

### ●千利休墓 (京都市外)

利休の墓は大徳寺中の聚光院に在り、茶道千家の流を汲むもの、常に茲に掃蕪す。因に云ふ、聚光院は大徳寺方丈の面方に在り、永祿年間三好義繼の建立に係る。  
利休は本姓は田中、名は與四郎、泉州堺の人なり、十七歳の時より武野新鷗に就きて茶道を修め頗る其技に通じ臺子稱授を享く、又傍ら大徳寺の古溪和尚に從ひて禪學を學び、自ら茶禪一致を唱道せり。後ち薙髮して宗易と稱し、拋筌齋と號す。始め織田信長に仕へたりしが、信長の薨後豊臣秀吉に仕へて大に眷遇せられ、天正十六年利休居士の號を授けらる、當時諸侯の間に茶道大いに流行し、秀吉又茶道を嗜みて屢々茗莖を張る毎に、利休これが事を司り、諸侯の間に頗る敬重せられたり。既にして利休其自像を大徳寺山門上に置くに及んで秀吉の忌諱に觸る(別項記事參照)るや利休豫め其死あるべきを自覺し、秀吉の使者、利休の家に臨みて切腹の使命を通ずるに及び、利休は敢て驚く色なく、從容として平然茶を點じ、偶來合せたる門人宗嚴と俱に茶事を了りて後、心靜かに其の藏品を所觀に分配する事を遺囑し、花を活け、香を炷き

### ●解脱門 (京都市外)

龍寶山大徳寺の山門を三解脱門と稱し、俗に解脱門と云ふ。大永六年連歌師宗長の勸進修造に成れるものにして、其閣を金毛閣と云ふ。天正十七年、茶道の師千利休、該閣を増營し、其閣の樓上に自身の木像を置きたるより、端なくも豊臣秀吉の忌諱に觸れ、之れが爲めに、利休は遂に死を賜ふ。金毛閣上には釋迦、阿難、迦葉及び十六羅漢の像を安置す。

### ●千利休木像 (京都市外)

是れ千利休が大徳寺山門増營の際、同門の閣上に置きたる自身の木像にして、像は八徳扱方頭巾を着し、鞍鞵を穿きて乙牀に倚たる姿なり。此時に當つて偶々此事を豊臣秀吉に告ぐるものあり、秀吉之れを聞いて大に怒りて曰く「夫れ山門は天子入り、諸公脚入る、然るに利休彼れ何者ぞ僅に一茶道の匠に過ぎずして、敢

### ●一休禪師居室 (京都市外)

大徳寺法堂の左傍なる眞珠庵中に在り。即ち是一休禪師の常に座臥せし室なり。

人生七十、力國希咄、吾遺寶劍、祖神共殺  
寒熱の地獄に通ふ茶柄杓も  
心なければ苦しみもなし  
の一偈一詠を貽し、屠腹して死す。是れ實に天正十九年二月二十八日なり、利休享年七十有一、  
筆蹟は松平直亮伯の秘藏也。



●黒谷光明寺 (京都)

岡崎町に在り。淨土宗鎮西四本山の一にして法然上人居住の舊蹟なり。上人初め叡山の西塔黒谷に住したるが、後茲に移りたるを以て新黒谷と呼び、中世又新の一字を除きて、單に黒谷と稱するに至れり。蓋し叡山西塔の黒谷を模したるなり。此地往時は栗原岡と云へり。寺域三萬三千餘坪、塔頭三十一、庵室十八を有し、洛東に於ける大伽藍なり、其の重なる堂塔としては本堂、方丈、阿彌陀堂、鐘堂、經藏、觀音堂、勢至堂、熊谷堂、三重塔等あり。又熊谷直實出家の際、鐘を脱ぎて掛けたりと傳ふる鐘掛松、法然上人石上に踞して念佛を唱へしと云へる雲石等境内に存す。

當寺は安元々々年、創建の當時にありては寺號を用ゐず、唯だ單に白川禪房とのみ呼びたりしが、後宇多天皇の御宇に至りて、始めて金戒光明寺の號を下賜せられたり。彼の有名なる法然上人の「一枚起請文」は當寺第一の什寶として秘藏せらるる左に其全文を掲ぐ

一枚起請文

もうこし我朝に、もうくの智者たちの沙汰し申さるゝ觀念の念にもあらず又學問をして念の心をさとりて申す念佛にもあらず、唯だ往生極樂のために南無阿彌陀佛と申してうたがひなく往生するぞと思ひとりて申す外には別の子細候はず、但三心四修と申事の候はみな決定して南無阿彌陀佛にて往生するぞと思ふ内にこもり候なり、此外に奥深きことを存せば、二尊のあはれみにはづれ、本願にもれ候べし、念佛を信せん人は、たとひ一代の法をよくよく學ばずとも、一文不知の愚鈍の身になして、厄入道の無智のどもがらに同じく、智者のふるまひをせずして、

たい一向に念佛すべし。

淨土門の安心起行此紙に至極せり、源空が所存、此外に全別義に存せず、滅後の邪氣をふせがながために所存を記し畢ぬ。

建曆二年正月二十三日 源空在判

●淀見の茶亭 (京都)

黒谷光明寺なる子院西翁院内にあり、茶亭の構造は總て藤村庸軒の設計意匠に係るものにて、趣向を凝らしたる茶室なり、一とたび室に入りて眼を放せば、洛中を始め淀島羽等の風景は眸裡に聚り來る、蓋し其の名稱ある所以にして、茶人雅客の賞讃措からざる所以なり。

●永觀堂 (京都)

山號を聖衆來迎山と云ひ、寺號を永觀堂禪林寺と稱す。南禪寺の北隣にあり。淨土宗西山派にして、本尊は見返阿彌陀佛なり。當寺は當初清和天皇の勅願に依り、眞紹僧都の開基せる所にして中興の祖は行道律師なりと云ふ。又一説には永觀律師當寺を中興し、以來永觀堂の稱ありとも云へり。境内深樹多く殊に櫻楓の二樹最も豊富にして、其庭園の如きは風趣佳絶、花時節を曳くもの甚だ多し。

●岩垣楓 (京都)

是れ永觀堂の境内に在る有名なる楓樹なり。由來永觀堂は楓樹の勝地を以て知らる。就中此の岩垣楓は其尤なるものにして、古來俗曲にも「秋は紅葉の永觀堂」など、謡はれてあるに徴しても之を知るべし。

關 雄

奥山の岩垣楓散りぬべし

照る日の光り見る時なくて

永觀堂、光明寺等を歴訪して、黒谷に逸すべからざるものは眞如堂なり、記事

の終を以て之を紹介す、眞如堂は鈴聲山眞正極樂寺と稱し、神樂岡の東南、中山に在り、正暦年間一條天皇の御宇、戒算上人に勅して創建せらる、天台宗にして本尊は慈覺大師作の阿彌陀佛なり、創建當時は白河女院の離宮を請ふて佛閣となしたりと云ふ、後文明九年今出川通り寺町に移り、足利義政之を尊崇して銀閣寺内に移し文龜三年再び今出川に轉じ、元祿五年火災後又々此地に移したるなり。

●松虫、鈴虫の墓 (京都)

鹿谷法然院の南なる安樂寺に在り。安樂寺は住蓮山と號す。法然上人の徒弟なる住蓮、安樂の二僧が念佛執行の故蹟なり。松虫、鈴虫の二婦は後鳥羽法皇の寵姫なりしが、豫て念佛聲明の名人として知られし住蓮、安樂の二僧が讚歎を聞きて發心し、宮廷を脱して厄となりたるが、端なくも醜聲外に漏れて上聞に達したるより、住蓮、安樂の二僧を逐はしめ、之を近江の國馬淵に於て誅せしめ給ふ。同時に其師なる法然上人亦連坐して流罪に處せらる、實に是れ承元二年なりき、機ち寺刹を其の住址に就きて興立したるもの即ち是れ安樂寺なりとす。「源空上人配流於土佐國、依專修念佛事也、近日件門弟等充滿世間、寄事於念佛密通貴賤并人妻可然之人々女、不拘制法、日新之間、擲取上人等、或被切、或被禁、女人等又有沙汰、且專修念佛子細、諸宗殊對申之故也」と皇帝紀略に記せり、以て當時の消息を窺ふに足る。

岩垣楓



淀見の茶亭

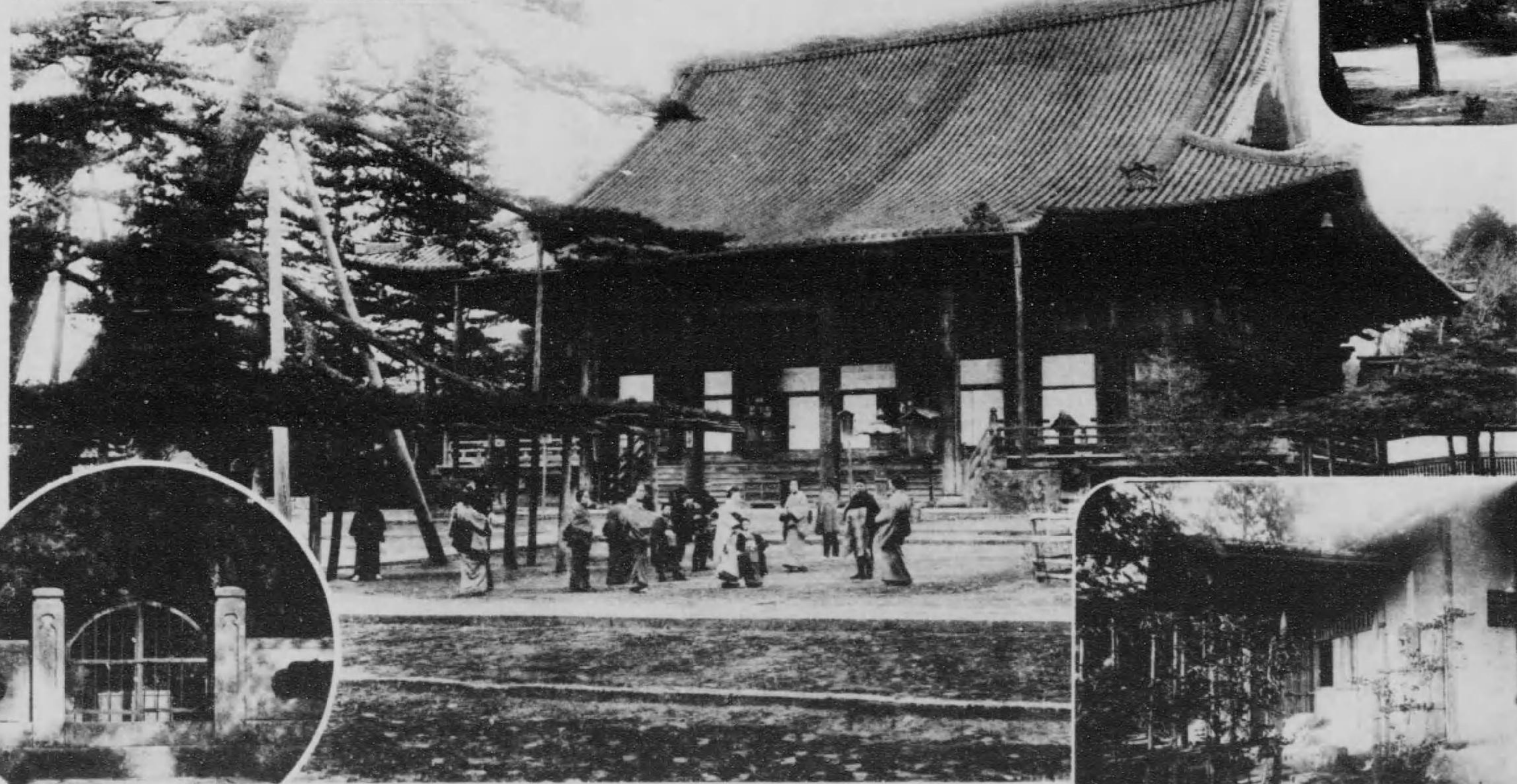




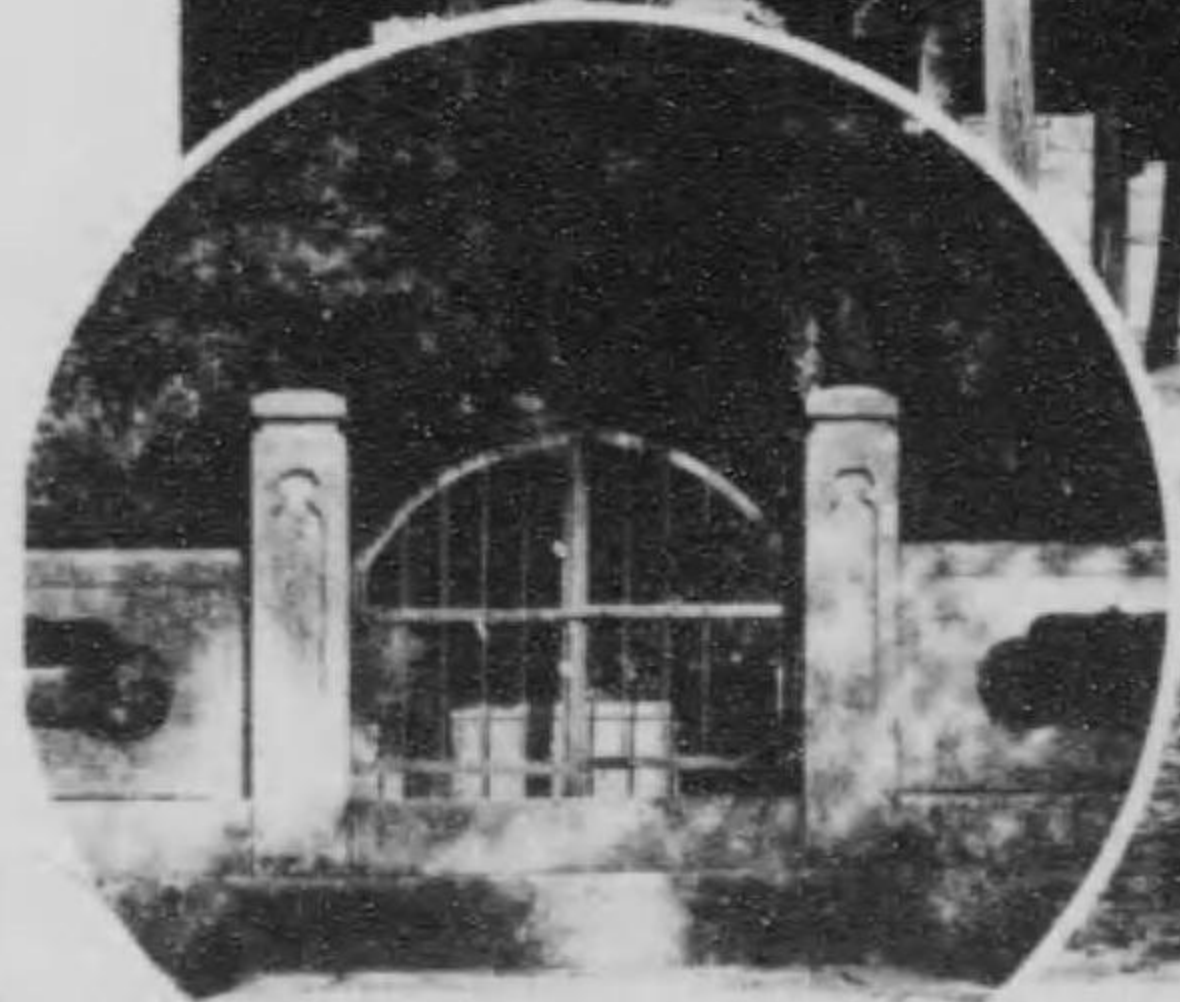
水觀堂庭園



岩垣楓



黒谷光明寺



松虫鈴虫墓

上ノ二九

に奥深きことを存せば、二尊のあはれみにはづれ、本願にもれ候べし、念佛を信せん人は、たとひ一代の法をよくよく學ばずとも、一文不知の愚鈍の身になして、尼入道の無智のどもがらに同じく、智者のふるまひをせずして、

奥山の岩垣楓散りぬべし  
關 雄  
照る日の光り見る時なくて  
永觀堂、光明寺等を歴訪して、黒谷に逸すべからざるものは眞如堂なり、記事

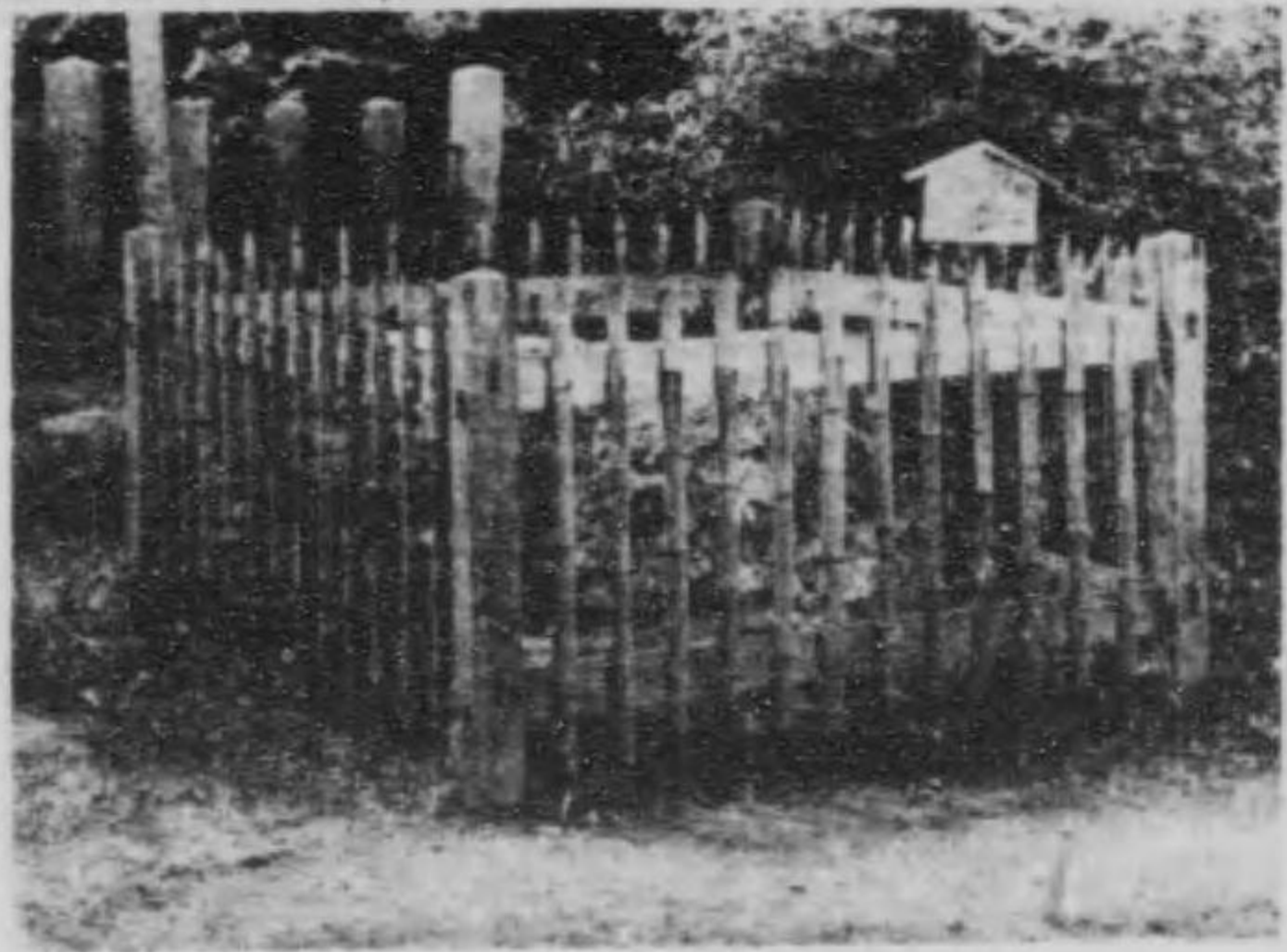
弟等充滿世間、寄事於念佛密通貴賤并人妻可然之人々女、不拘制法、日新之間、搦取上人等、或被切、或被禁、女人等又有沙汰、且專修念佛子細、諸宗殊僻申之故也」と皇帝紀略に記せり、以て當時の消息を窺ふに足る。

徒見の茶亭



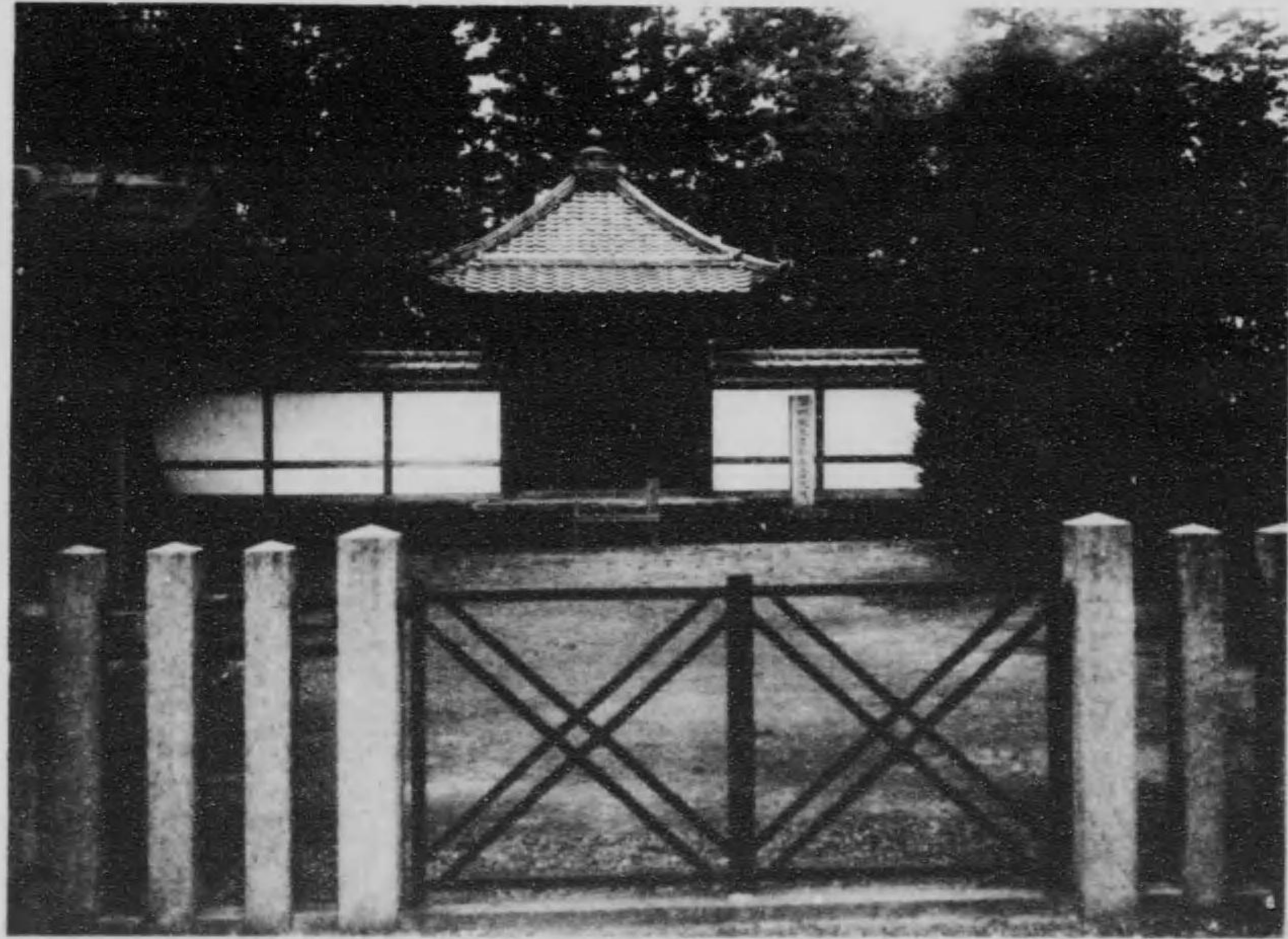


孔雀明王像



安樂壽院の冠石

安樂壽院



後鳥羽天皇御陵

●鳥羽天皇御陵 (京都市外)

紀伊郡竹田村の中央に在り。往時は竇塔ありしも火災の爲め焼毀し、慶長十九年佛殿を建立して之を代へたり。本御塔

られ、催馬樂を謠ひ、香律に精しく最も吹笛に長せらる。兼て古記を鑑覽し博く典故に通じ給へり。天皇平生佛に供し、僧に施されたるの費は甚だ少なからず、成勝寺、延勝寺皆其創建に係る、又常に容

七月二日終に一院隠れさせ給ひぬ、御年五十四、未だ六十にも満たせ給はねば、猶惜しかるべき御命なり、有爲無常の習ひ、生者必滅の掟始て驚くべきに有ね共、一天暮て月日の光り失へるが如く萬人歎



●鳥羽天皇御陵 (京都市外)

紀伊郡竹田村の中央に在り。往時は寶塔ありしも火災の爲め焼毀し、慶長十九年佛殿を建立して之を代へたり。本御塔の名稱今に存す。慶應元年に至り之を北側に移し、更に神廟を創建し、廟下礎石を以て殿重に封す。鳥羽郷古へ塔三基あり、鳥羽陵は其中塔なり、並に是れ安樂壽院の地」と山陵志に記したるもの、即ち是れなり。傳ふる所によれば御陵内の石櫃には一字一石の大乗經及び宸筆の法華經を藏めありと云ふ。

●孔雀明王像 (京都市外)

此圖像は安樂壽院の創建せられたる當時即ち鳥羽上皇の御代頃に成れる春日派の作品にして、其衣紋の線に銀泥を施したるが如き莊重に力めたるを見るべし、而かも毫も繊細に陥らず崇高の氣品に富みたり。畫像壇場儀軌に孔雀明王を説明して左の如く記せり「有<sub>二</sub>四臂<sub>一</sub>、右邊第一手執<sub>二</sub>開敷蓮華<sub>一</sub>、第二手執<sub>二</sub>俱緣果<sub>一</sub>、左邊第一手當<sub>二</sub>心掌持<sub>一</sub>、吉祥果、第二手執<sub>二</sub>三五莖孔雀尾<sub>一</sub>」原品は絹本着色にて堅三尺二寸四分横一尺九寸七分にして安樂壽院の所藏に係る。

鳥羽天皇、御名は宗仁、御父は堀河天皇、御母は藤原茂子、第七十四代の帝にして康和五年正月御降誕あらせらる。同年八月太子とならせられ、嘉祥二年七月踐祚し、十二月帝位に即き給ふ。在位十六年此間改元五回に及びり。保安四年位を崇徳天皇に譲りて上皇とならせらる。天皇在位中は政務總て白河法皇の手に出でたりしが、大治四年白河法皇崩御せらるゝに及び天皇亦之に倣ひて院政を聽かる。永治元年三月薙髮して空覺と稱せらる。天皇嘗て帝範を菅原在良に受け且つ天文に通じ、又藝術に多大の嗜好を有せ

られ、備馬樂を誦ひ、音律に精しく最も吹笛に長せらる。兼て古記を鑑覽し博く典故に通じ給へり。天皇平生佛に供し、僧に施されたるの費は甚だ少なからず、成勝寺、延勝寺皆其創建に係る、又常に容儀を好ませられ、源有仁等と共に大に之を講究せらる。彼の裝束に棧を有して威強く見え、鳥帽子に額を付するに至りしは皆天皇の御宇に始まると云ふ。院政を執らるゝ事二十有七年、保元々年七月二日崩御あらせらる、實算五十有四。

因に云ふ。鳥羽上皇内嬖多く、就中美福門院最も寵せられたるが、其出なる體仁親王は崇徳天皇の皇太子となり更に天皇の讓位を逼りて帝位に即かせらる即ち是れ近衛天皇なり。既にして近衛天皇夭く崩せらるゝに及び、崇徳上皇は皇子重仁親王を立てんとするの御志ありしも、美福門院は之を斥けて後白河天皇を立つ、茲に於て崇徳上皇大に失望せられ遂に保元の騷亂は茲に醸成するに至れり。

記事の序を以て左に法皇崩御に關する「保元物語」の一節を掲ぐ  
明くる四月二十七日改元あつて保元とぞ申しける、此頃より法皇御不豫の事あり、偏に去年の秋、近衛院先立せ給ひし御歎きの積りにやと世の人申しけれども業病請けさせ給ひけるなり、日に隨て重らせ給へば、月を追ふて憑み少く見えさせお在しませば、同じき六月十二日美福門院、鳥羽の成菩提院の御所にて御飾下させ給ひ、現世後生を憑み進らせ給ふ近衛院も先立給ひぬ、又僧老同穴の御契り淺からざりし法皇も、御惱重らせ給ふお歎きの餘りに思召し立つこそ聞えし、御戒の師には三藏上人觀空ぞ參られける、あはれなりし事共なり。法皇は權現御詔宣の事なれば、御祈もなく御療治もなし、只一向御菩提の御勤めのみなり、

七月二日終に一院隠れさせ給ひぬ、御年五十四、未だ六十にも満たせ給はねば、猶惜しかるべき御命なり、有爲無常の習ひ、生者必滅の旋始て驚くべきに有ね共、一天暮て月日の光り失へるが如く萬人歎て父母の喪に逢ふに過ぎたり云々。

●安樂壽院陵 (京都市外)

往時の鳥羽離宮東殿の地にして竹田村に在り、鳥羽上皇の念持佛たりし阿彌陀佛を本尊とす。其胸邊に卍字あるを以て卍阿彌陀佛の名あり、四海無双の如來と稱せらる、宗旨は古義真言宗に屬するも敢て古義新義を問はずして修學す。當寺は初め鳥羽上皇の離宮なりしも、上皇之れを棄てさせられ、保延三年藤原家成に勅して茲に寺院を創建せしめられ、五層の寶塔を築き以て寺領とせられたり。金堂即ち是れなり、之れを東殿御堂と云ひ、寶塔を本御塔と云ふ。次で久安四年上皇宸筆の法華經を石函に納めて木塔柱下に置けり。上皇崩御の後は當寺に葬り奉れり、又近衛天皇をも葬り奉れり。本寺及び所領は皇女八條(美福門院の)出之を傳領し、春華門院、安嘉門院より龜山院、後宇多院後醍醐天皇の大覺寺統に傳領せり。其後漸次衰頹し、又兵燹に罹りて廢絶に瀕したるが、天正十三年豊臣氏寺領五百石を給付し、次で本御塔を興立し、近衛天皇御陵には二層の寶塔を建立し之を新御塔と云へり。明治以降、二陵は宮内省の直轄となれり。今は本堂、五輪堂、新御堂等を存す。

●冠石 (京都市外)

安樂壽院の境内に存す、「御愛の梅」と共に著るしく知らる。均しく是れ鳥羽上皇に御因縁淺からざる遺物の一つにして同院を訪ふ者は必ず一見當年を偲ぶの料たらん。



●深草法華堂陵 (京都市外)

是れ後深草天皇を始め奉り、伏見、後伏見、御光殿、後圓融、後小松、稱光、後土御門、後柏原、後奈良、正親町、後陽成の十二天皇の御陵にして十二帝陵と稱す、寶塔寺の南、安樂行院に在り。深草法華堂は嘉元二年納骨の後に至りて、伏見、後伏見兩帝を同祀し奉り、後光嚴帝は更に新堂に納めらる。爾後分骨して本陵及び泉涌寺般舟院に安置せり。法華堂は院の外門の内東方に在り、仙骨を納め奉れる地なりとて土人仙骨堂と稱し、中世廢滅に瀕し居りしが近年修復を加へ從來の小塚の上に小堂宇を建てたり。

過安樂行院 僧 元政

滿園秋草絶衣冠 御骨堂荒白露漣  
寂寞林庭委風雨 蒼苔深鎖玉光寒

●深草の里 (京都市外)

「深草や曉寒く吹く風にいとど身にしむきりくすかな」と後鳥羽院の詠せられし深草の里は、即ち今の深草村大字深草の地なり。而かも一般に深草と稱するは伏見、京都間一條の街路に沿ひて民家の連続せる筋違橋通りを云へるも、専ら深草の里と稱するは稻荷以南大龜谷に至る間なりとす。左に深草に關する諷詠二三を抄して過去を偲ぶの料とす。

源 通 具

深草の里の月影淋しさも

住こしまゝの野邊の秋風

在原 業平

年を経て住にし里を出で、

いなばいとど深草野とやなるらん

後鳥羽院

狩にこし鶉の床の荒はて、

冬深草の野邊ぞ淋しき

●元政上人墓 (京都市外)

深草筋違通り極樂寺址なる瑞光寺に在

り。瑞光寺は元政上人の創建に係る。元政は學識道徳一世に卓絶したる高僧にして、後世佛徒の爲めに仰慕せらる。墓は瑞光寺佛殿の西方に在り。

重過詩僧元政上人墓 烏山 芝軒

政公墳墓在、傳是此捷連、除有三竿竹  
終無隻字碑、人高震谷隱、我愛草山詩  
重過留題去、祇應地下知、

深草登元政上人墳 後藤 松隱

深草々奥深、小徑蛇盤折、來吊政公墳  
苔關世縁絶、欲識主人仍平安、墳上青  
々竹三竿、

元政上人、俗姓は菅原、母は石井氏なり。京都の人、歳十三にして彦根侯井伊氏に仕ふ。二十六歳の時致仕し、妙顯寺日豊上人に事へて剃髮し、始めて佛門に歸し居を深草に定む。居は即ち瑞光寺なり。律を持する甚だ嚴、而して博覽強記、學として究めざるなく、兼て文藻詞章に長ず。寛文八年二月十八日四十六歳を以て歿す。著はす所『草山集』三十卷あり。世に元政上人の壁書といふものを傳ふ。即ち左の一篇なり。

不幸にして世を背ける墨の衣にはあらず、髪を結はせるむつかしさに頭を剃り、茅の軒端竹の柱に身を輕う、爰にどめおき樂しむ、心から浮世を見るに東西に走り南北に行く人、多くは身を思ふ事業にのみ足を空になして、吉野の花のあはれをも知らず、深草の鶉の聲を聞いても、焼けてやりたいたとばかり思ひ、後に何になる事ぞや、かく静ならぬ事は人間のみにあらず、山を出る雲は雨を催さんとて岫を出で、深山の鹿は妻戀ふ世話に聲の限りを啼き明す、是を思ふに此身ほど隙に樂なことなし、恵心の作の佛一體、持てども後世を願ふ爲めにもあらず、持傳へたる道具なれば御宿申すまでなり。極樂へ行て樂みたいと思ふ慾が無れば地獄へ

落る恐もなし。死ぬるまで生きて居ようと思へば、年の寄るも糸瓜とも思はず、雞のこぼれ種の牽牛花、ゆがもうが、ちじらうがあんなものと思ひ、時雨ふる夜の小夜風、吹かうと吹くまいと我身ひとりの苦にもならず、膝を容るゝ二枚敷、一つにて事足り、難煮食はぬ身には聞かせまいとはいはぬ鶯の聲も快く聞き、夜着持ぬ家にはさすまいともいはぬ、依估最負のない窓もる月を眺め、寝る筈の目なれば、眠たければ晝もかきこもり、ある筈の足なれば手の奴、足の乗物心の行く所へ迷ひありけど益みせぬ身なれば人も咎ず、覺へた事なければ忘るゝ事なし、歳を數へた事なければ幾つやら知らず、あら樂や人目かと思はねば人をも人と思はざりけり。

●松永貞徳墓 (京都市外)

上鳥羽の實相寺に在り、石面に銘して「逍遙軒明心居士」と云ふ。貞徳派の俳人茲に展するもの尠からず。貞徳は松永久秀の孫にして和歌連歌に長じ、殊に俳諧に巧みにして斯道の鼻祖と稱せらる。承應三年八十三歳にて歿す。

●戀 塚 (京都市外)

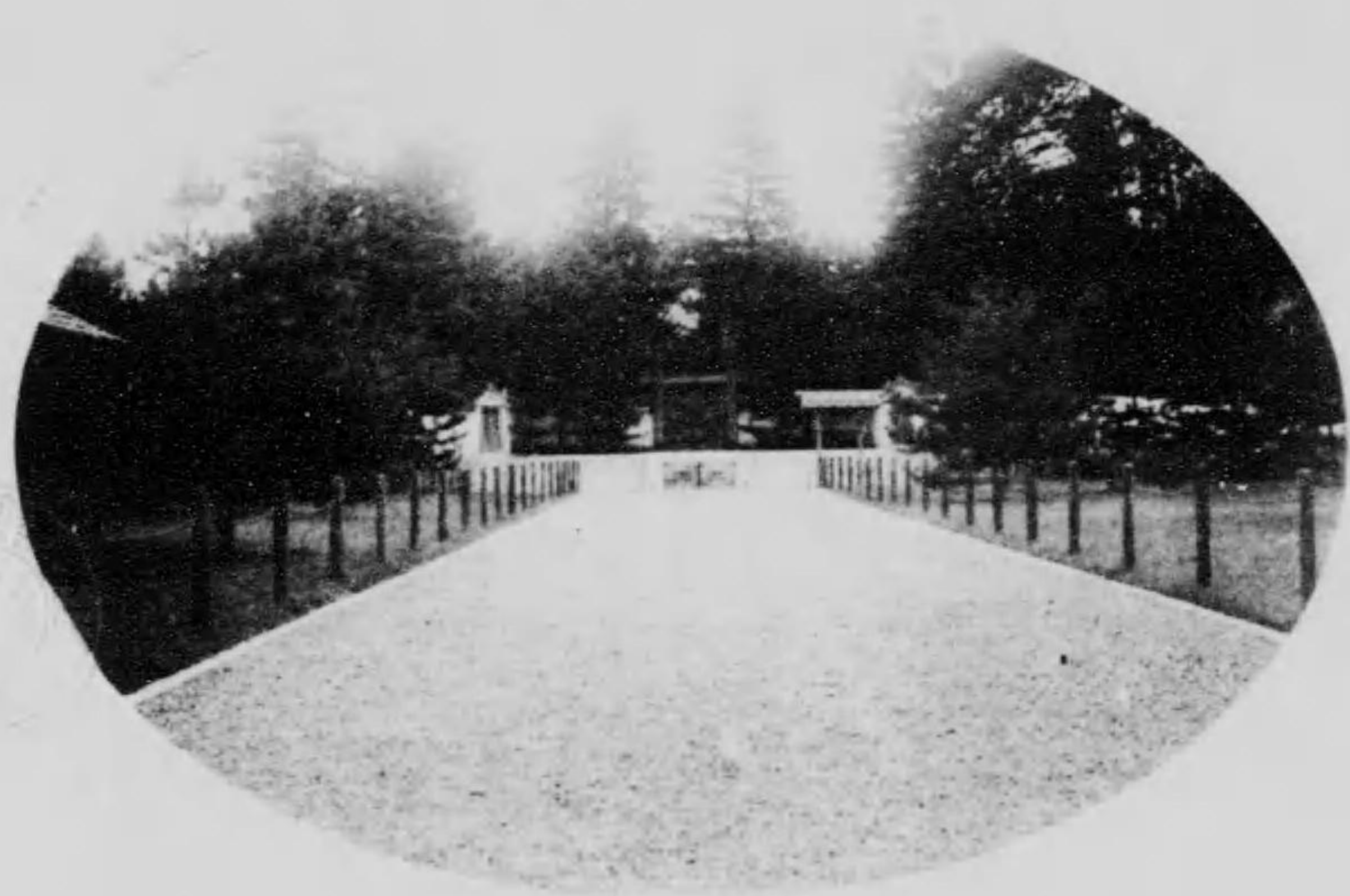
上鳥羽淨禪寺に在り。傳へ曰ふ。文覺上人在俗の當時、誤つて袈裟なる婦人を殺害し、茲に葬りて一基の塚を築き、悔恨の餘髪を削て佛門に歸したりと。正保四年十一月永井日向守直清一碑を塚上に建て碩儒林羅山の選文を題せり、其銘に曰く「吁節婦兮、惟孝惟義、不可泯兮、貞名不已」

元政筆蹟





法華堂三十代御陵



深草の里

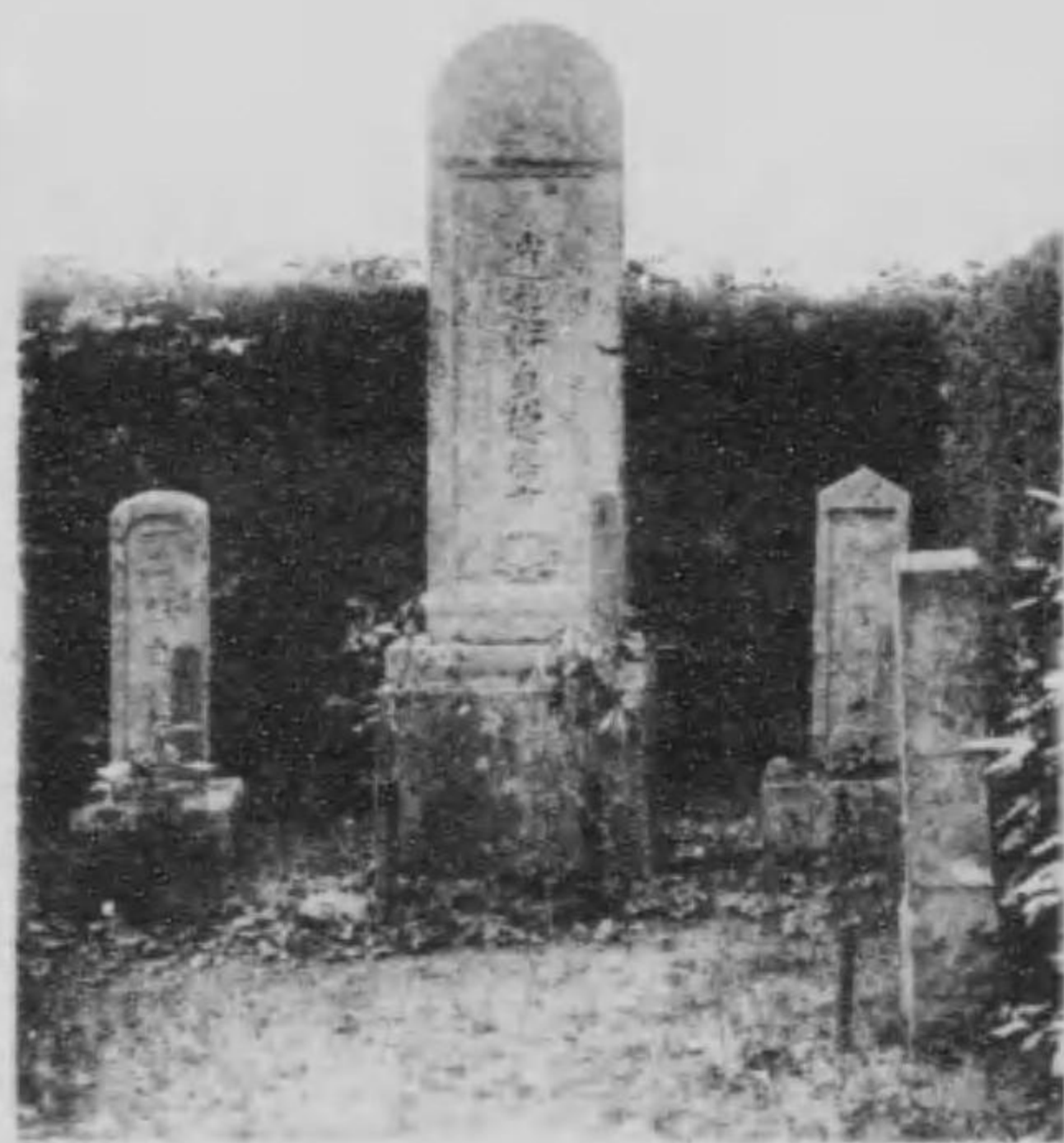


猶にこし藪の床の荒はて、  
冬深草の野邊ぞ淋しき  
●元政上人墓 (京都市外)  
深草筋通り極樂寺址なる瑞光寺に在

元政筆蹟  
予此處より  
法華堂御陵  
之に在りて  
建つるに  
人眼可く  
外様を  
御方之  
守りて  
法華堂  
に在り  
深草筋  
通り  
瑞光寺  
に在り  
元政上人  
墓に在り  
法華堂  
御陵に  
在り



元政上人墓



松永貞徳墓



墓

是を思ふに此身ほど隙に樂なこと  
なし、恵心の作の佛一體、持てども後  
世を願ふ爲めにもあらず、持傳へたる  
道具なれば御宿申すまでなり。極樂へ  
行て樂みたいと思ふ慾が無れば地獄へ

四年十一月永井日向守直清一碑を塚上に  
建て碩儒林羅山の遺文を題せり、其銘に  
曰く「吁節婦兮、惟孝惟義、不可混兮、  
貞名不已」



護持奉為管領  
之勤終之狀  
心伴  
康勝元年九月廿五日  
三寶院僧正



後林...  
川...  
...  
...  
...

金閣寺

松舟院

足利義政筆蹟

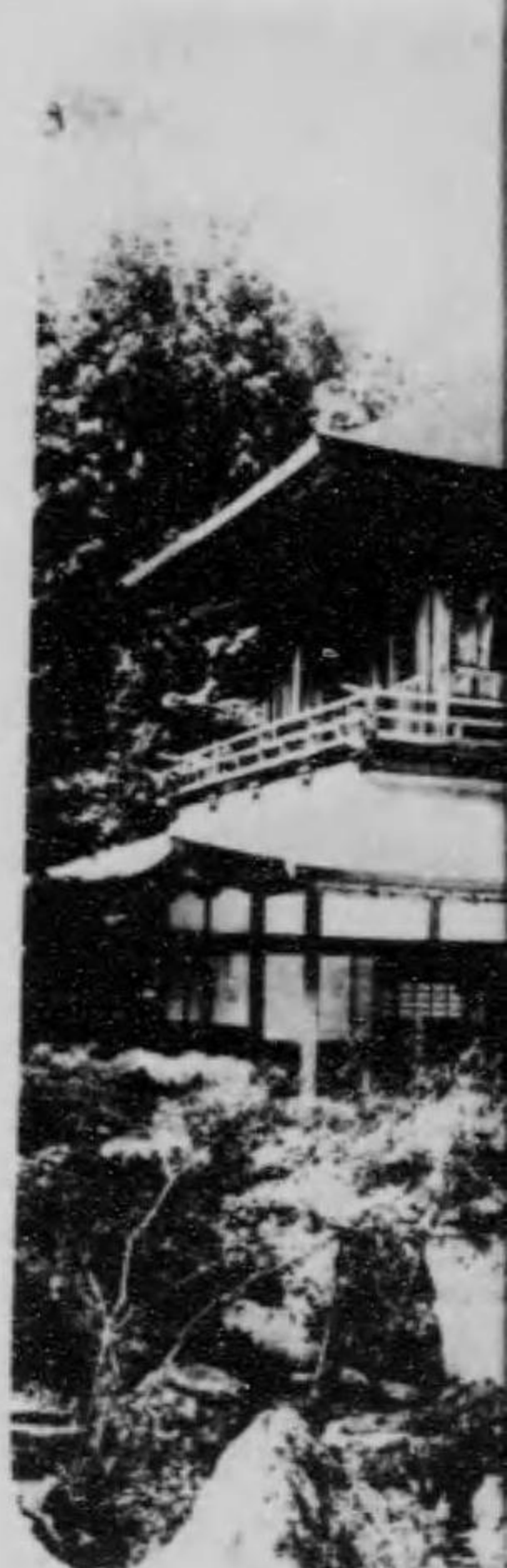
●金閣寺 (京都)

足利三代將軍義滿將軍が榮華の結晶とも観るべきものは金閣寺なり。金閣寺は平野神社の西北七八町に在り。應永四年

大將軍となりしも、年尙幼なるを以て執事細川頼之これを輔佐して政務を執りたり。文中二年參議左中將に任じ、同三年菊池氏を西國に討ち、天授四年室町の第を築きたり。次で權大納言に進み、懸永

の廣き四疊半、即ち茶室式にして俗に之を茶湯之間と稱す。我庵は月待つ山の麓にて傾く空の影惜しぞ思ふ。是れ義政が其居銀閣に在りて詠せしもの墨蹟今尙ほ寺什として存す。





Handwritten Japanese text, likely a calligraphic inscription or a note related to the photographs.

●金閣寺 (京都)

足利三代將軍義滿將軍が榮華の結晶とも觀るべきものは金閣寺なり。金閣寺は平野神社の西北七八町に在り。應永四年足利義滿西園寺公繼の山莊を請ひ得て、茲に宏壯雄大なる一字を創設し、號けて鹿苑寺と云ふ、金閣寺は則ち此の鹿苑寺境内の一字にして林泉中に在り。此地笠山(笠山)の西麓に位し、境域壹萬五千六百坪を有す。老松亭々として幽邃閑雅を極む。金閣寺は鹿苑寺方丈の西に所在し、三層、建築にして地を抜くこと四十二尺、西椽に一間の懸造あり。上層は屋根を賣形檜皮葺とし、究竟頂と號く、東西壹丈八尺、南北壹丈八尺、天井、壁、勾欄等悉く金箔を鏤む。中層は湖音洞と云ひ、洞内に觀音を安置す。下層は法水院と稱し、東西三丈三尺、南北貳丈四尺、如來像、國師像、檀那像を置く、一に鏡堂、如來殿等の稱あり。然して上層究竟頂には後小松天皇の勅筆額を掲ぐ。閣下の池を鏡湖池と云ひ、九山八海石、夜泊石、赤松石、畠山石等の奇石點々として水面に浮ぶ。閣北には岩下水、龍門瀧、鯉魚石等あり。小丘の上に設けられたる夕佳亭の床柱は、周圍八寸許、南天樹の材を以て造られ、其邊へ棚は胡枝花の枝材なり該亭は慶長年中、金森宗和の設計に成れるものなりと傳へらる。

大將軍となりしも、年尙幼なるを以て執事細川頼之これを輔佐して政務を執りたり。文中二年參議左中將に任じ、同三年菊池氏を西國に討ち、天授四年室町の第を築きたり。次で權大納言に進み、應永二年太政大臣に任せられしも其翌一年職を辭し、剃髮して道義と稱し又天山とも號せり。斯て室町の第は之を其子義持に譲り自ら北山の山莊に居り金閣を築き苑に鹿鹿を放ちて悠遊す、鹿苑寺の名蓋し之に生ず。應永十五年五月六日病を以て薨す享年五十有一、鹿苑院殿道義天山大禪定門は其諡號なり。

●陸舟松 (京都)

金閣寺の庭園に在り。庭裡の林泉その一木一石悉く是れ幽韻雅趣ならざるものなきも、就中陸舟松の如きは最も珍奇の觀を呈す。其の枝支宛然船形を爲す、陸舟松の名稱蓋し頗る適切なるを覺ゆ。

●銀閣寺 (京都)

鹿ヶ谷の正北淨土寺町に在り。即ち是れ足利義政閑居の地として、一名慈照寺と稱す。文明年間義政銀閣を造り彼の義滿の築造せる北山の金閣に擬せんとしたりしが工事全く竣成せざるに先だちて薨じたり。而かも其竣工せる部分は、彼れが榮華の跡を偲ぶに足る。閣は二層にして上を空心と云ひ、下を湖音閣と稱す。屋は四榮の檜皮葺にして結構頗る高雅なり。庭園は相阿彌の經營に成りて趣致を極む。其茶室の如きは義政生前最も茶事を嗜好せるを以て構造、裝置悉く其の創意に成り所謂四疊半式の濫觴として茶道界の垂涎措かざる所なり。延徳二年義政薨じ遺命して銀閣を佛寺と爲す。今臨濟宗派に屬す。

寺内の東求堂は義政の持佛堂にして本尊は觀音を安置し又義政の木像を收む堂の廣き四疊半、即ち茶室式にして俗に之を茶湯之間と稱す。我庵は月待つ山の麓にて傾く空の影惜しぞ思ふ。是れ義政が其居銀閣に在りて詠せしもの墨蹟今尙は寺什として存す。足利八代の將軍義政は幼名を正實と云ひ、後、義政と稱し、次で又義政と改む義教の二男にして義勝の弟なり。義勝薨じて繼ぐべき嗣子なきより、管領たる畠山持國、諸將と協議し義政を迎へて後嗣と爲したり。文安三年義政從五位下に叙し翌四年正五位下に進む。寶徳元年征夷大將軍となり、次で權大納言に轉じ、從二位に累進し、享徳二年從一位に陞る。義政幼不惑に達するも未だ一子のあらざるを以て、其弟義視の佛門に入れるを還俗せしめて嗣となす。然るに幾干もなくして夫人男子を擧ぐ。即ち是れ義尙なり茲に於て夫人は潜かに山名宗全に倚りて義視を廢し、以て義尙を立てんと謀り、端なくも茲に一大紛糾を醸成するに至れり。而して其餘波連年結んで解けず。是れ實に應仁の大亂を惹起せる原因なりとす。文明十五年義政北山の金閣寺に擬して東山に銀閣寺を創建し茲に幽棲して頗る驕奢を極め、悠々點茶三昧に入りて又世事を顧みざるもの、如し。延徳二年正月七日病で薨す。享年五十六。太政大臣を贈らる。

●足利義滿筆蹟

義滿が三寶院僧正に致したる筆札にして其文左の如し  
護持奉爲管領可致勤修之狀如件  
日附は康曆元年九月十日とあり。

●足利義政筆蹟

是れ義政が萬里少將に致したる書札なり但し其年號を署さざるを以て年次を詳知し難きを遺憾とす。



●嵯峨法華堂陵(京都市外)

嵯峨法華堂陵は天龍寺境内にあり、是れ後嵯峨天皇及龜山天皇の御陵なり、増鏡に「後嵯峨院は嵯峨藥草院に葬り、龜山院は龜山殿の上の山に火葬し法華堂を立て御骨を收む」と記す、兼明親主の「憶龜山」に

憶龜山、久往還、南溪夜雨花開後、西嶺秋風木間落、豈不憶龜山、

其龜山は小倉山の東南尾にして、形、龜甲に似たるより龜山と稱され、嵯峨天皇此山の東面に離宮を營ませらる、後、之を檀林寺と爲し給ふ、檀林寺廢絶となりて、後嵯峨上皇之を中興し給ひ、「龜山殿」と號し、淨金剛院と改む、足利氏に至り淨金剛院を二尊院に移したり。

後嵯峨院の御製として玉葉集に見ゆるものは  
幾里か嵐につけて聞ゆらん  
我すむ寺のいりあひの鐘

嵯峨山水の幽奇、龜山を推して最とす其西面は乃ち嵐峽にして大井河流る、河中の急灘と稱せられたる龜尾瀧は削夷せられて今は無し、龜山殿、檀林寺に關係深き二尊院は清涼寺の西、天龍寺の北にあり。

大江 匡衡  
遠尋古院彼秋催 岸上排松窓戸開  
灑砌浪紅鋪落葉 遶階嵐綠掃寒苔  
孤舟棹影穿煙去 晚寺鐘聲渡水來  
此地卜隣非俗境 龜山便是小蓬萊

紀 貫 之  
龜山の甲をうつしてゆく水に  
漕ぎ來る舟は幾世經ぬらん  
壬生 忠岑  
ゆき歸り程さへ遠き子の日かな  
千代の松ひく龜の尾の山  
紀 維 岳  
龜の尾の山の岩根をとめて落る  
瀧のしらたま千世の数かも

●天龍寺(京都市外)

天龍寺は葛野郡天龍寺村にあり、臨濟宗五山の一にして、當初は檀林寺の名ありし所なりしが、荒廢の後、後嵯峨上皇此に仙宮を營ませ給ひ、後、龜山殿と號し又淨金剛院と改められたる事は別記するが如し、其後龜山上皇之を離宮と爲し給ふ曆應二年後醍醐天皇の吉野に崩せらる、や、足利尊氏帝の退福の爲めに土木を興し、土石を運び三年にして巨利の建造成る、是れ天龍寺なり、夢窓國師を開始とし勸願寺に準せらる、後年屢々兵燹に罹り元治甲子の兵亂を合せて前後八回、峨山和尚之が再建を企て明治二十七年工を起し、三十三年に至りて本殿法堂の落成を告げ、佛殿には本尊釋迦牟尼佛を安置し、選佛場又の名雲居院には文殊菩薩を安んず、方丈後庭の林泉を曹源池と言ひ、開祖國師の意匠に成りて其巧緻は斯界を驚歎せしむ。

●源融の墓(京都市外)

墓は嵯峨清涼寺内に在り。  
源融は嵯峨天皇第八皇子にして、承和五年十一月加冠し正四位下に叙せらる、次で從三位に昇り、貞觀十四年左大臣に任ず、六條河原院に居りしを以て世に河原左大臣と稱す、融、河原院を營みて水石の風致を極め、園に潮水を難波の地より汲み來り、鹽を煮て陸奥鹽釜の景致に模擬せり、又歌人として著しく知らる、寛平七年薨す。

清涼寺は元嵯峨天皇の離宮境内なりしが、源融此に山莊を造りて棲霞と稱し、更に改めて佛刹となし棲霞寺と號せり、天慶八年重明親王の妃、藤原の爲めに新堂を同寺に立て法會を修し、等身の釋迦像を其内に安置す、後、勅許により清涼寺となれり。

●臨川寺(京都市外)

臨川寺は天龍寺の東、渡月橋の北に在り、臨濟宗にして夢窓國師を開基とす、後醍醐天皇建武二年「川端宮」を國師に賜與ありて道場と爲せり、川端御所は舊龜山殿の別館、大堰川に臨むを以て此名あり、龜山天皇其皇女昭慶門院に傳へ給ひ資給太だ厚し世に川端女院と言ふ、後醍醐天皇第二皇子太宰帥世良親王之が養子となり夏に傳領ありしが薨逝の後夢窓國師に勅授ありて親王之菩提を吊はせ給ふ其御墓あり、寺廢宸翰に「右當寺者龜山法皇仙居、都督大王遺跡也」云々とあり。  
臨川寺には初め「梵音閣」即ち山門及圓融道場(佛殿)枯木堂(法堂)等の佛閣を備へ頗る昌盛を極めたるも、今は幾かに佛堂を存するのみ。

●太秦廣隆寺(京都市外)

太秦廣隆寺として知らる、同寺は葛野郡太秦村にあり、眞言宗にして別格本山なり、推古天皇十二年聖德太子、秦川勝に命じて創建ありし山城最初の巨刹たり。  
峰岡山廣隆寺と號し、又秦公、桂林、三槻、香楓、葛野才の稱あり、推古天皇の三十一年三韓佛像を貢せし時、葛野秦寺に安んずとあるは此寺なり、太子堂を上宮王院と稱し、中に太子自作の木像を安んじ、其衣冠は歷世朝廷より寄進あり、桂宮院は太子堂より一町餘の西にあり、八稜形なるを以て世に八角堂と稱し、又奥院と言ふ、太子の別宮にして所謂楓野別宮なり、堂の中央には太子十六歳肖像、左右は如意輪觀音及阿彌陀佛を安置す、此堂は最初の建造に係り、今に至るまで一千二百九十餘年を経、平安第一なりと傳ふ。

龜山、後嵯峨兩帝陵



寺川臨

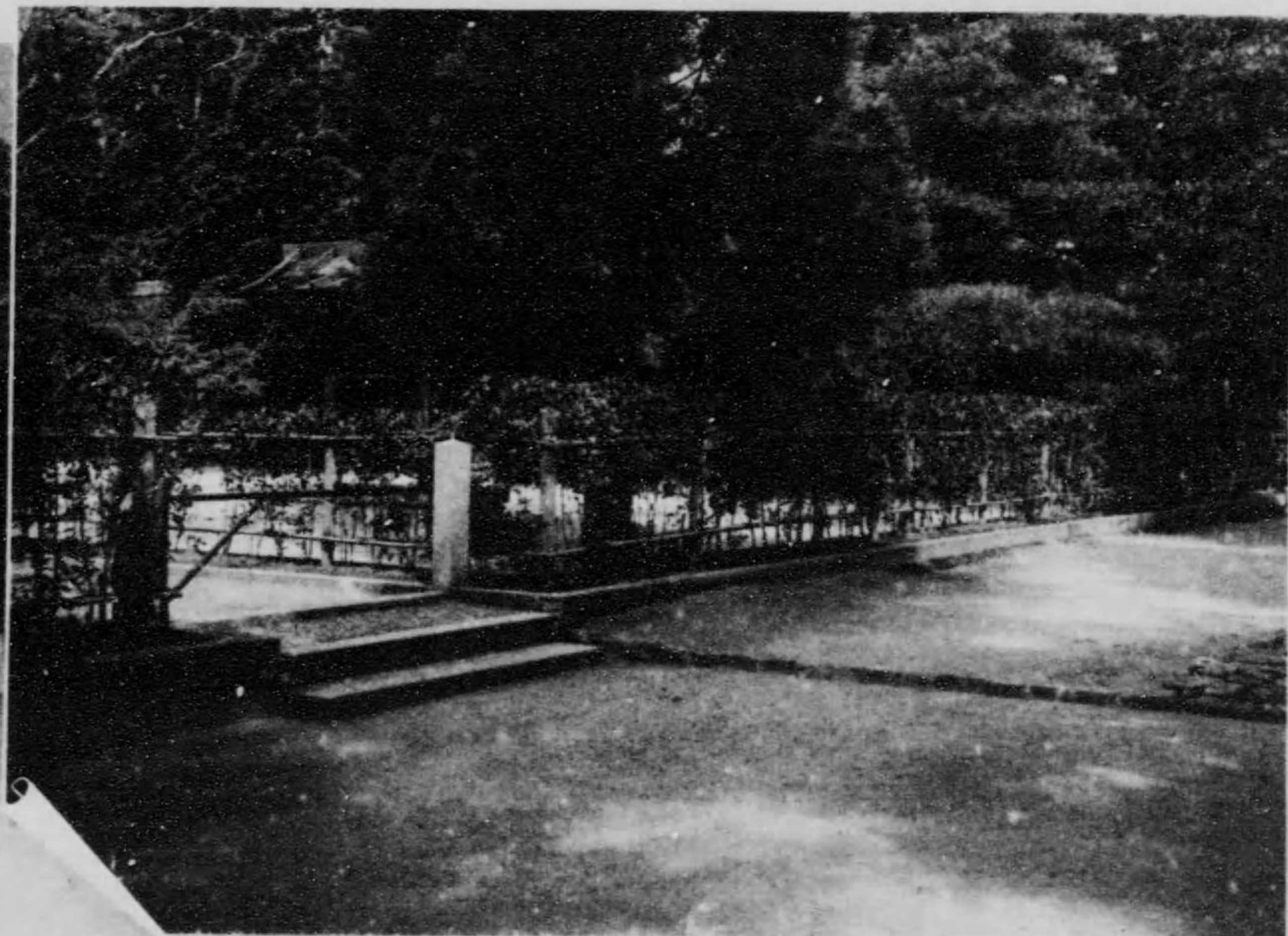


千代の松ひく龜の尾の山  
紀 維 岳  
龜の尾の山の岩根をとめて落る  
瀧のしちたま千世の數かも

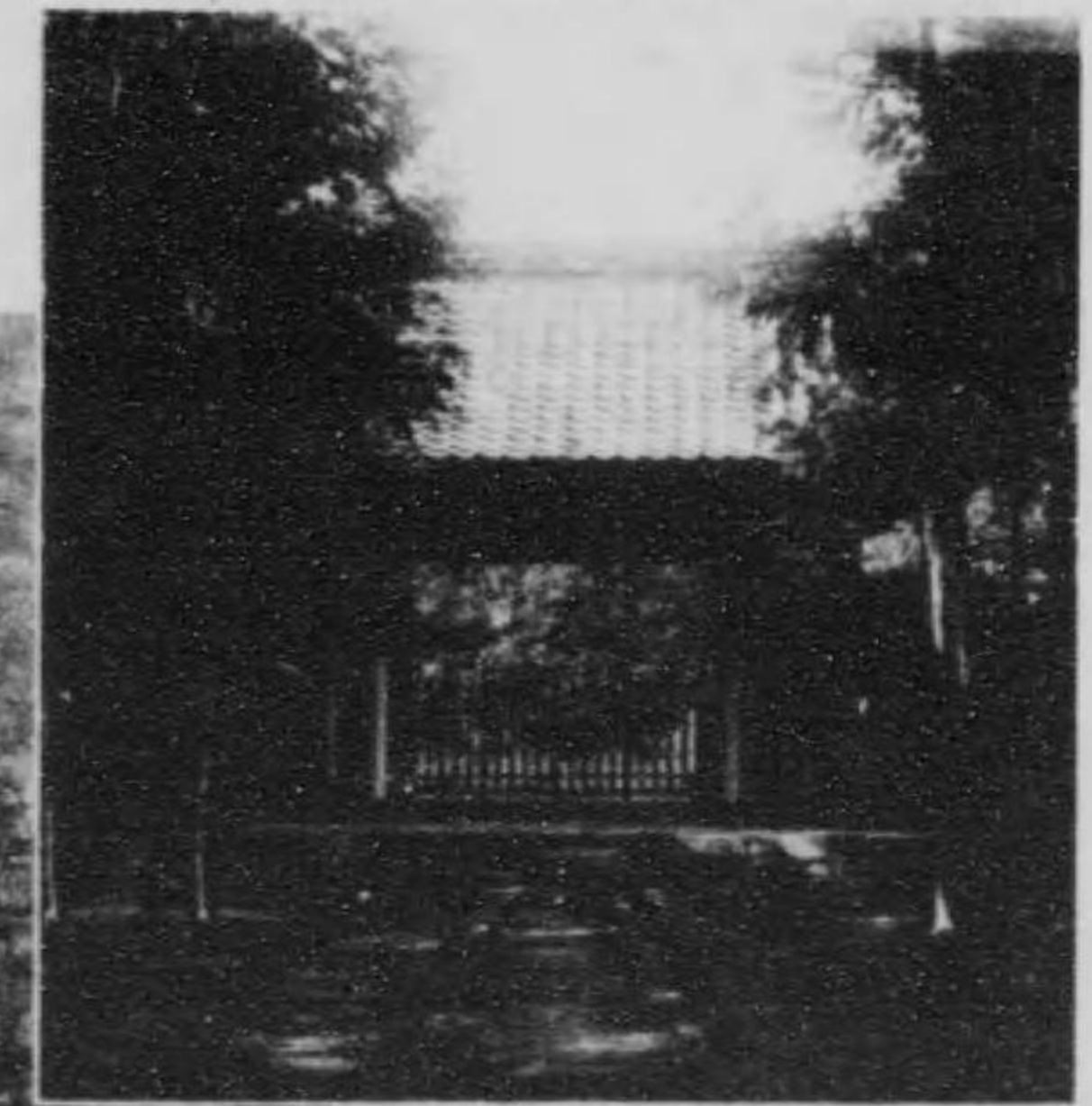
天慶八年重明親王の妃、藤原の爲めに新  
堂を同寺に立て法會を修し、等身の釋迦  
像を其内に安置す、後、勅許により清涼寺  
となれり。

一千二百九十餘年を経、平安第一なりと  
傳ふ。

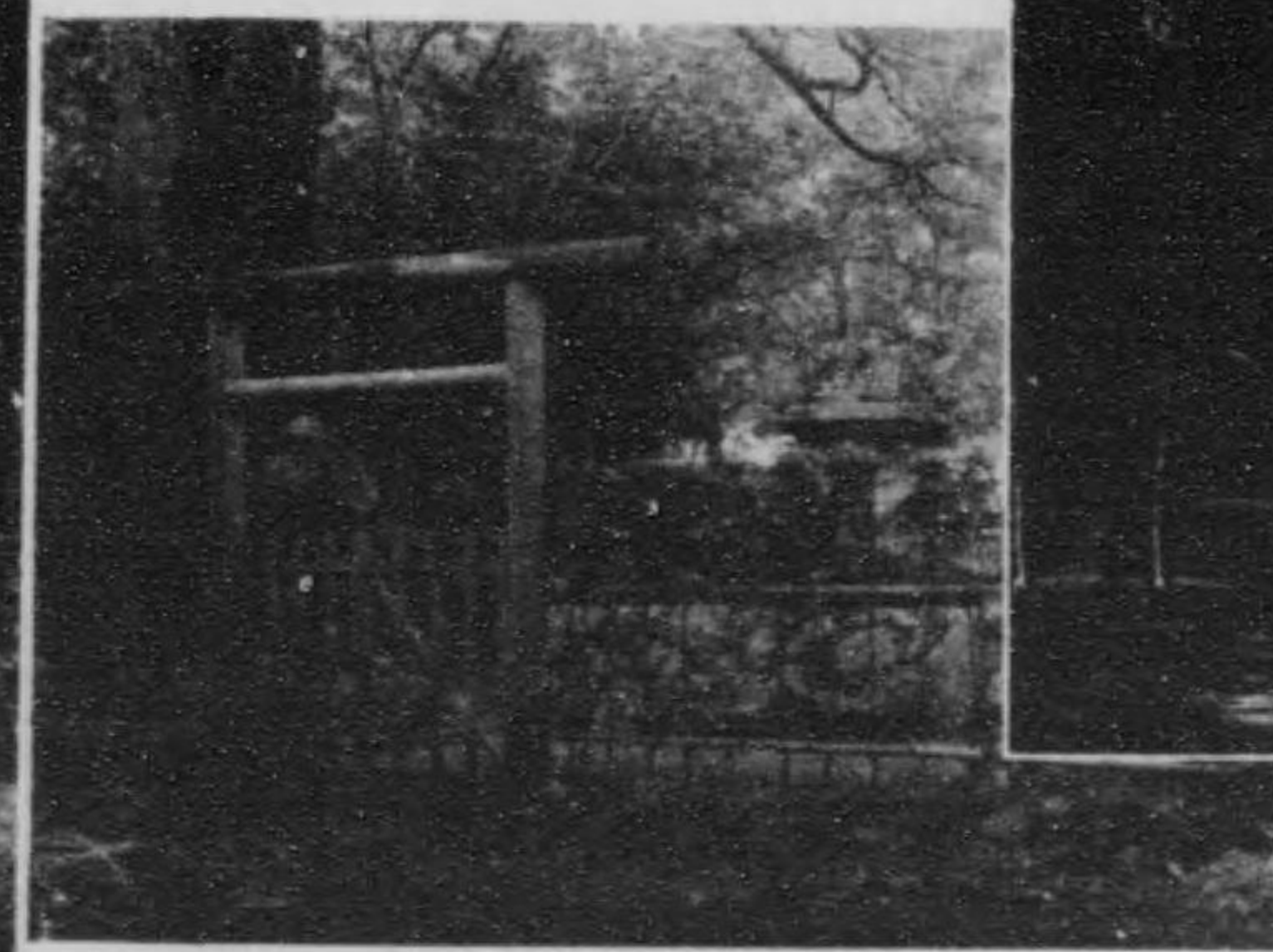
龜山、後醍醐兩帝陵



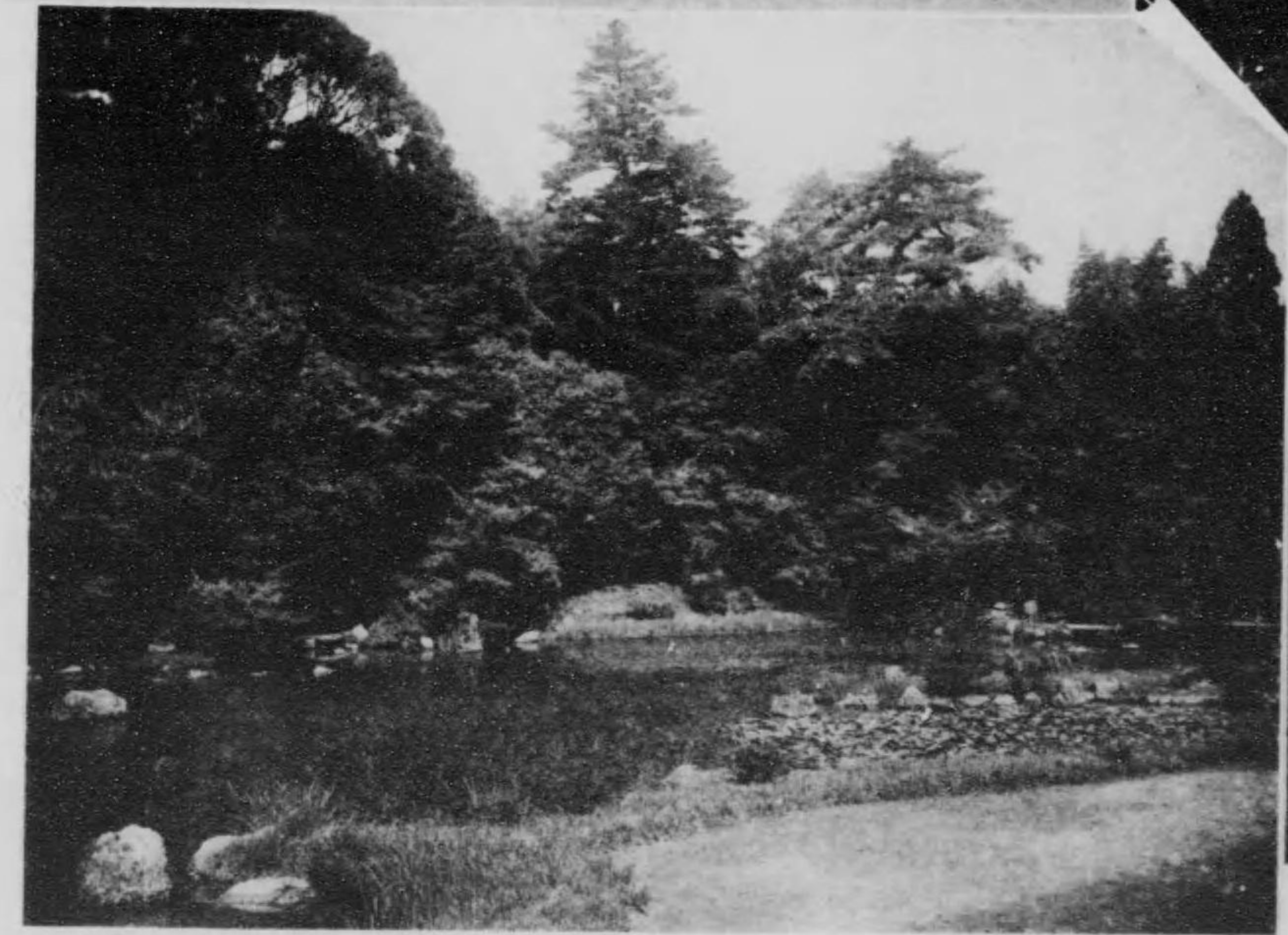
太 秦 廣 隆 寺



龜 川 寺



清 涼 寺 內 源 融 基

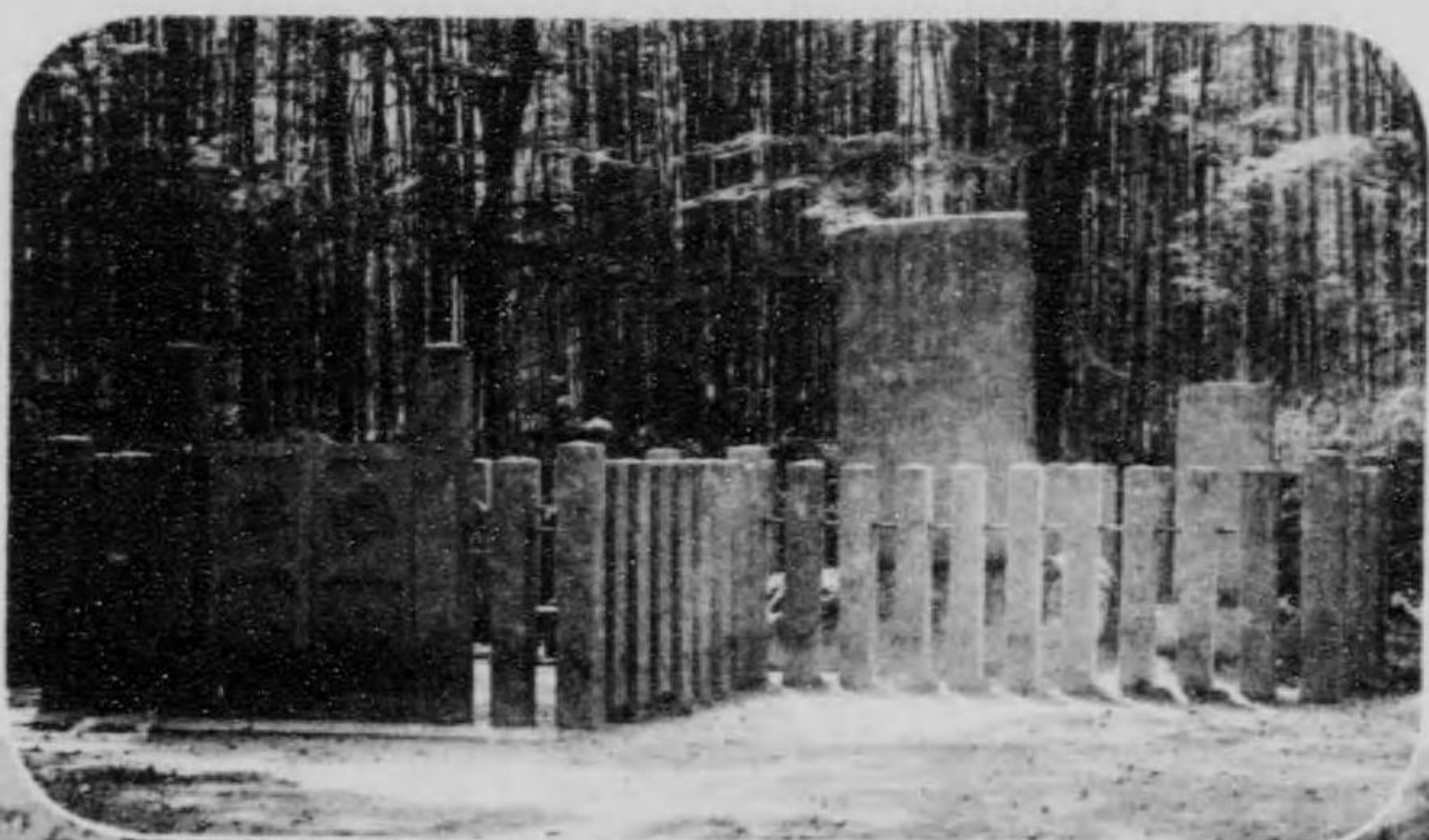


天 龍 寺 林 泉

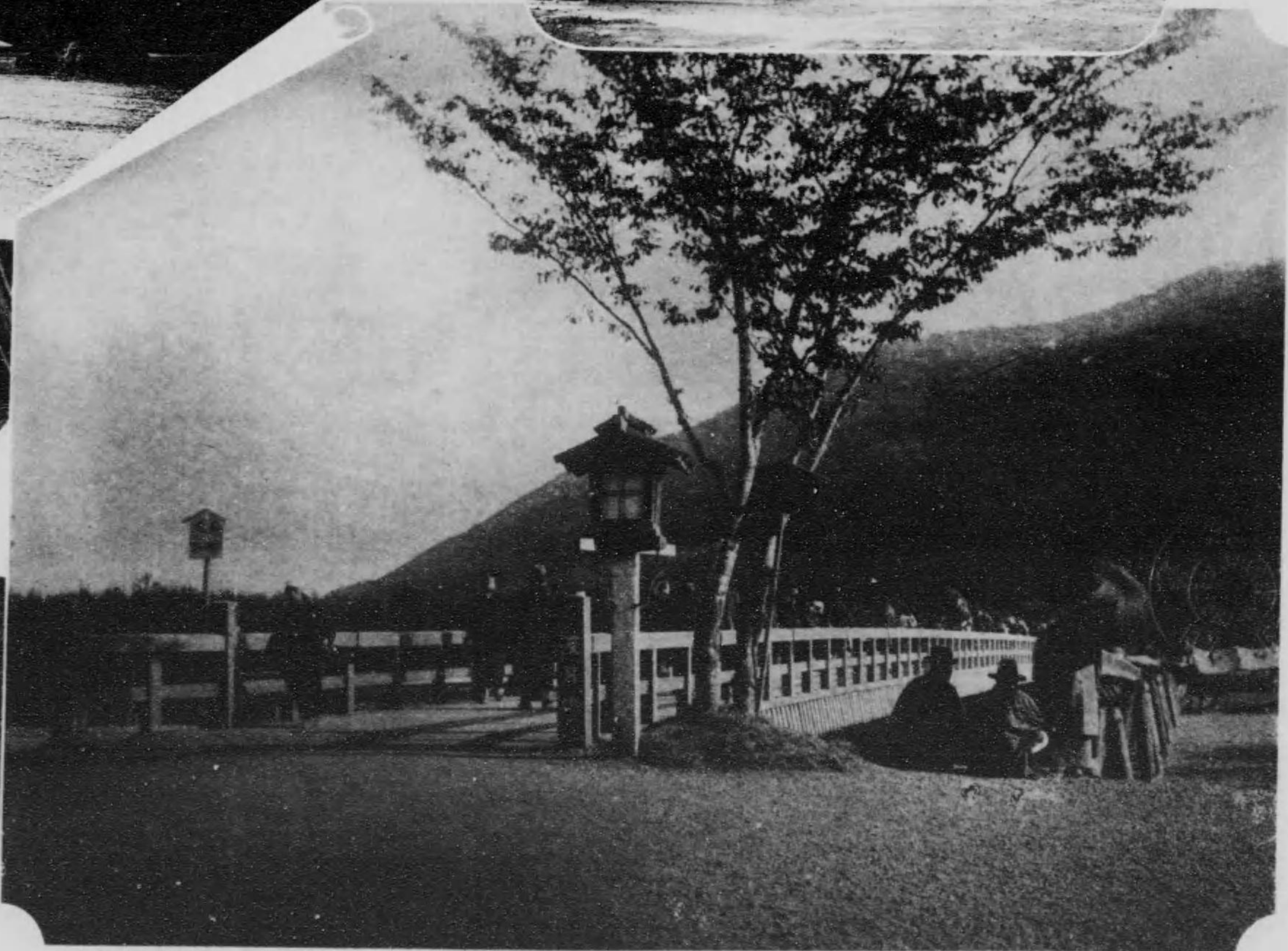
上ノ三三



小楠公首塚



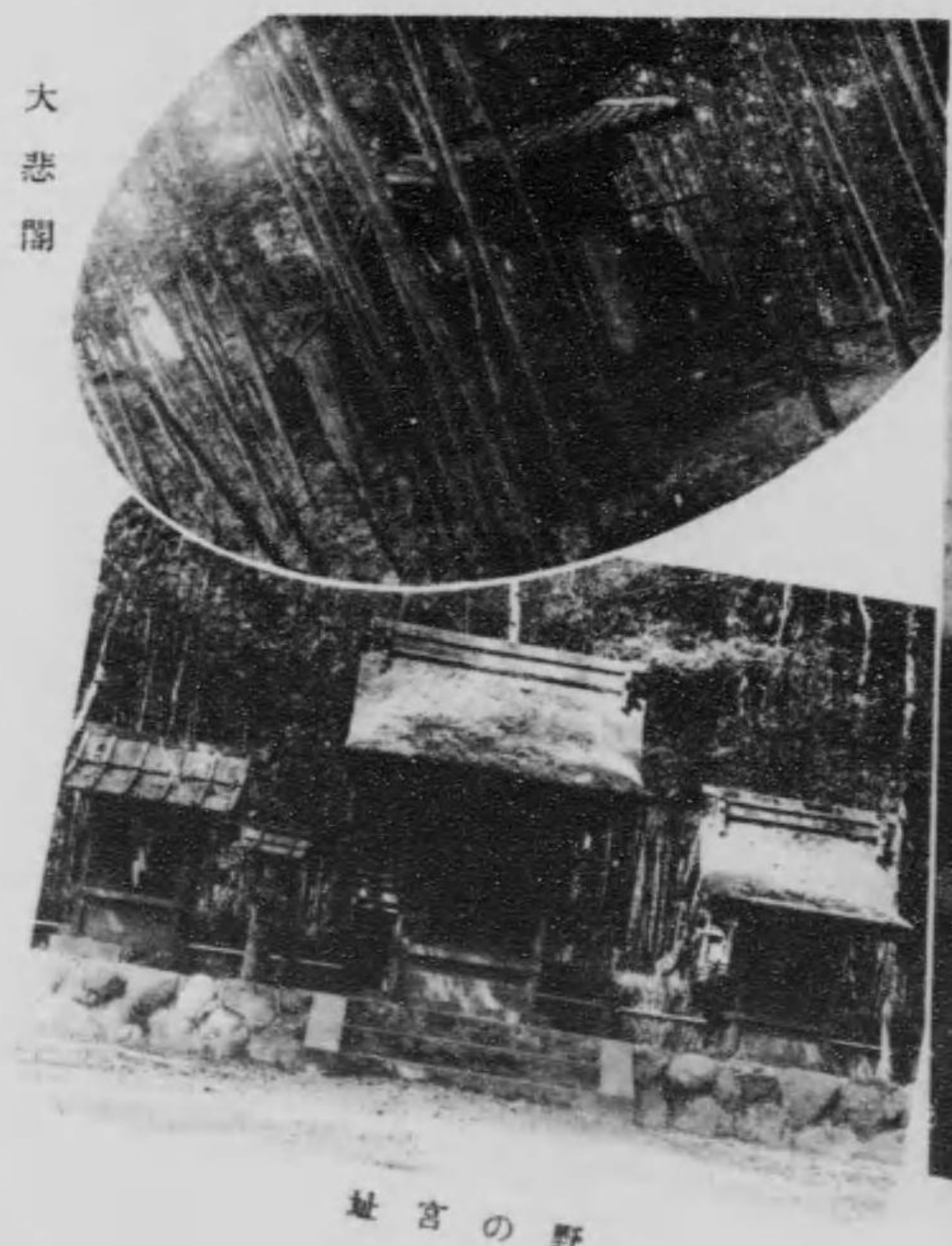
桂川



嵐山渡月橋

●嵐山渡月橋 (京都市外)

桂川の上流は保津川にして、棧敷岳より發する清瀧川と合せる保津川は、愛宕山の東麓を繞りて嵐山の麓に出づるや桂川と稱せらる、此間の山容水勢は頗る壯



大悲閣

野の宮址

●野の宮址 (京都市外)

三四

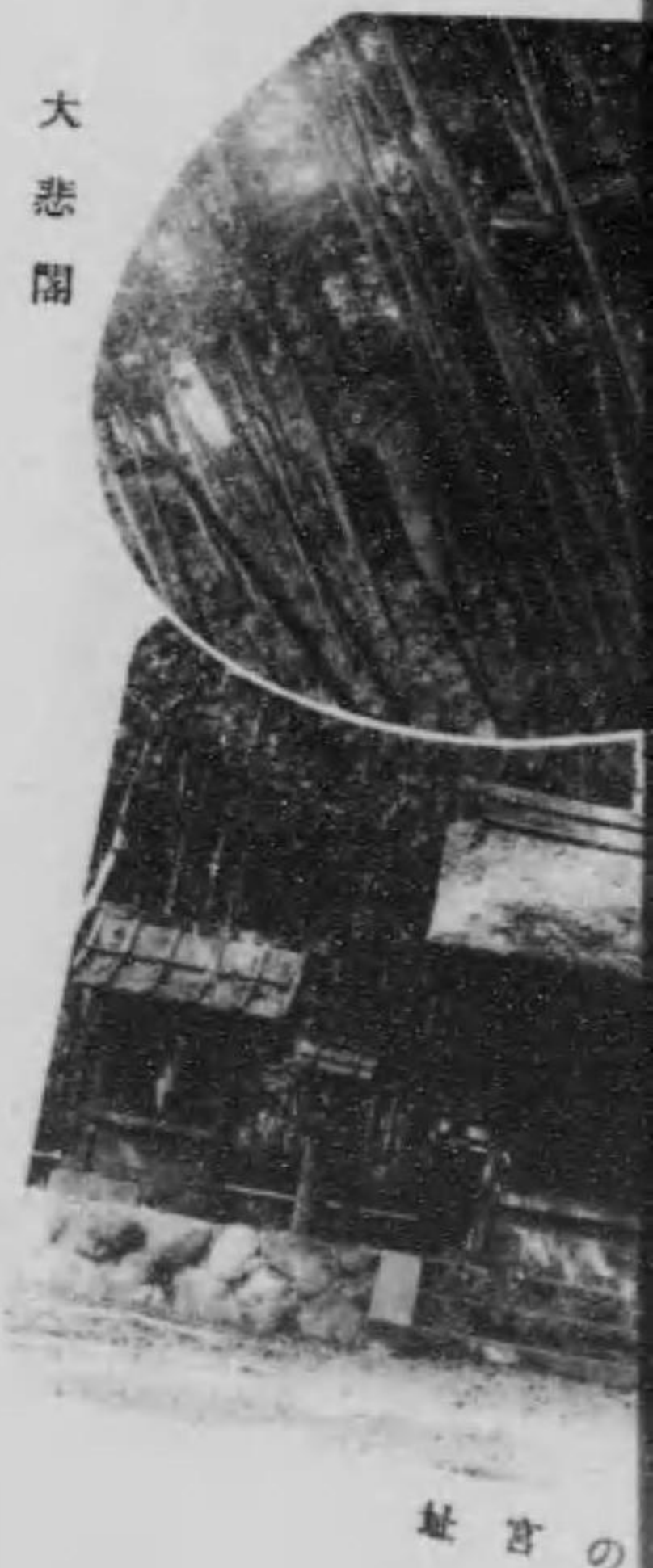
り三町餘登れる所に在り、樹間に溪流の奔跳するを眺めて趣致に富めり、千手觀音を安置し脇壇に嵐峽開鑿の水利家角倉了意像を置く、渡月橋の上流は保津清瀧の急瀬にして亂石奔湍の奇あり、躑躅線亂紅を漲するの時、龜岡より舟を縦つて此急瀬を下る尤も奇絶とす、峽中石あり

嵯峨二尊院の南、天龍寺の北に一叢祠あり黒木明神と稱す、延喜式に依れば、凡天皇初即位者、定伊勢大神宮齋、内親王簡未嫁者、卜城外淨野、造齋宮、明年後入之」とあり、其伊勢齋宮は大和京の昔より





大悲閣



宮の址

### 嵐山渡月橋 (京都市外)

桂川の上流は保津川にして、棧敷岳より發する清瀧川と合せる保津川は、愛宕山の東麓を繞りて嵐山の麓に出づるや桂川と稱せらる、此間の山容水勢は頗る壯觀を極む。

山水の秀と櫻花の勝とを以て其名天下に聞ゆる嵐山は、桂川の溪流を隔て、隆起せる峰巒なり、天龍寺前より松樹の蒼々たる間を歩し水滸に達すれば、清流淙淙として先づ心氣を爽ならしめ、前面に展開せる明娟の山水は亦人をして快哉を叫ばしむ、山屹として聳へ、谷狹く峽間を穿ちて其稍々平潤なる所一道の長橋を架す是れ有名なる渡月橋なり。

嵯峨の地曾て橋頭郷と總稱せられたるは此渡月橋ありしに因る、渡月橋は一に御幸橋とも言ふ、梅花無盡藏は之を度月橋と記す、萬里の度月橋詩に曰く

臨川寺外法輪塔 度月橋横大井河  
萬頃浪花閣下筏 行人和得棹郎歌

渡月橋より上流三町餘の所に風光美を以て聞ゆる千鳥淵あり、其山中に巨難瀨の大瀑ありて瀑上の淺黄櫻は滿山に於ける巨樹と稱せられ、山上十四五町の所に嵐山城址あり、永正二年管領細川政元の家人香西又六逆亂此城に籠り政元の近侍に賂して弑逆を行はしむ、四年政元の養子澄元阿波兵を率ゐて京師に入る、又六之を防ぎ戦敗れて死せり、里人は城址を城之壇と稱す。

嵐山は開春の候に至れば櫻花爛熳として峰燃へんとす、日出て、は霞蒸し、月照して雲冷かに清流に枕む、危崖の邊、萬朶の花清淺の水と相映發し、花氣水氣と相氳氳し夜も亦光あり、此山の櫻は龜山上皇が嵯峨の仙洞に在せし時、吉野の各種を植へさせ給ひしなりと傳ふ、芭蕉の『花の山二町のばれば大悲閣』は渡月橋を渡

### 野の宮址 (京都市外)

嵯峨二尊院の南、天龍寺の北に一叢祠あり黒木明神と稱す、延喜式に依れば、凡天皇初即位者、定伊勢大神宮齋、内親王簡未嫁者、卜城外淨野、造齋宮、明年後入之」とあり、其伊勢齋宮は大和京の昔より之れあり平安京に及び後鳥羽帝の皇女隸子内親王潔齋の事に當らせ給へる以來斷絶せるもの、如し、黒木明神に祀る所の神靈は天照皇大神にして、齋院内親王此に三年間住はせられて潔齋後伊勢に赴かせ給へりとの事に徴し此處は即ち『野之宮址』なりと傳ふ。

### 小楠公首塚 (京都市外)

清涼寺の傍らに竹林あり、琅玕戛々として鳴る、其林下に二個の碑石存す、其右なるものは小楠公の首塚にして左なるものは足利義詮の塔なり。

楠正行の四條畷に陣歿するや厭庵禪師なる者あり、竊かに正行の首級を奪ひ露行して此處に至り、地を相して之を埋め以て正行の冥福を修す、其位牌は天龍寺に在り、其後足利義詮病んで將に瞑せんとするや遺言して正行の塚畔に葬らしむ是れ正行の純忠至孝を敬慕したる他に思ふ所ありしか義詮の心事測り難し。

小楠公首塚は高七尺有餘、地に方石二尺餘のものを重ね、上に圓石を加へ、圓石を加へ、圓石の上更に方石を置き、其上に二小圓石を積む、石の四面皆な梵字を刻す、字畫模糊、指を以て掌に描くも其字體を得ず、五百年來風饑し雪虐し若蝕し盡す、又義詮の塔は一方石を置き上に交々屋形を成せる石と方石とを加へ頂に至りて漸く小なり、高七尺有餘其石皆な缺損して完形なく石片四方に散す、蓋し行客此塔を毀ち唾して以て快とするものあればなり、小楠公塚には香華常に絶へず。

り三町餘登れる所に在り、樹間に溪流の奔跳するを眺めて趣致に富めり、千手觀音を安置し脇壇に嵐峽開整の水利家角倉了意像を置く、渡月橋の上流は保津清瀧の急瀬にして亂石奔湍の奇あり、躑躅綠亂紅を漲するの時、龜岡より舟を縦つて此急瀬を下る尤も奇絶とす、峽中石あり皆奇、觀瀾石、蓮華岩あり屏風巖あり、奔流石に激して下る、兩岸盡く峭壁、老松懸垂して水に親しみ、花時猩血滴らんとし水亦赤し、灘の急なるもの浪花淵、猿淵、鳥船淵、舟子の舟を放つて此急瀬を下るや一人箭を執つて舟首に在り、石に遭ふて之を撞く、石に皆な箭眼あり、若し一箭を誤れば舟は忽ち碎く、舟子左右に箭を舞し少しも倉黄せず、箭細くして能く撓み石を撞くも彎々として弓の如し、之を保津下りと稱す、實に嵐山清遊の一興たるを失はざるなり。

### 類山陽

嵐山は春陽の櫻花、初夏の新緑、晩秋の霜葉、嚴冬の雪景、四時相通じて眺覽に富む、殊に此山の櫻花は蒼鬱たる樹間に超越して白雲の躑ける如く見ゆ、是れ他に求むべからざる特色たり。

青溪一曲水迢々 夾水櫻花影亦嬌  
桂楫誰家貴公子 落紅深處坐吹簫  
春風吹雨過西溪 溪上遊人路欲迷  
女伴相呼聯袂去 紅裙半濕落花泥

### 僧 瑞 溪

城西三里是嵐山 二十年來百住還  
人已數莖新白髮 花猶一笑舊紅顏

### 江 馬 天 江

峽口模糊曉霧封 寺門不見只聞鐘  
紅暉射處忽明水 滿山嵐翠染花青

### 林 雙 橋

漠々春雲漸欲晴 滿山何處不花明  
玉孫一去清遊絕 樹下無人奏鳳笙

### 後 類

となせより流す錦は大井川  
いかたにつめる木の葉なりけり



### ●花園天皇御陵 (京都市外)

粟田口十輪院山上に在り。

花園天皇は延慶元年後二條天皇崩御に依りて帝位に即き給ふ、文保二年に至りて後醍醐天皇に譲らせ給ひ、太上天皇と稱させ給へり、建武二年落飾あらせられて秋原殿に住はせ給ふ、天皇詩歌に長じ給ひ親ら『風雅集』を選し又深く禪を好ませられ常に妙超慧玄を師とし給へり、曩きに花園離宮を捨てさせられて妙心寺と爲し、更に玉鳳院方丈の側に一字を建立して之に移御あらせられ、正平三年十一月十一日寶算五十二を以て崩御あらせらる。

### ●妙心寺 (京都市外)

臨濟宗妙心寺派の本山たる妙心寺は、葛野郡花園村に在り、地は雙ヶ岡を東に望み、衣笠殿と稱せる宇多院址を西北に控へ嵯峨を西に見て南は太秦北は大内山に接す、初め左大臣清原夏野此に別業を建て、其後裔相繼いで之を領せり、花園天皇深く此地の風景を愛し給ひ、時の領主清原良枝に替地を賜ひて離宮を營み閑棲の地と爲し給へり、尋いで禪を好ませられ此離宮を以て禪刹と爲させ給ひ、西法山妙心寺と號せしむ。

應永六年大内義弘足利義滿に叛くや、義弘は妙心寺の住持拙堂の禪弟たりしを以て妙心寺は義弘に黨せりと讒せし者あり、義滿怒つて寺院及寺領を沒收し、他門に管理せしむること數十年、殿堂荒廢し唯だ開山堂を存するのみ、宗舜和尚妙心寺の住職となるに及んで、其堂塔を建築し、數年にして稍々舊觀に復したるは永享年中なり、然るに應仁の兵火に罹りて全山烏有となりしが、後土御門天皇勅して再興せしむ、爾後多少の變更を経たるも、濟家一派の大本山として今日に至り、佛堂は南向き二重瓦屋にして、殿

に磚を敷き中央に釋迦左右に迦葉阿難の三尊を安置し、東壇には大元密宗戈伽藍神の像、並に由緒ある帝王群侯の木牌を置き、達磨、百文、臨濟、關山の木像及當山歴世の牌を西壇に列ね、南向の法堂は佛殿の北に在り、是亦堂内磚を敷き、山主、演法諸法式を行ふ所にして、明暦三年の建立に係り、狩野探幽の畫ける極彩色蟠龍は此天井に雄姿を示せり。

### ●重閣の山門 (京都市外)

山門は重閣にして南面の通路に臨む、當年萬金を吝まず、時代の粹を選んで建造せるものなれば其結構推知し得べし。境内涅槃堂祥雲殿には豊太閤の子葉君廟を存し、庫門の西に古鐘樓あり世に黃沙鐘と號する巨鐘を懸く、『戊戌年四月十三日壬寅收精屋評造春米連康國鑄造』の一行廿二字を鐘面に鐫れり、實に一千二百餘年前の古鐘なりと傳ふ。

後宇多法皇

色々とならびの岡の初もみぢ

秋の嵯峨野の往來にも見る

たづね入る宇多野の風をうけてこそ

法をつたへし宿は占めけれ

世の中に沈むとならば照る月の

影をならびの池にすまばや

### ●五重塔と四派の松 (京都市外)

翠松離々として立つ處に巍然たる五重塔あり、是れ『妙心寺五重塔』と推賞せらる、古代の塔にして其内容外観筆紙の及ぶ所にあらず、境内に四株の老松の横はるものあり、蟠屈繁枝幾百年を経たるやを知らず、古く四派の松と稱せられ、五重塔と共に寺中に於ける稀觀の物たり、四派の松の稱は塔頭四派乃ち龍泉、東海、靈雲、聖澤より生める稱なり。

### ●雙ヶ岡 (京都市外)

契り置く花とならびの岡の邊に

あはれ幾世の春を過ぐさん

是れ兼好法師の歌なり、其雙ヶ岡は妙心寺の西に在り、山容、一坐、三墳を爲し南北に相雙び、北方最も高く、平地を抜くこと二百尺餘、後に深緑の山を負ひ風致絶佳の地たり、山上に『右大臣清原夏野墓』ありて今は雙ヶ岡公園として保存せらる。

夏野は三原王の孫にして、小倉王第五子なり、初め繁野と言ひ、此地の山莊に閑居せるより雙岡大臣と稱せらる、清原真人の姓を賜ひて臣籍に下り、爾來從四位上參議より從三位中納言に陞り左兵衛督を兼ね、後、左大臣民部に轉じ、大納言となり正三位に叙せられ、右大臣に進み從二位に叙せられて、承和四年十月薨す、朝廷其勳功を思召されて正二位を追贈す。雙ヶ岡は亦兼好法師の舊蹟として名あり。

吉田兼好の筆蹟は書畫大觀に據る。

### ●佐久間象山 (京都市外)

妙心寺境内大法院に佐久間象山の墓あり、象山名は啓、字は子明、通稱を啓之助と言ひ、後、修理と改む、象山は即ち其號なり、文化八年八月を以て信州松代なる象山の麓に生る。

象山は東湖の如く大術略大力量ありしに非ず、亦松陰の如く大血性大節義あるものに非ず、南洲の如く大信義大氣宇あるものに非ずと雖も、其經世的大識見に至りては則ち小楠を除くの外、維新前後彼れに及ぶ者なかりしなり、象山も亦一代の偉丈夫と謂はざるを得ず、而して彼れの志は終始其自發獨得の經綸は規模洪潤、區々たる國內の理論に饒饒するものに非ざりしことは、彼れが幕府に捧呈すべく起草せる建議書に就て之を察し得べし、惜い哉刺客の襲ふ所となり木屋街途上に暗撃せられて横死せり、是れ元治元年七月十一日にして象山時に年五十四





墓野夏原清



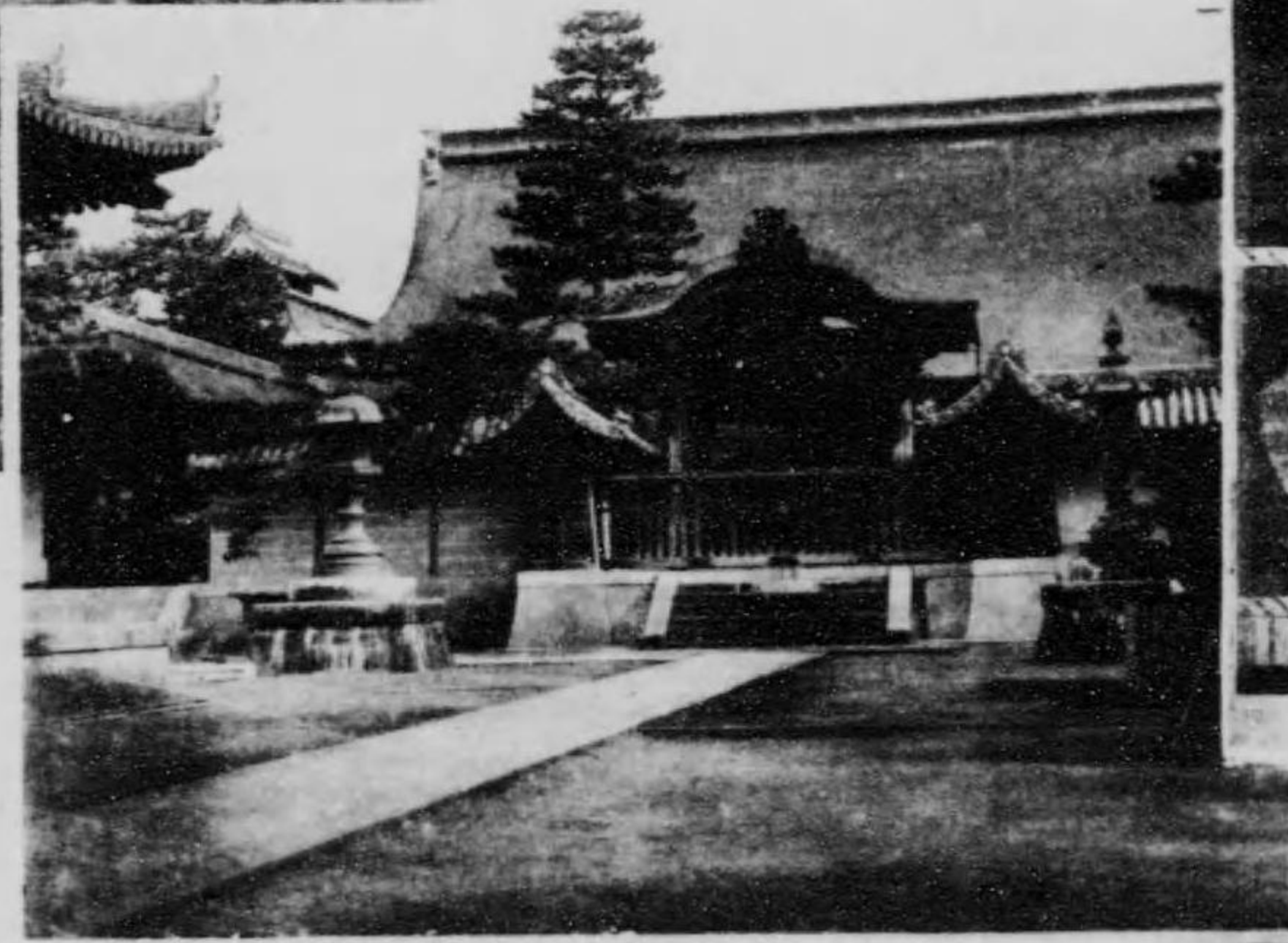
墓山象間久佐

岡ケ雙



松の派四

寺心妙園花



殿御皇天園花

影御皇天園花



て全山島有となりしが、後上御門天皇勅して再興せしむ、爾後多少の變更を経たるも、濟家一派の大本山として今日に至り、佛堂は南向き二重瓦屋にして、殿

四派の松の稱は塔頭四派乃ち龍泉、東海、靈雲、聖澤より生める稱なり。

●雙ヶ岡 (京都市外)

契り置く花とならびの岡の邊に

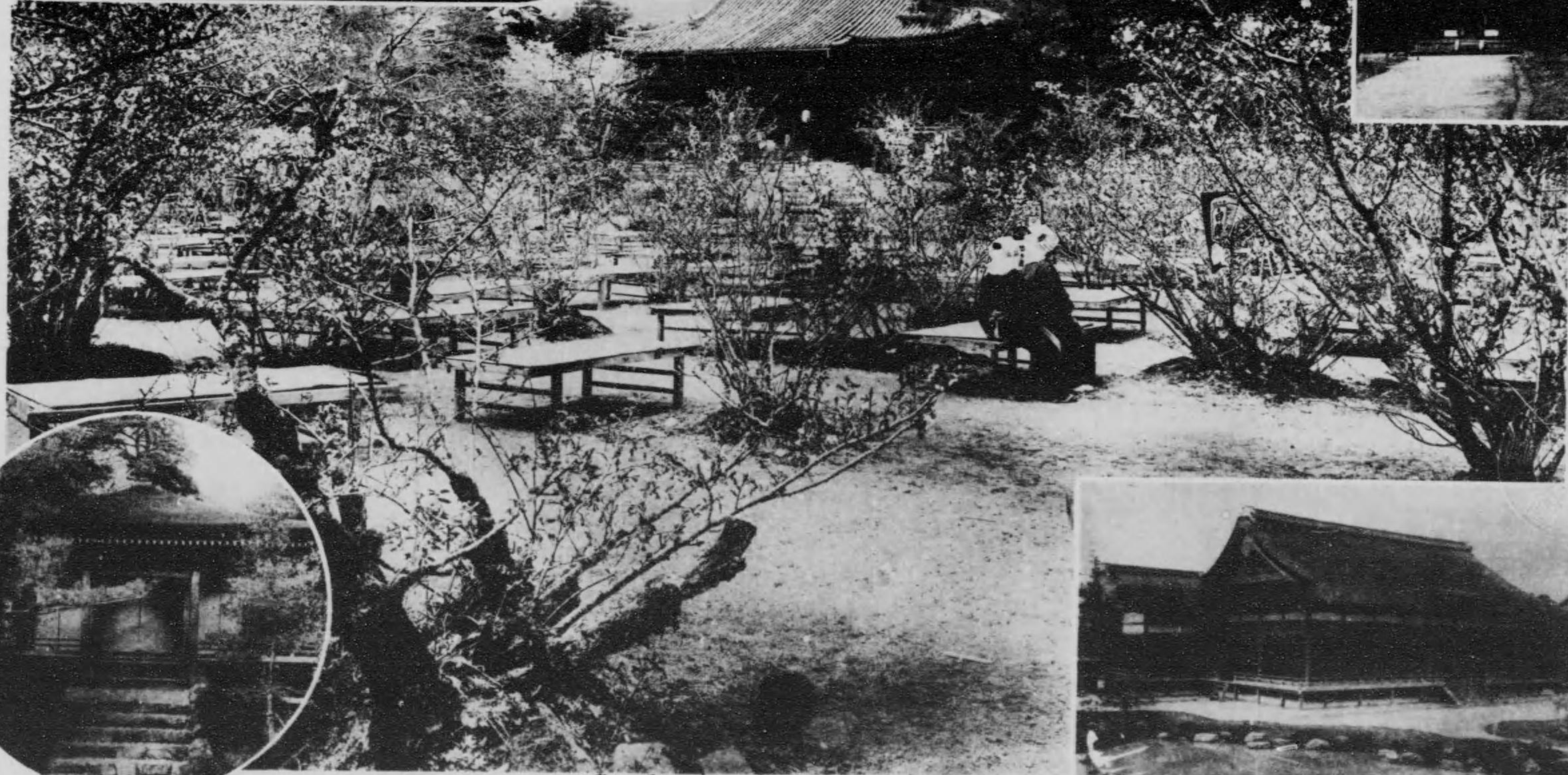
のに於たりしことは、彼れが幕府に捧呈すべく起草せる建議書に就て之を察し得べし、惜い哉刺客の襲ふ所となり木屋街途上に暗撃せられて横死せり、是れ元治元年七月十一日にして象山時に年五十四



仁 和 寺 山 門



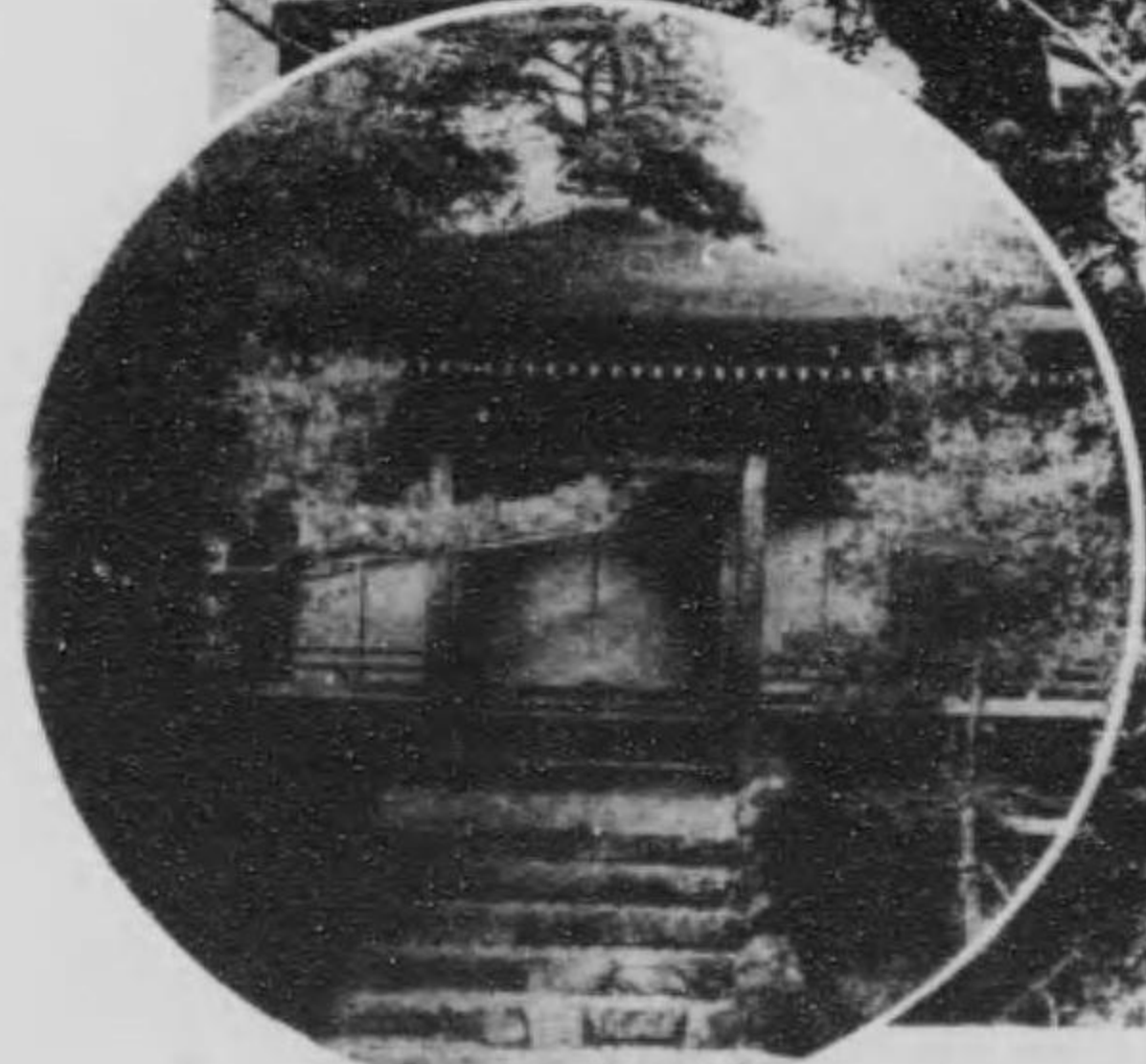
五 重 塔



御 室 仁 和 寺



仁 和 寺 靈 明 殿



仁 和 寺 宸 殿

● 御室仁和寺 (京都市外)

御室の稱は宇多天皇此に御室即ち離宮を營ませ給へるより起れるものにして、元は花園村全部と衣笠村の西方をも併せ

白雲の九重に立つ嶺なれば

大内山といふにぞありけり

慈鎮 和尙

隙もなきあとを哀れと見つるかな

大内山のけさのしらくも

見するに過ぎざるなり。

光格天皇遺愛の茶亭と傳へらるゝ飛瀧

亭及光琳の意匠を凝せる園廓亭は共に好

古家の参照に値すべく、金堂には光孝天

皇の尊像を安置し、四國靈場に擬して作





仁和寺宸殿

### ●御室仁和寺 (京都市外)

御室の稱は宇多天皇此に御室即ち離宮を營ませ給へるより起れるものにして、元は花園村全部と衣笠村の西方をも併せて『御室』又は仁和寺と總稱せり、仁和寺は御室の中央に在りて宇多天皇の御陵所在地たる大内山は仁和寺の北嶺に位す。

此地尋芳好。離宮即梵宮。華幘雙阜北、繡幕五雲中。花影人顏醉。山光鳥語工。更和靈園樂。千載與民同。

此詩は『春遊仁和寺舊寬平法皇離宮』の題を以て服部蘇門の賦せるものにして、寬平法皇の稱は宇多天皇落飾あらせられて、仁和寺に住し給へるより時人は寬平年間の法皇を意味せる尊稱なり、法皇は僧益信に就き空海傳來の灌頂を相承し、法名を金剛覺と稱させ給ふ、而して仁和寺は御室流と稱し、空海眞雅源仁益信を四傳と言ひ、寬空寬朝雅慶を經、傳へて濟信に至り、三條天皇の皇子師明親王落飾あらせられて性信法親王と稱し、當寺の中興とならせ給ふや、宗風益々振ひ、宇多法皇を推して、御室帝と稱し、性信法親王を大御室殿と曰へり、爾來皇子入室あり總法務宮と號す。

應仁及文明の亂に當り仁和寺は兵火に罹り、四十有餘の支院亦衰廢し、法務親王は雙ヶ岡の西麓に殿舎を營み纔かに法脈を傳授せり、寬永年中徳川幕府寺塔諸宇を造進せるより漸く面目を更新し、正保年間に及んで總ての落成を告げ舊觀に復せり、是れ覺深法親王の時なりき。當時の造營は寺域の西南隅に佛殿を置き、金堂、五重大塔、觀音堂、祖師堂、經藏、二天門、仁王門等にして徳川時代に於ける精緻の建造物なりしを、近年に至り其殿堂を燒失せるは惜むべし。

中納言兼輔

### 白雲の九重に立つ嶺なれば

大内山といふにぞありけり

慈鎮 和尚

隙もなきあとを哀れと見つるかな  
大内山のけさのしらくも

前者は亭子院即ち宇多法皇の大内山に在らせられたる時、勅使として伺候せる兼輔が、麓より雲の立のぼるを見て詠める歌なり、其大内山は御室の北嶺、仁和寺を距る正北八町餘、山頂の一凹處に大内山陵あり、大日本史に『宇多法皇遺詔、以葛裏棺、以葛約之、停任葬司造山陵、火葬大内山、稱宇多院、天子稱院省尊號、自此始』と見ゆ、山陵は當時の火葬所なりしを知るべし、古來櫻花を以て名ある御室の櫻は他と其種を異にし、幾星霜を経るも、幹身の延長することなく、株々根邊より花を開き、老大なるものは蟠屈曲折して地を匍匐するが如く、花時之を望めば紅雪の庭園を埋むるに似たり、大内山より仁和寺に亘りて此特種の櫻樹多し。

仁和寺は光孝天皇御宇仁和四年の創建にして所在地を大内山又御室とも言へり、之れ宇多天皇落飾の後當寺に入り宮殿を造營し給へるに起因す。

### ●宸殿と靈明殿 (京都市外)

宮殿當時の宸居は禁闕の其れと異なる所なき宏壯のものなりしことは言を俟たず、且つ宇多法皇崩御あらせられたる後と雖も、朱雀天皇讓位あらせられて亦仁和寺に宸居を定め給ひ、爾後世々法親王の住み給へる所なれば、兵燹に罹り屢々追營改修を經たりしも、其宸殿は依然として舊形に倣へり、然るに最近明治二十五年の火災に於て、祖師堂金堂等を留むる外大半燒失せるより、宸殿始め靈明殿

其他の古建物を見る能はず、唯だ寺邊を徘徊して當年宸居の舊蹟に就き往時を想

### 見するに過ぎざるなり。

光格天皇遺愛の茶亭と傳へらるゝ飛瀨亭及光琳の意匠を凝せる圍廊亭は共に好古家の參照に値すべく、金堂には光孝天皇の尊像を安置し、四國靈場に擬して作れる『成就山八十八ヶ所』は後方大内山に在り茲に掲ぐる宸殿靈明殿山門五重塔等は幾災害を經たる古建物中の舊形に基き造營せるものなれば、建築界の人に取ては好個の料たるべし、十萬六千四百六十餘坪の寺域を有する仁和寺は頻繁の災害に遭ふて殿宇を失ひ、纔かに造營成れるも未だ舊觀に復せず、櫻花獨り繁殖して『御室の花』たるを誇る、序を以て聊か宇多天皇讓位の遠近因を記さん。

藤原氏の權を擅にするや久し、就中基經に至りて最も專横を極めたり、一々之を枚擧するに遑あらずと雖も、宇多天皇の御宇に於て、彼れは攝政關白に任せられたる時、阿衡の任なる文字を捉へて、屢々字襟を惱まし奉り、竟に優詔の取消を求めたるが如きは恐むべき事に屬す、彼れ死して其子時平の朝に仕へし時も、朝廷藤原氏の跋扈に遠慮あらせられ、重く之を用ひ給へり。

然れ共久しく藤原氏の專横を怒らせ給へる宇多天皇は、檢稅使問題に於て大英斷を施さんとし給ひ、亞いで基經の妹たる清和天皇の中宮たりし皇太后高子の僧善祐と通せる故を以て廢后を仰せ出され徐々廓清を計らせ給へる後、位を太子敦仁親王に譲り給ひ、太上天皇として政を繼はせらるゝ事となれり、此間寵臣菅原道眞の意見を徵せられたること史上に詳なり、藤原氏不臣の專横は天皇に依りて変除の動機を作られ、國家重大の問題は亦序を逐ふて解決せられんとせり。

寬平九年七月三日を以て讓位あらせられ、承平元年七月仁和寺に崩御あらせられ大内山陵に鎮まらせ給ふ。



### ●等持院 (京都市外)

足利歴代の廟所として知られたる寺院にして衣笠山の南麓に在り、山號を鳳凰山と云ふ、後ち義堂和尚の時に至り萬年山と改稱せり、臨濟宗に屬す。延文年間、足利尊氏の廟塔として其子義詮の創建に係る。洛中三條坊門等持院の別院なるを以て北等持院とも稱せり又一説には往昔仁和寺の一寺院にして、足利尊氏夢窓國師を聘して中興の開山と爲すと云ふ。總門は南面して建立せられ、其前面に蓮池石橋あり、足利三代將軍義滿の揮毫に係る。「等持院」の堅額は當寺の中門に掲げたり。佛殿昭堂には足利氏累代の木像を安置す(但し五代と十代との兩像を缺く)孰れも衣冠持笏にして帶劍せる座像なり。嘗て明治維新の際、在京の浪士三輪田某等、木像の首を斬りて三條河原に鼻したるは此の木像なり、今は其首接合せられ依然として舊姿を存す。左に記事の序を以 足利幕府歴代の將軍氏名歿年を記す。

尊氏(初代) 初名高氏、又太郎と稱す貞氏の子なり、後ち醍醐天皇の一字を賜はりて尊氏と改む、延文三年四月廿九日歿す。  
 義詮(二代) 尊氏の第三子にして正平十三年將軍となる、在職十年、同二十二年歿す。  
 義滿(三代) 義詮の子、正平二十三年將軍となる、北山に金閣寺を造り驕奢を擅にす、應永十五年五月六日歿す。  
 義持(四代) 義滿の子、應永二年將軍職を襲ぐ、同三十年職を其子に讓る、正長元年歿す。  
 義量(五代) 義持の子、應永三十年將軍となる、在職僅に三年にして應永三十二年歿す。  
 義教(六代) 義滿の子、初め僧と爲り

後ち還俗して將軍職を襲ふ、嘉吉元年赤松滿祐の爲めに殺さる。

義勝(七代) 義教の子、嘉吉二年將軍職を襲ぐ、翌三年落馬して歿す。齡僅に八歳。

義政(八代) 義教の二子、寶徳元年將軍と爲る義滿の行爲に倣ふて東山に銀閣寺を創建して娛樂に耽る、延徳二年歿す。

義尚(九代) 義政の子、文明五年將軍と爲る、長享元年高頼を討ち陣中に歿す。

義植(十代) 義視の子、延徳二年將軍職を襲ぐ、亂を避けて近江に逃れ、大永三年歿す。

義澄(十一代) 政知の子、義政の養子となる、明應三年將軍となり、永正八年歿す。

義晴(十二代) 義澄の子、大永元年十二月將軍職を襲ぐ、天文十九年五月四日歿す。

義輝(十三代) 義晴の子、天文十五年將軍と爲る、永祿八年松永久秀の爲めに攻められて自殺す。

義榮(十四代) 義維の子にして義澄の孫なり、永祿十一年將軍となり、在職七ヶ月にして歿す、

義昭(十五代) 義晴の子にして義輝の弟なり、義榮の後を承けて將軍となる天正元年(元龜四年)歿す、是れ足利最終の將軍にして、義昭に至つて足利氏遂に亡ぶ。

### ●尊氏、義詮の墓 (京都市外)

尊氏の墓は等持院昭堂の西方に存し古色蒼然たる寶篋塔なり。義詮の墓は同院背後の山上に在り。是れ亦輪塔型なり。嘗て寛政年間、勤王家高山彦九郎茲を過ぎて憤慨して過ぐるに忍びず尊氏の塔

を管打ちたる事あり。又同時代に蘆生君平も亦皇陵探査の途次、茲に至りて憤懣禁する能はず塔に向つて尊氏の罪を責め、杖を擧げて幾びか撲ちたりと云ふ。尊氏の筆蹟は忌宮所藏、義詮の筆蹟は醍醐寺所藏に據る。

### ●細川勝元墓 (京都市外)

葛野郡花園村谷口なる大雲山龍安寺に在り。同寺は臨濟宗にして義天和尙の開基に係り、細川政元の創建する所なり。即ち政元の父勝元の墓所として知らる。當寺の庭地は素と勝元の庭園なりしと云ふ。當寺の天井に描ける蟠龍迎陵の畫は兆殿司の筆に成りて著名なるものなり。境内に鏡容池と號くる池ありて辨財天を祀る。水禽遊泳頗る風趣に富む、茲に飼へる鴛鴦は、古來龍安寺の鴛鴦と稱せられて名勝の一に數へらる。勝元生前此地の泉池を激賞して徳大寺家より譲り受け得たりと云ふ。

細川勝元は持元の長子にして、文安二年管領職に補し、右京大夫に任ず同六年四月從四位下に叙し、武藏守を兼ね享徳元年再び管領に補し、寛正五年之を辭す。是れより先、持國の子、政長、義就と不和を生じ、政長は勝元に依り義就は山名宗全に頼りて各々その保護を求むる所ありたり。茲に於て勝元、宗全の兩人、各自の保護者を援けて相争ふに至り、其局終に兵を集めて京都に戦ひを交ゆ、是れ所謂應仁の亂なり。斯くて勝元は將軍足利義政を擁し、且つ後土御門天皇及び後花園上皇を幕府に奉ず。文明二年再び管領職に就く。而して山名宗全と兵を交へ、數年に亘るも結んで解けず、其の終局を見ざるに先だち同五年五月終に陣中に於て卒す、享年四十四、法名を龍安寺宗寶仁榮と云ふ。

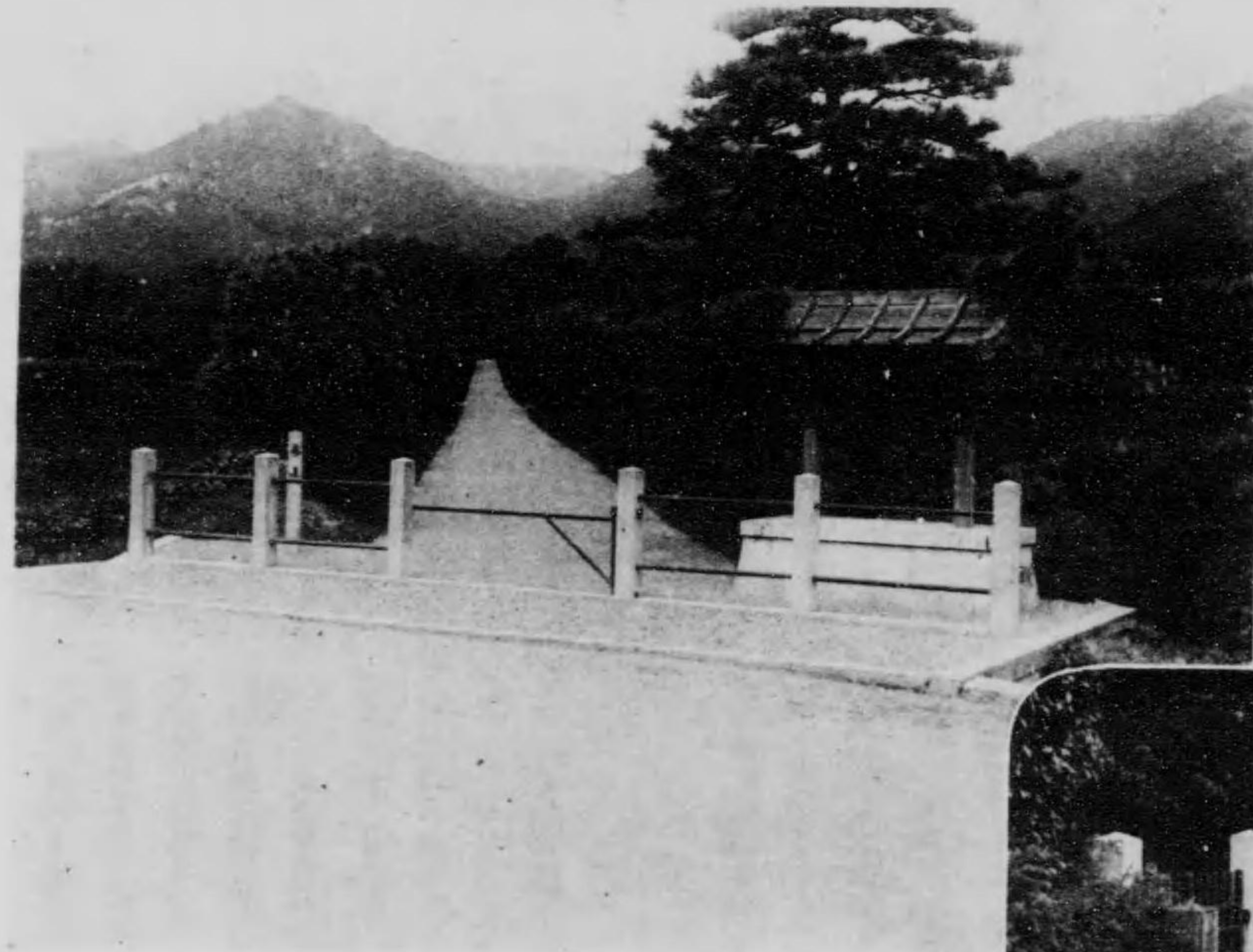




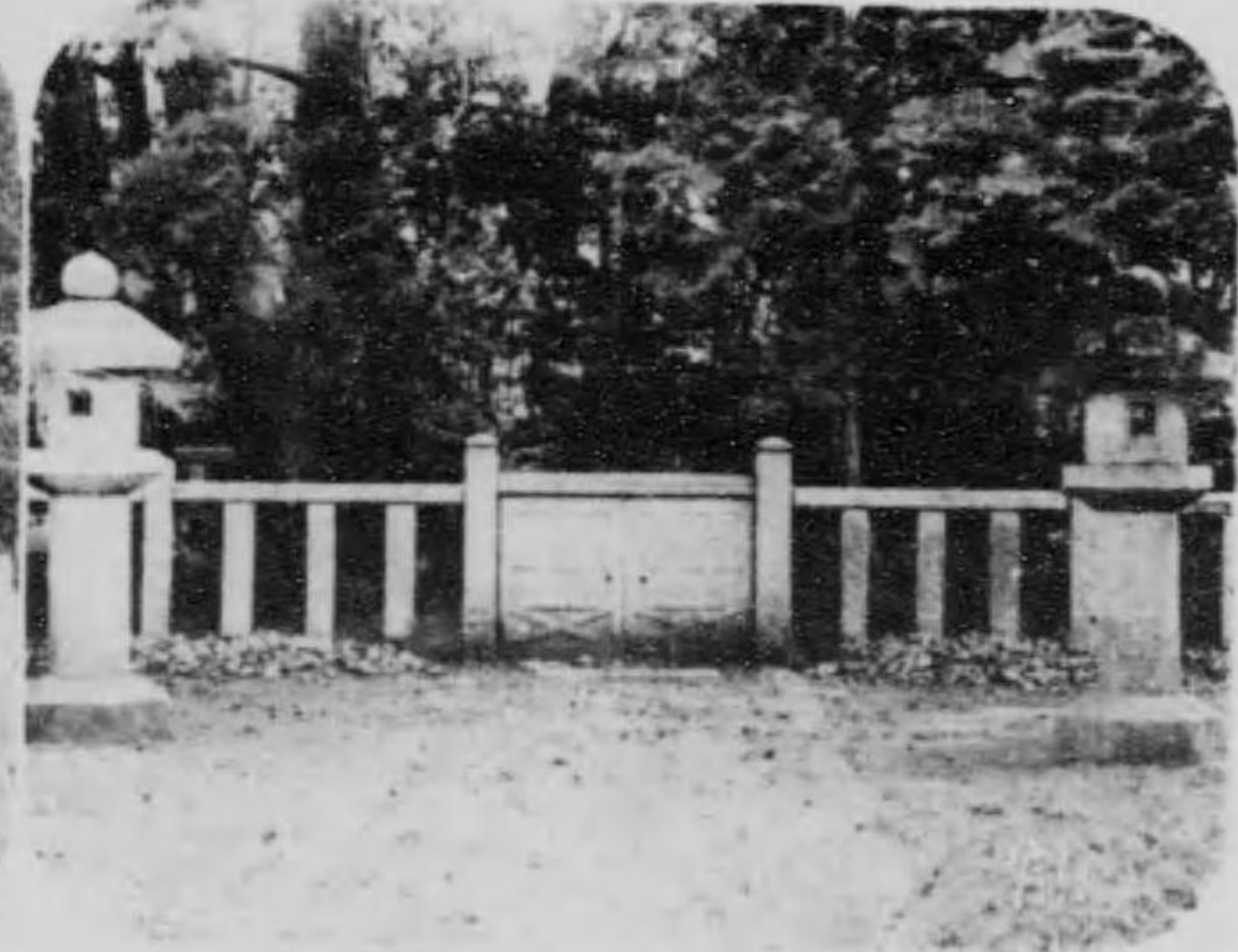
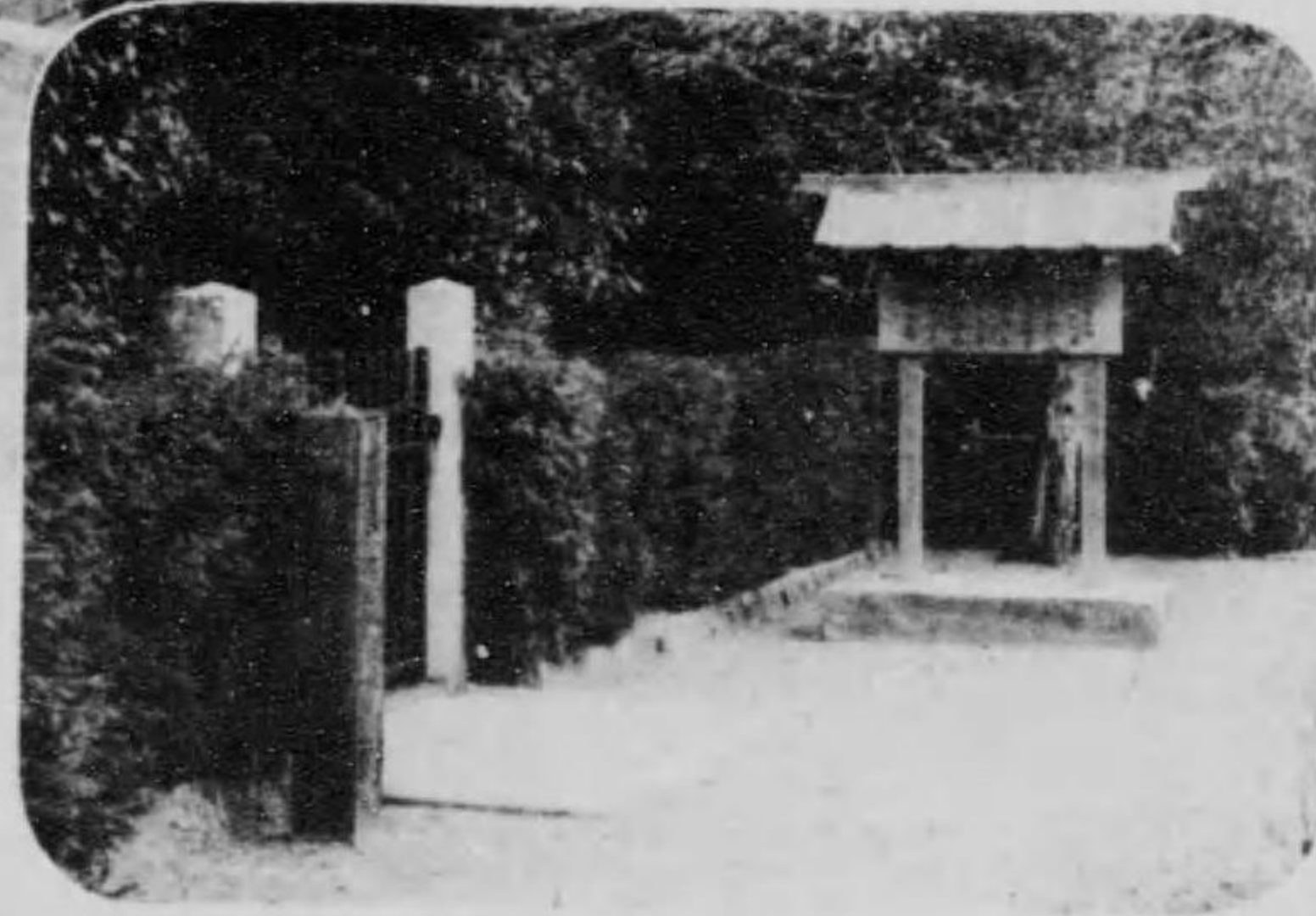
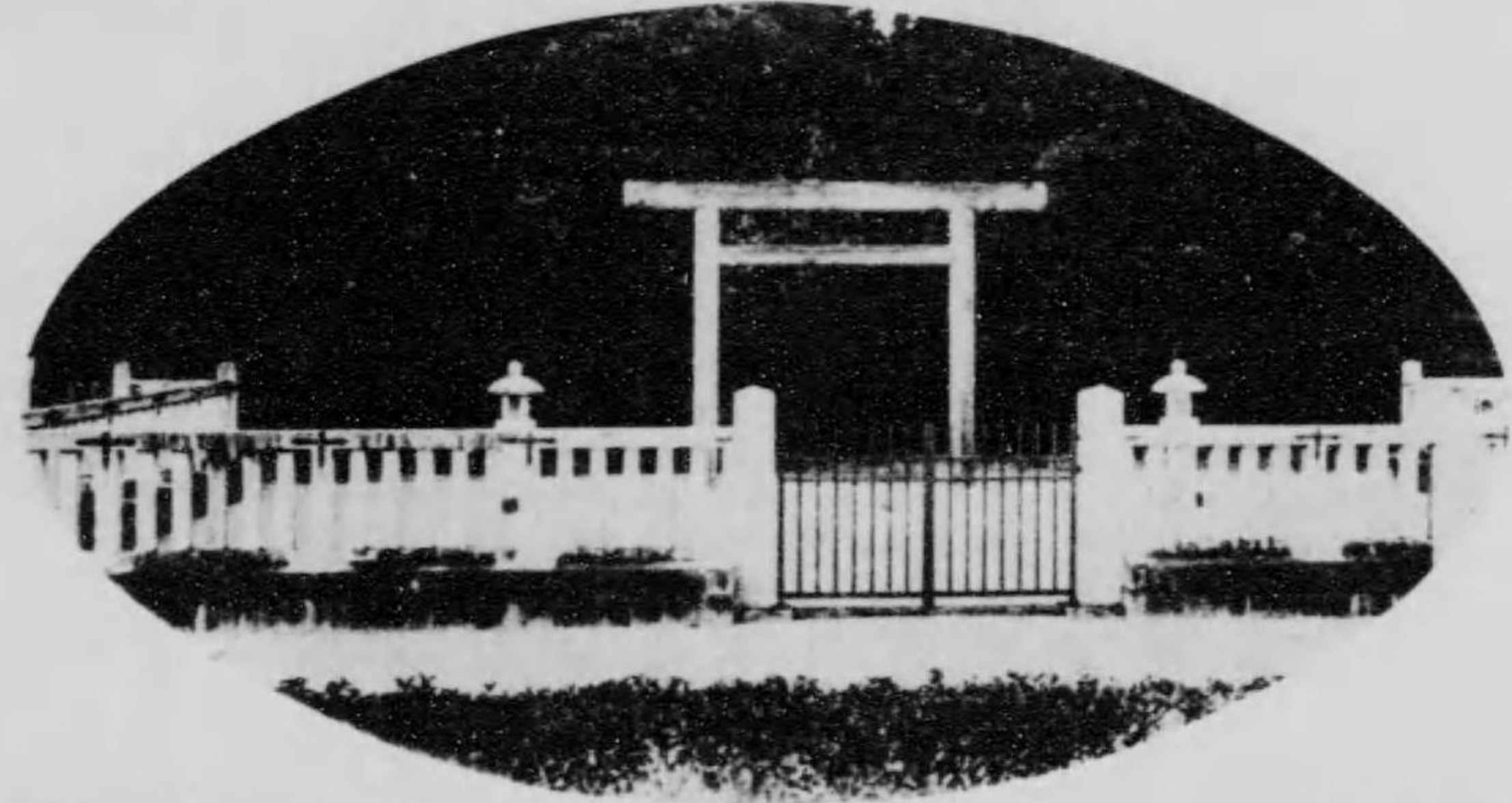




天智天皇御陵



桓武天皇御陵



坂上田村麿墓

元慶寺

桓武天皇御陵 (京都市外)

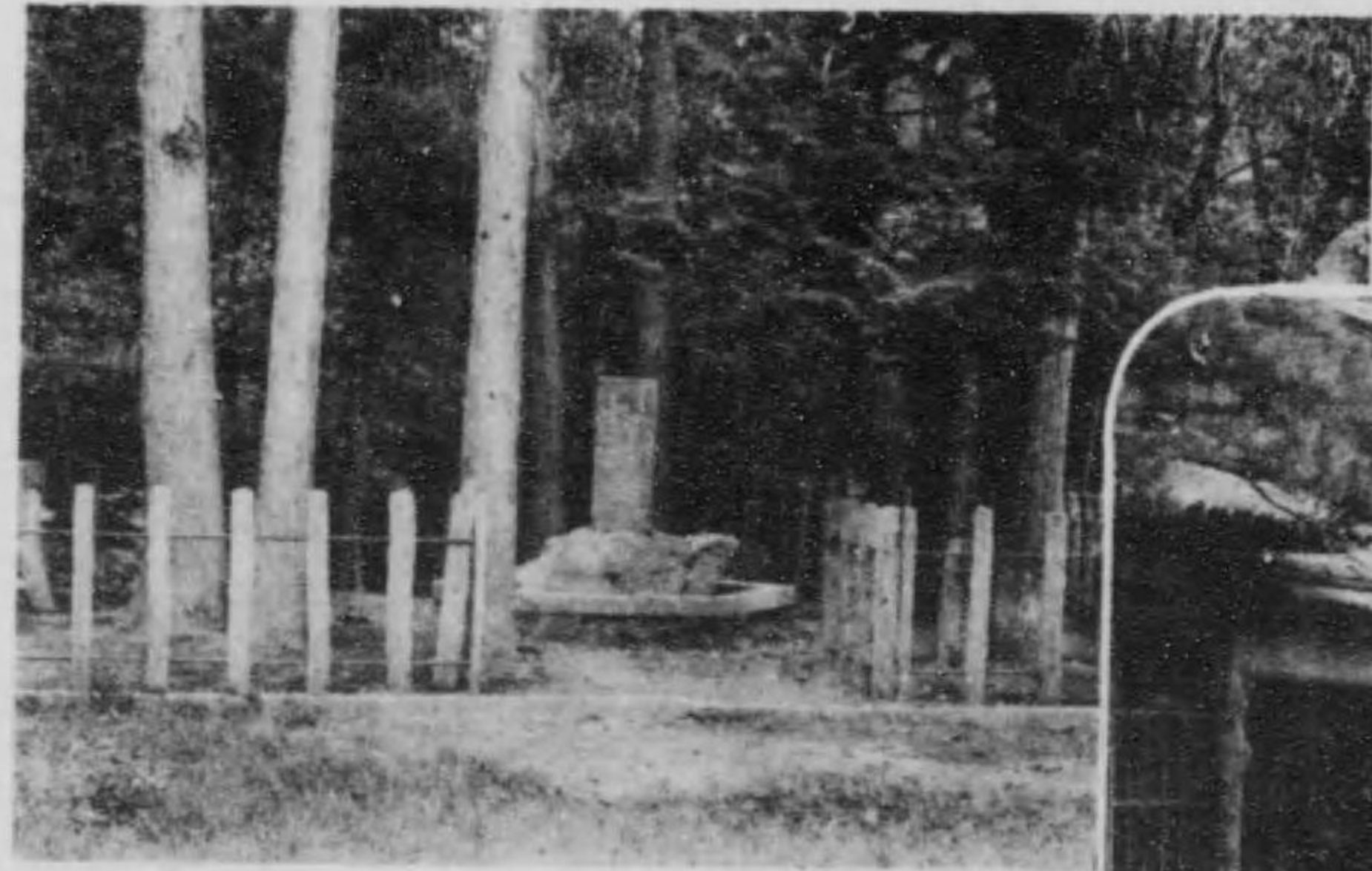
柏原陵と稱す、紀伊郡堀内村、即ち桃山に在り。初め深草山柏原に在りしが、大同年間、水害の爲めに毀損したるを以て伏見山松原に移せらる。文祿年間、

大納言兼右大将坂上田村麿の墓なり、塋域凡そ四十坪、明治二十八年修理を加へて墓道を作れり。傳ふる所に依れば、弘仁二年坂上田村麿の薨するや、宇治郡栗栖村水陸田山林三町を賜ひて墓地となし其遺骸を棺中に立たしめ之に甲冑劍刀を

二年正月十九日寂す。

花山に法皇の御幸ありし時かへらせ給はんとせし時

僧正 遍昭



大石良雄閑居址



僧正遍照墓(中) 茶奴(下)



津守國基、花山にまかりける時、僧正遍





閑居址

桓武天皇御陵 (京都市外)

柏原陵と稱す、紀伊郡堀内村、即ち桃山に在り。初め深草山柏原に在りしが、大同年間、水害の爲めに毀損したるを以て伏見山松原に移修せらる。文祿年間、桃山城築造に際し、陵域郭内に入るを以て密に延曆寺主に謀りて帝廟を同寺中に造りたるが、其後陵名を去り、其所在を失するに至りしが。近時調査の結果、明治十三年帝陵の標を建てられたり。古記に據れば柏原陵は伏見山松原中に在り桓武陵所なりと記したり、想ふに今の伏見山大龜谷の邊なるべし。或は云ふ、伏見築城の際、帝陵を破壊せしと云ふは非なり。柏原陵は今の桃山西北字五良太町に在りたりといふ。

大納言兼右大將坂上田村麿の墓なり、塋域凡そ四十坪、明治二十八年修理を加へて墓道を作れり。傳ふる所に依れば、弘仁二年坂上田村麿の薨するや、宇治郡栗栖村水陸田山林三町を賜ひて墓地となし其遺骸を棺中に立たしめ之に甲冑劍刀を帶し弓箭を持せしめ、平安城に向つて之を葬らしめたり、是より後、國家事あれば此塚必ず鳴動すると云ふ。

二年正月十九日寂す。  
花山に法皇の御幸ありし時かへらせ給はんとせし時

僧正 遍昭

まてと言は、いともかしこし花山にしばしと暗ん鳥の音もかな

津守國基、花山にまかりける時、僧正遍昭の遺室に櫻の散りけるを見て詠みたる歌は續古今集に載せあり。

元慶寺 (京都市外)

津守 國基  
あるじなき住家に殘る櫻花あはれ昔の春や戀しき

大石良雄舊址 (京都市外)

宇治郡山科村に在り、一名花山寺と云ふ。天台宗なり、貞觀十八年清和天皇の勅建に係る。僧正遍昭住持たりしより花山和尚の稱あり、今尙は遍昭の像を脇壇に安置す、中絶の後、近世に至り愚道和尚北花山に再興せり。本尊は藥師如來なり。一説には當寺は觀中院と稱し、素と僧正遍昭の遺室なりと云ふ、嘗て花山院當寺に行幸ありて落飾あらせらる、依て花山法皇と號けらるると云ふ、又一書には當寺伽藍創建の年天皇禰位あり、翌年改元に當り、其年十二月紀元を配して元慶寺と云ふと記せり。

頼山陽

十萬人家煙火蒸 虎踞龍蟠勢險峻  
不知耕鑿由誰力 春艸茫々桓武陵

天智天皇御陵 (京都市外)

山科陵と稱す。日岡の東、大字御陵の北に在り。後方の山を鏡山といふ、依て山科鏡山陵とも稱す。傍に鏡池あり、傳へ云ふ、天智天皇登祚し給ふ時、此池水に玉體を寫したまへりと琵琶湖の流水御陵を繞流す。名跡志に據れば御陵は野の東北に在り。小祠ありて前に杵石ありと云へり。

僧正遍昭墓 (京都市外)

山科村大字北花山の南二町餘、字中道に在り。墓上一石を置き、老櫻一株を植えたり。

奴茶屋 (京都市外)

山科より京に出る大津街道、漆谷越の別路なる北側に在り、在昔諸國戰亂の當時野武士の出沒して旅人を掠る爲に旅客の迷惑一方ならざりしが、其頃此地に閑居せし片岡丑兵衛なる者射術に長じたるが旅人の困苦を見るに忍びず自ら弓箭を帶して旅人を護衛したり、斯て後人家も無かりし此地に茶屋を設け店頭に弓箭武器を飾り備へ、主人丑兵衛自ら山中の旅客を送迎せり、此事何時となく諸國旅人の間に傳播し奴茶屋と稱せらるゝに至りたり。爾後代々奴茶屋の屋號を相續して今に至れり。亦京都市外の一史蹟に數ふべし。

額田王

やすみしる我大君のかしこみや御陵へかへる山科の鏡の山によるはもよ

伊藤 東涯

墓艸荒煙路不分 松楠影老簇如雲  
唯餘一片蒼苔石 尙記千年初帝墳

田村麿墓 (京都市外)

世に將軍塚又は田村塚といふ、山科村大字栗栖野の東南に在り、是れ征東大使



●高尾山 (京都市外)

花園驛より御室の街道に至る梅ヶ畑村に在り、紅葉の名勝を以て著はる。梅ヶ畑村は清瀧川の中程にして花園村の西方なり、清瀧川潺々として高尾山の麓を繞る、川に架したる高尾橋を渡れば神護寺に達す、全山紅葉を以て満たされ、秋季は溪畔の錦繡、山に輝き、水に映じて美観名状すべからず。神護寺は眞言宗にして一名高尾寺とも稱す、寺域二萬八千五百十坪、樓門、金堂、講堂、鐘樓等域内に在り、當寺は神護景雲年間和氣清麿の創建に係り、淳和天皇の天長二年當寺を弘法大師に賜ひ、神護國祚眞言寺と改稱したる事あり、本堂に藥師如來、大師堂に弘法大師の像を安置す。鐘樓は本朝三絶と稱せらるゝ名鐘にて橘廣其相序詞を作り菅原是善其銘を遺し藤原敏行之を書したり。鐘樓の下に護王神社あり和氣清麿の靈を祀る。高尾橋を渡りて神護寺に至る途中に和氣清麿の墓あり、鐘樓より登ること三四町にして頂上に達す、此地素と地藏院の舊址にして眼下に清瀧川の溪流を收め老楓兩岸を擁し就中紅葉谷の風景最も佳趣を極む、其他弘法大師の硯石、文覺上人の觀月壇等山中見るべき名勝跡からず、楨尾、榊尾と共に三尾山中高尾最も莊麗の觀あり。

(夫木集)  
わきのぼる行手の峰の高尾山手折らでうつる岩つゝじかな  
重 門  
山風の高雄の峰に霧はれて梢見おろす  
谷のもちぢば  
(玉葉集)  
世々を経て濁にしみし我心きよたき川にすゝきつるかな  
服部 南郭  
行入三摩地 連山各占雄 歳年存古寺

神鬼護靈宮 門徑清相似 溪流隔且通  
深秋千樹色 空觀依青楓  
伊藤 仁齋

夏木葱蘢山氣佳 上方唯許白雲埋  
僧居隨處多栽茗 女伴尋常唯賣柴  
藍水蛇行廻峭壁 古藤龍掛壓層崖  
經遊幸卜好風日 百歲人間抒壯懷  
伊藤 東涯

●清瀧川渡猿橋 (京都市外)

嵯峨の西北に在り、其水源を棧敷ヶ岳に發し南流して梅ヶ畑村を過ぎ愛宕の東麓を繞りて大堰川に注ぐ。其梅ヶ畑を過ぐる西崖には高尾、榊尾、三尾山並び峙ち、此邊附近一帶の地最も幽邃を極め奇岩怪石の間を走り流る清瀧川の危景異趣名狀すべからざるものあり、茲に架する橋を渡猿橋と云ふ上流の兩岸山中には古來猿多く棲息する事は諸書に記されたり、蓋し橋名の因て來る所以か、此邊山容水態最も勝絶せり。  
(新勅撰集)

清瀧や瀬々の岩浪高尾山  
人もあらしの風のみやすむ  
國 信  
岩根越す清瀧川の早ければ  
波おりかゝる岸の山吹  
清瀧や波に散込む青松葉 芭 蕉

●楨尾 (京都市外)

高尾、榊尾、楨尾の三尾山中に於ける最北に位する榊尾山麓なる白雲橋を渡り、溪に沿ふて下ること數町、對岸の山は即ち楨尾山なりとす。山中に一刹あり、西明寺と云ふ、一名平等心王院と稱す。弘法大師の徒弟智泉法師の開基にして中興の祖は正忍律師なり、律宗にして

眞言宗を兼ね、慶長年中重興し、元祿に至り徳川桂昌院堂宇修造の資を投じ大に土木を役し、堂々たる大伽藍となれり。  
三尾山中、楨尾は比較的楓樹に乏しと雖も樹木鬱蒼として幽邃深陰、俗氣を脱して森嚴なる景趣に富み仙境を踏むの想ひあり。

三尾山中、最も楓樹の老幹巨株に富めるは楨尾なりとす。山中一帶清瀧川の碧流に臨み、幾林の楓樹到る處に繁茂し錦繡紅梢を染むるに到れば溪水と相映じて景致風越筆紙の能く形容し得べき所にあらず、山中に高山寺なる寺院あり、華嚴宗にして眞宗を兼ね、明惠上人嘗て當寺に住したり、上人は日本製茶の祖として知らる有名なる宇治の茶は此地より移植したるものなり。比叡山尊意僧正の開基にして本堂には釋迦如來を安置し、禪堂院には明惠上人の像を置く、嘗て屢々火災に罹り多少焼失したるも尙舊觀を思ふべく、後ち修理を加へて、漸く整頓するに至れり、尙境内に佛足石、藤原兼平の墓あり。又此地の附近に多く松茸を産し茸狩季節には茲に遊ぶもの頗る多し。

●松尾神社 (京都市外)

葛野郡上山田村松尾山麓に在り。祭神は大山咋神、市杵島姫の二座にして、官幣大社なり。社傳に據れば和銅二年賀茂より茲に遷座し、大寶元年其神殿を創建せりと云ふ。正殿、拜殿、竈殿、厨祈、神服殿、社務所等境内に建て並び、攝社末社亦多く山上山下に散在せり。蓋し洛西第一の大社なり。山上を別當の峰と稱し、巔上に巨巖あり、當社の神靈始て降臨せる所なりと傳ふ、當神社は世に造酒の神と稱せられ特に酒造家の尊信厚し。毎年五月の祭禮には神輿七基、西七條の御旅所より桂川を船渡する例なり、是れ承和五年に始まりし古式なりと云ふ

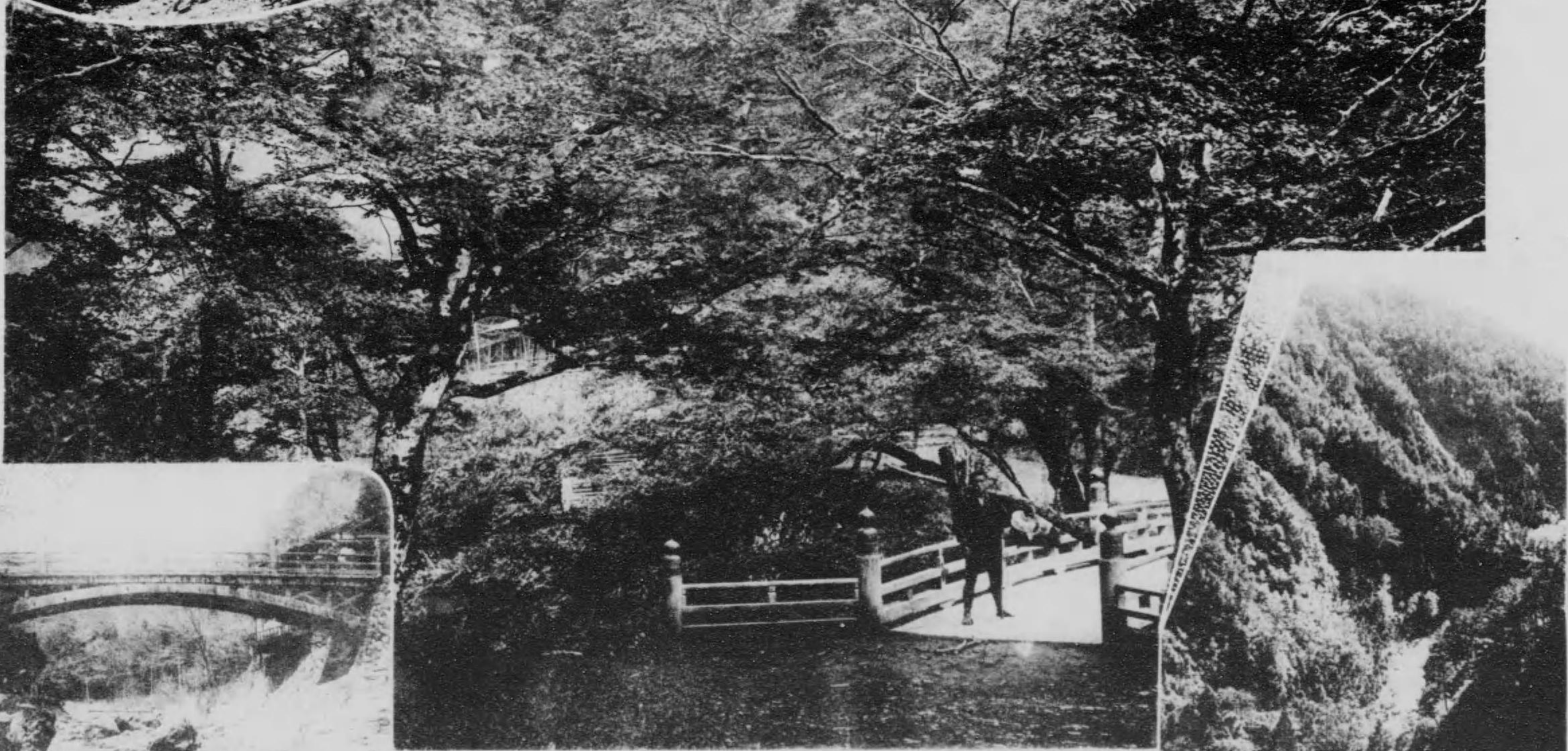




尾の橋



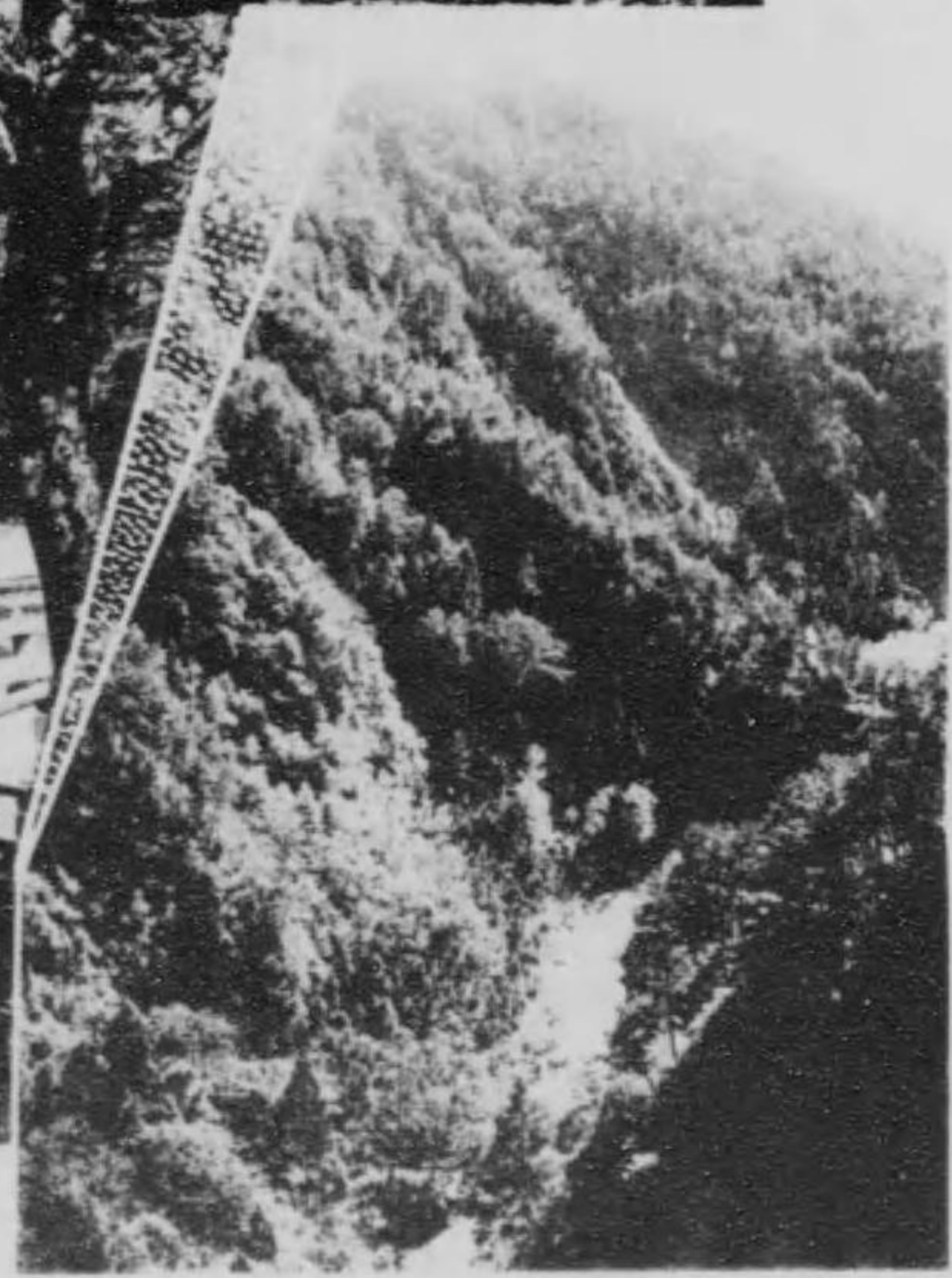
松尾神社



高尾



清瀬川波鏡橋



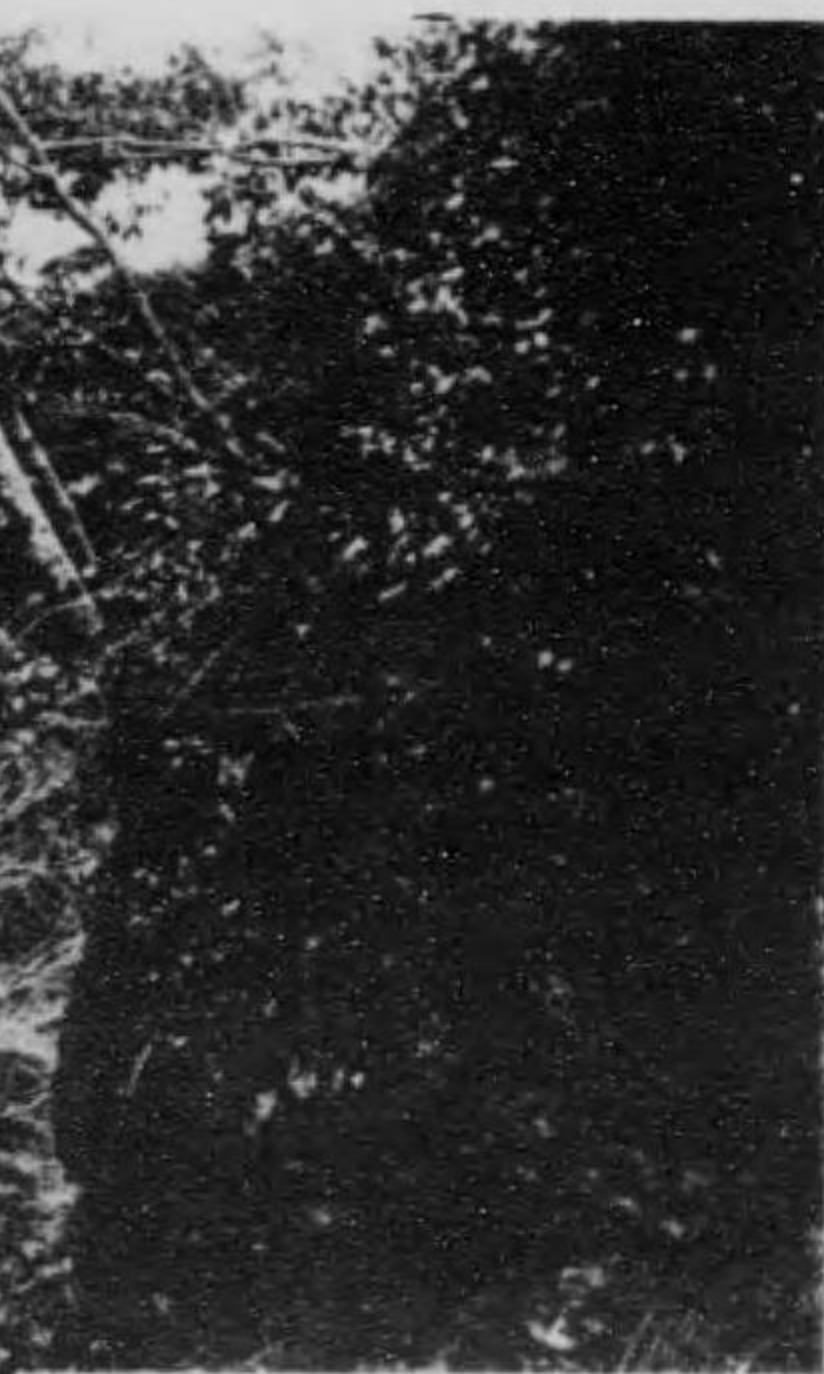
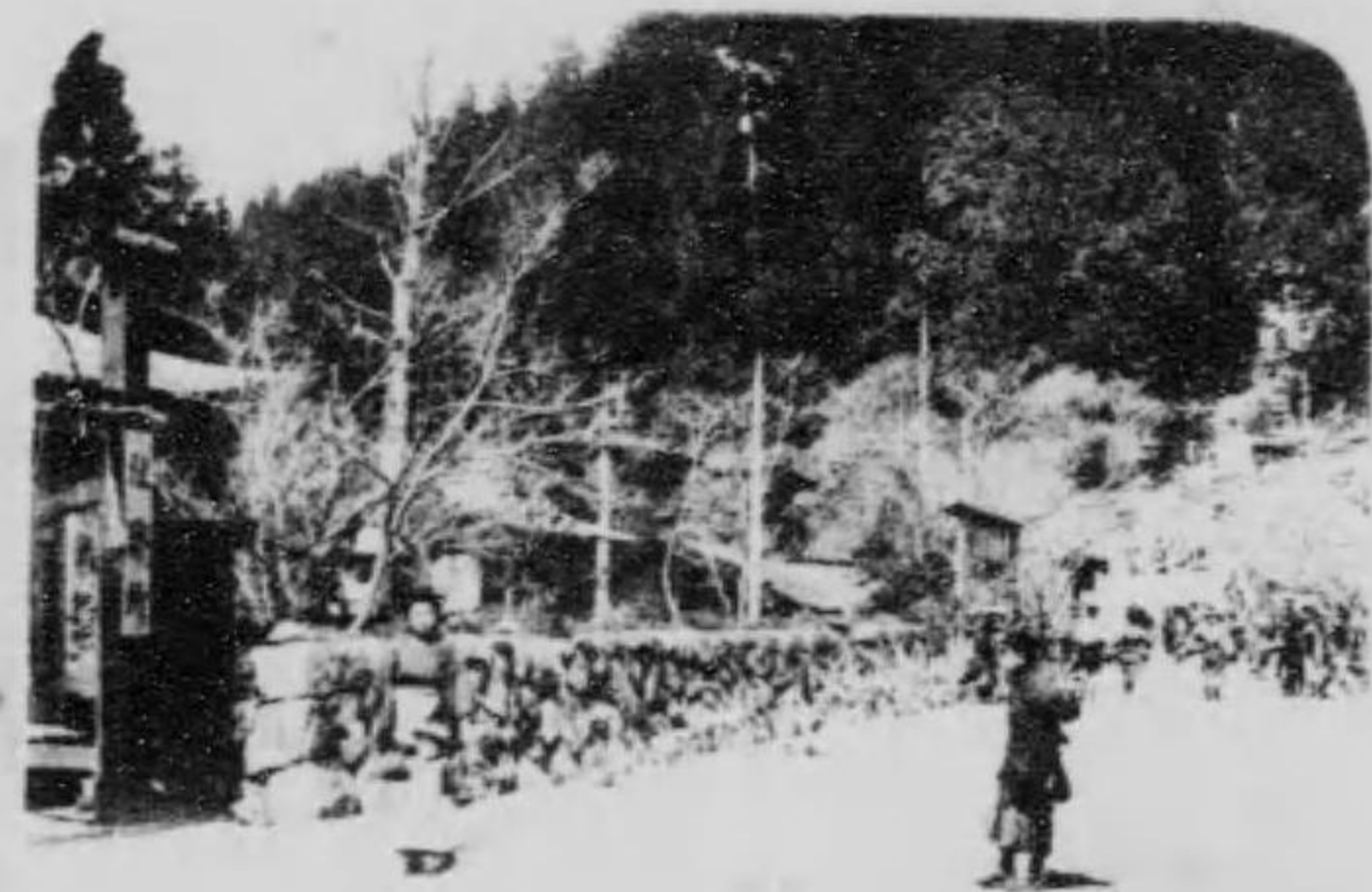
龍葉谷

にすゝきつるかな  
服部 南郭  
行入三摩地 連山各古雄 歳年存古寺

り、西明寺と云ふ、一名平等心王院と稱す。弘法大師の徒弟智泉法師の開基にして中興の祖は正忍律師なり、律宗にして

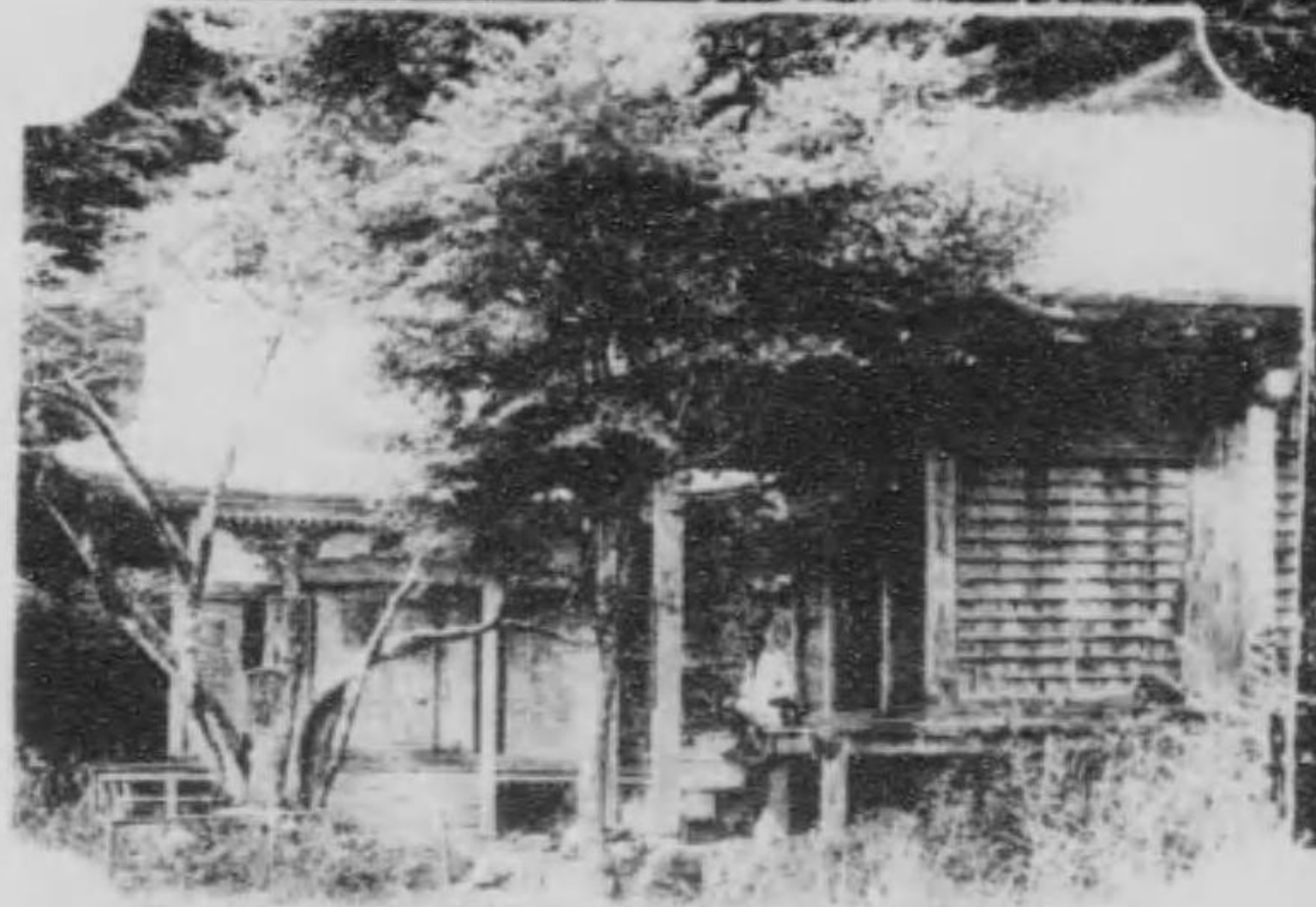
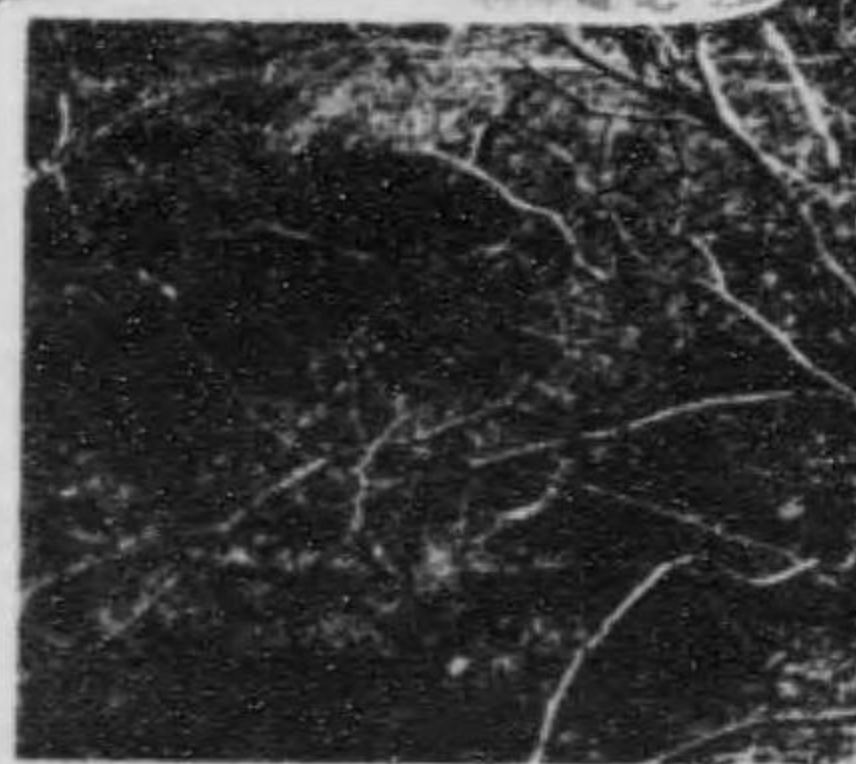
酒の神と稱せられ特に酒造家の尊信厚し。毎年五月の祭禮には神輿七基、西七條の御旅所より桂川を船渡する例なり、是れ承和五年に始まりし古式なりと云ふ





此の山は、昔より名茶の産地なり。其の茶は、宇治の茶より移植したるものなり。高山寺の禪堂は、後鳥羽上皇の賜ふ所、即ち加茂に在りし石水院を移せるものなれば、古建物の一に属す。寺寶としては、鳥羽上皇御筆の御書あり。其の書は、

明 意 上 人 筆 跋



月 輪 寺 時 雨 櫻

禪 の 尾

●愛宕山 (京都市外)

愛宕山は嵯峨の北方に在り、雄峻高聳にして嶮険多く登攀容易ならず、先づ一の華表前より、道左に取り一嶺を踰ゆれば石門關なり、更に登ること五町餘に及

ち鐵の華表より右方に入ること凡そ十八町餘の所にして、山號を鎌倉山と稱し本

尊は千手觀音なり、曾て空也上人此寺に

上つて禪を修し九條關白兼實亦其幽邃を

愛して閑居の地となせり、堂後は龍女祠、

鼻祖、有名なる宇治の茶は此地より移植したるものなり。

高山寺の禪堂は後鳥羽上皇の賜ふ所、

即ち加茂に在りし石水院を移せるものな

れば古建物の一に属す、寺寶としては、



●愛宕山 (京都市外)

愛宕山は嵯峨の北方に在り、雄峻高聳にして嶮険多く登攀容易ならず、先づ一の華表前より沢を左に取り一嶺を踰ゆれば石門關なり、更に登ること五町餘に及んで道漸く急、試峠を踏破し又足を進むること數町始めて猿橋に達す、又更に九十九折の難道を登り漸くにして山巔白雲山に到る乃ち山麓一の華表より鐵の華表に至るまで五十町百十八段の石階あり之より上七十三段の石階を経て愛宕神社本殿に達するなり。

愛宕神社の祭神としては伊弉册尊、火産靈尊を祀り、雷神、破元神を合祀す、別に太郎坊社、飯綱社、子守勝手社、天狗社、春日社、十二天等其附近に在り、試峠、渡猿橋、日晚瀧、櫛ヶ原、南星峰等は當山の名蹟中にして其他釋ぬべきもの少なからず、又山中に土盃投の戯を爲す所あり土盃を執つて空に抛てば風に隨つて輕揚し恰も飛鳥の如く之を久ふして始めて深谷に墮つ。

山巔の眺望は最も廣濶にして、眼下に瓦壁入り交りし京都の市中を望み遠くは伏見及澁江の流れ、巨椋の池を一眸に收む、愛宕社の境内に白雲寺址あり此所も亦眺望に富めり。

山崎 關齋

空手徒行登岩阜 同遊相語路先後  
頑夫自古禱災祥 愚將到今憑勝負  
願毀宮房跡地藏 且驅杉檜削天狗  
山神使者飛鷹登 妙用顯然君見否

伊藤 東涯

白雲深處白雲寺 磴道盤紆入碧空  
仰見樓臺起象外 遙聞鷄犬在煙中  
前溪水漲知經雨 老樹陰森不待風  
二十六州歸眼界 却疑自座上清宮

●月輪寺時雨の櫻

(京都市外)

月輪寺は愛宕山裏坂の山腹に在り、即ち鐵の華表より右方に入ること凡そ十八町餘の所にして、山號を鎌倉山と稱し本尊は hands 觀音なり、曾て空也上人此寺に上つて禪を修し九條關白兼實亦其幽邃を愛して閑居の地となせり、堂後は龍女祠、龍女水あり、堂前に在る『時雨の櫻』は親鸞上人北國講居の時、兼實との訣別紀念に手植せるものにして、梅雨季に至れば絶へず葉末より雫を點す、此附近二瀧あり、前山に在るを寒蟬の瀧とし他を空也瀧と言ふ。空也瀧は落下幾十丈頗る壯觀を極む、近畿第一の名瀑に數へらる。

頼山陽

霜樞歷溪疑無水 架溪一橋斜通寺  
晨霜漸融路猶濕 粥魚聲隔錦雲裏  
認是辨公通蹊處 溪邊茗圃猶可指  
一自法雲萌雀舌 靈液蘇得世界熱  
誰洗鉢血聽塵言 想應予座許對吸  
一椀喚醒英雄夢 九世傳授淡白訣  
君不見佛圓待石虎知海鷗 孰若此公化武州  
滅騎知過此橋入 若個紅樹繫紫羅  
且借僧榻談千古 不妨又呼雪亂颯

●梅尾高山寺 (京都市外)

清瀧川の碧流に臨みて幾林の楓樹繁茂し、其秋霜樹梢を染むるの時に至れば黄葉紅樹碧溪と相映する佳境梅尾は、嵯峨野、宇多野以北、愛宕山麓に位する山間に在り。

梅尾は所謂三尾山の一にして高尾檜尾と共に紅葉の勝地として著る、高尾檜尾に比すれば其最北に於ける地に當り、絶谿に架せる板橋を白雲橋と稱し、激越急奔の下流は幾多巖石の過むる所となり、潭水浮著して青靨を染めたるが如し、白雲橋を渡り阪路を登ること數町にして山腹の高山寺に達す。

高山寺は比叡山尊意僧正の開基に係り本堂に釋迦像禪堂院に明惠上人像を安置す、上人は此寺の住僧にして日本製茶の鼻祖、有名なる宇治の茶は此地より移植したるものなり。

高山寺の禪堂は後鳥羽上皇の賜ふ所、即ち加茂に在りし石水院を移せるものなれば古建物の一に屬す、寺寶としては、鳥羽僧正畫獸遊戯圖四卷、將軍塚築造圖一卷、藤原信實畫華嚴緣起六卷(詞書明惠上人法助准后道家兼經公經等數人合作)等世に著れ、文覺上人肖像及明惠上人、忠久肖像、春日住吉の神影等皆稀世の畫幅と傳へらる、佛像乾漆造藥師を始めとし本銅の諸作を藏する外小軀の銅佛又は書畫類少なからず、是れ好古家の觀賞に値す。

明惠上人、名は高辨、紀州有田郡の人、父を重國といふ、九歳にして父母を喪ひ、爾來高雄山の文覺に從ひて華嚴俱舍を學び、後、實尊、景雅、尊印等に學び、十六歳にして剃髮せり、十九歳與然陀開梨に從ひて兩部密教を受け終に北山梅尾に止まる、又榮西禪師に參して其の心訣を得たり、嘗て北條泰時の懇請に依り、儒釋兩教を雜へて説示する所あり、承元二年紀伊に歸り、四年又梅尾に歸る、寛喜二年後堀河天皇の詔によりて宮中に説法す、了りて宮廷を出づるや、藤原定家之を送つて、微妙の法を聽て結縁感悦すと言へり。師榮西禪師嘗て宋より茶の種子を携へ歸り之を明惠に頒與す、明惠受けて之を梅尾に植栽す、爾來我が邦人茶を賞するもの漸く増し來れり。寛喜四年正月十九日明惠修學の法を講じ、彌勒の名號を唱しつゝ、示寂す、享年六十。

世に傳ふ明惠上人の茶十徳なるものあり。左に録す。

諸神加護 五臟調和 睡眠銷除  
煩惱消滅 孝養父母 息災安穩  
天魔遠離 諸人愛敬 壽命長延  
臨終不亂

明惠上人筆蹟は朝吹常吉氏所藏也。



●笠置山 (山城)

元弘の昔、後醍醐帝の行宮址として歴史に華やかなる色彩を貽したる地なり。相樂郡笠置村の南方に位し、地を抜くと六百六十尺、巖々として聳ち、木津川の流を下瞰し、其巔は雲に没す。全山奇石怪巖に満たされ、頗る天険に富み要害最も良し。山上の寺を笠置寺と云ふ。其他山中に文珠院、福壽院等の寺院あり。文珠院の東に薬師、彌勒、虚空藏の三巨石あり。薬師は高さ四十尺。文珠は二十尺、彌勒は五十二尺、往古は石面に各々其佛像を刻したりとの事なるも兵燹の爲めに諸堂と共に焼毀せられて今その態を留むるなし。夫より北方に石門あり、其西に太鼓石あり、此附近總て後醍醐天皇の行宮址なり。其南方に笠置石あり。往時天武天皇此に遊獵し給ひし際、雷雨に會し御笠を置かれたる所なりと傳ふ。蓋し笠置山の名稱之れに基くものなるべし。西方の懸崖を貝吹岩と云ふ、貝を吹きて皇軍の志氣を鼓舞せしめたる舊址なりと云ふ。其他千手窟、虚空藏石、胎内寶、東の覗き、蟻の戸渡り等の古跡あり。二の丸の址は頂上に存し、海拔一千三十尺。此邊悉く柱穴を存す。想ふに行宮の址ならんか。

左に笠置戦の一節を掲ぐ(太平記)

笠置の城と申すは山高くして一片の白雲峰を埋み、谷深くして萬仞の青岩路を遮る、攀折なる路を廻りて上る事十八町岩を切りて堀とし、石を疊みて堀とせりされば假令防ぎ戦ふ者なくとも、輒く登ることを得がたし。されども城中鳴を静めて、人ありとも見えざりければ敵はや落ちたりと心得て、四方の寄手七萬五千餘騎、堀がけとも言はず、葛のかつらに取りつきて、岩の上を傳へて、一の木戸口の邊、二玉堂の前まで寄せたりける。

茲にて一息休めて、城の中を屹と向上げければ、錦の御旗に日月を金銀にて打ち着けたるが、白日に輝きて光り渡りたる其陰に透間もなくよろうたる武者三千餘人、甲の星を輝かし、鎧の袖を連ねて雲霞の如くに並居たり。其外檐の上さまの影には、射手と思しき者ども弓の弦くひしめし、矢束解きて押しくつろげ、中差に鼻油引きて待ちかけたり。其勢決然として敢て攻むべきやうぞなき。寄手一萬餘騎是を見て、前まんとするも叶はず、引かんとするも叶はずして、心ならず支へたり。良暫くありて、木戸の上なる櫓より、矢間の板を排きて名乗りけるは三河國住人足助次郎重範、呑くも一天の君にたのまれ進らせて此城の一の木戸を堅めたり。前陣に進みたる旗は美濃尾張の人々の旗と見るは僻目か、十善の君の御座します城なれば、六波羅殿や御向ひあらんすらんと心得て、御儲の爲めに大和鍛冶のきたうて打つたる、鐵を少々用意仕りて候、二筋受けて御覽じ候へと云ふ儘に、三人張の弓に十三東山伏せ、籠かつぎの上まで引きかけ、暫く堅めて丁と放つ、其矢遙なる谷を阻て、二町餘か外に控へたる荒尾九郎が鎧の千檀の板を右の小腋まで籠深にぐさと射込む。一箭なりと雖も究竟の矢坪なれば、荒尾馬より倒に落ちて起きも直らで死にけり。(中略)是を軍の始めとして、追手搦手、城の内をめぐり叫びて攻め戦ふ、箭叫びの音、関の聲、暫しも休む時なければ、大山も崩れて海に入り、坤軸も折れて忽ち地に沈むかとぞ覺えし。晩景になりければ、寄手彌重りて持つ楯をつきよせ、木戸口の邊まで攻めたりける。(中略)

去程に類火東西より吹かれて、餘煙皇居にかゝりければ、主上を始め進らせて宮々聊相雲客、皆歩跳なる體にていづくを指すともなく足に任せて落ち行き給

ふ。此人々始一二町が程こそ主上を扶け進らせて前後に御伴をも申されたりけれ、雨風烈しく道闇くして、敵の関の聲此處彼處に聞えければ次第に別々になりて、後には只藤房、季房の二人より外は、主上の御手を引進らす人もなし、呑くも十善の天子、玉體を田夫野人の形に替へさせ給ひて、そことも知らず迷ひ出でさせ給ひける、御有様こそあさましけれ。如何にもして夜の内に赤阪の城へと御心ばかりを盡されけれども、假にも未習はせ給はぬ御歩行なれば夢路を辿る心地して一足には休み二足には立止り、晝は道の傍なる青緑の陰に御身を隠させ給ひて、寒草の疎なるを御座の茵とし、夜は入も通はぬ野原の露分け迷はせ給ひて羅敷の御袖をほしあへず、とかうして夜晝三日に山城多賀の郡なる有玉山の麓まで落させ給ひけり。藤房季房も三日まで口中の食を断ちければ、足たゆみ身疲れて今如何なる目に逢ふとも逃げぬべき心地せざりければ、詮方なくて幽谷の岩を枕にて君臣兄弟諸共に現の夢に伏し給ふ。梢を拂ふ松の風を雨の降るかと思召して木蔭に立寄せ給ひたれば下露のはらりと御袖にかゝりけるを主上御覽せられてさして行く笠置の山を出でしより

天が下にはかくれがもなし  
藤房聊涙をおさへて  
いかにせん頼む陰とて立ちよれば

猶袖ぬらす松の下露  
山城國の住人、深須入道、松井藏人二人は、此邊の案内者なりければ、山々峰々残る隈なく搜しける間、皇居隠れなく尋ね出されさせ給ふ。云々

後醍醐天皇御製(笠置におはしける頃)  
うかりける身を秋風にさそはれて  
思はぬ山の紅葉をぞ見る(増鏡)

因に後醍醐天皇宸翰は高野山金剛峰寺萬里小路藤房の筆蹟は教王護國寺所藏也



元弘元年八月廿日佛舍利  
一粒し  
勅計  
甲壹百七十七粒  
乙壹千三百十九粒



落ちたりと心得て、四方の寄手七萬五千餘騎、堀がけとも言はず、葛のかつらに取りつきて、岩の上を傳へて、一の木戸口の邊、二王堂の前までぞ寄せたりける。

口の邊まで攻めたりける。(中略)  
去程に類火東西より吹かれて、餘煙皇居にかゝりければ、主上を始め進らせて宮々卿相雲客、皆歩跳なる體にていづくを指すともなく足に任せて落ち行き給

後醍醐天皇御製(笠置におはしける頃) 上がりける身を秋風にさそはれて 思はぬ山の紅葉をぞ見る(増鏡) 因に後醍醐天皇宸翰は高野山金剛峰寺 萬里小路藤房の筆蹟は教王護國寺所藏也

笠置山



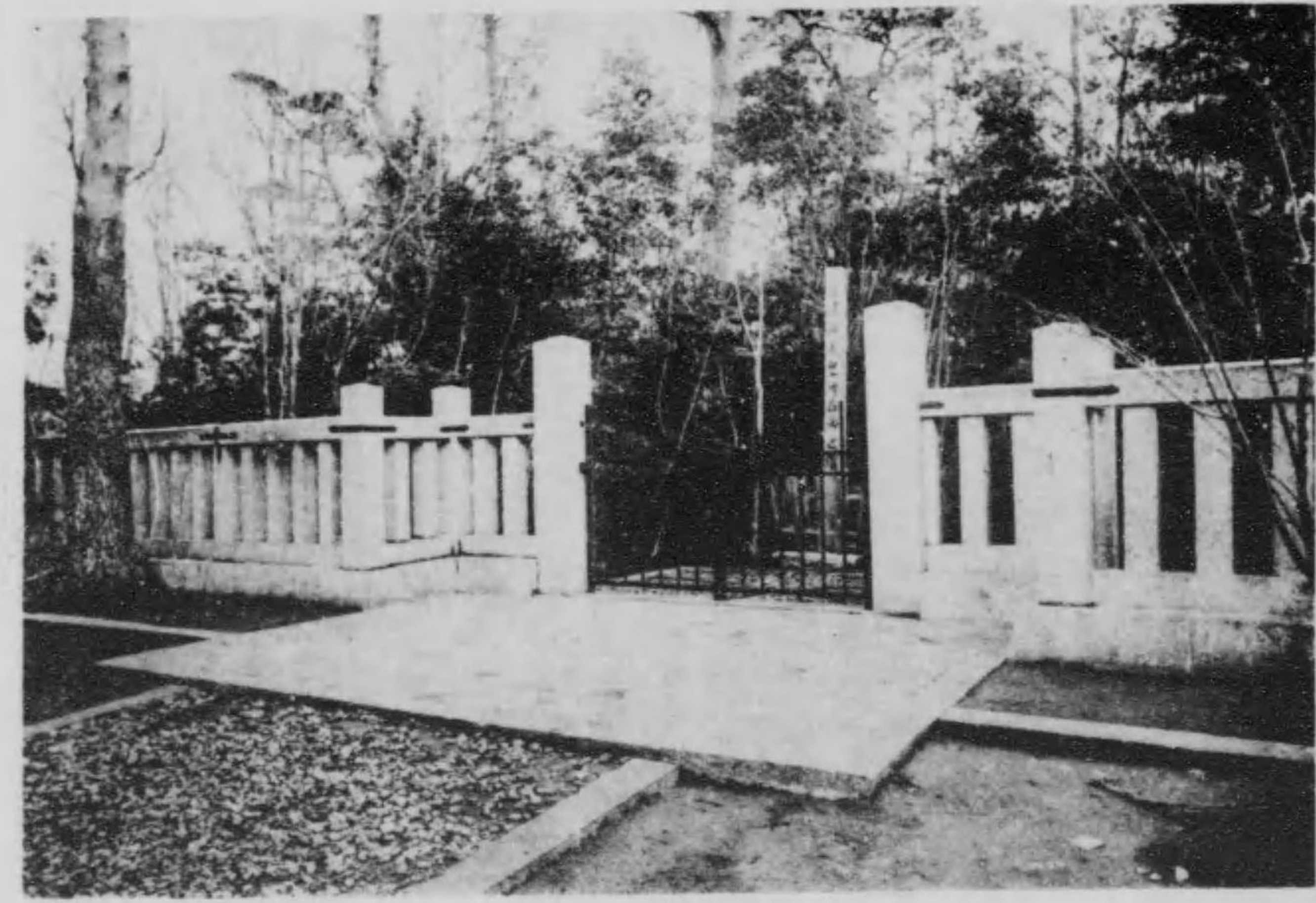
嘉元元年八月廿日佛舍利  
勅付 甲壹百七十七粒  
一粒し 仲野法  
一粒し 中野法  
一粒し 岡白  
行幸 寺野井殿  
此等法は仲野前住  
山崎法

萬里小路藤房筆蹟

後醍醐天皇宸翰



三願事  
一天野法就齋鉢奉地可奉是深  
一行幸高野山可與盛宗事  
一為當山佛法紹隆與寺領可守  
田地事  
右条、天下神護之時、下皇運之故、仲野  
嘉元二年二月九日、天下、



笠置行在所址

同宸翰



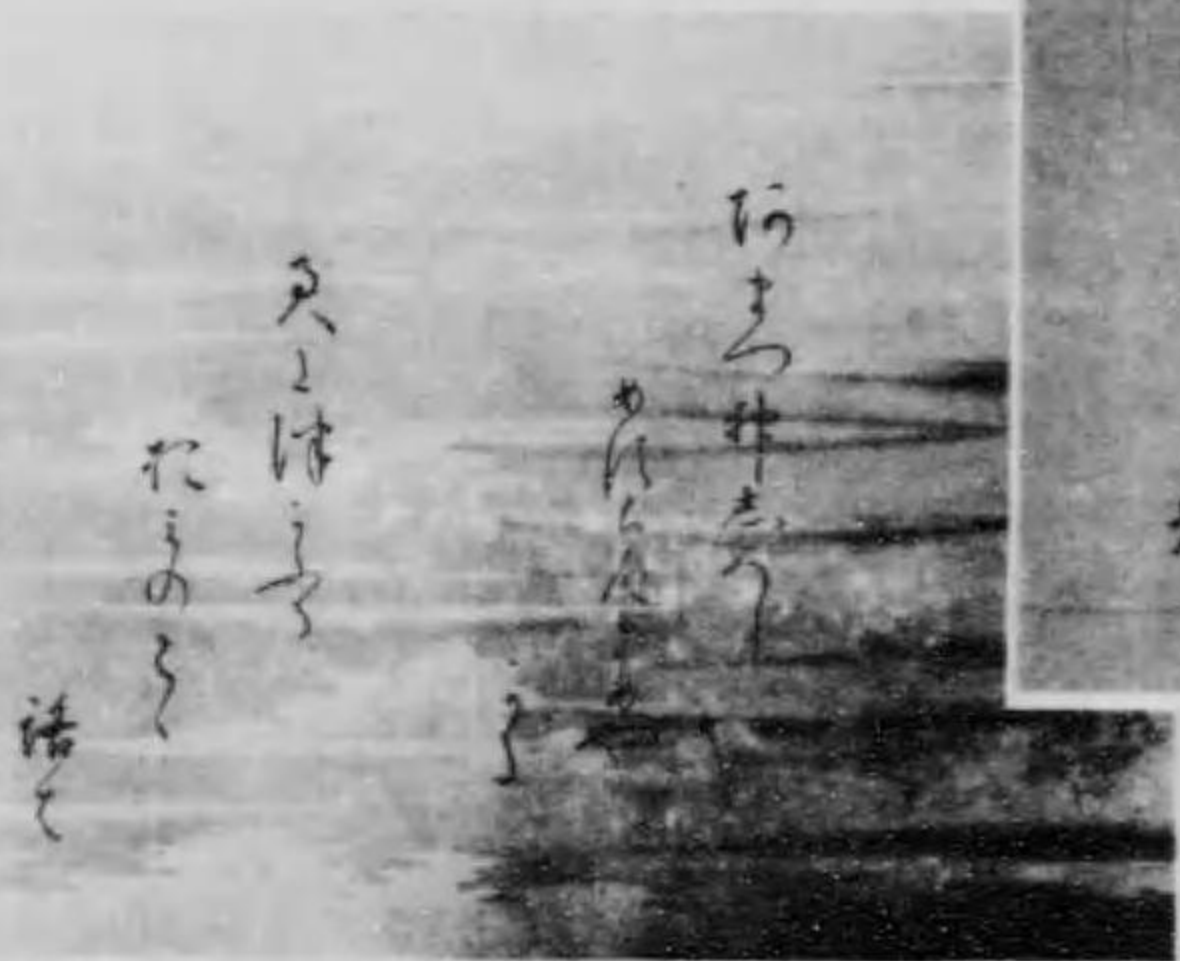
影 尊 皇 天 治 明



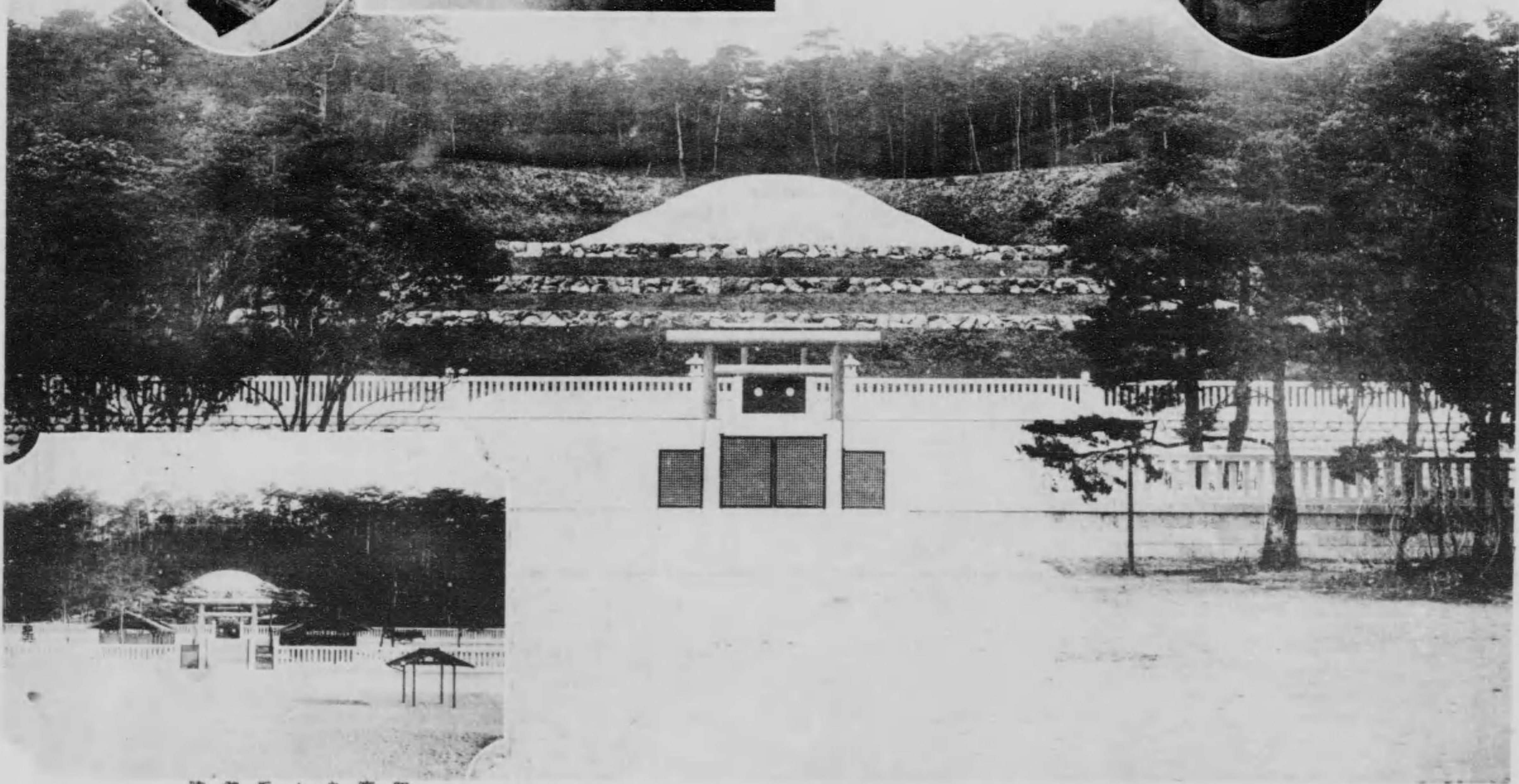
輪 宸 同

汝實美再三辭表  
之趣全職掌對  
至誠哀情出朕之  
容納然雖方今國  
家多事際朕朕朕  
百不可缺更汝親往  
汝實美其之勉

皇 后 太 皇 德 照



皇 后 太 皇 德 照



陵 御 后 太 皇 德 照

陵 御 山 桃 見 伏

● 伏見桃山御陵 (京都市外)

曠古の聖天子明治天皇の英靈長へに鎮  
在し給ふ靈域なり。天皇登遐し給ひて以

この夜をてらす月のことくに

聖徳宏大、覆幬天に貳し、持載地に參す

るを仰ぐべし。

政事いて、まは斯くはかり

雨たりにくほみし軒の石みても

かたきわさとして思ひすてめや

とる棹のこゝろなかくも漕き寄せむ

あしまの小舟きはりありとも

聖徳勳也は躬行實履し給ひし所也。處世



●伏見桃山御陵 (京都市外)

曠古の聖天子明治天皇の英靈長へに鎮在し給ふ靈域なり。天皇登遐し給ひて以來茲に八年、聖徳ヲ追慕して參拜する者日夕給えず、森嚴の氣、敬虔の念、覺えず襟を正して拜跪せしむ。

御陵は伏見桃山陵と命せられ、伏見宮貞愛親王の染筆に因りて標せらる。其地元と文祿三年豊臣秀吉の居城として築きたる伏見城址にして所謂桃山御殿の遺蹟なり。其本丸千疊敷の在りし處即ち寶壙なりと云ふ。

明治天皇諱は睦仁、寶算僅に十有六にして祖宗の不績を繼承し國歩艱難を極むる秋に當り天縱の英邁、能く群雄を駕御して開國維新の鴻業を成就し、爾來國民皆兵の制を定めて尙武自強の基を建て、殖産興業の道を開きて利用厚生の實を擧げ、憲章煥發國政を公議に諮ひ、明詔廣布、教育の淵源を明にし庶政日に整ひ、紀綱月に張る。一たび膺徳の典を正せば、大蘇の向ふ所、山河風を望み、草木皆靡く、征清の師、討露の役、稜威八紘に輝き、皇化四境に布き、鷄林の社稷覆巢の危を免がれ、南溟北海新に版圖に版す。内は則ち供御の華を去り、宮室の壯を損し、内帑を類ちて窮氓を恤む。明治の聖代、仁風慈雨四十五年、億兆齊しく鴻恩に浴し、蒼生咸な盛澤に霑ふ。聖徳蕩々たり、之を稱すべからず、帝業巍々たり、之を望むに際涯なし。洵に有史以來不世出の聖天子なり。

天皇盛徳の餘技詞藻に秀で給ふ。萬機を總攬せらるゝの暇、御製の新詠十萬首に達すと云ふ。固より歌人の諷詠と異なり、今其一二を録せん。

あさみとりすみわたりたる大空の  
ひろきをあのかこゝろともかな  
わかこゝろいたらぬくまのなくもかな

この夜をてらす月のことくに  
聖徳宏大、覆轡天に貳し、持載地に參するを仰ぐべし。

政事いて、まは斯くはかり  
あつき日なりと思はさりしを  
夏の夜もねさめかちにそあかしける  
よのため思ふことおほくして  
宵々肝食政務に勵精せらるゝ大御心畏し。

年々に思ひやれとも山水を  
くみてあそはむ夏なかりけり  
嚴冬盛夏と雖、常に宮城に在り、祁寒隆暑を意とせず、政務を親裁せらる。陸軍大將本郷房太郎此御歌に感激し、温泉海水浴の逸樂を廢したりと云ふ。

山のちかく島のはてまで尋ねみむ  
世にしられさる人もありやと  
空蟬の世はやすらかにをさまりぬ  
我をたすくる臣のちからに  
人材を重んじ賢に任じ、能を用ひんとする聖慮此の如し、日露戦役の際失意の境遇に在りし軍神乃木希典を拔擢せられたるもの、偶然にあらず。

身にはよしはかすなりてもつるきたち  
ときなわすれそやまところを  
ますらをに旗をさつけて思ふかな  
日の本の名をかゝやかすへく  
尙武は登極の始より大御心を注かれし所なり而して國威是に由りて輝き、邦基是に山りて固たし。

窓のうちに扇とりてもあつき日に  
照る目をうけて小草かる見ゆ  
おも荷ひく車の音を聞えける  
照る日のあつさたへかたき日に  
深く九重の上に垂拱して庶民の疾苦を  
軫念し給ふ。炎風朔雪人跡ある處皇徳を  
謳歌せざるものなき所以なり。

たらちねの庭の教はせはけれと  
廣き世にたつ基とはなれ  
教育に留意せらるゝを拜察すべし。

雨たりにくほみし軒の石みても  
かたきわさとして思ひすてめや  
とる棹のこゝろなかくも漕き寄せむ  
あしきの小舟さはりありとも

堅忍勤勉は躬行實踐し給ひし所也。處世の法成功の道、片言隻語に盡く其他の御製總て是聖訓の尊きを見る。此に掲ぐる數行の文字亦聖徳の一端を窺ふに足らん

●桃山東御陵 (京都市外)

桃山御陵の東に在り。昭憲皇太后の底津岩根に安すらけく鎮まりませし處なり御陵の様式概ね桃山御陵の先例に倣ひ、御陵名は閑院宮載仁親王の染筆に係る。

昭憲皇太后諱は美子、明聖の資を以て、貞仁の徳を乗り、維新の際、錯節盤根の時局に入内せられ、宮闈に在りて乾位を輔け、帝業の漸く恢弘するや、坤徳を守りて風化を敷く、管に壺範の明に、母議の著はるゝのみならず淑慮常に國家の大局に拳々たりしは歴代の后妃に匹儔なき所なり。茲に御詠を掲げて、蕪文懿徳を頌するに代へん。

淺くとも堰けは溢るゝ谷川の  
心や民の心なるらん  
政治の眞諦を三十一字に道破して遺憾なし。

大宮の火桶のともさむき夜に  
みいくさ人は霜やふむらむ  
是れ日露戦役の際出征將士の辛勞を想ひ  
屢詠せられたるもの、一なり。寒夜御衣を脱せられたる故事を聯想せしむ。

とり／＼につくるかさしの花よりも  
香ふこゝろのうるはしきかな  
みたるへき折はおきて花さくら  
まつゑむほとを習ひてしかな  
十二徳の御詠と稱し、節制、清潔、勤勞、沈黙、確志、誠實、温和、順序、節儉、寧靜公義の十二首に分ち。人道の範を示し、處世の訓を垂れ給ふ。



●伏見稻荷神社 (山城)

東福寺の東十町餘、所謂伏見街道に在り。官幣大社にして倉稻魂命、素盞鳴尊、大市比賣命の三神を祀る世之を伏見稻荷と稱す。神社の境域頗る廣濶にして規模宏壯、本社、神殿は背後の稻荷山に據り若宮、拜殿等並べ結構雄麗を極む、攝社、末社は稻荷山の峰巒溪谷の間に點在し一々之を順拜せんには一里餘に及ぶ俗に之を御山巡りと稱す。神社前には有名なる赤塗の大鳥居屹立せり、社前の市街を稻荷御前町と云ふ、四時遠近の參詣者群集難杏せり。

●御香宮 (山城)

伏見山の西約三丁に在り。神功皇后を祀る、伏見城築造の際、當社を大龜谷に移したるが、慶長八年舊地に復し修築を加へて伏見一郷の鎮守とせり、往昔此の神社の池に清泉湧出し其芳香四方に薫じたるが、試みに病者此泉水を服すれば病忽ち癒えたり。依て此の神社を御香宮と號づくるに至れり。

元 政

探春林樹中 行至御香宮 白石劉華表  
黃芽餘古風 鶯啼談法々 鳩喚唱空々  
未掩和光影 夕陽處々紅

●文珠九助碑 (山城)

御香宮境内に存す。碑面に刻して伏見義民碑と云ふ。

文珠九助は、山城國紀伊郡伏見下板橋二丁目の人なり、其祖先は文珠四郎包光と稱し刀鍛冶として世に知られたり。世々鹿兒島藩の用途を勤め通稱を宗兵衛と言へり、宗兵衛齡六旬に達し家督を其子に譲り隱居して九助と呼びたるが、資性温厚慈仁に富み且つ義侠の質なれば伏見町民は擧つて九助を慕ひ萬事その指導に従ひたれば九助は選ばれて町内の年寄役

に擧げられたり。然るに安永八年二月小堀和守政泉方新たに伏見奉行として任命され同月廿八日伏見に著以來町政漸次苛虐に傾き町民の困憊追日甚だしきを加へ、不當巨額の用金を町民に負擔せしめ、苛斂誅求、惡虐日々に増加せるより、伏見町民等は驚愕悲痛此儘にして過ぎんには伏見全町は遠からず亡滅し、町民は塗炭の苦境に陥らざるを得ざるに至りしより、九助は猛然として蹶起し、此際當面の實情を江戸幕府に訴へ、救済の方法を講ずべしと、同志の丸屋九兵衛、麴屋傳兵衛等と共に數十人と謀り深草眞珠院の山上に會合して協議を凝したる結果、九助は九兵衛傳兵衛の二人と俱に變裝して江戸に赴き知己の紹介を以て深川の養岳寺に潜伏し、此間畫策凝議非常なる辛酸を嘗め、有らゆる艱難を凌ぎて天明五年十一月二十六日、丸の内一ツ橋なる寺社奉行松平伯耆守に向つて懇訴を爲したり。

斯くて後種々訊問を受けたるに對して九助等は毫も怯まず、續々實情を陳述し、幕府に於ても審議の結果、九助等の願意は終に達成し、小堀政方は江戸に召喚せられて、伏見奉行を免せられ、久留島信濃守代りて新奉行として善政を施す事となりたり。茲に於て伏見町民は大に喜び、永く九助等の功績を稱ふるに至り、其至誠の行爲は今に至つて尙噴々として傳へらる。

●寺田屋事件紀念碑 (山城)

伏見に在り。是れ文久三年四月二十三日伏見の船宿寺田屋に於ける薩藩志士の命を殞せる者の爲めに建設せられたる紀念碑なり。

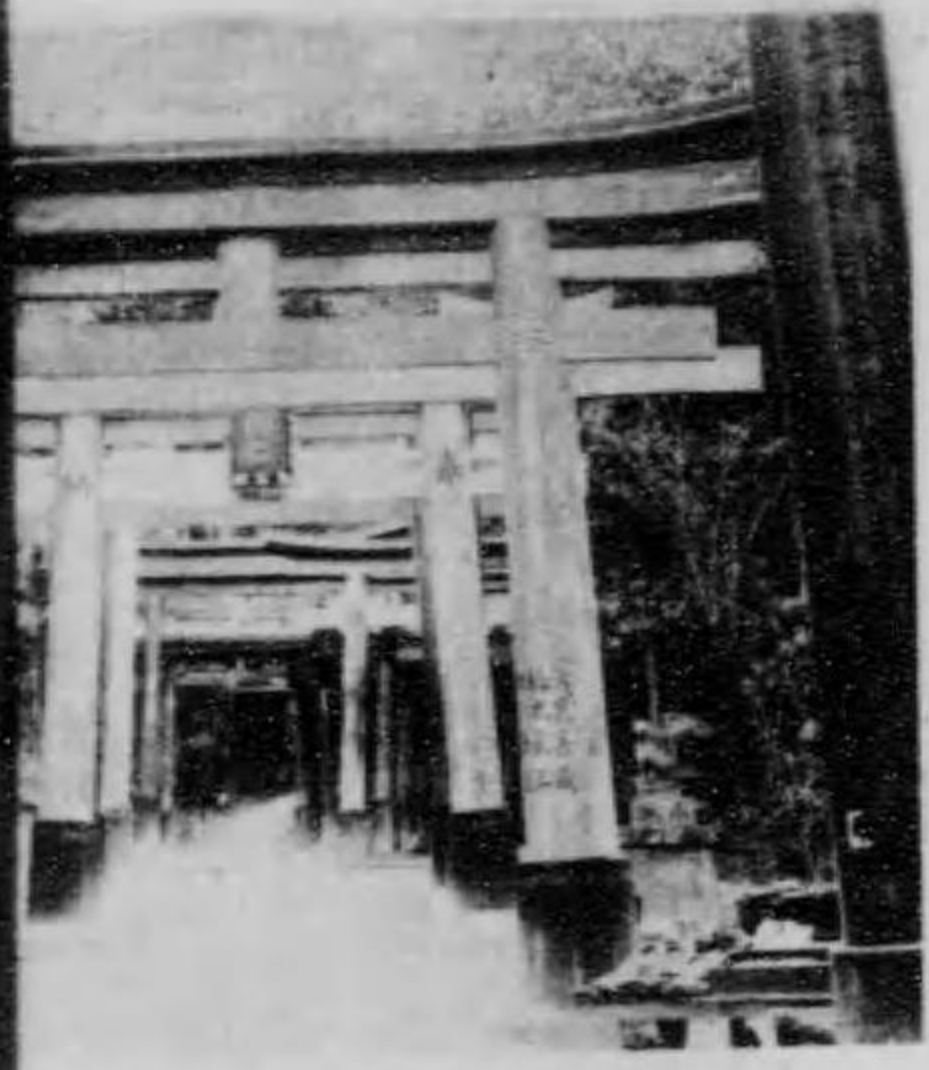
幕末の風雲暗憤を極めたる文久三年島津久光上京して意見を開陳し、朝廷にても嘉納ありて密に久光に依頼さるゝ所ありたり。此時に當つて薩藩士有馬新七、田中謙助等は關白九條尙忠、京都所司代

酒井忠義を除かんと謀り、爲めに京都の物情騒然たるより久光は之を聞知して大に驚き有馬等の志士を鎮撫せんとせしかば、志士等は却て憤激し大に爲す所あらんとす。茲に於て久光は奈良原繁、大山綱良等八名を選みて志士擧を未前に阻止めしむ。斯て奈良原、大山等八名は伏見に行きしが志士約八十名は此時同地の船宿寺田屋に會して密議を凝しつゝある事を聞知し、直ちに同家に行きて君命を傳へて暴動を思ひ止まらしむる所ありたれど、志士等は其言を聽かざるより、奈良原等は君命なりと稱し、矢庭に志士八名を斬つて仆す。有馬新七之に死す。志士等は之を見て大に怒り各々白刃を揮つて抵抗す。此時奈良原刀を棄て諸肌を脱ぎて衆中に飛入り叫で曰く「吾等は捕吏に非ず始く吾等の告ぐる所を聞け」と茲に於て志士等亦無刀の者に刃を向ふべからずとして其告ぐる所を聞きたり、奈良原は徐ろに君命を傳へ終り「斯く説くと雖も尙聽かすんば先づ我首を斬れ」と、仍て志士中の西郷從道、柴山辰五郎等は奈良原の言を理ありとし、衆を宥めて其擧を断念せしめ、事漸く鎮まるを得たり。是れ實に文久三年四月二十三日の夜の事にて、世之れを寺田屋騒動として傳ふ。

●藤森神社 (山城)

伏見稻荷を距る十町餘、深草の里に在りて伏見街道の森林中に鎮座す、祭神は舍人親王、早良親王、伊豫親王の三座にして其創建は詳ならず。本殿の東に當りて櫟の大樹あり、俗に之を旗塚と呼べり。傳へ曰ふ是れ神功皇后三韓征討の後其旗及兵器を埋めたる遺蹟なりと又一説には秦氏の墓なりとも云ふ。華表の内なる馬場の西畔に七基の塚あり、是れ早良親王蝦夷征討凱旋の日敵將の首級及び兵器を埋めたるものなりと傳ふ。

伏見稻荷社大鳥居



寺田屋事件紀念碑



藤森の神社